
弁当を求めて

ロノニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弁当を求めて

【コード】

N54940

【作者名】

ロノニ

【あらすじ】

死んだはずの俺は生まれ変わっていた。そして、俺は第二の人生で自らの意思で戦いに投じる。戦いのその先にあるものを目指して。

第一部時点での登場人物（前書き）

リクエストがありましたので作り直しました。簡易なものです。が。随時追加予定。

第一部時点での登場人物

『高城ファミリー』

高城 真

主人公であり、転生者。中学1年生。異文化研究部所属。

同年代に比べれば大人びているが、肉体に引っ張られているのか転生前よりは精神的に未熟な部分が見られる。

親の仕事の都合で（ご都合主義とも）で晩御飯を得るために狼となる。

食生活と物語の憧れから狼となることを選ぶが、段々と狼の世界というものへとひかれていく。

因みに原作合流の際には高城真たかしまことの名前で齊藤洋さいとうひろみの相棒になる予定。

高城 泰人

主人公のお父さん。実は結構なエリート。

夢である貿易に関する仕事を息子の中学入学を機に本格的に始める。

高城 遙

主人公のお母さん。

夫である泰人を支えるべく共に海外を飛び回る。泰人とは学生結婚をした。

『学校関係』

海野 政志

主人公の小学校時代からの親友。中学1年生。

現時点ではそれ以上に特筆することはない。あわれ。

斯波 香月

主人公のクラスメート。中学1年生。異文化研究部所属。

主人公とは違う小学校だった。

進士 優貴

中学3年生。異文化研究部部长。

腐のつくお方。文章ではなく、絵を得意とする。

原作合流の際には白粉花おしろいはなと同人サークルを作らせようか、と考
えたりする。

相馬 毅

異文化研究部顧問。

特筆すべき点はなし。

《近隣の狼》

アロハ

主人公が最初に出会った狼。大学生。

本名不詳。いつもアロハを着ているのアロハと呼ばれている。

實力はあまり高くなかったが、真という弟分ができたことをきっかけに狼としての實力を着実にあげている。

巨乳

高校2年生の狼。

本名不詳。ただ胸が大きいというだけで巨乳と通称されている。

セクハラである。

實力はアロハより少し高いぐらい。彼女もまた弟分の誕生をきっかけに狼としての飛躍を始める。

金髪

古参の狼。

紆余曲折の狼としての道を行んできているが實力はいまひとつ。

反面、狼としての矜持はしっかりと持っている。

トマト

モブ狼の1人。壮年。

負けたときにはトマトを買って変える。

長髪

モブ狼の1人。フリーター。
優男風である。

サングラス

モブ狼の1人。堅気の人である。
顎鬚を蓄えている。

メガネ

モブ狼の1人。浪人生。
ただいま、3浪中。

プロローグ（前書き）

処女作です。

完結を目標にして書いていきます。

プロローグ

俺はトラックに轢かれて死んだ。24歳、短い人生だったなと思
いながら、俺を中心に広がっていく血溜まりの中で目を閉じたの
から。

しかし、俺は生きている。いや、これから生きていくといったほ
うがいいだろう。

死んだと思つたら、暗いどころもわからぬ中にいた。ただ暗かつ
た。身動きもほとんどれなかつたし、時間の経過もわからなかつ
た。それでも、ここは怖くなかつた。むしろ安心を感じる。

そこでの生活は不思議なものだ。なにをするでもなく、ただそこ
にあるというべきか。

その生活の終わりは唐突に訪れた。今まではたいして身動きでき
なかつた、少しは動けるのだが動くというよりも揺れる程度の動き
しかできない。それが、今までになく大きく動けた。いや、俺が動
いてるのではなく周りに押し出されている…？

押し出された先には光があつた。光に向かって押されていく。そ
して俺は光の中に入っていく。

光の先は部屋だつた。部屋には白衣を身に纏つた女の人がいた。
俺はあの暗闇からでたあとで頭も回らず、ぼーっとしていたらいき
なり背中を叩かれた。痛いほど強く叩かれたわけではないが、文句
を言おうと声をあげた。

「おぎやあああ」

あれ？

「ふう、よかった。無事に産声をあげましたよ。元気なおとこのです」

白衣の女の人は俺の後ろに向かってそう言った。

「…はあはあ、おとこのこですか」

俺の後ろから疲れた感じの女の人の声が聞こえる。

「ふふ、泰人たいじんさんみたいな立派な人なつてね」

後ろから女の人が俺を覗き込みながら笑みを浮かべてそう言った。俺には状況がわからない。いきなり女の人に泰人さんみたいになつてと言われたのだ。泰人さんて誰だよ！？そもそも貴女はだれですか！？

とりあえず、現状把握だ。そう思い思考中にの沈もうとした時、部屋の扉が開く。

「大丈夫か、遙はるか」

扉からは興奮した感じの男の人が入ってきた。

「私は大丈夫ですよ、泰人さん。ですからこの子に名前を教えてくださいてください」

俺を見ながら女の人と言う。女の人にそう言われた男の人は俺を抱き上げる。

抱き上げる？まで、何で成人男性の俺を抱き上げられる？

「そうだったな。この子はおとこのこか？それともおんなのこか？」
「元気な男の子ですよ。」

混乱する俺をおいて二人の会話は進む。

「おとこのこか…。なら、お前の名前は真まことだ。」

男の人は俺に向かって言う。…俺にむかって？なぜ？俺にはちゃんと××って名前が。…あれ？××って何だ？俺の名前はなんだ？混乱が深まるばかりの俺にむかって男の人は続けて言う。

「高城真たかぎしん。うん、いい名前だ。」

高城真。必死で自分の名前を思い出そうとしている俺にむかって言われたその名は深く深く俺の中に刻み込まれていくような不思議な感覚がした。

多分、この瞬間だろう。俺が高城真として、高城泰人と遙夫妻の子として世界に認められ、第二の人生を歩みだしたのは。

俺が高城真としてこの世界に生まれてから12年が経った。生まれたばかりの頃は前の世界の記憶があったことで両親を両親とはなかなか認められなかった。当たり前のことだが前の世界には高城真

である前の俺の両親がいた。つまり俺には今まで両親と呼べる存在がいたわけで高城夫妻を両親とは簡単には認められない。

それでも、1歳を迎える前には高城夫妻を俺の両親として認めることができた。理由としては前の俺の記憶が人に関する記憶がおぼろだったのが大きい。例えば、両親にしてもいたということははっきり覚えているのだがどんな両親だったのかが思い出せない。顔も、声も、性格も。それは友達にしても同じだった。思い出せないのは辛かったがその分はやく俺が生まれ変わったことを認めることができた。高城泰人が父で高城遙が母であることも。

思い出せないことに対する開き直りという部分が大きかったことは否定しない。それでもこの世界を新しく生きていくには必要なことで、顔も思い出せなかった前の俺の家族に、友達に対して心の中で『さよなら、忘れてごめん。……でも好きだった、多分。』といいながらこの世界を受け入れた。

生まれ変わって小学校に入学するぐらいになると新しい人生にも慣れ始めて心に余裕ができて二次創作とかでお馴染みの転生とかじゃないかな、とか思ってたパソコンで冬木とか海鳴とか麻帆良とかいった地名を探したりした。もちろん見つからなくて、ちよつと期待していた自分を恥ずかしく思う。

小学校での生活は精神年齢が違っただけあって、他の子たちとは話にはあまりあわなかったが一緒に遊んだりするのは楽しかった。童心に帰るっていうか童心そのものだなとか思いながらちよつと自嘲の笑みが顔に生まれる。勉強のほう小学生のテストでは100点をとるのは簡単だったが今から常に100点とかとつてると高校に入学したときに落ちぶれることが決定してしまう程度の学力しかなかったので80点を超えるぐらいの点数に調整している。……嘘です、すみません。正直、中学3年ですでにやばいです。

まあ、精神年齢うんぬんをいつても俺が小学生であることには変わり無い。でも小学生に比べれば周りのことをよく見るし、気も利く。当然といえば当然なんだがそういう奴は自然とクラスの中心的存在となる。だから、通信簿にある先生からのコメントに毎回『しっかり者でクラスのリーダー』とかお褒めの言葉ばかりを書かれていたことも特に気にしていなかった。

転機が訪れたのは小学校を卒業の日だった。その日の家の食卓は今までにないほど豪華で俺の好物ばかりが並んでいた。このとき素直に自分の卒業祝いだと言った自分を呪ってやりたい。

食事が終わりにさしかかったときに父さんがおもむろ口を開く。

「真。卒業おめでとう」

「ありがとう、父さん」

そう返した俺に対して父さんは一拍をおいて言葉を続ける。

「実は大切な話があるんだ。しっかり聞きなさい」

「大切な話？」

「そうだ。今日のご飯は豪華だろう？………実は真の卒業以外にもお祝いがあつてね。それを兼ねているのさ。何だと思う？」

俺の卒業以外のお祝い？父さんのいうお祝いを少し考えてみる。

………はっ。まさか、二人目か？うちの両親は仲がいい。子供である俺の目の前でいちゃつく程度には。十分に考えられる可能性。むしろいままでいなかったほうが不思議だと思う。そう思い父さんにむかってお祝いの言葉を送ろうとするが、それは叶わない。俺が喋るより先に父さんが喋ったからだ。

「まあ、わからんだろうな」

だったら尋ねるなよ。そう思った。

「起業祝いだ。私たち二人のな」

起業祝い？起業ってことは会社をおこすわけだよな。………私たち二人？二人つてことは父さんと母さんだよな。つまり、二人で会社を始めるわけか。

「それで、だ。これから色々私たちは忙しくなる。家に帰ってくるの遅くなるだろう。帰れない日が続くことも考えられる」

「真は一人でお留守番することになるの。一人で大丈夫よね」

成る程と納得しそうになるが、思いとどまる。今の俺は小学生を卒業してこれから中学生になる。それを一人にすることもあるだろうということだ。…おかしだろう、常識的に。いや、全くないというわけではないだろうが口ぶりからするとそれなりの頻度で夜に親がいなことが推測される。これはおかしと思う。だから抗議の声をあげる。

「僕（人に対するときの一人称は僕。中学にはいつたら俺にしようと思っっている。）はまだ小が…」

抗議の声は父さんの声にさえぎられる。

「本当は真が高校に入ってからのつもりだったんだが」
「だったら、それま…」

俺の声は届かない。

「真。お前は自慢の息子だ。昔から一人でなんでもやるうとするし、周りのこともよく見ている。芝原先生も褒めていたぞ。こんなしつかりとした小学生はみたことがない」と

いきなり褒められて照れくさい感情をもてあます。ちなみに芝原先生ってのは6年のときの担任だ。

「だからね。真なら一人でも大丈夫だと思うの。毎日いないってわけじゃないし」

「そうだ。毎日帰ってはこれないが真なら大丈夫だ」

何の根拠があるのか核心をもつて父さんと母さんは言う。確かに洗濯とか掃除とかできるけど、俺は料理ができない。これはこれから中学生になる子供が一人で留守番するうえで致命的だと思うのだが。そんな俺の思考を読み取ったように父さんが喋る。

「食事に関してはお金を渡すから自分でどうにかしなさい」

先手を取って逃げ道をふさがれる。

しかし、考えてみればそこまで困るわけではない気もする。普通の子供ならばともかく、俺は転生者ともいうべき存在。死ぬ前には一人暮らしをしていたし、今も時々一人が気楽でいいな、とか思ったりもする。…ならばそれ程の問題もないのでは。

ただ、最大の問題は俺ではなく12歳の子供をしっかりとっているからという理由で帰らない宣言をする両親の倫理観念だと思う。普通の子供ならぐれてもおかしくない。

そう考えればわりかし大丈夫な気がしてきた。ならば、親の起業を祝って協力するのが親孝行につながっていいなと。そう思った。

普通の子供ではない分だけ子育ての大変さは知っているから、両親への感謝という点では転生前の両親よりある。……………多分だけど。

「わかったよ、父さん。それでどんな仕事するの？」

「真ならわかってくれると思っていたよ。仕事なんだが、貿易だ」

貿易か、てことは海外とかに出張とかもあるわけだ。だから家に帰れない日が続くってことも納得できる。そういえば海外は小さい頃からよく旅行に行ったな。

……………待て、よくだと。特に金持ちではないうちがよく海外旅行をしていた…？おかしくないか。おかしいといえば旅行中に両親が揃っているのは珍しかった。父さんがいれば母さんがいないし、母さんがいれば父さんはいなかった。家では休日のたびに仲良く出かけていたのに。

その時、ある仮説が俺の中で思い上がる。海外旅行は家族での旅行というよりも起業に対する準備ではなかったのかと。あたって欲しくはないが聞かずにはいられない。

「父さん、うちの旅行先って海外が多かったよね」

「あー、まあ、なんだその。多分、真が思っているとおりで」

少し気まずそうな顔して俺の顔を見つめ返さないで父さんが答えた。

「子供の頃からね、夢だったの。貿易に関する仕事をしたって。いろんな国をいけるし、いろんな物をみれる。大学を卒業したらすぐに始めるつもりだったの。だけどね、大学で泰人さんに…」

ヤバイ。母さんが夢を語る子供の瞳から父さんとの昔語りに入るうとしていく。母さんの父さんとの昔語りは100%の確立で延々

と続くノロケ話へとシフトする。この流れを止めるべく俺は大きな声を張り上げた。

「父さん、母さん。二人ならばきつと会社もうまくいきます。だから家のことは僕に任せてください」

いきなり大声をあげた俺にびっくりした様子の二人だったがすぐに笑顔になる。

「頼んだぞ、息子よ」

「頼みますよ、真」

二人は笑顔でそう返した。

中学が始まって二週間が経った。両親は春休みから数えても両手の指で足りる数しか家に帰ってこなかった。社会人を体験している俺としてはもっとしつかり休んだほうがよいと思うのだが、家に帰ってくる両親は疲れた顔をしながらも楽しそうな雰囲気が出ている。やりたかったことがこれからできるといっなのはそれだけ嬉しいのだろう。

さて、それだけ両親が帰ってこないということは俺の食事はファーストフードとかスーパールとかコンビニのお弁当が中心となる。カ

ツブ麺生活にまでは落ちたくはない。成長期なのだから。

そんな生活に慣れた頃、部活の見学で帰りが遅くなりいつもより遅い時間にスーパーに入った。

その瞬間、俺の体に刺すような視線があびせられた。それも一人ではない。正確な数はわからないが10人はいないであろう。視線に怯む。しかし、視線はすぐに霧散した。気のせいというには強すぎた視線だったが感じられなくなった今、気にしてもしょうがないと思い、いつもどおりにお弁当のコーナーに行く。

弁当のコーナーに近づいていくと先ほどの刺すような視線がまた感じられる。近づいたたびにどんどんと視線の数は増え、強くなる。しかし、周りを見渡しても視線の主は見つけられない。首をひねりながら歩き弁当のコーナーへとたどり着く。

「おっ」

俺がいつも買うスーパーの弁当は定価だ。時々10%引きのときもあるが。しかし、今日は弁当に30%引きのシールが貼ってある。ラッキーと思いつつ残っている弁当を見る。

『デミグラスハンバーグ弁当』

『ミックスフライ弁当』

『かつ重』

『ホイコーロー弁当』

時間がいつもより遅いだけあって残ってる弁当は4つだけ。いつもの時間ならもっとたくさんの種類の弁当がある。選べる範囲こそ狭いが30%引きは魅力的だ。さて、なんにするかと考えているとスタッフルームから40手前ごろの男が出てきた。手にはバーコードリーダーを持っている。どうやらこれから更に値引きが行われるらしい。

ならば、30%引きの弁当を買うのも得策ではない。更なる値引き、おそらくは半額になるであろう弁当を買ったほうが財布に優しい。親からはそれなりのお金を預かっているが節約するにこしたことはない。そう思いバーコードリーダーをもったスタッフが来るのを待った。

男は惣菜コーナーを並べなおした後にバーコードリーダーをうち惣菜に半額シールを貼っていく。惣菜すべてに半額シールを貼った後に男は俺のいる弁当コーナーへとくる。その時、男と目が合った。男の目は俺に対して警告を行っているように感じた。弁当をさつさと持つてといくか、そのまま去れ。そう視線が訴えている気がした。気のせいだと思った。だから男が全ての弁当に半額シールを貼るのをずっと見ていたし、貼り終わるのを待っていた。

スタッフルームに男が戻っていく。男をみても仕方がない。弁当を買おう。そう思い、少しの逡巡ののち、『ホイコーロー弁当』を手取る。いや、取るうとした。

しかし、俺は弁当を手を取れない。一瞬のうちに俺は惣菜コーナーに吹き飛んでいた。何が起きたかわからない。気づいたら惣菜コーナーにいた。

「弱気は叩く」

「豚は」

「潰す」

「それが」

「この領域の掟だ」

吹き飛ばされたとき確かにそう聞こえた。

そして、俺がさつきまでいた弁当コーナーには10名前後の人影がある。正確な人数はわからない。それ程の速さで彼らは動いている。ただ、彼らの目指すものが半額弁当だということはわかった。弁当に向かっていく人影。それを阻止せんとする人影。10名前後

の人影は弁当を目指して争っていた。

俺は思い出す。前の世界で読んだ本のことを。

『ベン・トー』

その本はライトノベル。略してラノベと呼ばれる分野の本だ。

内容としては簡単に言えば半額弁当を求める者たちの戦い。ばかばかしく思うかも知れないが自分のもてる力の限りを尽くして半額弁当を目指す。

そんな感じの本だ。

理解する。今の俺が生きる世界はこの『ベン・トー』の世界だと昔、パソコンで調べてたこともあながち間違ってたな。そんなこと思いながら、この世界が命の危機がある世界ではないことに安堵する。そして、自分のすべての力ををもって戦うにふさわしい相応しい世界であることを。

体が熱くなる。当然だ。今まで本の中でしかなかった世界に自分がいる。自分がその舞台に立てる。そう思うと興奮する。

吹き飛ばされてただ呆然としていた俺はもういない。吹き飛ばされただけだ。殴られたわけでもないし、蹴られたわけでもない。原作では半額シールを貼られるのを待っていた、主人公である『佐藤洋』は殴られ、蹴られ吹き飛んだが、俺は今回の戦いが初めて。完璧なルーキー。だから、吹き飛ばされただけ。

足に力を入れて立ち上がろうとする。そして、目の前で繰り広げられている戦いへと向かおうとする。

しかし、俺は戦いには加われなかった。立ち上がるその瞬間に弾き飛ばされてきた人影が俺にぶつかる。

「ぐおっ……………」

人影：アロハシャツをきている男だ。ぶつかった瞬間にアロハシ

ヤツは俺をクッションにして己へのダメージを抑え、再び戦いへと戻っていく。

その光景を見ながら俺はアロハシャツがぶつかった衝撃で意識を失う。ただ、俺の顔はこの『ベン・トー』の世界で生きていくことに、戦うことに対しての楽しみを感じてか綺麗な笑顔だった。

たかぎしん 高城真、たかぎしん 中学1年生。まだ狼とはとてもいえない、一匹の犬が生まれた。

プロローグ（後書き）

割かし無茶な感じで進めていると思います。

だけど、原作の都合で家で夕飯が食べられないという前提が必要なので細かいことはスルー推奨です。

第一話 半額神との出会い

目が覚めると知らない部屋にいた。立ち上がり回りを見渡す。特に変わったものはない広くもなく狭くもないそんな感じの部屋だった。俺はソファア-の上で寝ていたようだ。なぜ知らない部屋のソファ-で寝ているのか。思い出そうとするが、後ろから聞こえてきた声によって中断される。

「おお、起きたか、小僧」

声の主は知らない男だった。いや、よく見ればどこかで見た気がする。男は40手前といった感じの風体をしている。

「今日は来るのが随分と遅かったな」

男は俺を知っているかのように話しかけてくる。だが、俺はこの男を思い出せない。

「いつもの時間に弁当を買いに来ていればこんな目にも会わなかったのにな」

その言葉でスーパーに弁当を買いに来たことを思い出す。同時にこの男が弁当に半額シールを貼っていた人物出るとあると思いつつ、つまり、目の前にいる男は『半額神』ということになる。

半額神 それは『ベン・トー』の世界において、弁当に半額シールを貼る存在である。しかし、その存在は『ベン・トー』の世界においては自身の持てる力の限りを尽くして弁当を目指す者たち、狼と呼ばれる者たちにとっては一種の神聖な存在となっている。

「まあ、軽い打撲程度だから大丈夫だとは思うが、湿布ぐらい貼っておけ」

「軽い打撲？」

男：半額神にそう言われると確かに右肩に痛みを感じる。確か、先ほど弾き飛ばれてきたアロハの男がぶつかったのは右肩を中心としていた。ああ、だからか。

右手をあげてみる。少し痛みが走ったが特に問題があるほどではない。一晩も経てば痛みも消えているだろう。問題無しと判断して半額神の方を向く。

おそらく、ここはスタッフルーム。スーパー内で気を失った俺を半額神が運んでくれたのであるう。ならば、お礼の言葉の一つでも言うべきと思う。

「気を失っている間ここで休ませてくれてありがとうございました」
「ああ、気にする必要はねえよ。4月にはよくあることだ。もう慣れた」

4月によくある。そうか、大学に入学した人や会社に入社した人が多いこの時期、一人暮らしを始めて日々の食事にスーパーの弁当を選ぶことはなんら不思議ない。そして、より安い弁当を求めて半額弁当に目をつけるのも至極当然のことだ。

そこまで考えたとき、先ほどの半額神の言葉がひっかかった。『今日は来るのが随分と遅かったな』と半額神は言った。俺がこの半額神の姿を見たのは今日が初めてだったはずだ。しかし、半額神は前から俺を知っているようだった。

「なんで、俺のことを？」

そう口から漏れていた。

「さすがに小僧ぐらいの年の奴がこれだけうちに弁当を買いに来ると目立つんだよ。バイトのおばちゃんなんかよ、家庭の心配までしていたしな」

成る程と思う。今の俺は中学に入学したばかり、この年でこれだけ頻繁にスーパーに弁当を買いに来ていれば目立つの当然だろう。しかし、家庭の心配までされるとは。まあ、中学生が家で晩御飯を食べれていないのだからそう思われても仕方ないのかもしれない。心配されたままでは居心地が悪いし、両親が悪く思われるのもいい気分はしない。なんだかんだで今の両親はいい親だと思ってるし、個人としても気に入っている。

「はは…、別に家庭の方は問題ないですよ。ちょっと……、かなり親が忙しいだけです」

「けどよ、忙しいからって子供をおろそかにしていい理由にはなんねえぞ」

「でも俺自身が納得してますし。ちゃんと話し合いもしましたしね」
「なら、いい」

少しぶっきらぼうにそう言う。この半額神のおじさんもやはり俺を心配していたのだろう。いい人だな、と思った。

「明日からはいつもの時間に来い。遅くなるなら、別のスーパーに行け」

いきなりそんなことを言われ、これからは狼たちに混じって弁当をめぐる戦いに加わろうと思っていた俺は慄然とした表情で聞き返した。

「…何ですか」

自分でも少し睨んだ感じの目をしていたのがわかった。二度目の人生であり、お約束の物語の中の転生かな、と期待したりしていた自分。けれども、今までは魔法が使えるようなことなんてなかったし、ドラゴンとかの幻想的な生き物にも出会わなかった。だから、ここが『ベン・トー』の世界であるとわかったときには嬉しかったし、これからは俺もその中に入っていこうと思っていた。

だからこそ、目の前の半額神が言ったことが認められなかった。あの言い方ではまるで半額弁当をめぐる戦いに加わるな、そう言っているように聞こえる。

「小僧は今日みたいな目にまた会いてえのか」

少し強い口調でそう言われた。その言葉で俺は純粹に心配しての警告なんだなと理解した。だが、ここが『ベン・トー』の世界であると知ったその時に俺は半額弁当を目指して戦うことを決めた。

物語の世界が現実。その現実に生きているなら戦うことが使命にさえ思える。そしてこの戦いは二度目の人生に華を添える、そう確信する。

なによりも、強敵と書いて友呼ぶような奴らを相手に自分の死力を尽くして戦い、勝ち、弁当を食べる。物語を読んだだけでもその弁当を食べる狼たちがなんと美味そうに食べることか。ならば、自らの手でその弁当を手に入れその弁当を食べればその美味さは筆舌に尽くしがたいはず。

人の三大欲求の一つ、食欲。それを貪欲に求める姿。より美味しい食事をするために戦い、勝つ。その先ある弁当を求めて。そう思った。

「美味しい弁当を食べるためなら…」

自然と口から漏れていた。

「痛い思いをしたいわけじゃない。痛いのはいやだ。けど、その先にある半額弁当はきつとそんなことがどうでもいいと思えるほどに魅力的だと思う。だから、俺は明日もこの時間にこのスーパーに……来るっ！」

叫ぶように言い切った。言ってから失敗したと思う。この言い方は俺が半額弁当を巡る戦いを知っていることを前提としているものだ。半額心からしたらなんでこの戦いのことを知っているのか、そういう疑問が生まれてしまう。まさか、前世でこの世界の物語を読んでいるから知っているとも言えない。

「…小僧。何で知ってる」

「えっと…、その」

口ごもる。本当のことは言えない。ならばどうするか。考える。が、答えは出ない。半額神は俺を見ている。焦燥感が募る。はやく何か言い訳を。表情は隠せていない。冷や汗が流れる。そんな俺を見かねたのか、半額神が口を開く。

「言いたくないなら言わなくていい。小僧にも事情があるようだしな。…それにそんな顔をされると俺がいじめてるみたいじゃねえか」

ありがたい。そう感じる。

「……………っありがとうございます」

少し言葉に詰まりながらも今日二度目となる感謝の言葉をつむぐ。

「別に細かいことは気にせんだけだ。この際知っていることよりも大事なものは小僧が知ってる上で弁当を求めるこれがどういう意味が分かっているのか」

「分かっているつもりです。でも、俺が思っている以上に激しい場所である気はします」

「そうだ、今の小僧が思っているよりは確実に激しいだろう。あの戦いは甘くはねえ。今まで何人もたった一回の敗北で二度目の戦いに現れないものも多い。それでも小僧は戦うのか」

「まだ俺は戦いに参加すらしていません。今日のは戦いの場所にある邪魔のものをどかさただけ。そうですよね」

「ああ、ルールまで知っているのか。狼 弁当を求めて戦うものたちは、狩猟者でないものは狙わない。今日、小僧が吹き飛ばされのは小僧が狩猟者じゃねえからだ。明日、また来た場合は狼たちは間違いなくお前を狩猟者と思い攻撃してくる」

「今日のは俺が初めてだから警告のようなものですよね」

「その通りだ。奴らは、狼どもは同じ弁当を狙う狩猟者ならば容赦はしない。子供であろうと、女であろうと、老人であろうとな。手加減することは自分が負けること、弁当を手にはできないことに直結する。だから次は今日とは比べられんほどの攻撃が加えられる。それでも小僧はこの場所にまた来ると言えるのか」

「さつき言いましたよね。半額弁当は魅力的だと。狼たち毎日激しく戦い抜いてまで食べたいと思う、その半額弁当を俺は食べたい。どれ程の価値なのかそれは半額弁当を食べたことのある者にしか分からないと思う。そして、半額弁当を食べたことがあるのは一握りの人、いや、狼だけ。ならば俺もその価値のわかる狼になりたい」

自分で言っただけで気分が高まってくるのがわかる。言えば言うほど半額弁当を食べてみたいという気持ちは強くなる。

「それに俺はまだ戦いにすら加わっていない。なのにもう来ないとか、戦う前から勝てないって決め付けてようなもんじゃないですか。それはちよつと格好悪いじゃないですか」

最後はちよつとおどけたように言った。

「確かにそれは小僧といえど男だ、それは格好悪いと思うな」

ちよつと笑ったような顔でそう半額神は言った。そして、一拍おいた後に。

「俺はここいらの狼からは煮物神にものがみって言われている」

そう言った。この行為は単なる自己紹介ではない。半額神が俺を弁当を巡る戦いに加わることを正式に認めたようものだ。狼とはいえない、犬としての確かな一步を踏み出した瞬間だった。

スタッフルームをでて家に帰る。煮物神とは最後にこれからよろしくお願いしますといいながら握手してわかれた。明日からのことを思い胸が躍る。さっきまで気絶していたとは思えない足取りで家路に着く。その途中でふと思いつく。

「晩御飯、どうしよう」

そう俺は弁当を買えなかった。つまり晩御飯がない。家までの間にはコンビニがある。しょうがない、コンビニでなんか買うか。首領兵衛んぐえを買おうかと思うがやめる。戦っていないのに首領兵衛はまだ早い。そう思いお握りを三つほど買い、家に帰った。

次の日の学校は気もまばらだった。晩御飯のことを考えるとついにやけてしまう。授業を聞いてなかったので先生に当てられたときは困ったが、中学1年レベルのもんだいなら転生者にある俺には問題がなかった。：転生者であることに喜びを感じたが、こんなずるしていると駄目になりそうと同時に思った。

学校では小学校からの親友である海野政志うんのまさしに常にやにやにやして気持ち悪いとまで言われてしまった。まあ確かに気持ち悪かったかもしれないが、お前の将来が心配だよとまで言われてちよつと落ち込んだ。中学一年生に将来に心配までされるとは、これでも精神年齢はずっと上なんですからね。心の中で反論をしようといた。

そして、俺は煮物神がいるこのこのスーパーハーブフライズラベリングタイムに来ている。時間は6時30分。このスーパーの半値印証時刻は昨日は7時ごろだったことを考えればちょうどいい時間だと思う。

気合は十分だ。体もいい感じに緊張をしている。大きく深呼吸を一回した。よし、とスーパーの扉を見る。これが俺の初戦だ。絶対に弁当を手に入れてやる。そう決意して、スーパーの扉をくぐった。

高城真^{たかぎしん}中学一年生。これが彼のデビュー戦となる。

第一話 半額神との出会い（後書き）

原作では首領兵衛ってそのまま使われてるけど、そのまま使っているのかな。

第二話 初日の戦い

スーパーの中に入ると昨日と同じような刺すような視線が俺に向けられた。しかし、すぐに霧散する。当然だろう、昨日はたまたま半額弁当が生まれたその瞬間に居合わせて、半額弁当を手にしようとした。狼たちにとってはそれだけの存在だ。そして、昨日は半値ハイフプライス印証時刻間近イストラベリクタイムにきたのもある。弁当を買おうとしてスタッフルームからバーコードリーダーをもった男が出てくれば自然と更なる値引きを期待して買い物カゴにいれるのを待つ。多分、ほとんどの人がそういう行動をとる。だから、偶然半値印証時刻に來ただけの小僧は狼でない、そう言える。

「よう、小僧。昨日は悪かったな」

スーパーに入った俺に向かってアロハの男が歩きながらそう言ってきた。このアロハは昨日俺にぶつかってきた男だ。昨日とは違いうアロハを着ているが背格好でわかった。

「いえ、大したことありませんでしたから」

「そうか、ならよかった」

アロハの男はほつと安堵のため息をもらしたかと思うとすぐに真面目な顔をした。

「小僧。弁当を買うならさっさと買っていくのがいいぜ」

それは忠告だった。きつと俺をクッションにしまったことに罪悪感があるのだろう。狼ではなかった俺をクッションにすることは『狩猟者になきものをするなかれ』という掟ルルにかする。が、明確

に掟^{ルール}をやぶったかという微妙なところだ。

理由としては俺は昨日が初めての素人ということだ。たとえ素人でも半額弁当を手に取るうとすれば当然のことながら攻撃される。俺が吹き飛ばされたのがいい例だ。しかし、狼たちは原作でも『氷結の魔女』槍水^{やりずいせん}仙が「二度目はキツイぞ」と言っている通り二度目は主人公である佐藤^{さとう}洋^{ひろゆき}は最初とは段違いの攻撃をくらっている。つまり、最初の一回に関しては手心を加えるというのは狼たちの不文律である。吹き飛ばされた時点で呆然としていた姿の俺はすでに狩猟者ではなかったと思われているのだ。実際は弁当を手に入れようと俺は立ち上がるところだったのだからアロハの謝罪は見当違いということになるのだが。

まあ、だから今日も俺はアフロにとっては半額弁当を争う敵ではないのだ。半額弁当が数が減るという点では敵ではあり、邪魔な存在なのだろうが。まさかお客に対して「その弁当は半額になるまでのこしておけ」なんてことが言えるわけもない。

だから、半額弁当を奪い合うライバルであることも含めて宣戦布告のような返答をする。

「さつさと買っわけにはいきません。だって、まだ半額じゃないでしょ」

俺のこの言葉にアフロは驚いたような顔になる。ついで俺を値踏みするかのように見る。同時にスーパーの中からの視線がいくつかに俺に集まる。この瞬間に俺は狼たちに敵と認識された。

「……………また随分と小さい犬が生まれたもんだな」

そうアロハはつぶやいた。小さいといわれたことに力チンとくる。一応、160cm近くはある。これはむしろ同学年では高いほうだ。俺が4月生まれということをし引いても間違っても低いということ

とはない。目の前のアロハは顔とか年齢とかのことを含めていつているのは理解できるが今現在が男の子である以上は小さいとかは言われたくない。

「小さいのが戦力の決定的な差でないと教えてあげますよ」

目の前のアロハは目測で180cmほどはある。だから、小さいってことを否定するには俺自身と身長差がありすぎてちょっと悲しい。だから小さいからってバカにすんな的なニュアンスで返す。

「言っじゃねえか。けどよ、昨日今日に知った奴が勝てるほどここは甘い世界じゃねえよ」

アロハの言うとおりだろう。だが、俺は勝てないと言われても領けない。ここで領けば自分から弁当をいらないうつと言っているのと同義に近い。勝てないイコール弁当が手に入らない。だから、領けない。

「目の前に半額弁当がある。戦うには十分すぎる理由だと思っけど」

一瞬、アロハはきよとんとした表情になった。

「かかかつ、そりゃそうだわな」

しかし、すぐに楽しそうに笑い出す。

「……………つと、小僧、いや犬っ子。もうすぐ半値印証時刻だ。その前に弁当の確認ぐらいしておけ」

ハイフブライスラヘリングタイム

そういつてアロハは野菜コーナーへとむかった。

歩いて弁当コーナーに向かう。遠目から見ると弁当は3つ残っている。なにが残っているかを確認しにさらに近づいた。

『鮭弁』

『唐揚弁当』

ここまではどこにでもある普通の弁当だった。

『ゴーヤーチャンプルー弁当』

おかずのメインがその名の通りゴーヤーチャンプルーである弁当しかし、弁当全体の3分の1ものスペースを使っているのはいかなものか。豪快だな、と思いつつ唾を飲み込む。俺はゴーヤーが好きだ。いや、大好きだ。あの苦味が堪らない。

今日の弁当はこれにしよう。これしかない。ハーフプライスラベリングタイム半値印証時刻までのこっついてくれよ、と願いつつ調味料コーナーへと向かった。

様々な調味料が並ぶ。見知らぬ名前の調味料が見てこうゆつのはどんな料理に使うのかと疑問に思う。調味料を見つとも心は弁当コーナーにあった。ハーフプライスラベリングタイム半値印証時刻はまだかと何度も腕時計をみる。1分1秒が長い。まだかと気持ち焦る。

何度見たかは覚えていないが遂に腕時計の短針が7時を指した。にものかみ煮物神が出て来る。そう思い視線はスタッフルームに向く。しかし中々と出てこない。1分、2分とじかんが経っていく。半額神と言えども時間きっかりに出てくるわけではない。それでも7時丁度に出てこない煮物神にやきもきする。

7時10分を回った頃に煮物神は出てきた。あくまで目安といえもう少しはやく来て欲しかったなと思う。煮物神は惣菜コーナーに

向かい惣菜を並べ直すとバーコードリーダーを取り出し半額シールを一つ、二つとぺたぺたと貼っていく。もとより今日はそれ程と惣菜が残っていないかったのですぐに終わった。

そして、弁当コーナーに向き直ると歩を進める。残っている弁当を確認すると並べ直してからハンガクシールを貼った。そのままスタツフルームへ向かい、扉を開けると店内にお辞儀をしてから扉を閉めた。

瞬間、店内の空気が変わる。狼たちが弁当に手にするために弁当コーナーへと走った。俺はそんな狼たちに対して出遅れた。理由は店内の空気が変わったその瞬間に発せられた狼たちの気に当てられたとでも言えばいいだろうか。覚悟はしていた、それでも狼の弁当を欲する気迫に耐えられなかった。俺が思っている以上の世界であることを痛感する。だが、それは俺が弁当を諦めることには繋がらない。

「絶対に弁当を食べるっ！」

だから、遅れてはいるがそう口にして弁当コーナーに向けて走り出した。弁当コーナーには8人の狼が群がっている。スタートの出遅れは痛い敵の数は確認した。8人、俺を入れて9人。弁当は3つ。単純計算で3人に1人が弁当を手に入れられる。初戦でこの割合なら悪くはないはずだ。まして、俺の狙う『ゴヤーチャンプルー弁当』はゴヤーが使われている以上は好き嫌いが激しい。つまり、ほかの二つの弁当を狙う者のほうが多いと見て間違いない。ならば勝機はあるはずだ。

弁当コーナーにたどり着く前に狼たちの動きから狙いを推測する。『鮭弁』と『唐揚弁当』が2人ずつ、『ゴヤーチャンプルー弁当』

は1人、後の3人の狙いはわからない。因みにアロハは『鮭弁』狙いのようだ。

出遅れたからか、狼たちは俺のほうを見ていない。好機とみて勢いそのままへ弁当をを目指す。1人、2人と隙間を縫うように前へ進む。

「甘えよ」

その言葉とともに俺の左側から男の拳が飛んできた。俺は拳をしっかりと見ながら左手で相手の腕を払う。腕がぴりぴりとする。だが、障害は払った。このままこの男の相手をするよりは弁当を目指すのが得策と瞬時に判断して駆け出した。

「ぐふっ」

俺は駆け出した瞬間に腹に蹴りを貰った。さっきの男が拳を払われるのと同時に左足で俺を蹴っていた。後ろに飛ばされるが先ほど抜き去った1人へと当たり、止る。今は俺のミスだ、向かってくる拳を払うために他へと注意が回らなかった。

腹は痛むが、痛みよりも問題なのは腹に食らったことだ。腹に食らうというのは胃へもダメージがある。胃へのダメージは食欲へと直結する。時間が経てば経つほど胃がダメージを認識して食欲が落ちる。熟練の狼ならばともかくルーキーである自分にとっては食欲の加護がなくなるのは致命的。

ならば自然と短期決戦を挑まねばなくなる。攻撃、防御、回避、間隙のすべてにおいて俺は9人の中で劣る。それも圧倒的に。勝つためにはどうするか。時間はない、能力は劣る、弁当への距離も飛ばされて近いとはいえない。絶望的だ。しかし、諦めるなんて選択肢はない。

答えは一つただただ弁当を目指すの捨て身の特攻。それしか

いと思う。

「行くぞっ！」

雄たけびのように叫び弁当を目指して駆けた。左からまた拳が飛んでくる。先ほどの男だ。今度は拳を払わない。食らうことを前提に最低限の動きで体をひねり、ダメージを減らすようにバックステップ。

「ぐっ」

痛い、歩みを止めるほどではない。先ほどの同じように左足からの蹴りが来ていた。バックステップでは蹴りの間合いから逃げることも考えての選択だ。しかし、男の蹴りは創造より早かった。間合いから外れるかどうかは微妙なところだ。せめてできることはないだろうかと自分の重心を後ろに預ける。

ひゅっ、と俺がいたところを男の蹴りが空を切る。ギリギリだが避け切れた。しかし、重心を後ろに集中しすぎたらしいこのまま倒れてしまう。足を踏ん張りこらえる。腹にも力をいれ上半身を前に出す。

何とか体勢を立て直せそうだが、このロスは大きかった。俺に向かって攻撃をしてきていた男も体勢を立て直しそうだ。このままではただ時間を過ぎただけになってしまう。

俺は一か八かの賭けに出る。体勢を立て直す勢いを利用して男に対してヘッドバッドを試みる。かわされたら俺はそのまま倒れてしまう。これは最早、致命的となる。吹き飛ばされたなら体勢を立て直し再度向かう時間ができるだろうが戦場の真ん中であるここで倒れた者が起きることなどまず無理だ。回りすべてが敵の中で争奪戦が終わるまで踏み続けられるだろう。

だがこのままお互い体勢を立て直した場合は間違いなく俺が負け

るだろう。だから俺は男に向かって倒れるようにヘッドバッドをかます。

「ぐおおおっ」

ヘッドバッドは成功する。お辞儀したかのような格好のため身長差もあり、男の腹へと直撃した。腹への強烈な一撃だ。男はもう戦いには戻れないだろう。

「やったっ…」

初めての戦いで決定的な一撃を与えたことで自惚れた。いける、このまま弁当を。男は倒した感触をかみ締めながらそう思った。

愚かだった。決定的な隙がその時生まれていた。男を倒してすぐに弁当に向かって駆けるべきだったのだ。

「なかなかやるじゃない、子犬ちゃん」

そう声がするほうを見ると胸があった。

「でかつ」

思わず口にその戦闘力はどんなに低く見積もってもEはくだらない。敵に隙をみせている、これだけでも相当なピンチ。なのに俺は視線は胸に向き体は硬直する。だが、視線がはずせない。男の性さがには逆らい難い。ヤバイとわかっているのになにもできない。

「ぐほううう」

腹に強烈な膝蹴りを貰った。そのまま膝をつき前へと倒れこむ。

「おう!？」

倒れこむ寸前に後ろから襟首をつかまれてそのまま後ろへと飛ばされる。

「サービスだ。このまま踏まれるのもつらいだろうからな。……………
昨日の侘びだ。」

アロハの男はそう言って戦闘不能になった俺を線上の外に投げ飛ばした。

アロハに投げ飛ばされてからどれだけの時間が経っただろう。腹に食らったダメージは思いのほかに大きくしばらく四つんばいの状態でうずくまっていた。ダメージから回復して弁当コーナーを見渡す。弁当は残っていないし人もいない。

誰もいない弁当コーナーをしばし呆然と見つめ続けた。どれくらい見ていたのかはわからなかったが、自然と疲労感が全身を伝う。

「ああ、俺は負けたのか」

口にする。口にしたことで己の力量不足を認識する。胸に見とれたなどの言い訳は通用しない。他の男の狼も同じ条件で戦っている。それでも心乱されるかとはないのだろう。そもそも、見とれずともあのタイミングでは回避できなかった。それがわかるから悔しい。唇をかみ締めた。涙が出そうになるが堪える。子供の体は涙腺が弱すぎるとか見当違いな文句を心の中で言う。

いつまでも呆然としていてもしょうがない。晩御飯はどうするか。なんて悩むまでもなく首領兵衛どんべえ一択だ。俺はうどん派だ。そばが嫌いというわけじゃないが10回食べればまず9回はうどんだ。そしてカッパ麺のコーナーに行き首領兵衛どんべえきつねうどんを取ろうと手を伸ばす。

「待てよ」

その手は途中で手首を掴まれてとまる。掴んだ手の主はアロハだった。

「お前はもう諦めるのか」

アロハはそう言った。諦める何を言っている俺は負けたんだ、弁当はない。そう目でアロハに訴える。

「スーパーはここだけじゃない、まだある。先輩として俺が教えてやるっ」

アロハは憎たらしいぐらいの笑顔でそう言った。

「乗れよ」

アロハが予備のヘルメットを俺に投げて寄越す。俺はそれを受け取るとアロハの近くに行く。

「なんでこんなに色々…」

当然の疑問だろう。俺がアロハと会ったのは昨日が初めて話したのは今日だ。ここまでしてくれる意味がわからない。昨日の俺びと
いうなら先ほど返してもらったばかりだ。

「ここいらにはスーパーが4つある」

俺の疑問には答えずにアロハは喋る。

「1つは古狼と呼ばれる者たちが集まるスーパーだ。ここに行くことはあまりないだろう。つまり、俺らみたいなやつらが戦うのは3ヶ所になる訳だ」

「3回チャンスがあるってことですか」

成る程と思った。つまり、煮物神のいる店で弁当が手に入らなくてもあと2回チャンスがあるということか。

「違う。チャンスは2回だ」

3店舗あるのにチャンスは2回。どういう意味かとしばし考える。
答えはすぐに出た。

ファイナルハーフライ斯拉ベリングタイム
「最終半値印証時刻が同じってわけですか」
「違う」

間髪いれずにアロハは否定する。

「ここいらの狼は新人に優しい。土地柄なのかもしれない」

確かにアロハが俺に色々としてくれることを思うと優しいのだから。しかし、あくまで個人の問題な気もする。それに答えにならない。

「3店舗のうちの最終半値印証時刻にあたる店は3月から5月の新人が増える時期だけここいらの名うての狼が集う。……いや、腕がある奴はこの期間の間だけのここのスーパーは最終半値印証時刻の店か、古狼の集う店、もしくはこの地域以外の店に行く」

つまり新人が増える時期は他の2店舗には顔をださないということか。

「いつの頃からかはわからんが気づけばそういう風習ができていた。……逆に腕がない奴は最終半値印証時刻の店には行かない。と言うか行ってはいけないような雰囲気になっているがな。この時期にその店に行くことがここらでは実力者の証だ」

地域ごとの特性みたいなものか。場所が違えば掟も多少変わるのも当然だ。

「他にも聞きたいことがあるなら先輩として答えてやるよ」

この言葉に俺はアロハに会った当初から聞きたかったことを尋ねる。

「戦いには関係ないことなんですけど」
「構わん」

なら、この質問をぶつける。

「この時期にアロハを着ていて寒くないんですか？」

至極もつともな質問だろう。今は4月だ。アロハを着るには少し
というかだいぶ早い。

「……………」

よく見ると鳥肌が立っているのがわかる。ましてやこの時期にア
ロハでバイクとはバカとしか思えない。何か理由があるに違いない
と思う。

「……………俺のアイデンティティーなんだよ」

「それだけ？」

「ああ」

俺の中でアロハはバカという図式が完成した。いい人だがバカだ。
紛れもないバカだ。

「…他に質問がないならとっとと乗れっ！」

少し急かすように言う。ちょっと怒らせてしまったみたいだと思
いながらバイクの後ろに乗った。

バイク乗って5分もするとスーパーが見えてきた。煮物神がいるスーパーよりは若干小さい。それでも決して小さいスーパーではなく、十分な品揃えは期待できる。

「着いたぜ。ここが地場神じはがみのスーパーだ」

バイクを降りるなり、アロハはスーパーを見ながら言った。

「地場神……」

俺はこのスーパーにいる半額神の名を反復する。…名前だけ聞くと本当にいそうな神様の名前だと思う。

「煮物神…つとさっきのスーパーの半額神の名前だが知っているか？」

アロハの問いかけに俺は頷く。それを確認したアロハ続きを話す。

「煮物神はその名の通り弁当の中でも煮物関係のおかずが他のスーパーに比べて抜きん出ている。…煮物関係が残っていればまず間違いないく月桂冠になる。…月桂冠ってのはわかるか？」

月桂冠。半額神が最も自身の持てる弁当に貼られる特別なシールがある。通常は機械打ちである半額の文字が半額神自らの手で書かれている。店舗にもよるが貼られないことのほうがはるかに多い。古代ギリシャにおいて競技の優勝者に送られる葉のついた月桂樹の枝を輪にして冠として送った。これを月桂冠の語源とする。現在ではその意味は最も名誉な地位のしるしでもある。そのシールが貼られた弁当を手にすることはその日そのスーパーでの絶対の勝者を意

味する。

唾を飲む。その言葉を聞くだけで腹の虫がなった。

「くくつ。腹の虫が答えてくれるとは思わなかったぜ」

恥ずかしい。笑うアロハを強めに睨む。

「おいおい、睨むなよ。…で、何の話だったか。ああ、半額神の名前だったな。地場神ってのは…弁当を見てから説明したほうが早い。行くぞ、犬っ子」

一人でどんどん話して自己完結したかと思うと、アロハはスーパーに入っていた。俺はその後を追いかけてスーパーに入る。

入ると狼特有の視線が俺に向く。だが煮物神のスーパーほどではない。狼の数が少ないのかとも思ったが、すぐに違うとわかった。数瞬遅れて感じる視線が増えたからだ。俺の前にアロハがいたことが原因です。狼として活動しているアロハを確認していた為に俺への視線が遅れただけだった。

俺と違ってこのスーパーはすでに庭のようなアロハはさっさと進む。弁当コーナーにむかうのだろうと、俺はアロハに続いて歩いていると弁当コーナーが見えた。4つ弁当が残っていることをわかる。どんな弁当が残っているかと確認の為にさらに近づいた。

「なっ…!!」

『肉野菜炒め弁当』

そう書かれた弁当がある。弁当自体はどこにでもある平凡な弁当だろう。だが、この『肉野菜炒め弁当』は平凡で片してはいけなないと思った。特筆するべき点があった、野菜の量が多い。大盛りなん

て言葉で済ましてはいけない。特盛り？まだ陳腐だ。爆盛りとでも言おうか。それほど野菜が多い。肉はそこらにちらほらと見えるだけだ。しかし、肉が少ないというわけではないだろう。普通の『肉野菜炒め弁当』だったら少ないとはいえない量だ。肉が多いとはいえる量ではないが。つまり肉が少ないと感じさせてしまうほどの野菜の多さ。キャベツ、にんじん、ピーマン、玉ねぎ、もやしと5種類の野菜がこれでもかと盛られている。

「すげえだろ？ここいらの狼はこの弁当を『肉野菜炒め弁当』と呼ぶ奴はいねえ。誰が言い始めたかは知らんが『肉入り野菜炒め弁当』と呼ぶ」

確かにこの割合は肉野菜炒めというよりは肉入り野菜炒めだと納得する。ならばほかの弁当はどうかとみる。

『鮭弁』

『肉野菜炒め弁当』

『メンチカツ弁当』

あの脅威の盛りの『肉入り野菜炒め弁当』は2つあったのだ。こちらも先ほどと遜色のない盛りである。『鮭弁』は普通だった。ならば『メンチカツ弁当』普通だろうと思ったがその思いは打ち砕かれる。

「なんだよ…。あのキャベツの量は。ありえねえ」

メンチカツの下にしかれたキャベツは最早、海と言っていていいほどの量だった。それに合わせたのだろう、キャベツにもたつぷりとソースがかかっている。おかずはメンチカツが3枚以外はおしんこがついてるだけのシンプルさ。通常なら胃がもたれそうな感じもする

があれだけのキャベツがあれば最後まで美味しくメンチカツもいただける。しかも、付け合せのおしんこも通常のスーパーの2倍の量だ。極め付きとばかりに『メンチカツ弁当』は更なる脅威を見せ付ける。

「…つご飯が、豆ご飯」

豆の数、大きさともに充分だ。豆が入りすぎていたらご飯の価値は減る。いくら美味くても豆が入りすぎていた食べるに邪魔になる。だが、この弁当はその限界ギリギリを見極めた量の豆を入れている。

「この半額神、地場神は野菜を知っている」

驚愕する俺に対してアロハはそう言った。

「犬っ子。お前の狙いは」

商品棚を挟んでアロハが問いかけてきた。

「メンチカツ」

簡潔にそう答える。

「なら、今から敵だな」

アロハの狙いも『メンチカツ』だったのだった。ならばこれから敵。余計な馴れ合いは不要だと思い、別のコーナーに歩き出す。

「ちょっと待てよ」

アロハは俺を呼び止める。俺は返事を返さずに顔だけを向きなおす。

「地場神の由来はわかったか」

「……………わからない」

俺がそう答えるとアロハは饒舌に説明を始めた。

「まつ、犬っ子ぐらいの年の奴にはわからんか。スーパーにはな地場直産ってコーナーがあるんだ。その頭をとって地場神」

地場直産の名に聞き覚えはある。なんだったかと思い出そうとしている横でアロハは説明を続けていた。

「地場直産のコーナーは簡単に言えば店側が仕入れた商品を売るんじゃないくて農家がスーパーの場所を借りて商品を売るコーナーだ。売れたときに売価の何%が見せ側の利益となる。この地場直産の利点は正規では売られないものも並ぶ。形が変だとか少し傷がついているものとかがそうだな。こういった野菜は市場にでることはあまりない。日本人は形の綺麗で傷がない者を好む傾向が強い。だから、売れが悪いし、ちゃんとした商品の中にそういうのが混じっているのはマイナスイメージが強つく。だが、地場直産ならそういった商品を出せる。店側も仕入れてるわけではないから売れなくても損をしない。そういった野菜はもちろん市価よりも安い価格で販売される」

成る程と思う。店側からしたら利益は出ても損は出ない。農家側からすれば売れないものを売れる。客側からすれば見た目は少し悪

くても質は問題ない野菜が安く手に入る。よく出来たシステムだと思っ。

「で、このスーパーは昔からそうだった地域の農家との繋がりが強い。そして、弁当は加工品。レタスとかを買ったとき料理に使う前に外側の1、2枚を使わないことがあるだろ？だが、その1、2枚の葉を捨てたからと言って店側に使えなかったなんて文句を言う奴はいねえ。それと同じように切ってしまったえばにんじんの傷なんか関係ないし曲がったきゅうりも同じだ。安い野菜を効率よく使っているわけだ。原価が安く済んだ分だけ利益が増えるわけだが地場神は何を思ったか通常の野菜を使った時と差額を野菜で埋めやがった。そしてこのスーパーの弁当に入っている野菜の量は他の店を圧倒する結果になった。っと長々と語っちまったな。もう地場神がでてる」

アロハがそう言うのと同時にスタッフルームの扉が開く音がした。

地場神は50才を超えたぐらいの男であった。惣菜コーナーに向かった地場神は慣れた手つきでなれべ直すとすぐに半額シールを貼っていく。流れるような動きであっという間に惣菜コーナーを去って弁当コーナーへと向かった。そして、弁当コーナーも先ほど変わらない早い動きで陳列をおえ、半額シールを貼るとスタッフルームへと帰っていった。扉を閉める前に綺麗なお辞儀をして扉を閉めた。

走り出すと同時に地響きのような音が聞こえた。一斉に狼たちが走り出したことにより生まれた音だ。視線を動かして狼の数を確認する。11人。

「8人が。厳しいな」

俺の斜め前を走っているアロハがつぶやいた。8人？11人ではと思うが気を取り直して『メンチカツ弁当』を指す。その途中でアロハのいう8人の意味を理解した。8人と言うのは狼の数ではなく『メンチカツ弁当』を指す狼の数。

そう気づいたときには回りを囲まれていた。前、後ろ、右、左から同時に攻撃が来る。かわすことが出来るスペースはない。おそらく素人と見た俺をまず脱落させようと示し合わせたのであろう。俺にできるのは攻撃に備えて体を硬くすることだけだった。

「ぐお…」

前から肘のエルボーを貰う。

「いてっ」

左からの拳を方に食らう。

「およっ…！？」

右からは攻撃ではなく足払いだった。バランスが崩れて倒れると思っただがたおれない。

「あれ？」

両わき腹を掴まれている。後ろにいた人だろう。

「うおおおー！？」

そのまま持ち上げられ戦場の外へと投げられた。

ゴツンと店の床にぶつかった。

痛い。超痛い。痛みでうずくまる。こうしてうずくまっている間も弁当を巡る戦いは繰り広げられている。このままここでうずくまっているのは簡単だ。俺はもう戦いの輪から弾き出されたのだから。しかし、俺は再び戦場に向かおうとした。

食べたい。あの『メンチカツ弁当』を食べたい。その思いが痛みを堪えさせ、戦場へ向かう意思の力となった。

現実是非常だった。俺が戦場を向かおうと弁当コーナーを振り返ると、『メンチカツ弁当』を手にしたアロハが悠々と弁当コーナーを離れているところだった。

負けた。その思いが胸を突き刺す。目指すものがないと知った絶望から膝を突く。狼、初日である勝てる確立は高くはないのはわかっていた、それでももしかしたらと思っていた。だから俺はそこで負けという壁にぶつかつた今、戦意をなくした。

「何してる。弁当はまだ残っている」

アロハは俺の横を通るときにそう言ってレジに向かつていった。

その言葉で失われていた戦意が戻り始める。アロハの言うとおり、最初の目当てであった『メンチカツ弁当』はなくなったがまだすべの弁当が取られた訳でない。急いで弁当コーナーを見る。残る弁当は2つ『肉入り野菜炒め弁当』と『鮭弁』がある。もう1つの『肉入り野菜炒め弁当』は誰かに取られたのだろう。戦場で現在も戦っている狼の数は5人。俺は弁当を目指して駆け出した。

「まだだっ！まだ俺は戦える！」

口にすることで一種の暗示を自分にかける。まずは狙う弁当を決める。2つの弁当を走りながら見る。

「ん？」

弁当の高さが違う？『肉入り野菜弁当』の方が高い。そして、気づく。

「蓋が違う…」

そう、『肉入り野菜弁当』はその暴力的なまでの野菜の量のため普通に使われている。弁当の蓋よりも高くなっている。

俺は目的を『肉入り野菜弁当』へと絞った。一直線に目指す。ただ我武者羅に。実力、経験の双方で劣る上に体に痛みもある俺に正面からのぶつかり合いでは勝機を見出すのは難しい。だから煮物神の店のように再び特攻を仕掛ける。弁当を手にしたならそのまま倒れてしまっても構わない。そんな気持ちで走り手を伸ばす。

他の狼たちは投げ飛ばされた俺を眼中からはずしていたのが功を奏した。俺の存在に気づかれたときはもう俺の間合いだった。いける、そう思い左手を伸ばした。

「うっ…」

痛みがはしる。左手は正確には左肩はさっき攻撃を食らっている。左手を伸ばしたことで左肩に痛みがはしる。痛みによる一瞬の硬直。これを見逃してもらえないほどこの場は甘くない。

あと少し、というところで腹に蹴りを受け吹き飛ばされ気を失っ

た。

吹き飛んだ先で気を取り戻したときにはすでに戦いは終わっていた。今度こそ負けた。もう弁当は残っていないのだから。敗北感が身を包む。

「…しょう」

つぶやく。

「ちつくしょう」

何度も。それは負け犬の遠吠えに近かった。

「あと…あと少しだったのに」

それでも俺は1人、つぶやいていた。

首領兵衛どんべえきつねうどんを買って店を出る。

「よう、惜しかったじゃねえか」

店の先にはアロハがいた。

「帰り、送るぞ。煮物神のスーパーまでだけだな」

アロハはそう言っただけで俺に向かつてヘルメットを投げて寄越した。俺はそれを受け取りアロハの後ろへと乗る。

「じゃあな、また明日」

煮物神のスーパーについたらそう言っただけでアロハは行ってしまった。俺はそのまま家へと歩いて帰る。体中が痛い。初日から2試合もしてきたのだ。弁当が手に入れば話はかわったのだから俺の手元には弁当はない。ただ敗北の無力感と体の痛みだけが残っている。まだ、勝利の味を知らない俺にとっては心が折れそうなのだった。家に着くと首領兵衛^{どんぐえ}にお湯を入れて出来るのを待つ。

「明日、どうしようかな」

もう止めようかな、そう思うほどに俺は疲れていた。自然と口からそう漏れる。その時ふと思いつく。

また明日。アロハはそう言っただけで去っていった。これは俺とまた明日も会うということだ。俺とアロハは会う場所などスーパーしかあり得ない。ならばまた明日とはアロハからの腐るなよと言うメッセージなのか。慰めの言葉はなかった。それでもアロハは俺のことを気遣っていたのかと今になって思う。

「明日も行くのか」

アロハの気遣いを感じた俺はそう口にしていた。

第三話 狼の世界

狼としての初めて戦場にたった次の日の目覚めはつらかった。特に腹が痛い。煮物神にものがみ、地場神じはがみの両方の店で俺に止めをさしたのはどちらも腹への一撃。それも腕よりも威力が高い脚での攻撃、片方にいたっては膝だった。

「よく地場神の店で戦えたなあ」

煮物神での戦いが終わった後にアロハに流されるように地場神の店に行ったときは次のチャンスがあるという気持ちで支配していたから痛みは感じていなかった。多分、脳から何とかフィンとかいう物質が分泌されていたのだろう。一晩寝たことで体も落ち着いているのか、今は昨日の戦いのダメージが残っているのを感じられた。

「朝御飯はいらないかな…」

中学1年である今の俺にとっては成長期にご飯を抜くと言う選択肢はつらいものになる。しかし、腹の痛みが何かを食べようとする気持ちもなくさせる。

「給食までには痛みもなくなってるだろう」

そう楽観的に思いながら通学の準備を整える。

「おはよーっ！」

元気に朝の挨拶をしながら教室に入る。

「おはよ」

「おはよーさん」

「おはよう」

クラスメートの何人からか返事が返ってくる。小学校のときと比べれば返事の数はいくつか少なくなっている。まあ学区の関係とかで違う小学校の生徒も混じっているし4月である今そこまで親しくなっていないのもあるのだろうが。

「おはよう、真。今日は遅かったな」

政志が俺に向かって手をあげつつ俺に言った。俺はいつもクラスの中でも割かし登校するのが早いほうだ。だが今日は始業ギリギリという時間でもないが5分前という余裕があるという時間でもない。ダメージが残っている体では朝がすらく登校中も足取りは重かった。

「たまにはそんな日だってあるさ」

親友と言えど説明するのは面倒だったし、説明したところで理解してくれるとは思わない。理解したところで「お前、バカだろ」と言われるのは目に見えてわかった。だから適当に流すのが一番楽だと思う。

「まあな」

特に気になつたわけでもないのだろう。政志もそれ以上は聞いてこなかった。それから朝のHRまではたわいのない話していた。

誤算だった。いや、忘れていたと言ったほうがいい。今日の4時限目は体育だった。3時限目を終えて腹の痛みもそれなり落ち着いてくると今度は腹が減ってきた。朝を抜いているから早くあと1時限だ、そう思っていたからこそ「早く着替えに行こうぜ」と政志に言われたときに体育であることを思い出して絶望した。

すきつ腹での体育はつらかった。転生者である俺にとっては今までの授業は簡単なものであり、授業が退屈で長く感じることは今までに何度も、と言うかほぼ全ての授業がそうだった。だが、今日のこの体育が今まで最も長く感じた授業だった。

体育の授業を終えた俺は給食の準備をしている時に再度、絶望する。今日の主食は食パン2枚であったからだ。別にパンが嫌いと言うわけではない。むしろ好きだ。米の方が好きなのは確かだが。

話を戻そう。給食におけるパンとご飯の違い、それは食べられる量に関係ある。ご飯はクラスに支給されている範囲であれば好きにだけよそうことができる。量に限りはあるが。しかし、パンとなると一人当たりの配当と言う形になる。つまり、足りないからと言っておかわりがあるわけでもない。パンが主食としてでるのはこれで確か4度目。そうなると、1枚とかでいいと言う小食の人もこの人にあげているという図式がすでにできている。それに今日は欠席者もない。そもそも今のところ誰かが休んだと言うこともない。我がクラスは健康優良児ばかりで実に結構なことである。

今日は絶対に弁当を食べてやる。そう決意を固めた。

気力は十分。腹の虫は今か今かとその時を待っている。体調は十全とはいえないが、それでもほとんど問題はない。右手に財布を握り締めるとそのままズボンのポケットへと入れる。

「行ってくる」

家には誰もいないがそれでも家を出るときにそう口にした。

闘志をむき出したままに煮物神がいるスーパーへと確かな足取りでむかう。今日は勝てる、そう思った。腹の加護は万全だ。昨日は感じられなかった体のうちからでてくるような不思議な力を感じた。

「うお、すげえ気合だな」

スーパーにつくとアロハがすでに来ていた。俺からほとぼしる闘志が感じられるのか若干驚きと共にアロハが言った。

「今日は弁当を手に入れます。…何か負ける気がしないんですよ」

啖呵を切るようにアロハに言った。

「確かに、俺も若干気圧された。2日目にしてそんだけの気合を発せられるなら狼の素質があるのかも知れねえな。………ただ、言いにくいが残念な知らせがある」

「残念な知らせ？」

名つての狼がいるとかだろうか。そう思うがすぐに否定する。アロハの話ではこの時期に名つての狼はここには現れないはずだった。今まで続いてた習慣がそう簡単に変わるとは思えない。

ならば集まっている狼が多いのだろう。そう結論する。数が多いなら苦戦は必然だろう。そう結論してスーパーに入ろうとする。

「おい、待てよ」

アロハがそういうが人数を言われるよりも狼たちの視線を直に感じたほうがわかりやすい。どれ程の視線を感じるのかと身構えながらスーパーに入った。

視線を感じない。ただの一つもだ。狼になる前から感じる事ができた視線を狼となった今現在に感じないと言つことはおかしい。どういうことだと思つ。

「話を最後まで聞け。……………気合十分な犬っ子には言いにくいんだが」

後ろからアロハが話す。言いにくいと区切り一呼吸ほどのためだけに。

「今日は煮物神の店に弁当は…残っていない」

「ふえ？」

このとき振り返ってアロハを見た俺の顔はすごい間抜け面をして

いたと後にアロハは語った。

「ありがとうございます」

バイクから降りて礼を言う。アロハは昨日に続いて今日も地場神の店まで送ってくれた。

「まあ、ついでだし気にするな」

地場神の店に前に立つが店の中に入る一步が出ない。地場神の店でも弁当がないという可能性もある。さっきまでの俺は弁当が残っていないなんてことを微塵も考えていなかった。だが、今は考えいでしまっている。それも昨日よりも気合を入れて腹の虫が催促を繰り返しているなかでだ。地場神の店でも弁当がなかったらこの思いをどこにやればいだろう。この土地の風習的に他の2店のスーパーに行つたところで勝てそうにもない。中学1年である俺にとっては他の地域のスーパーに行くのは厳しいものがある。すると自然にここがラストチャンスとなる。

「安心しろ。経験上、煮物神と地場神の店の両方の弁当が売り切れることは祭りとか特別な日を除けばなかった」

スーパーの扉の前で立つたままの俺の気持ちを理解してか俺に対してアロハは言った。

「本当ですか？」

「俺は弁当のことで嘘をつくのは狼にあるまじきことだと思つてい
る」

心外だという顔でアロハは言い返す。アロハの言い分に俺は深く納得する。経験上ということは今までなかったと言うことでこれからの保障はない訳だが俺がスーパーの扉を躊躇うことなくくぐるには十分な台詞だった。

入った瞬間に視線を一身に受ける。昨日感じた視線の数よりは確実に多い。煮物神の店が駄目だった時点である程度は予想は出来た。狼が多いことは弁当を手に入れられる確立が減ることになるのだが、今の俺には大した問題ではない。視線があると言うことは弁当が残っている。それが一番重要なことだった。

『肉野菜炒め弁当』
『肉野菜炒め弁当』
『豚生姜焼き弁当』
『ハンバーグ弁当』
『カレー丼』

この五つの弁当が残っていた。

「今日も2つ残ってる」

昨日に引き続き『肉入り野菜炒め弁当』が2つ残っている。決して人気がない訳ではないであろう弁当が2日と続けて2つ残っているのは奇妙だ。

「ん？ああ、俺も最初は疑問に思ったんだがな。理由は簡単だ。売れ筋で安定して材料が用意できる。自然と作られる数も多くなる。」

……料理しない奴が野菜がたくさん食えるからよく買った」

料理ができなくて外食ばかりでは確かに野菜分が足りなくなりがちになる。自然と外食といっても毎日食べるなら安いものが中心となる。ハンバーガーや牛丼などがその筆頭だろう。安いジャンクフードが当たり前のように夕食の選択肢に入っているものを感じるものがあつた。

気を取り直して他の弁当を見てみる。『豚生姜焼き弁当』はレタスの枚数が多い意外は特に目立ったところはない。『ハンバーグ弁当』も特筆するところはない。

問題は最後の1つ『カレー丼』だ。まず最初の疑問がなぜカレーライスではなくカレー丼なのかと思う。日本人としてはカレーライスの方が親しみがある。人によっては「カレー丼？カレーライスの器が丼ならカレー丼だろ」と言う程度の認識しかない。

だがカレーライスとカレー丼は似て非なるものだ。簡単に言えばカレー丼のルーは出汁でのばされて、醤油風味の味付けがされている。カレーライスには用いられない具材も使われる。長ネギなどがその筆頭だろう。

「『肉入り野菜弁当』だな」

カレー丼の説明をしていて選ばないのかよと言われるかもしれないが食べたいのはこの弁当だ。昨日、食べ逃した上にここの売れ筋とまで聞いてしまったら食べたいと思うのは当然だ。

「ふん、子犬ちゃんはそれか。じゃあ、あたしとは敵だね」

そんな声がして後ろを振り向くと知らない女が立っていた。

「誰ですか？」

「えー、あたしを忘れちゃったの？」

どうやら面識があるらしい。女をよく見る。年は17ぐらいだろう、女と言うよりも女の子と表現するべきだ。近くの高校のブレザーを着ていることから大きく外れていないと思う。が、俺はこの高校に通っている生徒に知り合いはいない。人違いだろうと結論した瞬間にそれが目に入る。

「昨日の巨乳!？」

そう叫ぶ。目の前の女の子は露骨に不満そうな顔する。近くにいるアロハは何がそばにはいったのか「ぶっ」と噴出し笑う。

「否定はしないけどさ、いきなりそれは酷いんじゃない? ってかさ、昨日も思ったけど結構なむっつり?」

昨日は胸に目を奪われてたし、今日は胸で個人を特定した。現在進行形で胸を凝視している。そう思われても仕方ない。むっつりを否定したいところだがその為には胸から目をはずすだけではなくこれからも胸を見ないようしなければならぬ。

それは、できない。なぜならもう少し大きくなればこの行為は『変態』と呼ばれるようになる。だが、今ならまだ『色気ついたガキ』で済むのだ。この扱いで済むのは数年、いや数ヶ月しかないかも知れない。ならば、今は可能な限り胸を見ようと。小学1年の担任が赴任3年目の巨乳の先生だったときから俺はそう決心した。そして目の前の女子高生はその先生を上回るポテンシャルを秘めているのは明白。視線をはずさなくこの女子高生を巨乳と呼ぶことに決めた。

「この名物なら一度は食べたいじゃないですか。2つあるからっ

てお互い手加減はしないでしょ」

顔ではなく、胸を見ながら話題を話しかけられたときのものに戻した。

「…まあ、いいわ。お互い頑張りましょ」

胸を見ながら話す俺を少しあきれたような声でそう言って去っていった。

後、5分程で半値印証時刻ハーフプライススレベリングタイムという言うときにそれは現れた。腹の虫がはやく食わせると催促して俺の気合も十分で後は半額神がシールを貼るのを待つだけのときだった。

「…っ『大猪おおじし』だ！『タンク』も装備してるっ！」

スーパーの入り口が見える位置にいた狼が叫ぶ。その声に呼応するかのようにスーパー内にいる狼たちから殺気が走る。

大猪：それは狼の天敵ともいえる存在だ。生活力というベテランの主婦だけがもつことを許されて特殊能力を備えた者たちがそう呼称される。狼たちにとっては忌むべき存在である。タンクと呼ばれるのは買い物用のカート。タンクを装備した大猪は重戦車といいいほどの攻撃力を誇る。

この世界に踏み入れたからには必ずぶつかる脅威。狼たちが1人、2人、と弁当コーナーの前に集まっていく。普通は半額シールが貼られる前に狼たちが弁当の前に来るのは最初の確認だけだ。しかし、今は弁当コーナーの前に狼たちが集まっている。理由は1つしかない大猪をとめるためだ。

正直、怖い。実際に体験にしている先達に比べればその怖さは想像にとどまるが原作でも最強と言われる魔導士^{ウィザード}『金城優^{かねしろゆう}』を持って「進む方向を調整してやればいい」と言わせている。つまり、最強クラスの狼をもってして正面からでは対応できないといっているようなものだ。

体が微かに震えている。それでも俺は大猪を止めるべく狼たちの元に向かおうとした。

「待った」

不意に後ろから俺の右肩に手が置かれる。振り返ってみるとそこにはアロハがいた。隣には巨乳もいる。

「お前が行ったところでどうにもならねえ」

「そうそう、子犬ちゃんも弁当の前にいればいいのよ」

2人はそれだけ言うたさつさと他の狼たちの元に行ってしまった。言われたことの意味は考えなくてもわかる。大猪をとめるだけはいずれ狼全員が力尽きたときに半額弁当を根こそぎ奪われていく。それはいくら足止めをしたとしても負けを意味する。ならば1つでいいから弁当を取るものの存在が必要となる。彼らはその役目を俺に任せただのだ。

原作でも弁当を手に入れたことがなかった佐藤洋と白粉の2人^{おしろいほな}がこの役目を任せれた。おそらくはこの役目が『弁当を手に入れたことのない者』か『新人の狼』にまかせるといふ掟^{ルル}があるのだろう。それに新人である上に大猪と相對したことはない俺ではできないことなど無いに等しい。悔しい思いもあるが弁当を取ることが俺にとって、いや、この場に集まっている狼たち全ての為になる。そう思い弁当コーナーの前に来た。

俺が付いたと同時にスタッフルームの扉が開き、地場神が出てきた。その瞬間、いや、刹那と言うべきか今まで野菜コーナーで野菜をみていた大猪がこちらに向かって急発進して来た。

狼たちが大猪の進路へと立ち塞がった。俺にできることは何も無い。せめてもと、神に祈った。

「「「「ぎゃあー！」「「「「「

「「「「きゃあー！」「「「「

「ひでぶっ」

現実是非常だ。狼たちは何もできずに次々と吹き飛ばされていた。10数人いた狼も残るはアロハと巨乳だけだ。2人がまだ吹き飛ばされていないのは最終防衛ラインとともいうべき場所に陣取っているからだ。

S I D E アロハ

「意地を見せたい」

隣の巨乳に向かってつぶやく。因みに巨乳の名前は知らない。

「最早、勝つのは無理だ。弁当は大猪のものとなるだろう」

隣は見ない、ただ前にいる大猪を見ながら言う。

「少しでいい。大猪を止めるぞ」

「子犬ちゃんに対する見栄？…それならあたしも同じよ。弁当の前にいればいいのよ、なんて言うんじゃないわよ」

巨乳の答えに満足した俺は駆け出す。

「いくぞっ！」

S I D E O U T

アロハと巨乳の大猪の前に散っていった。だが、少し時間にして5秒と経っていないだろうが大猪のカーとは止まった。わずかな時間ではあるが大猪を止めたこの事実は大猪にたいして狼は何もできないということ否定する材料となる。

しかし、大猪の脅威に初めて触れた俺にとってはそんな2人の奮闘よりも目の前に迫っている大猪のほうが問題だった。足がガクガクと震えている。武者震いなんて大層なものじゃない、純粋な恐怖から来る震えだ。

「邪魔よ」

目の前に来た大猪は俺に向かってそう言った。頭がどうするか考えるのその前に体は大猪に道を空けていた。

「ふんっ」

鼻息を鳴らして俺の横を通り過ぎた後は残っている30%OFFの弁当をまとめてカゴに入れるとそのまま惣菜コーナーで陳列しな

おしている地場神の前まで行った。

「半額シール早く貼ってよね」

大猪は地場神にそう言った。

俺は恐怖から道を空けた自分を責めた。

俺はスーパーの近くの公園にいた。1人ではない。アロハと巨乳の2人がいた。

「気にすんな。俺も最初は立ち向かえなかった」

「あたしもよ。ただ呆然と見てるしかできなかったから子犬ちゃんの気持ちはよくわかるわよ」

2人は首領兵衛どんぐえができる間も俺を慰めてくれている。

「でも」

仕方ないといってもらっても頭では理解しても感情が許さない。

「でも、じゃねえよ。あれがあの中の場の最善だった。この結果を責める奴あ、誰もいねえよ」

「そうよ。気に病むことはないの。誰もが通る道、それが子犬ちゃ

んの場合は早すぎた。だから、恐怖に負けたのも仕方ないことなの
「俺なんか狼を始めて2ヶ月が過ぎたときに初めて大猪に出会った
が犬っ子と同じような結末だった。2日ならそれで上出来だ。むし
ろ、足止めができなかった俺たちにも非がある」

「あれを非って言っちゃうとどうしようもないわよ。どっちかと言
うと天災って感じよ」

「違いねえな」

2人が懸命に慰めてくれる。それでも落ち込んだ気持ちは直らな
かったが、心がほっとしたのは確かだった。

「そんな気にしてどうする。犬っ子ならすぐに逆の立場になるぞ」
「逆？」

アロハの言っている意味がわからなかったので聞き返す。答えは
巨乳から返ってきた。

「新人の為に大猪を止める側になるってことよ」

「そうだ。犬っ子にはそれだけの才能があると俺は思っている。昨
日が初めての戦いだっつのにあそこまでやれるとは思ってなかった」
「子犬ちゃんはずぐに守られる側から守る側になるとあたしも思う。
だからその時に新人の為に体を張って大猪を止めることが今日のこ
とを悔やんでるなら最大の孝行になるのよ」

その言葉を聞き、元気が湧いてくる気がした。俺のような思いを
新人にさせない。それは今はまだ新人である俺には酷く魅力的な台
詞だった。

「できますか、俺に」

2人に聞き返す。

「ああ」

「出来るわ」

即答する。その期待に応えるために強くなるうと思った。大猪を止められるほどに。

「まあでも、まずは弁当を手に入れることからだな」

「ふふつ、簡単には取らせてあげないわよ」

アロハと巨乳の言葉に対して俺は強く返した。

「すぐに追い抜いてあげますよ！」

「生意気な子犬ちゃんね」

「言っじゃねえか」

その後は誰からと知れず笑い出し、気づけば3人で笑っていた。

「……っと。首領兵衛どんへえがのびちまってるな、こりゃ」

「たまにはいいじゃない。伸びてふやけている首領兵衛どんへえも」

「そうですね、じゃあ」

3人がタイミングを合わせる。因みに俺以外はたぬきそば派だった。

「……いただきますっ！」「」「」

その日食べた首領兵衛どんへえはのびてふやけていたが今まで一番美味しかった。

第三話 狼の世界（後書き）

この小説の設定ではどこのスーパーにもお湯が入ったポットが用意されているということになっています。

都合よすぎかもしれませんがその方が書きやすいというか、戦いの後の語らいができなくなるための設定です。

ご容赦願います。

因みにレンジも普通にどの店にもおいてあります。これは現実でもおいてある店はそれなりにあるはずですが。実際にライスバーガーを解凍してお昼にしたことがあります。

第四話 誕生日プレゼント

大猪と呼ばれる狼にとっては最大の天敵との出会いから一週間が過ぎていた。その間も俺はスーパ―に通っていた。残念ながらもまだ弁当は手に入れることができていない。しかし、狼の道を歩み始めて2週間が経ついま勝利が欲しい。首領兵衛どんぐえが晩御飯の生活にも慣れてしまった。このままじゃいけないとは思うのだが弁当の壁が厚い。

ただ、実力は間違いなくついてきている。一昨日などは最後の1つの弁当を巡ってアロハと一騎討ちまでもつれ込んだ。∴ 齒は立たなかったが。乱戦と違い一騎討ちの場合は隙ができにくい。一騎討ちだと相手だけを注意していればいいから乱戦みたいな隙を付いての攻撃や弁当の奪取ができない。もっと、実力がつけば別だろうが。何はともわれ今の俺では数が減れば減るだけ敵しくなるということだ。それともう1つわかったことはアロハと巨乳はこの居残り組みでも言うべき狼たちの間では頭1つ抜け出た存在のようだ。それでも弁当を手に入れる確立は7割にいくかいかないかというレベルだという話だ。だが、ここ数日は常に弁当を手に行っている。これはアロハと巨乳の実力が上がってきているからだと思う。俺にしても他の狼たちとの実力差は少しづつだが縮まってきているのを感じている。それでもかなりの差があるのは認めなければならぬが。

だが2人との差を縮まっっている気が全くしない。離れていつているわけでもないのが救いといえば救いか。2人が実力を隠しているということはないようなので間違いなく強くなっていると思う。

さて、今日こそは勝ってやろうと気合が入っている。何故なら今

日は俺の誕生日だからだ。いくらなんでも誕生日の晩御飯が首領兵衛^えというのは嫌だ。初勝利の弁当こそが俺の晩御飯に相応しい。

因みに、両親は今日はどうしてもはずせない予定があるとかで家に居ない。その分は昨日は豪華な晩御飯を母さんが作ってくれた。外食じゃない理由は家に居る時ぐらいいは手料理が食べたい、と家族で満場一致したからだ。久しぶりにしつかりとした晩御飯を食べたのも今日こそはと思う理由の1つだ。母さんの手料理は美味かった、それが俺をちゃんとした晩御飯の欲求へと変わったのだ。

誕生日プレゼントは最新のゲーム機だ。それも携帯型ではなく、据え置き型。もらった時は友人たちに自慢してやろうと思ったのだが止めた。いや、止めざるを得なかった。このゲーム機、EU圏内で発売されたゲームに完全対応してるんだぜ、すごいだろ。ただし日本はおるか、アメリカ産のゲームにも対応してないけどな。忙しくて日本でも日本で買って欲しかった。思い出すと悲しい。だが、忙しい中で買ってくれたプレゼントであり、中学1年生である俺に送るには破格ともいえるプレゼント。文句は言わずに押し入れにしまった。ゲーム機が嬉しいとか思うあたり最近は肉体年齢に精神年齢が近づいている気がする。馴染んでいるというのも大きいだろうが、個人的な考えとしては転生前と転生後の年齢が近くなって行くのに従って年齢の差が少なくなったからだと思う。小学生よりも中学生の方が転生前の年齢には当然近い。だから、誤差の調整が段々と進んでいるんだと思う。このままだと高校を卒業する前には肉体年齢と精神年齢が一緒になるペースだ。

簡単に言えば精神年齢は若返っていて、肉体年齢は年老いていつているって感じた。多分だけど精神年齢が肉体年齢まで若返ったらそれからは普通に年を取っていくと思う。ていうかならないとま^ずい。中学生の精神年齢をした大学生とか絶対に嫌だ。

さて、まずは学校だ。

「おはようっ」

いつも通りに朝の挨拶をしながら教室に入った。

返事は返ってこない。寂しさはなかった。勘違いしないでほしいのだが挨拶されないことになったとかそういうわけじゃない。ただ、俺が一番早くに登校しただけの話だ。

俺に登校する時間は教室に人が5人以上いることはまずない。朝連のある部活の連中は来ていても教室にはいない。

だから、寂しくないのだ。まあ、人が居るのに挨拶が帰ってこなかったらさすがに寂しいが。

「おはよう。高城君」

返事がない教室を入り口から見渡していると後ろから声がかかった。

「いつも早いよね」

後ろを振り向くと斯波^{しば}香月^{かつき}さんがいた。斯波さんも俺と一緒に登校するのが早い人だ。それでいてフレンドリーな人だから。人が少ない朝の教室で一緒になるとよく話してたりする。特別に親しいわけではないが友達といえる人、それぐらいの関係だ。

「おはよう、斯波さん」

挨拶を返す俺。斯波さんはかわいい部類にはいる顔立ちをしているので髪は肩つくぐらいの長さの女の子だ。もっと成長すれば俺のストライクゾーンに間違いなく入ってくるであろうポテンシャルを秘めている。1つ言っておくが俺はロリコンではないから中学1年生

に欲情したり、恋愛の対称としたりはしない。転生前の感覚で言うならば高校は卒業しているぐらいからが対称だ。

だが、最近は段々とそのボーダーラインが下がってきていると思う。先ほどの精神年齢の若返りの話にもどる。このままのペースではおそらく中学を卒業するまでには中学3年生は十分にそういった対象になる感じなのである。今からそう言ったことを考えるとロリコンの頭に浮かぶ。肉体は同年代だから構わないかと思うかも知れない。だが、転生前が24歳であった俺にとっては非常に苦悩する問題なのだ。時々、転生前の俺はなんで熟女好きではなかったのかと悩むことがある。せめて、年上好きだったらなあ。とか考える時点で俺は色々と末期な気がしないでもない。

斯波さんと話す話題とかはテレビの話が多い。昨日のドラマがどうだったとかバラエティーがどうたら。正直、ドラマは話のネタとして話題作しか見ないし、バラエティーの話をするとすごく昔はよかったなあ、と思うのであまりしたくないのだが。政治の話とか経済の話とかそういう話をしたいとおもったりするのだが中学1年生にそれは望むべくもない。

結論から言えば会話が受身になりがちとなる。会話の内容はしっかりと聞いてるので聞き役としては十分な役目を果たしていると思っっている。中1ぐらいならば話を聞くよりも話すのが楽しいものの方が多いので割りかすと大人しく話を聞いている存在は貴重だと思う。

「はよー」

政志が挨拶をしながら教室に入ってきた。

「おはよ、政志」

「おはよう、海野君」

斯波さんと一緒に政志に挨拶を返す。政志は鞆に手をいれて何かを探していた。

「ほらよ、誕生日おめつとさん」

そう言いつつ、鞆から取り出したラッピングされた袋を投げてよこす。

「ありがと、政志」

中身はおそらくクッキーだ。政志という男は料理というか、お菓子作りを趣味としている。男では珍しいと思うがいつもご相伴に預かれるので嬉しい。甘いものは好きだ。腕のほうも抜群とまではいれないが年齢を考えたら将来はパティシエとかになっているかもしれないと思う。

そういうわけでクッキーを貰ったのは嬉しい。問題があるとすればラッピングされていることぐらいか。誕生日プレゼントなのだから当然といえば当然なのだが精神年齢が素直な喜びを減らしている男からラッピングされた手作りのものを貰うとか考えるとちょっとな、とか思ったりもする。だが、相手は中学１年生。純粹に誕生日プレゼントだからラッピングしただけなのだ。………政志が女の子だったら素直に喜べるのにか思った自分は末期だし、呪ってやりたい。

「高城君って今日が誕生日だったの？」

そんなことを考えていると斯波さんが尋ねてきた。

「そうだよ、今日から１３歳になるんだ」

政志を始めとした小学校が一緒だった子たちは俺の誕生日を知っている。というか後ろの黒板に月ごとに誕生日の子が書かれていた。一種の羞恥プレイな気がした転生者の俺は祝ってもらって純粋に嬉しがっている子供をみて「ああ、俺も昔はこんなだったな」とか懐かしんだりした。斯波さんは違う小学校だったので俺の誕生日を知らない。

「ええー、何で教えてくれなかったの」

少し不満そうな顔をして斯波さんが言う。だが、俺としては一々と誕生日おめでとうとか言われるのは多少、いやかなり気恥ずかしい。だから中学では特に聞かれでもしない限り教えるつもりは無い。

「いや、わざわざ言うようなことでもないと思ってさ」

「何で？誕生日って嬉しいじゃない。友達に誕生日おめでとうって言うってもらえないよ？」

言われて自分の失言に気づく。中学1年生ならまだ純粋に誕生日は嬉しい日だ。家族や友達に祝ってもらえるし、プレゼントももらえる。この年で誕生日が嫌いとかのマイナスイメージを持っているものはまずいない。

「あーっと」

気恥ずかしいとか言ってもほぼ間違いなく理解されない。どうしようかと困っている俺を助けたのは政志だった。

「そーいや、親からは何を貰ったんだ？」

ナイスだ。このタイミングで話しかけるとは素でやっているなら将来空気を読めない人間になりそうだが、俺は助かった。この話題なら意識をそらせるはずだ。

「あー、あたしも聞きたい、聞きたい」

やはり斯波さんが食いついてくる。

「ふっふっふ、聞いて驚くなよ?」

「なに、もったいぶってんだよ」

怪しげに笑う俺に対して政志が多少あきれた口調で言った。

「なんと、FC・FXだ」

言つつもりはなかったのだが会話をそらしたほうが楽なので言う。

「いいなー。んじゃ、ゴ布林バトルとか新作もできんじゃん」

うらやましげな目で見てくる政志。

「ああ、ゴ布林バトルの新作は俺も楽しみにしている。だが、世の中はそんなに甘くないのだよ、政志君」

「どういうことだよ?」

「プレゼントのFC・FXなんだが実はEU版で、日本のゲームソフトは再生できないんだ」

政志には俺の言葉の意味が理解できなかったらしく、きょとんとした表情をしている。

「えっと、ゲームで遊ぶには海外から取り寄せないといけないってこと?」

斯波さんが横から尋ねてきた。

「うん、そういうこと」

俺はそう答えると政志が成る程といった顔になっていった。

「海外から取り寄せれば遊べるってことだな、買ったら俺にもやらせてくれよ」

簡単に言うが海外から個人で取り寄せるとかは色々とめんどくさいし、何より問題はそれだけではない。

「取り寄せられなくはないけど、日本語じゃないぞ?」

「え!?!」

俺の一言にすでにやるつもりになっていたらしい政志は固まる。そう問題は日本語以外で文字は表示されるし声ももちろん日本語ではない。実は海外の言葉を喋れるなんてこともない俺にとっては使えないのである。マニアには売れるだろうが両親からのプレゼントを売るわけにもいくまい。ましてや中学生である俺にとっては親の同意がなければ買い取ってももらえない。

「俺も日本語以外はちんぷんかんぷんだしな」

「……………」

政志はまだ固まっている。

「じゃあ、これを機会に外国語の勉強を始めたら？」

斯波さんがそう僕に話しかけてきた。確かにそれはその通りだと思う。ましてや、両親ともども海外を相手にしているからには僕としても何らかの外国語は収めておきたい。急に外国人の知り合いが家を訪ねてくることも考えられる。

「んー、でも何語を勉強すればいいのやら」

実は家にはそういった外国語の教科書はたくさんある。両親の仕事を考えれば当然だ。だから勉強しようと思えばできるのだろうが、独学で勉強はさすがに無理がある。

「英語の授業じゃ駄目なのかよ？」

再起動を果たした政志が俺に問いかけてくる。

「英語の授業だけじゃさすがに難しいよ。それに授業でやるイギリスの英語とアメリカの英語だと結構な違いがあるよ」

「じゃあ、なんか部活に外国語をやるうとかそういうところあったじゃん。そこに入れば？まだ部活決めてなかっただろ」

一瞬、何かが光った気がした。

「ああ、異文化研究部だった？」

異文化研究部は中学生から外国に興味をもってもらおうという趣旨で作られた部活だ。この部活は日本以外の文化を勉強することが活動内容となる。外国語の勉強もしないというわけではないがそういった内容のほうが多いと部活紹介の冊子には書いてあった。

ただ、海外の文化というのにも興味はある。よく海外旅行に行っていたのもあって実際に目に見て触れたりしたのもあって日本との違いに驚かされたものだ。

少しの逡巡ののち。

「いいかも。興味もあるし」

いい加減と部活を決めないといけないとおもっていたのでこれも機会の1つかな。そう思っていると俺の前に紙が差し出される。

「……………ん？入部届け？」

紙を見ると入部届けとかいてある。それも部活名のところに異文化研究部と書いてある。差し出された方向を見てみる。

「えへへ。あたしも異文化研究部なんだ」

はにかんだ笑顔の斯波さんがいた。斯波さんは異文化研究部にはいつているらしい。しかし、「あたしも」の「も」とは誰のことを指しているのか。そしてなんで斯波さんのボールペンが俺の右手にあるのだろうか。

「早く、書きちゃいなよ」

その斯波さんの笑顔は俺が見てきた中でもトップクラスとっていい素晴らしい笑顔だった。どれくらい素晴らしいかったかというと体が勝手に入部届けにクラスと名前を記入していたほどだ。ただ、背中からはなぜか4月の終わりだというのに汗を大量に書いていた。

「じゃあ、先生に渡してくるね」

斯波さんはそう言う俺が入部届けを渡す前に自分で入部届けを持って行って教室を出て行ってしまった。

「あ、海野君もまだ部活きめてなかったよね」

しかしすぐに戻ってきて政志にそう言った。

俺と親友である政志の部活が決まった瞬間であった。

「あ、次の部活はゴールデンウィーク明けだから」

そう言って2人分の入部届けをもって斯波さんは今度こそ教室から出て行った。

煮物神にものがみのスーパーの前に着く。ここで初めて弁当を買ったのは3月の終わりごろだったか。両親が忙しくなり自分で晩御飯を用意しなければいけなくなった。それがここに足を運ぶきっかけとなった。あの頃は他にもコンビニやファーストフードなどでも晩御飯を調達していた。

しかし、2週間ほど前に知った事実がその生活を変えた。転生前に読んでいたライトノベル『ベン・トー』。半額弁当を巡り、狼た

ちが日夜、戦いを続ける世界。それを知ってから晩御飯は親が居ないときはスパーに赴き、半額弁当を求めた。結果は来る日も来る日も首領兵衛とんべえをすることとなつたわけだが。

それでも俺は半額弁当を求め続けた。まだ知らぬ勝利の味。現実を知らない俺の舌と胃にはその美味さを想像でしか伝えられない。想像では足りない力がある。半額弁当の味を知っているからこそその強さがある。今の俺には足りないものだ。

最初の半額弁当を手にしたときに狼として大きな一歩を踏み出すことになるであろう、半額弁当の味。それは間違いなく俺を狼として成長させる。

今日この日、この世界に転生して13歳の誕生日を向かえ肉体的に成長した俺。今日この日に、狼としての成長を与えることが俺から俺への誕生日プレゼントになる。

「さあ、手に入れるぞ」

今日こそは勝利と半額弁当を。自分自身への誕生日プレゼントへと。

第五話 悩める狼

煮物神のスーパーへと足を踏み入れる。いつもと同じ狼特有の視線を感じた。いや、いつもよりも強い視線を感じる。数が多いわけではない。狼としてはまだ弁当を取ったことすらない俺だが2週間近くも来ていれば正確な数はわからないでも多い、少ないぐらいはわかる。

考えてもわからない。とりあえず、弁当を確認しようと弁当コーナーへと足を運ぶ。もう見慣れたといってもいいであるが弁当コーナーには3つの弁当が残っていた。1ずつしっかりと確認していく。

『チキン南蛮弁当』

メインのチキン自体の大きさはやや小ぶりといっている。だが、残念だとは思わない。チキンはやや小ぶりの代わりにチキンは2枚入っている。大きいチキンを1枚か小ぶりのチキン2枚かならどちらが食べ応えがあるか迷うところだがこの『チキン南蛮弁当』のチキンはあくまでもやや小ぶりという大きさである。この大きさならば間違いなく大きなチキンが1枚入っているよりも嬉しい。味の決め手となる南蛮酢とタルタルソースもたっぷりとかかっている。ソースは少ない方がチキン自体の味を楽しめて好きだという人も居るだろうが、ことチキン南蛮においてはソースは決め手。たっぷりであるに越したことはない。下にしかれているキャベツの千切りもケチってなどいなく十分な量がある。このキャベツをタルタルソースにつけて食べるのも美味しそうだ。俺が唾を飲み込んだのは当然のことだろう。

『レバニラ炒め弁当』

これは好みが分かれる弁当だ。メインのレバーが駄目な人もニラが駄目な人も少なくはないしヨウガが苦手という人もいる。どれも年を重ねると割合と食べれるようになったという人も多いが、今までの経験上、こちら辺の狼はわりかすと若い連中が多い気がする。俺はレバーもニラも全然食べられる。そもそも嫌いなもの自体が少ない。ライバルは少なめであるうこの弁当であれば初勝利も十分と狙えると思う。それにレバニラ炒めは時々、無性に食べたくなる。レバニラ炒めといわず癖の強いものはそういうものが時々とある。今こうしている間もなんとなくレバニラ炒めを食べたいという気持ち強まっていく。

『豚の角煮弁当』

大きな角煮が4つも入っている豪華仕様だ。ねぎとしょうがといった香味野菜もしつかりと使われている。醤油、みりん、日本酒で味付けされているであろうその角煮はみているだけでも嗅覚を刺激される錯覚を覚える。肉をみてみるとしつかりと味がしみこんでいるのがわかった。箸でつついただけでも崩れそうな程にしつかりと煮込まれているのだらう。こういった煮る系のもは味をしみこませるのが大変だったりする。味をしつかりとつけようとするれば型崩れをおこすし、型崩れを恐れては味がしめない。だが、目の前の角煮はしつかりと形が整いつつも味がしみているのがわかる。ここの半額神である煮物神は相当に気をつかったのであろう。

どれも美味しそうだ。この中からどれか1つを選べというのは酷だと思う。それでも獲物は選ばなければならぬ。

「っ『豚の角煮弁当』が残ってるのか!？」

どれにしようかと迷っていると後ろからアロハの声が聞こえた。その声は信じられないものを見たかのような驚きがまじっていた。

「何時以来だ…？ここ3ヶ月はみてないな」

その言葉に俺は驚く。3ヶ月の間、残らなかった弁当。もしかしてそれはという思いを込めて俺はアロハに問いかける。

「アロハ…さん。ひょっとしてそれは月桂冠に…？」

アロハと呼ぼうとして今までに名前を呼んでいないことを思い出す。年上だし敬称をつけたほうがいいだろうと思ひさんづけで呼ぶ。

「アロハさんってなんだよ…。いや、呼び捨てよりはマシか…？まあいい。そうだ、前に話しただろう煮物神の名前の由来を」

煮物神。このスーパーの半額神である彼は煮物を作るのが上手なことからそう呼ばれているとアロハからは聞いている。目の前にあるのは『豚の角煮弁当』は紛れもない煮物である。それを思い出し確かにと思った。この豚の角煮は正直なところ家で作るうと思っても簡単には作れない。この角煮を見たことで俺は煮物神の名前の由来に納得する。

「道理で今日はやたらと強い視線を感じる訳だ。月桂冠がでるなら狼たちが殺気立つのも頷ける。……………今日は今までよりも厳しい戦いになるぞ、犬っ子」

そついい残すとアロハはお菓子コーナーへと消えていった。

フライパンを眺めながら半値印証時刻をいまかいまかと待っている。今日はいつにも増して気合が入っている。自分の誕生日に月桂冠が残っていた。これは天啓に近いと思う。自分が選ばれし者とかそこまでは自惚れてはいないが転生者であることも考えるとどうしても運命とか考えてしまっても仕方ないと思う。

けれども、そういった気持ちも慢心にも繋がることもこの2週間で学んだ。知識があるだけでは対応できなかったし、転生者だからって特別な力とか強運とかを持っていたわけでもなかった。つまり、この戦いが始まってしまつたらそんなものよりも弁当を求める己が最も信じるに足る。

負けっぱなしだったが場数を踏んだことで少しづつだが確実に半額弁当に近づいている。無駄ではないと言い切れた。月桂冠が出るのはこれが初めてだ。だから、今の俺は月桂冠が出てきたときの戦いを知らない。絶対の勝者の証である月桂冠がでた日の戦いを今までと同じだなんて思っていたら間違いなく、すぐに脱落する。

今こうしてフライパンを眺めている間にもひしひしと狼たちの気配が感じられる。いつもとは比べられない気迫が充満している。皆が皆、狙いは『豚の角煮弁当』のはずだ。

俺の狙いももちろんそれだ。アロハから月桂冠になるであろうことを教えてもらわなかったとしても『豚の角煮弁当』を選んでいた。そう思えるほどの魅力を『豚の角煮弁当』は放っていた。

ガチャッとスタッフルームの扉が開くと煮物神が出てきた。月桂冠が出るであろうと期待する狼たちの視線を感じないわけではないであろうにいつもと変わらない足取りで惣菜コーナーへと煮物神は向かった。いつもと変わらない動作で惣菜を陳列し直すと弁当コーナーへと向かった。俺の気持ち半額弁当を待ちわびているせいかな煮物神がやけに早く弁当コーナーに来た気がした。

弁当コーナーへと着いた煮物神は変わらぬ手際によさで弁当を並べなおす。そして次にバーコードリーダーを取り出して半額シールを貼る……はずだった。弁当を前にした煮物神は少し悩んだ後に半額シールを貼らずにスタッフルームに戻ってしまった。

俺には今の状況が理解できない。半額神がなんで半額シールを貼らないのか。それが仕事ではないのか。なぜそのままスタッフルームへと戻るのだ。30%引き弁当たちが半額弁当になるのを待っている狼たちが沢山いるというのに。

「……………どうして…?」

思わず俺の口からこぼれるように呟きがでた。

「そりゃあよ、惣菜がほとんど売れちゃってるからさ」

何時の間に来たのか、俺の隣にはアロハがいた。

「惣菜が売れてる？」

確かに惣菜は売れているのだろう。やけに早く半額神が弁当コーナーに来たのは気のせいなんかではなく、惣菜コーナーの残りが少なかったから早く来ただけのことだった。

だが、惣菜が売れていることと半額弁当がうまれないことが繋がるのが理解できなかった。それに今までは弁当が3つ残っていても半額シールが貼られていたことが混乱に拍車をかける。

「ああ、さすがにわからんか。とりあえず落ち着け。今から説明すつからよ」

現状が理解できないうえに混乱している俺は素直にアロハのほうに向き直って説明を待つ。

「ちよいと長くなるが構わんよな。スーパーに弁当を買いに来る奴は大体が料理ができない奴とか疲れてたりして料理するのが嫌な奴とかだ。だが、そういった奴らが全員が弁当を買っていくわけじゃあねえ。中には惣菜を買っていつてそれで済ます奴もいる。料理はできなくても米を炊くことぐらいはできるからな。それに、料理するのがめんどくさい奴だつて米を炊くぐらいならそれ程の手間にならないな。…ここまではわかったな？」

アロハの言葉に俺は頷く。

「続けるぞ。つまり、惣菜で済ます奴らもそれなりにいるってことになる。気分しだいどちらになるかはわからんが。だが、惣菜で済まそうとしていた奴がと自分好みの惣菜が残ってなかったらどうする？…答えは簡単だ。弁当を選ぶ。そういった連中は惣菜を買いに来ているんじゃないやなくて晩御飯を買いに来ているわけだからな。で、

話は半額シールを貼らなかつたところに戻る。惣菜が残ってないなら弁当を買うやつ等がでてくる。つまり、現時点の30%引きでも十分に売り切れると煮物神は判断した。∴煮物神だつて仕事でやっているわけだからより高い値段で売れると判断すれば当然」

そこで一息をアロハはついた。

「半額シールは貼らない」

真面目な顔をしてアロハは俺に言った。

アロハの言うことは理解できる。だが、簡単には納得できない。今までが残っていれば確実に半額弁当になっていたから尚更だ。

「じゃあ、今日はもう半額弁当はでないってことですか？」

「でない訳ではない。さらに時間が経てば半額シールが貼られるの間違いない。∴それまで弁当が残っているかはわからんがな。覚悟はしておけ」

最後は強い口調になって俺にそう言うのアロハはどこかへと行ってしまった。

それからの時間は長かつた。何度も何度も腕時計の時間を確認するが時間は進んでいない。目線はスタッフルームを見つめ続けている。今にも扉が開いて半額神ができた弁当に半額シールを貼ることを願つて。

体感時間は1時間を越えた気がするが腕時計はこの店の半値印証ハイフプライスラベリ時刻から10分しか経っていなかった。これ程と時間がゆっくりに感じたのは始めてかも知れない。回りの狼たちからも様子を伺つて

いるのであろう気配が感じられた。先ほどのような気迫は今を感じない。ただ静寂の中で機会を待っているそんな感じるする。

店内に流れるBGMが今は酷く耳障りだ。

15分を過ぎた頃に変化があった。1人のスーツ姿の男が入店してきた。コツコツと足音を立てながら男はまっすぐに惣菜コーナーへと来た。残っている惣菜を一瞥すると少し悩んだ拳句に弁当コーナーへとやってきた。残っている弁当を眺める。

俺にとっては気が気ではなかった。誕生日に華を添えるために為に今日こそはと意気込んできたのに半額弁当が出ずに目の前で弁当が1つ減るうとしている。この現実はつらい。

男が弁当を手を取った。遠目からでもわかる『豚の角煮弁当』だ。よりによって月桂冠になったであろう弁当を男は持って行ってしまふのか。絶望が俺を襲う。回りの狼たちからも似たような雰囲気が発せられていた。

しかし、1度は手に持った弁当を男は元の場所に戻すと惣菜コーナーに戻り惣菜を買い物カゴへと入れた。どうやら男の中では弁当と惣菜の天秤で惣菜が勝つたらしい。同時に周りの空気が緩むのを感じる。それは俺にとっても同じだった。ほっとするのもつかの間でまた別の客が入ってくる。

また店内に緊張がはしる。だが、今度は普通の主婦らしいはいっですぐにある野菜コーナーで野菜を次々と買い物カゴへといれていく。この客は弁当を買うことはないとみていいだろう。

20分が過ぎた頃に俺はふと思った。今この30%引きの弁当を買って行ったらどうだろうか。このままでいても月桂冠が出る保障はない。出たとしても今までに弁当を手に入れたことのない俺に弁当を手に入れられるだろうか？

今日は俺の誕生日だ。誕生日に、それも晩御飯にカップめんを食べたい奴はまずいないだろう。誰しもしは贅沢なものを食べたいものだ。

それが今の俺には目の前にある。半額ではないが残っていれば月桂冠は間違いないという『豚の角煮弁当』。俺の誕生日の晩御飯に相応しいものだと思う。半額弁当でないのは残念だがそれでも相当な味が期待できる。

そう思っていたときには半額弁当を求め続けてきた今までの俺はどこにいったのかふらふらと弁当コーナーへと歩みを進めていた。

S I D E アロハ

「あんの、バカっ！」

思わず言葉が漏れる。犬っ子、名前も知らないが俺にとっては狼としての後輩に当たる。俺より後に狼になった奴はそれなりにいるが大概は誰か狼の先達がついていた。それだけ全くの素人が生きるのには厳しい世界だ。1人でこの世界に入ってくる奴は少ないし、弁当を手に入れる前に諦めて去るものも多かった。

だから俺がぶつかつた小僧が次の日もスーパ―に現れたときは驚いたし狼になると言ってきた時はさらに驚いた。同時にこの世界で

生きていけるのかとも心配した。

俺だつてこの世界に入ったばかりの頃は色々先輩方に教わつてここまで来た。だからその先輩たちみたいに俺も機会がきたら新しい狼に色々教えてやるうと思つていた。それは思つてたよりもずつと早くに機会はきた。前の日に小僧を利用して俺びも兼ねてこのらのことを教えてやつたりしている。

そんな日々を繰り返していくうちに1つわかったことがある。俺は案外と世話を焼くのが好きらしいということだ。犬っ子に色々教えるのは楽しいし、何よりも間違ひなく犬っ子には才能を感じた。いずれは俺なんかは犬っ子に勝てなくなるだろう。だが、今の犬っ子はまだ弁当を手に入れていない。仕方ないことだと思つ。いくら才能があつても体がまだできていない。高校生ぐらいから始めればまだ違つだろうが犬っ子にはぶつかり合いに勝てるだけの体格がまだない。

隙間を縫つて弁当を狙うということもしているが犬っ子は激しいぶつかり合いからの正面突破を好んでいるように思える。隙あらば弁当狙うというのはあくまでもサブでありメインではない。それでもあと一歩のところまではいくのだからそつちに特化していれば1、2度は弁当を手に入れていたのではないかと思つ。

買ひ物カゴといったものを持つて補うという方法もあるが生憎と俺は買ひ物カゴを使ったことがないから教えられない。そもそもここら辺で買ひ物カゴを使うのは今は1人しかいない。それだけ扱ひ辛いものだ。

ともかく俺は俺なりに犬っ子を気に入っている。だから、早く弁当をてにいれて一皮むけてほしいと思つている。犬っ子のためにも手を抜くことはしないが。俺自身も弁当を食べたいしな。

だから今、犬っ子が弁当コーナーに向かつているのが許せない。こんなところで今までの半額弁当を求めてきた犬っ子が狼の道を歩むことが止まっちゃうのが許せない。

だけど、同時に理解もできちまう。今までずっと弁当を手に入れ

られずにいて、今日この日に月桂冠が確定している『豚の角煮弁当』
でてるおかげかいつもよりも気合が入っていた。それを半額シール
が貼られないなんて結末で気合が空ぶって、あげくに買い物客に『
豚の角煮弁当』を買われそうになる。

犬っ子みたいな新人でなくとも弁当コーナーに足が向く可能性だ
って否定できない状況だ。状況だけ見ればここまでよく持ったほう
だとは思う。だけど、それでも俺はこういう形で犬っ子に弁当を食
べさせたくないと思った。

だから、犬っ子を止めるために前に進む。狼としてはここで止め
るのは間違っていると思う。それでも俺は犬っ子には半額弁当を食
べて欲しいと思う。できれば犬っ子自身で歩みを止めて欲しいが。

「ダメよっ」

「あっ!？」

後ろから肩を掴まれる振り返るとそこには巨乳がいた。

「これは子犬ちゃんの問題。試練なの。あたしたちが手を出しても
いいことじゃないわ」

一理あると頭は理解する。それでも感情が許さない。

「わかつちやいる。だが、この状況は辛すぎる」

巨乳の手を払い犬っ子の元に行こうとする。

「子犬ちゃんを信じないの？」

巨乳の言葉に歩みを止める。

「子犬ちゃんを信じないの？子犬ちゃんはまだ弁当を手を取ったわけじゃない」

言うことはわかる。

「だがな、弁当を手にしたら犬っ子はこれから先、狼でいる保障がねえ！」

誘惑に負け、半額になる前の弁当を手にしてしまった狼が戦場に戻ってこないのはよくある話だ。きつと誘惑に負けた自分を恥じて戦う資格を失ったとか考えているのだろう。

「そしたら子犬ちゃんはそこまでだったってだけよ」

こともなげに巨乳が言う。

「お前っ！」

この一言に俺は巨乳のほうに向き直った。俺は犬っ子のことを気にかけていた。だから、他の連中も話こそはしないが犬っ子のことを気にかけていたのはわかった。

その中でも俺をのぞけばこの巨乳こそが一番、犬っ子を気にかけていたのがわかった。だから今の一言をシヨックだった。

その時に初めて巨乳の顔を見た。口調こそ普段と変わらないが巨乳の顔はつらそうだった。その顔を見たときに俺は理解した。彼女もまたできることなら犬っ子を止めたいのだ。だが、それは犬っ子の為にならないと思い止めた。もし、このまま弁当を手にした犬っ子が戦場に戻ってこないなんてことになったら彼女はきつと後悔するだろう。

それでも彼女は犬っ子を止めるべきでないと考えた。これからの

成長の為に、そして犬っ子は弁当を買わないと信じて。

「世話ねえよな」

俺の口からそう言葉が漏れた。俺が一番に犬っ子のことを気にかけてたのに犬っ子のことを一番に信じているのは俺じゃない。ちょっと犬っ子を信じていない俺を情けなく思った。

「…わかったよ。こっから先は犬っ子が選ぶもんだ。ここで見てる」
「それでいいのよ。子犬ちゃんなら大丈夫よ」

何の根拠があるのかは知らないが彼女のその言葉は確信めいていた。

「俺らの期待を裏切るなよ。…犬っ子」

S I D E O U T

俺の目の前には弁当が並んでいた。『豚の角煮弁当』『レバニラ炒め弁当』『チキン南蛮弁当』の3つがある。どれも美味しそうだが特に『豚の角煮弁当』は他の2つの弁当よりも圧倒的な存在感を放

っている。誕生日の晩御飯として不足はない。

ただ惜しむらくは半額弁当ではなく30%引き弁当であることか。だが目の前にある『豚の角煮弁当』は半額弁当でなくても十分な美味さだとわかる。

半額弁当ではないことが手を伸ばすことを躊躇わせる。ここで手を伸ばして弁当を手にすることは簡単だ。だがそれは同時に今までの戦いの日々を否定することに繋がる。ここで弁当を手にしてしまつたら何のために今まで戦っていたのか。

心はそう思う。しかしそれでも、と思わせるほどに目の前の弁当は魅力的だ。それにこのまま待ついても半額弁当になると決まつたわけではない。耐えに耐え、半額弁当を巡つて狼たちとの死闘の果てに半額弁当を手にはできなかつたのならまだ納得できる。誕生日にまで首領兵衛どんぐえを食べたくはないが。それに無論、戦うのなら負けるつもりなどなかつた。たとえ今まで1度の勝利がなくとも半額弁当を目にしたときは今日こそは弁当を食べる日だと思ひ全力でぶつかつていった。今日だつてそのつもりだ。

しかし、今日はその戦うことすらも許されずに首領兵衛どんぐえをすることになるかも知れない。地場神じはがみの店に行くならば今すぐにでも行かないともう半値印証時刻ハーフプライスラベリングタイムには間に合わない。それは他の狼たちもわかっているはずだ。普段ならきつぱりと見切りをつけ地場神のスーパーへと向かつている狼もいただろう。

だが今の状況はそんな単純ではない。『豚の角煮弁当』、月桂冠は間違い無しといわれるこの弁当が残っているからこそ狼たちは動けない。普段なら戦略で済む行動が月桂冠候補が残っていることにより敗北となる。

それに狼ならだれしも月桂冠がでるのならそれに挑戦するのが当然であった。絶対の勝者、その響にはあこがれるものがあるがそれ以上に月桂冠とまで呼ばれる弁当を己の手で手に入れ、食べたい。そう思った思いが狼たちを地場神の店へと足を運ばせない。

そこでふと考え付く。今、地場神の店に行けば間違いなく狼の数

は少ない。それだけ弁当を手に入れる可能性は高い。だが、そこで初勝利を飾る弁当を食べたところで美味いには美味いだろ心が満たされない。半額弁当の味における、心の部分はかなり大きい。それを減らしてまで手に入れる価値のある半額弁当になるかは謎だ。

選択肢は3つ。

このまま待ち続ける。これははっきり言ってつら過ぎる。すでにここまでで俺の精神はボロボロと言っていいほどに消耗していた。これ以上、待ち続けたとして月桂冠が出るならまだいい。だが出なかったときに俺はまた狼としてスーパーに戻ってこれるかはおぼろげにわからない。それ程のつらさが今の状況だ。

2つめはここで弁当を買ってしまうこと。買うならばやはり『豚の角煮弁当』だ。一番簡単だし確実に弁当が食べられる。これのリスクはやはり狼としてスーパーに戻ってこれる自信がないことだろう。普通の弁当ならまだしも月桂冠候補の弁当を持っていつてしまつては他の狼たちに合わせる顔がない。

最後は地場神のスーパーに行くことだ。これを選んだ場合は確実に狼でい続けると思う。それでも、狼としての成長は見込めなくなるのは間違いない。月桂冠を目の前にして尻尾を振って逃げる狼が立派になるわけではない。狼でいることと弁当を手に入れることの両方を手に入れるならばこの選択が1番だ。だが中途半端すぎる。どつちかに寄るといふよりもどつちからも逃げていただけだ。

ここまで考えて地場神のスーパーに行く選択肢を消す。この選択肢はありえないと結論がでた。どつちつかずでいるくらいならきつぱりと割り切ってしまったほうが良い。転生前にどつちつかずでいて

痛い目にあつたことは何度もあるし、この選択を選んでしまった場合は常に後悔しながらそれでも狼を続ける自分が想像できて嫌だ。

残るのは2つ。待つか、買うかだ。

ごくりとつばを飲む。のどが渴く。選べない。どちらも選べない。狼でいたい気持ちは強いが待つことに対する怖さが強い。そして目の前にある『豚の角煮弁当』の誘惑は強すぎる。ここにいるだけでつばがどんどんとでてくる。他の弁当を手にした場合はまたこの場に戻ってくることもあるだろうがそれでも取るなら『豚の角煮弁当』しかありえない。それだけの魅力と価値が目の中の弁当にはある。体中から汗が出てくる。自分の迷いが心を乱し、体を平常ではなくす。汗が止まらない。思考もまとまらない。答えが出ない。

一回深く深呼吸をし心を落ち着けようとする。まだ心は乱れたままだが少しは余裕が生まれた。この余裕がなくならいうちに考える。まずは半額弁当ができるまで待つという選択について考える。この場合のリスクは弁当が手に入る確立が低いことだ。これは大丈夫だと思える。今までよりも月桂冠と誕生日という重い枷こそあれど、それでも耐え切れるといえる。全力で戦った結果だからこそその結果は受け入れられる。

だが半額弁当が存在しなかったら、戦うことすらできずに今日という日を終える。期待が大きい分だけに失望も大きい。しかし今現在、弁当は3つ残っている。これが全て売れきれることはまずないだろうとそう思う。だけど絶対と言い切れない。

そこまで考えたときに全身から汗が一斉にひく。呼吸が乱れる。今までになく呼吸が荒い。しらずに自分に保険をかけていたことを知った。半額弁当がでないと思っただけでもそれは『豚の角煮弁当』という月桂冠をメインに考えていた。それが売れたときのショックはでかい、と。だがまだ他の2つ弁当のうち最低でもどちらかは残っているだろうと考えていたのだ。

残っている弁当が全て売れてしまつことを想像する。

……一瞬、意識が飛んだ。俺はこの瞬間に理解する。これは俺にはとても耐え切れない。

そう思った時に『豚の角煮弁当』がより俺を誘惑する。

この弁当を買ったって前の生活に戻るだけだ。フィクションの世界だったらいいな、と思っただけで実際にそうだった。けれどここが『ベン・トー』の世界だと知る前には諦めていた。その時の状況に戻るだけだ。普通に暮らせていた。特に不自由はしなかった。

「それなら、いいか…」

俺は手を伸ばして『豚の角煮弁当』を手に取った。

たくさんの、強い視線が俺に集まっているのを感じる。その視線には敵意はない。むしろ、俺を励ますかのような視線だ。狼たちにとっては名前も知らない俺のことだろうと今日まで同じ目で戦い続けてきた同志だ。そんな狼たちにとっては今の俺は弁当を持っていく敵ではなく未熟さゆえに苦惱し道を踏み外そうとしている狼なのだろう。

今日まで狼として戦っていたからだろうか。言葉はない視線なのに狼たちの声が聞こえる。

（そのまま弁当を持ち去っても俺たちはお前を責めない。だが、で

きるならば俺たちと共に半額弁当ができるその時まで待とう)

直接に声が聞こえたわけではない。だがわかるのだ。狼たちの心の声。

そんな声なき視線は俺に待とうという気持ちを再び起こす。

だがそれでも怖いのだ。待って、待って、待ってその結果に半額弁当ができなかった時の事が。

(ごめん、俺には耐えられないんだ)

心の中でそう狼たちに誤るとレジに向かって歩いていく。

その時に確かに感じた。他の狼たちよりも強い視線で俺に訴えかけてくる視線を。

視線を感じた俺はその視線の強さゆえに体が竦む。同時に視線のほうを向く。

そこにはアロハと巨乳がいた。

第五話 悩める狼（後書き）

弁当を考えるのにも一苦労。メインのおかずを考えるだけで手一杯サイドメニューを思いつけない自分が情けない。

文字数も多くなってきたので投稿。中途半端だと思えますが勘弁を。

第六話 出した答え

SIDE 巨乳

子犬ちゃんが『豚の角煮弁当』を手にしてレジに向かおうとしている。その様子をあたしは見つめていた。

アロハには信じないの、とか言っていたのはあたしがそうなって欲しいと思つてたのが大きかった。だから、子犬ちゃんが弁当を手にとることなんて考えないようにしてた。こんなのは子犬ちゃんを信じてるんじゃないかってあたしに都合がいいことしか見てないだけだ。

だから子犬ちゃんが弁当を手を取ったときのショックは大きい。呆然とした。

あたしはそれなりに子犬ちゃんのことを気に入っている。あたしが狼になったのは去年の5月の終わりごろだ。新しい生活が始まる3〜4月が一番、狼が増える時期だ。5月になって新しく狼になる奴は大抵は部活やサークルの後輩が先輩の狼に連れられてやってくる場合がほとんどだ。だからもうある程度グループが出来てる。最初は先輩が直接ではなくとも手助けしてくれる。

新しい狼たちが戦場に慣れてきて更に新しい狼たちには先輩たちの助けがある。戦場では手を貸さなくても知識を与えるだけでそれはかなりの助力になる。そんな中であたしはこの世界に入つて行つた。もちろん全く歯がたたなかつたから首領兵衛どんぐえをすすめる日々が続いた。

あたしが初めて半額弁当を手にしたのは夏休みにはいる少し前だった。その弁当を手にしたときのことは今でも鮮明に思い出せた。

あの時の弁当の味は死ぬまで忘れない。

同時によく戦い続けてなと思う。あたしより先に入ってきた人も後に入ってきた人もほとんど半額弁当を手にする前にスーパーカー姿を消して行った。そんな中、あたしは1人で戦い続けていた。何度ももう止めようと思った。でも不思議と足はスーパーに向かった。

1人で戦うことの辛さと厳しさがあたしにはわかる。だから新しい狼が生まれたときには直接は無理にしても助けてあげようと思っていた。ちよつとした助言でもそれは大きな助けになる。経験からそれがわかった。

新しい年度が始まる前にももちろん新しい狼は少数であるが生まれる。だけどその時のあたしにはまだ助けてあげるほどの余裕はなかった。

だけど、3月になれば状況が変わるのは知っていた。新しい狼が増えて、実力者たちが一時的にはいえ姿を現さなくなる。教えることができる新人が増えて、実力者たちがいなくなるのならあたしにも少しは余裕が出来る。

楽しみだった。あたしみたいな苦勞をして欲しくないという気持ちが強かったがあたしにも後輩が出来るということの方が嬉しかった。狼としての先輩といえる人がいなかったあたしには先輩がいなかった寂しさを後輩に求めている。

でも現実は厳しかった。めぼしい新人がない。いたとしても部活とかサークルとかの関係で連れてこられて人ばかりだった。今年は無理かなと思っていたときに出会ったのが子犬ちゃんだった。

出会いは他の狼を新人ながらに沈めて喜んでるときだった。まるで隙だらけだと思った。だから出会いがしらに強烈な膝蹴りを食らわせてあげた。最近では新人を探して毎日スーパに顔出していたから子犬ちゃんはこれがデビュー戦だったのかもしれない。だとすれば期待の新人といえる。

だけど子犬ちゃんにはアロハが世話を焼き始めた。狼としての実

力はあたしと同じくらいだけど一年中、アロハでスーパーに現れる変な奴。だから後輩は出来ないのかと少し寂しい気持ちになった。

それでも挨拶だけはしておこうと次の日に地場神じばがみのスーパーで見かけたときに話しかけた。それから先はスーパーで会ったときに戦う好敵手ライバルの1人になるはずだった。

そうはならなかったのはその日に大猪おおししが現れたのが原因だ。あたしたちは完膚なきまで大猪おおししに蹂躪された。何度か大猪おおししに会ったことはあるけどあの恐怖にはなれない。

それが元で子犬ちゃんがへこんじゃった。仕方のないことだと思つた。大猪おおししを前にして恐怖を抱かない狼なんてそれこそ最強と呼ばれる存在かそれに近い位置にいる狼たちぐらい。

それがきつかけだった。気づいたらアロハと2人で子犬ちゃんを慰め、励ましていた。その後もいつの間にかアロハと一緒に子犬ちゃんのことを気にかけていた。だから子犬ちゃんはあたしとアロハの2人で面倒を見ているような感じになった。

子犬ちゃんはいずれ最強と呼ばれる存在になるかも知れない。漠然とだがそう感じさせるものを持っている。だがまだまだ未熟な腕前であるのも事実。これから子犬ちゃんがどうなるか楽しみだった。

楽観視していたのかも知れない。あたしがそうだったように子犬ちゃんも耐えられると思っていた。だからあたしは子犬ちゃんの元に行こうとするアロハを止めた。

あたしは弁当を手に入れられなかった時に何度もこういう経験があった。自分でこの試練に打ち勝つ子犬ちゃんを見たかった。

そんなあたしの都合があたしの経験が子犬ちゃんを弁当を取らない。そう思わせていた。

だから子犬ちゃんが弁当を手にしたときに子犬ちゃんを信じてそう言っただけではないことを思い知らされた。

なんでだろうと考える。あたしの考えが甘かったのはわかる。それでも子犬ちゃんならと思える。

疑問は子犬ちゃんの手にした『豚の角煮弁当』を見たときに氷解した。

「あつ。月桂冠…」

成る程と思う。普通の弁当ならまだしも月桂冠がでるかでないかの瀬戸際にあるのならあたしの時よりも状況はよりつらいものになっていて当然だ。

だからかと思つた時に諦念が生まれ、心の中で子犬ちゃんにさよならを言おうとした。

「ただだぜ。まだ犬っ子は弁当を買つたわけじゃない。手に取つただけだ」

そんなあたしの気持ちがわかつたのか隣にいるアロハが言った。強がりだと思つた。手に取つてから引き返すのは手に取る以上に難しいことだと今までのことからわかつていたからだ。

「犬っ子を信じろつて言つたのはお前だろ。俺よりも先に信じるのを止めてどうする。俺はまだ信じてるんだぜ」

その言葉はあたしには重かった。信じると言うよりも結果を予測していたと言えるあたしには重かった。

隣にいるアロハを見る。アロハはあたしのほうを向いてはいなかった。ただ真っ直ぐに子犬ちゃんを見ていた。その目からは諦めが

感じられない。

うらやましく思った。その諦めずに信じ続けられる心の強さを。同時に憧れた。

アロハの視線の先には子犬ちゃんがいる。確かに子犬ちゃんはまだ弁当を買ったわけではない。だからアロハは信じている。

あたしもそんな風に強くなりたいと思った。

そして気づいた。まだ終わっていない、ならば今からでも子犬ちゃんを信じることができる。

だからあたしは子犬ちゃんを信じる気持ちを今までの分まで込めて、子犬ちゃんに送った。

その瞬間に子犬ちゃんはこちらを振り返った。

S I D E O U T

振り返った先にはアロハと巨乳の2人がいた。2人の視線は強い。だが決してマイナスの感情は感じられなかった。2人は口を開かない。だけどその視線から言いたいことは伝わってくる。

(戻って来い)

(戻って来て)

簡潔にただそれだけを視線で訴えている。だがその言葉に秘められた意味は簡潔で済ますことは出来ないほどに濃縮されている。

一緒に半額弁当を目指そう。

意味を集約するとそこにいきつく。

だが2人は俺が弁当を戻して再び半額弁当を求めることを願っているのがわかる。

今、弁当を手を取っている俺は裏切り者に等しい。いや、状況を見たら裏切り者というよりは臆病者か。ただ、弁当が失われるのが怖くて逃げ出した臆病者。

俺はその道を選んだ。その証拠が右手にある『豚の角煮弁当』だ。狼たちに悪いとは思う。それでも怖かった。

弁当を手にしたときに臆病者として生きる覚悟は出来ていたと思う。だからこそ弁当を手にした。

それでも2人の目を見た瞬間にその覚悟が薄れていくのが感じられた。

ただただ、俺が戻って来ることを信じて、それ以外のことなど考えていないような目。その目には曇りがなかった。

その信頼が俺には辛い。いつそ、俺を責めてくれたほうが余程楽だったろう。弁当を取ったときに責められる覚悟はしていたのに。

アロハと巨乳はそれを許してくれずに俺が戻ってくるのを信じている。

精神がボロボロになりながら、迷い続けてようやく出した答えなのに。2人は俺に再度の選択を迫っている。

弁当を戻してもう1度、半額弁当が出来るまで待つか。それとも俺を信じて待っているアロハと巨乳を振り切ってレジへといくか。

先ほどの問題より更に辛い選択を俺は迫られている。さっきはどちらを選んだとしても所詮は自分の問題。後悔こそしても責任を負

うのは自分1人。

だが今回は違う。2人を振り切ってレジに行った場合は間違いなく俺だけではなくアロハと巨乳の2人のこれからにも変化が訪れる。それも悪いほうにだ。

2人の信頼には応えたい。その気持ちは強い。

それでも怖いのだ。軟弱な精神と笑っていてくれてもいい。ここまでで日々で少しずつだが確実に磨耗されてきた心が月桂冠候補がなくなるかも知れない、その恐怖で折れてしまったのだ。

1度、折れてしまった心は簡単には戻らないのだ。

しかし、2人の気持ちは俺の心に確かに届いている。俺を再び戦場に運ぶまでにはいたらなくとも迷いを生ませる程には。

頬に涙が伝う。

この涙は間違いなくアロハと巨乳が俺がもどると信じている気持ちを感じ取った俺の心が生んだ嬉し涙だ。

戻りたい。戻りたい。戻りたい。

心がそう叫ぶ。

だが足は動かない。体が動かない。

それでも無理をすれば戻れるとも思う。だがそれでは意味が無いのだ。

戻ることを考えるたびに呼吸が荒くなる。過呼吸を起こしているのが自分でもわかる。

これが俺が失う恐怖を克服していない証。今、無理して戻ってもまた同じことを繰り返すのは目に見えている。

時間の経過がわからない。俺が振り返り立ち止まってからどれだけ経ったのかわからない。その間ずっとアロハと巨乳は俺をしつかりと見据えている。

先ほどから変わったことといえば俺の呼吸がどんどんと激しくな

っていることぐらいだろうか。息をするのが苦しいほどの呼吸をしている。

涙も止まらない。さっきまでは嬉し涙と断言できたが今は恐怖からくる涙と区別がつかない。2種類の涙が俺の目から零れ落ち続ける。

俺の心はとうに限界を超えている。それでも答えをだそうと考える。

いや、考えるなんてことはもうできていない。

戻りたい、怖い。この2つ想いを訴え続けるだけだ。

後はどちらの想いが強いかそれだけで結果が決まる。

戻りたい、怖い、戻りたい、怖い、怖い、戻りたい、怖い。

2つの想いが交互に心を支配する。

無限に続くとも思われた想いのぶつかりあいにも終わりの時が訪れようとしていた。

戻りたい、怖い、戻りたい、怖い、怖い、戻りたい、怖い。

恐怖。その感情が勝り始める。このまま心が恐怖に埋め尽くされそうになったときに回りの変化を感じる。

アロハと巨乳だけだった戻って来ると信じる視線が1つ多く感じた。

視線のほうを向く。1人の男の狼がいた。男の顔には見覚えがあった。俺が最初の争奪戦に加わったときにヘッドバンドをかましてノックアウトした男だった。

彼もまた俺が戻ることを信じているのだ。立ち止まる俺の迷いから戻ってくると思ったのか、アロハと巨乳の2人では足りないのなら俺も信じよう。そんな彼の心の声が聞こえる。

少し恐怖が薄れる。

それでも恐怖はまだ勝っている。

まだ戻るには、恐怖を克服するには足りえない。

だが彼の気持ちは俺に一步の勇気をくれた。

今までは振り返ってみていたアロハと巨乳に対して俺は向き直った。

その様子を見ていたであろう他の狼たちから動揺が感じられる。

もう戻れないと思っていた狼が戻ろうとする兆候を見せたことに対する驚愕ととれる。だがアロハと巨乳と彼は当然だとばかりに動揺は微塵もしない。

しかし俺も向き直ったがそれから先は全く進めない。恐怖がどうしても邪魔をする。

涙が流れ続ける。呼吸は荒いまま。全身に悪寒がはしる。踏み出す一歩が出ない。

また時間が流れる。大した時間は過ぎていないであろうに俺の消耗は激しい。このままでは進むことができないまま俺は限界を迎える。

そう思った時にまた変化が訪れた。

視線が1つ増えたのを感じる。そちらを振り向くと今まで何度か見たことがある女の狼がいた。彼女とは同じ戦場にいたことは何度かあるが直接戦ったことはない。

それでも俺が戻ってくると信じ始めた。

また少し恐怖が薄れ、勇気が生まれた。

呼吸が少し落ち着く。涙と悪寒はまだとまらない。

また1つ視線が増える。

そのたびに恐怖が薄れ、勇気が成長する。

気づけばスーパー中の狼が俺が戻ってくるのを信じている。

もう俺の中では怖いという気持ちよりも戻りたいという気持ちの方が強い。恐怖を克服しきったかと問われれば頷けはしないがそれ

でも立ち向かっていける。

狼たちの視線を一身に受けた俺は一步、また一步と弁当コーナーに向かって歩みを進める。

その歩みは非常にゆっくりとしたものだった。しかし、確実に進んでいる。

やがて弁当コーナーの前にたどり着く。

最後の山場に着いたのだ。ここに弁当を戻せば終わりだ。

弁当を戻そうとする弁当を置くその時に一瞬、腕が止まる。だが狼たちに勇気付けられた今の俺はそのまま弁当を弁当コーナーへと置いた。

パチパチ、店内に静かな拍手が起こる。その数は11人。今日この場にいた俺を除いた狼の数である。

俺はこの狼たちに向かって大きくお辞儀をした後にフライパンの前に戻ろうとする。

その時に1つ拍手の数が増える。

ギギ、と開かれたスタッフルームからでてきた煮物神が拍手をしていた。

第七話 月桂冠への挑戦

煮物神がスタッフルームからでてくる。それが意味することは今の状況では半額シールが貼られることに他ならない。

戦場に帰ってきた俺には息を整える間もないままに戦いの鐘は鳴り始めようとしていた。

この戦いを止めうることのできる存在はおそらく、大猪おおじしだけだろう。だがこの場にその姿はなく、訪れるであろう気配もしない。

ならば間違いなく月桂冠を巡る戦いは起きる。煮物神はすでに惣菜コーナーに向かっていた。ならば俺も早くこの場を離れなければならぬ。弁当コーナーについては豚ぶたになってしまう。

豚……それは『ベン・トー』の世界において狼ではないのに半額弁当を手にしよととする者の蔑称だ。半額になる前の弁当を前にして半額神を今か今かと浅ましくも待ち続ける者たちに使われる。

あるいは、弁当を手に入れたいが為に半額神がスタッフルームへと消える前に弁当に向かい駆け出してしまった狼にも使われる。前者と後者の違いは元々豚だったのか、新しく豚になったかの違いだ。他にも狼としてのマナーを著しく脱すれば豚となる。

静寂に包まれている。店内に流れるBGMの音だけが聞こえる。狼たちから発せられる気は鋭く、身を貫かれそうな錯覚さえもした。それが心地良い。

自分が戻ってきたと実感できた。体力、精神ともに万全とはとてもいえない。それでも今日は初めての半額弁当を手にすることができる。そんな気がしていた。

月桂冠がでる今日は狼たちの狙いが1つに集中する。これは今までと大きく違う。弁当を手にするために他の狼と手を結ぶことはよ

くあることだ。弁当の狙いさえ違えばお互いが弁当を手にするまで共闘関係は続く。

しかし、狙いが同じなら共闘は本当に一時的なものになってしまふ。月桂冠に近い狼を2人で倒したら次に月桂冠に近いのは倒した2人になる。つまり、倒した瞬間にはすでに敵となるのはわかっている。それだけではなく他の狼の狙いも2人に集中する。

常に前線で月桂冠を狙い続けるか、後方から状況を見極めつつ好機を待つか。

前者はリスクは高いが月桂冠を手にする可能性も高い。後者は最後まで戦うことは出来るだろうが好機を見逃せば何もできないままに月桂冠が失われる。

愚問だな。そう思った。考えるまでもなく俺の中で答えは出ていた。

1度は誘惑に負けてまで手にした『豚の角煮弁当』が何もできないままに取られていく、そんな可能性がある選択を選ぶことを今の俺に無理だ。

それにどうせ今の俺には持久戦ができるだけの力は残っていない。ならば俺は最前線で『豚の角煮弁当』を目指し続ける。それが最善であり唯一の選択だ。

煮物神が歩を進め弁当コーナーの前へと来た。そしていつものようにバーコードリーダーで半額シールを作り貼っていく。最早、見慣れた光景とっていい。

しかし、ここから先がいつもと違う。『チキン南蛮弁当』と『レバニラ弁当』へと半額シールを貼り終えるとそのままエプロンのポケットへとバーコードリーダーをしまう。

「このシールを使うのも久しぶりだな」

そう言いながら代わりに何も書かれていない真っ白なシールが貼られている台紙を取り出した。そのまま台紙から一枚のシールをはがし、『豚の角煮弁当』に貼る。シールをしわを伸ばすようにきゅつきゅつと貼り付ける。その後黒のマジックを取り出して半額と煮物神が書いた。

体の筋肉が弛緩を始める。今をもって月桂冠は誕生した。月桂冠ができた時の気持ちは狂喜と安堵が支配した。

前者は純粹に月桂冠が出来た喜び。後者はこれで弁当がなくなる恐怖からだ。さらに細かく説明すると半額となった時点では狼たちはまだ弁当を手にできない。なぜなら煮物神はまだスタッフルームへと戻っていないからだ。弁当の争奪戦は一礼をして半額神がスタッフルームの扉を閉め切った瞬間から始まる。

これは半額神はお客様に対して、狼たちは半額弁当を作ってくれた半額神に対しての感謝の気持ちが込められた儀式であり礼儀であった。

ただ、弁当を手にすることはできなくとも半額となった弁当に群がる豚を処刑することはできる。半額神に感謝もせずに見苦しくも半額弁当を手にすればそれでいいと考える豚は始末できる。30%引きの時に狼たちが処刑する理由はない。だが半額弁当となった時に処刑する理由が生まれる。

つまり、今この時より半額神が去るまでの間は全ての狼が味方であり半額弁当を目指す全て者が敵となる。

煮物神がお辞儀をする。これもまた見慣れた光景だった。いつもながらに美しいお辞儀だと思ふ。煮物神だけではなく地場神じばがみのお辞儀も美しい。半額神と呼ばれる者たちはおそらく皆が皆、美しいお辞儀を身につけているのだらう。ひよつとして何処かに半額神へとなる為にお辞儀を身につける修行場があるのだらうか。

俺の考えがずれている間にいつもより少しだけ長かった煮物神の

お辞儀が終わり顔を上げる。普段ならそのままスタッフルームへと戻るのだが今日は少し回りを見渡していた。

「…ふっ」

俺と目が合うと何か楽しいものを見つけたかのように笑うとスタッフルームの中へと入り、その扉を閉めた。

狼たちが動き出した。目指す先には『豚の角煮弁当』がある。

俺を含めて12人の狼による争奪戦。今日ここに集まっている狼たちはみな一度は見た記憶がある。見たからといって実際に戦ったわけではない。同じ場にいたというだけだ。

戦い方がわかるのは5人といったところだ。他の6人の戦闘スタイルはわからない。

だが月桂冠を前にした狼たちがいつもと同じと想っては痛い目を見ることは必至だ。現に俺自身がいつも以上の力を発揮できる、そう思えるほどに月桂冠は魅力的だ。だがそれを発揮できるのはすでに消耗をしている俺にとっては長くない。

さりとてここぞというタイミングを待つだけの余裕は当然のようがない。

以上のことをふまえると戦略としては常に最前線で戦いながら好

機ができたなら無理をしても弁当を狙う、に落ち着く。

冷静に考えればまず無理だ。まず最前線にたどり着くのが俺には難しい。さらにたどり着いたとしてもそこまでに体力を失っていては後が続かない。残っていたとして最前線の激しい戦いに潰される。さらに好機といっても普段はリスクが高すぎて別の選択を選ぶような場合でも弁当を狙っていかねばならないだろう。

だが、目指す先にあるのは月桂冠。

大事なものは理屈ではない。感情が叫ぶ。可能性があるのならそれしかあり得ないと。

だから駆ける、他の狼たちよりもはやく駆ければ俺がいるところが最前線となる。最前線にたどりつく必要がなくなる。このメリックは今の俺にとっては大きい。

息が整いきっていない俺には辛い早さだがそれでも駆ける。体ができていない中学1年の俺には不利だろうと関係ない。ただ月桂冠を手に入れるために駆けた。

俺の頑張りは報われたと言っていていいだろう。

「おらあ！！！！」

「ふんっ！！！！」

最初に弁当コーナーへとは着けなかったが、それでも俺が着いた時にはアロハと金髪（俺がヘッドバンドを食らわした彼）が激突を始めたところだった。

それに呼応するように周りでも狼たちの激突が始まりだした。

俺は勢いそのままにアロハへと向かう。

「でいやあああー！」

掛け声と共に腕を伸ばし、アロハを殴ろうとする。

アロハは一瞬、驚くが俺の拳を受け止めるべく左手で防御しようとする。

今の俺ではアロハの防御は突破できないだろう。だからアロハが相対している金髪へと視線を送る。

(この隙にアロハを沈める)

金髪は言葉も返さなかったし、頷きもしなかった。ただ金髪の目は『了解』と喋っているのがわかった。

わざわざ声をあげたのはアロハに俺を強く意識させるためだ。さすがに金髪のほうから注意は外れていないがそれでも2人同時ならばアロハとて簡単には倒せないはずだ。

もう1つの理由はこの一撃が成功させないためだ。もしこの一撃が入ってしまったら俺は金髪から横から一撃を食らってしまう。大振りの攻撃のあとの隙を見逃してくれるような奴じゃあない。

だからアロハを倒した後のことも考えて2人での共闘を選んだ。アロハではなく金髪をパートナーに選んだのはアロハの方が強いからだ。アロハとやりあうよりも勝率は高い。だからまずはアロハにご退場を願おうか。

「はっ」

俺の拳を受け止めたアロハはそのまま俺に向かって右手で殴りつけてくる。

「なっ!?!」

あり得ない。右手で攻撃してくるということは金髪に対する防御

を捨てるということ。いくらアロハといえ無防備な状態での一撃を耐え切れるとは思わない。

しかし今の問題は目の前まで迫ってきているアロハの拳。俺は体を無理に右にひねってかわす。

無理やり、ひねったために走ってきた勢いも合わさって転びそうになる。しかし今転ぶことはできない。ここで転べば『豚の角煮弁当』は手に入らない。

俺の執着が勝ったのかはわからないが何とか踏みとどまった俺はすぐさまアロハのほう向き直る。

「これで脱落だとも思ったんだがな。…思ったよりも強くなってるってことか？」

そう言いつつも金髪に向かって蹴りを放つ。正面からの一撃だというに金髪は回避することも受け止めることもせず食らった。

そのまま金髪が崩れ落ちる。金髪の後ろには巨乳がいた。

俺と金髪が協力してアロハを倒そうとしたようにアロハもまた巨乳と協力した、ただそれだけのことだった。巨乳が金髪を後ろから潰す。だからアロハは俺に対して迎撃にでれたのだ。

しかし金髪が倒れた時点でアロハと巨乳の協力関係は終わっている。現に2人はすでに戦い始めている。その目線からは俺の動きを観察していることもわかる。

「あたしはちゃんと金髪しとめたのに。あんたは子犬ちゃんもしとめられないの」

巨乳は愚痴りながらもアロハへの攻撃を止めないし俺への警戒も続けている。

「…っつお。なに言ってやがる、金髪はまだ動けた。だから俺がとどめの一撃を入れたんだ。あれさえなけりゃ犬っ子に追撃をかけた」

アロハは巨乳の攻撃を捌きながら反論した。2人の激しいぶつかり合い加速していく。

チャンスだと思った。2人と俺に対する警戒は怠っていないがお互いに目の前の相手の方が強敵と認識している。それにより徐々に俺に対する警戒が弱くなっていつている。

この隙に月桂冠を指すしかない。

だがそう簡単には上手く物事は運ばない。俺が月桂冠に向かおうとするタイミングで横から男の狼からの蹴りがとんできた。

「がつ…は」

かわすこともガードすることも出来なかったが体をずらして直撃はなんとか防いだ。だが今の俺は隙だらけだ男の追撃がくれば終わりだ。

終わりたくはない。『豚の角煮弁当』を食べたい。絶対にだ。

まだやれるはずだ。次の一撃さえどうにかすればまだ戦えるんだ。目で男の動きを見る。男のに一挙一足にいたるまで事細かに見る。

腕か？足か？

右か？左か？

俺は身構える。この状態ではかわすことも受けることも無理だが来る場所さえわかれば筋肉を締めることでダメージを減らせる。

だがその必要はなくなった。

男はそのまま弁当コーナーへと手を伸ばした。

「なんでだ…」

疑問が口から出た。しかし、男の動きを見ているうちに理解する。男は俺をしとめようとしていたのではなく月桂冠を目指す道筋に俺がいたから牽制としての一撃を見舞わせたに過ぎないと。俺がチャンスだと思っただのと同様に男もチャンスだと思いつけて来た。ならば俺の相手をして無駄な時間は使いたくない。

そして男の手は月桂冠に伸ばされている。その手に月桂冠が掴まれようとした瞬間に男は巨乳からパンチを貰っていた。威力はそこまではないであろうが一瞬だけ男の伸ばす手が止まる。そのときを逃さずにアロハは男の腰を掴みそのまま放り投げた。

そして2人はまた激しくぶつかり合っていく。

俺はアロハと巨乳との実力差を痛感した。男がいなかったら放り投げられていたのは俺だった。チャンスができたと思っていたのは甘い考えだった。

それでも行かねばならない。このまま待っていたら勝機はない。さつき食らった男の蹴りのダメージは決して軽いものじゃない。もともと余裕がなかった俺にはもう戦えるだけの力はないといってもいい。

俺が今たっているの『豚の角煮弁当』を食べたいという思いがさせている。

「当たって砕けるだっ!!!」

そう叫ぶと弁当コーナーへと走り出す。アロハと巨乳は示し合わせたかのようにお互いを攻撃するのを止めて俺へと狙いを定めてきた。

しかし、俺にはそれがわかっていて。先ほどの男が無闇な突撃がどうなるかを身を持って教えてくれた。だから俺の狙いは今はまだ弁当ではない。

アロハと巨乳が攻撃しようとして俺へと向かってくる。それに対して俺は方向を微調整してアロハの懐に飛び込む。

「つと、あれ？」

俺の進路が変わったことにより巨乳が攻撃するタイミングを逃す。

「あー！？」

アロハは俺が弁当コーナーにある『豚の角煮弁当』を狙っていると思っただけで、さすがに反応できずに懐に入ることには成功する。

そのまま肘をアロハの腹へと見舞う。ダウンさせるほどの一撃をいれる必要はない。むしろいれてはならない。ここで強烈な攻撃をいれればアロハは戦闘不能となるだろうがその間に巨乳が弁当に手を伸ばしてしまう。ひるませる程度の威力でいいからアロハから一瞬の時間を奪えばそれでいい。

「うっ…痛う」

アロハがひるんだのを確認するとすぐさま『豚の角煮弁当』へと手を伸ばす。

だが俺よりも先に巨乳が『豚の角煮弁当』を指して手を伸ばしていた。

誤算だった。巨乳の動きが俺が思っていたよりもずっと早い。このままでは巨乳が月桂冠を手にしてしまう。

「くっ、まだだ」

俺を弁当に伸ばそうとしていた手を巨乳への攻撃へとシフトする。狙いは伸ばされている手だ。

俺の手に気づいた巨乳は空いている片方の手で払おうとする。払われたら終わりだ。

だが巨乳は俺に気づくまで弁当に集中していたおかげで反応ははやくない。

俺の手が当たるのが先か、巨乳が俺の腕を払うのは先か。

「きゃっ！」

「いたっ」

僅かな差だった俺の方がはやくだった。

「やっってくれるじゃないの」

そう言っただけ巨乳は俺を睨みつけてくる。お互いに手を伸ばせば届く距離だが手を伸ばせばお互いに邪魔しあうそんな距離で巨乳と対峙する。

巨乳に勝てば月桂冠が手に入る。それは巨乳にとっても同じことだ。俺に勝てば月桂冠が手に入る。お互いに相手の動きに細心の注意を払う。

緊迫した空気が流れていた。

「あっ」

いきなり巨乳があっけに取られたような声をだす。

「わりいな」

後ろからアロハの声が聞こえる。

俺の後ろをアロハが通り過ぎていく。そのまま俺の横から手を伸ばして『豚の角煮弁当』を手にした。

あつけない幕切れだった。俺と巨乳はお互いに注意が完全に相手に向いていた。月桂冠を目の前にして目がくらんだのか他の狼のことを忘れていた。

悔しさと無力感が俺を包む。弁当を手に入れられなかったシヨックは大きい。それも目の前にあつた。あとは巨乳をどうにかすればいい、そこまで来たのに結局は手に入れられなかった。

打ちひしがれる俺の横を月桂冠たる『豚の角煮弁当』を手にしたアロハがレジへと向かっていく。その様は威風堂々といえた。

「何してる。弁当はまだ残っている」

去り際にアロハはそう言った。このセリフは俺が狼としての初日に地場神の店で目当てにしていた『メンチカツ弁当』をアロハに取りられたときに言われたセリフだ。

このことをすぐに思い出せたのは今の状況が似ているからだろう。あの時も目当ての弁当をアロハに取られて茫然自失としていた俺にアロハは同じセリフを言った。違いは今回は月桂冠だったということだ。

あの時はその言葉で再び戦おうという気持ちが出てきた。それは今回も同じだった。

「くく…」

あの時と同じ人物によって絶望させられ、また奮い立たせられる。自嘲の笑いが漏れた。だが悪い気はしなかった。

「いつか、あんたを超えてやんよ」

弁当コーナーに残っている弁当に手を差し出す。狼たちもやはり月桂冠がなくなったシヨックが大きかったのだろう動きが止まっていた。今までの苦勞が嘘だったかのように弁当はあっさりと俺の手に掴まれた。

「「「いただきます」」」

大猪に初めて会ったときと同じように公園でアロハと巨乳と晩御飯を食べる。違うのは今日は煮物神のスーパーの近くの公園だということ。

そして何より晩御飯が首領兵衛どんべえではなく半額弁当だということだろつ。

俺の膝の上には『チキン南蛮弁当』がある。アロハは『豚の角煮弁当』、巨乳は『レバニラ炒め弁当』を手にしている。

「食べる前に1つ言っておくことがある」

パキッと割り箸を割っていざ弁当を食べようとしていた俺にアロハが言った。

「なんですか？」

2週間の戦いが報われるその瞬間を邪魔された俺は口を尖らせて聞いた。

「今日の犬っ子は運がよかった。次はこんな簡単にはいかねえ」

「どういうことですか？」

確かに最後はあっけなかったがそれまでの戦いは今まで以上に激しかった。

「今日きていた狼たちは月桂冠を手にしたことのねえやつばっかだ。だから俺が月桂冠を手に入れたときに狼たちはみんな固まっていた。今日こそは、と生き込んでいた反動だな。それは犬っ子もおなじだったろう。だが、月桂冠がなくなったらすぐに他の弁当に狙いを変えねえと駄目だ」

「あゝ、そう言えばそうね。特に今の時期は腕がある狼が出払っているから今日こそって気持ちは一層に強かったんでしょうね。……でも1つ訂正。あたしは月桂冠を手に入れたことあるわよ？」

不満げな顔をして巨乳がアロハに言う。

「あー、悪かったよ。ま、とにかくこれで慢心するなって話だ。……じゃ、食つか」

アロハの話が終わったからお預けを食らった犬みたいになっていた俺は早速、チキン南蛮に噛り付いた。

「美味しい」

言葉を飾る必要はない。その一言で全てを表せる。

初めての半額弁当である『チキン南蛮弁当』は実は前に食べたことがある。狼になる前の春休みだった。

その時と全く同じということもないだろうが大きな違いはないはずだ。それでも前に食べたときとは比べるのが馬鹿馬鹿しくなる程に美味かった。

初めての半額弁当、という事実が最高の調味料となっている。

無我夢中でチキン南蛮を食べる。そして、米をかき込む。

狼として負け続けた2週間は辛かった。だがその辛さは今、吹き飛んだ。

あつという間に一枚目のチキン南蛮がなくなる。ここで一息をいれる。

誕生日に月桂冠までは無理だったがそれでも半額弁当を手に入れた。その事実が体中を駆け巡る。

その幸せをあらわすために目からは涙がこぼれた。

「…確かにはじめての半額弁当は格別だが泣くやつは初めて見たぞ」

多少あきれた様な顔でアロハはそう言うと箸を伸ばして俺のチキン南蛮を持っていった。

「えっ…？」

自然な流れで奪っていった。

「交換だ。犬っ子があんま美味そうに食うもんだから食いたくなつた」

そう言つてアロハは豚の角煮を1つ寄越した。交換自体に文句はない。むしろ望むところだ。だがしかし。

「チキン南蛮1つと豚の角煮1つは少し不公平だと……」

「あほう。月桂冠だぞ」

何を当然だとばかりにアロハは切り返す。

「あたしにも頂戴よ。4つもあるんだし1つぐらいいいでしょ？」

成り行きを見守っていた巨乳が話しに入ってきた。

「やだよ」

考える素振りすらせずにアロハは拒否する。

「あたしのレバナラも食べていーよ」

「……レバナラと豚の角煮の共存は難しいだろ」

考えてみた。

「……」

沈黙が場を包む。

「……今回はやめとこつと」

「……それが賢明だ」

気を取り直して豚の角煮をいただくとする。

「うおっ?」

口の中でとけるかのように柔らかい。味も奥のほうにまでしつかりとしまっている。だからと言って味が濃すぎるわけもない。

俺は残っている米を一気にかき込んだ。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさま」

「ごっそさん」

三者三様に食事の終わりを告げる挨拶をする。

このまま解散だろうと俺が立ち上がる。

「よく戻ってきたな」

不意にアロハが俺に話しかける。

何のことか。考えるまでもなく俺が30%引きの弁当に手をだしたことだ。

「うん。普通は戻ってこないよ」

確かにあの状況から戻るのはまず無理だ。それでも俺は戻った。間違いなくアロハの、巨乳の、あの場にいた狼たちのおかげだ。

だがそれを言うのは恥ずかしい。ただでさえボロ泣きしていたというのに心情まで吐露とか恥ずかしくて死ぬ。

「俺が普通じゃなかったただけですよ」

だからそう言って真っ赤に染まった顔を見せないように足早に帰る。

「ありがとうございましたっ！！！」

公園から出るときに怒鳴るようにそう叫んだ。

「気にすんな」

「子犬ちゃんはかわいいね」

後ろからそんな声が聞こえた。

今日は色々あったけど最高の誕生日だった。

第七話 月桂冠への挑戦（後書き）

いい加減にアロハと巨乳に名前をつけてあげたい。でも名前をつけない方がいい気もする。さて、どうしようかな。

第八話 ゴールデンウィークの遠征

世間はゴールデンウィーク真っ只中に突入している中、高城真はたかぎしん暇をもてあましていた。

初めて半額弁当を食べた翌日にも意気揚々とスーパーへと向かったが結果は散々だった。勝利がまぐれとまではいかなくとも運が良かった部分もあったと認識させられた。

アロハと巨乳はしっかりと半額弁当を手に入れていた。最近の2人の半額弁当獲得率は高い。もういつそ噂に聞く今の時期に強者が集まっているというスーパーに行ってしまう。そう考えてしまうのは俺が弱いからだろうか。

何はともあれ初勝利からもスーパーに行つてはいるのだが勝利が遠い状態。あと少して手に入れられそうな時にものも煮物神のスーパーでアロハと巨乳が半額弁当をした後に地場神じはがみのスーパーに行った時だから余計にそう考えてしまう。

さらにゴールデンウィークにだということにやることがないというのがだらけを呼んで昼間の活動を億劫にさせて「いざ、半額弁当」というときにいまいち腹の虫が力を貸してくれない。

昼間に遊べばいいのだろうが親しい奴はみな家族と旅行に行つてしまっていない。俺の家族はゴールデンウィークなど関係無しに様々な国を飛び回っている。

1人でやるような事はお金がかかることが多い。少しぐらいならいいと思うがうっかり調子に乗ってしまった時が怖い。俺の小遣いイコールどれだけの節約が出来たか、そんな状態だから何かあった時の為にあまりお金は使いたくない。

このままでは無為にゴールデンウィークを過ごしてしまう。もっとたいない。

せめて、腹の虫の加護を得るために体を動かすか。

「自転車でちょっと遠くまで行ってみるか…?」

中学生の移動手段はお金のかからない徒歩か自転車が多い。特にちょっと出かけるにしても自転車は便利だ。どれくらい便利かという様をつけてもいいくらいだ。

転生前には免許を持っていた俺としてはやはり出かけるとなると近場と行っても徒歩では辛い距離になってしまう。その点、自転車ならば隣町ぐらいなら余裕でいける。

「毎日、家に籠ってるのも悲しいしな」

ギーコ、ギーコと自転車を漕いでいく。特に行き先はきめていない。

ただいつも行かないところに行こうかと思っていた。

自転車でも長時間漕いでいれば疲れる。だが、この自転車の性能はかなりいいものだ。中学入学の折に親が買って貰ったものだ。家を空けることが多くなるので必然と生活用品を買いに遠くまで行かねばならぬ時もある。だからちょっとわがままを言って買ってもらった。性能がいい分だけでもちろん値段も張る。

えっ?どれくらい値段かって?

一月の生活費の支給額が当初に予定していた金額の8割になったぐらいさ。…お金がないのは決して自業自得ではない。ともあれ値段の分だけの価値はあると漕いでいると思える。スムーズに漕げるし、速い。

「ここはどこだ？」

だからついついと時間を忘れて遠くへと来てしまった。太陽が沈むのが見える。夕暮れが綺麗だ。

道路案内を見ていけば帰れるので問題はないはずだ。

ここまで自転車を漕いだのは初めてだ。中々に楽しかった。長い坂はこりこりだったが。

どんどん変わる景色が面白かったし、体を動かすのも爽快だった。これからは休日に色々なところに出かけてみるのも良いかもしれない。

「明日は今日とは違う方面に行ってみよう。さて、さすがに帰らないとやばいよな」

夕焼け空を見てようやく時間を思い出して帰らないとまずいと気づく。成りは中学生の俺では早く帰らねば補導されてしまう。望んで補導されたいと思うような奴はいない。

「俺はなんでこんなところまで来たんだっけ」

ふと疑問に思っただけだと考えるとすぐに思い出した。

「ああ、そつだ。腹を減らすためだった」

ゴールデンウィークですることがなくなっただらけていたから腹が空しくなくなっていたために運動をしたんだと。これだけ動けば十分に体は弁当を求める。

「目的を忘れてるとはまだ耄碌はしたくないんだがなあ」

途中で目的が自転車を漕ぐことになっていたことに苦笑する。

「さて、なら尚更に早く帰らないと半値印証時刻に間に合わなく……」

空が夕焼け色に染まっている。腕時計を見る。

「……………」

ここから家までどれくらいかかるだろうと考える。うるちよろとしていた分だけ真っ直ぐに帰ればそれだけ早く帰れるとは思っ、だが。

「昼ごはんを食べて少しゆっくりしてから家をでたから……。うん、無理だな」

煮物神の店の半値印証時刻には間に合わない。ハーフプライスラベリングタイム 地場神の店ならば全力で戻れば間に合うかも知れないがへとへとな上に急激な運動の後に腹の加護を得られるとは到底思えない。

「…本末転倒ってやつだな。俺は何やってんだか」

まあ、楽しかったしそれでもいいかと思う。

「しかし、晩御飯をどうしようか」

いい感じにお腹は空いてき始めている。どこかでなんか食べてくかなと、考えいたときにスーパーの看板が目に入った。

「と、スーパーはどこにであるんだよな」

ならばまだまだ駆け出しの狼である俺では生意気と思われるだろうが遠征と洒落込むのも悪くない。

自転車の向きを変えてスーパーへと向かう。まだ半値印証時刻には早いだろがこころ辺のスーパーにはどんな商品が並んでいるのか興味があった。

この店はスーパーとしては大きかった。中に入って弁当コーナーへと進む。まだ10%引きのシールさえ貼られていない。あまつさえ出来立て思われる弁当まである。

「結構遅くまで営業してる店っばいな」

さすがに閉店が早い店ではこの時間に出来立ての弁当がならんでいることはないと思う。原作では半値印証時刻ハーフプライスラベリングタイムに合わせてうなぎ弁当をつくる強者の半額神もいたがあれは例外だろう。土用の丑の日だったからのイベントのはずだ。さすがに普段からはやってないはずだ。

丁度考えていたからかふとうなぎ弁当が目に入った。

「この時期には珍しいな…」

他の弁当を見てみると魚をメインに据えた弁当が多い。普段通っている煮物神と地場神のスーパーでは魚メインは鮭弁くらいしか見

かけないから新鮮に感じた。

「もっと魚メインの弁当を増やしてくれてもいいのにな」

意外と普段は行かないスーパーを見ているのも楽しいなと思いつつ店を出た。

自転車を漕ぎつつ帰り道を急ぐ。すでに太陽は沈んでしまっていた。

ライトもあるので怖くはないが問題はスーパーが見当たらないことだ。大きい道を通っているのに見つからない。先ほどからお腹の虫が催促を始めていた。

「おつようやくあった」

目の前に見えてきたのは紛れもないスーパーだった。どこにでもある有名なチェーン店だ。年中無休の24時間営業をうたっている大型店。品揃えには期待できる。

「…んっ、24時間？」

ふと思う。そろそろ早い店ならば半値印証時刻が始まる時間だが24時間営業の店ではまだ始まる時間ではない。

ハイフプライスラベリングタイム

そもそも24時間営業の店に半値印証時刻は存在するのだろうか？ いや、時間が経って廃棄するぐらいならばあるのだから何時ごろになるんだ。間違いなく補導される時間までは粘らなければなるまい。

俺は腹の虫にすまないと告げつつこのスーパーをスルーすることにした。

自転車を漕ぎ続ける。今日は運がないと思う。スーパーはあまり見つからない。見つけても半値印証時刻が遅かったりなぜか休業してたりした。ゴールデンウィークを休むとは強気とも言えば良いのか？

ここまではまだ店に入る前からわかるからいい。問題は弁当が残っていないときとか半値印証時刻が終わってしまったときだ。あれの絶望感は計りしれない。せめて戦った結果、半額弁当を手に入れずに次のスーパーを目指したい。不戦敗というの非常に後味が悪い。なんとというか気力が失われる。

ちよつとくじけそうになってきた時にスーパーが見えてきた。閉店時間をチェックした後に腕時計を見る。

「んつと…、この時間ならもう少しで半値印証時刻ハイフプライスラベリングタイムつばいな。後は弁当が残っていると願うだけだな」

いい感じの店だと思った。半額弁当への期待を膨らませつつスーパーへと入った。

店の雰囲気は中々にいい感じだ。流れているBGMもうるさくは感じない。

入った瞬間に強い視線も浴びた。間違いないく狼特有の視線だった。これが意味することは半値印証時刻ハイフプライスラベリングタイムが近いということだ。

「どんな弁当が残ってるかな」

今までは煮物神と地場神の店でしか狩りをしてこなかったからか新鮮な気分させる。

周りを見渡しながら歩いていく。初めてのスーパーといっても弁当コーナーを見つけないのは難しくない。だいたい正面玄関から入ると野菜コーナーがあつてそこから外回りに巡つていくと魚と肉のコーナーがあつてその後にあることが多い。

「おっ、あつた、あつた。ちゃんと残つてるな」

コーナーの上には4つの弁当が残っていた。

『コロツケ弁当』

メインのおかずはコロツケが2つ。形が違うことから中の具材が別なものであることが伺えた。コーン、肉、野菜、ポテトと様々な種類があるが中身はなんだろうと楽しみにさせる。『コロツケ弁当』はもう1つ残っておりこちらのコロツケも先ほどの弁当とは形が違った。このことから『コロツケ弁当』はランダムに2種のコロツケが入られるのだろう。他にはシウマイが2つにマカロニサラダが入っている。特に奇抜なサイドメニューではない分だけ大きなはずれということはない。油ものであるコロツケにサラダがついているのは嬉しい。コロツケの下にはキャベツが敷いてあるがそれだとしても油分を少し感じてしまう。

『チキンカツカレー』

カレーはこのスーパーでも作られているオーソドックスな弁当といつていい。だが店ごとによってルーの味はもちろん変わってくる。辛味が強い店や甘めに仕上げている店などの根本的な味付けから隠し味1つとっても様々な物があるだけにその店の半額神の腕の

見せ所だ。何よりも万人受けすると言っても良いほどに日本人にはカレー嫌いは少ないし食欲を誘う。俺の口の中にもつばが溜まっていた。単純なプレーンカレーをだす店もあるがスーパァのカレーの醍醐味は何がのっているかだと俺は思う。家ででてくるカレーでカツとかが毎回のっている家は多くない。だから外でカレーを食べるときは少し贅沢な気分を味わいたいしガッツリと食べたいときにも丁度いい。

『揚げだし豆腐弁当』

この弁当は中々に挑戦的な弁当だ。揚げだし豆腐で弁当といえばサイドメニュー的な立ち位置だと思っただがこの弁当ではメインに据えている。豆腐がもともと安価なものも手伝ってか大きいといえる揚げ出し豆腐が3つ入っている上に餡もたっぷりとかかっている。この餡も店ごとの魅力とわかっていい。ただ揚げだし豆腐がメインだとどうしてもボリュームが足りなく思えるのは食べ盛りだからだろうか。肉団子がついているのが幸いといえた。ご飯に黒ゴマがまぶしてあるのもポイントアップだ。

「うーん、揚げだしが気になるけどボリュームが欲しいからチキンカツだな」

運動した後の成長期の男の子はやはりボリュームが大事だと腹の虫が訴えた。回りをきよるきよると見渡してどこら辺で待とうかと考える。少し考えた後に冷凍食品コーナーへと足を運んだ。

辛いなと思う。ハーフライススラベリンゲタイム半値印証時刻の正確な時間がわからないというのはそれだけで疲れた。決まった時間に貼り始める店もあるのだが商

品がなくなってきたとき出てくる半額神もいる。この店はどちらか
かはわからない。アウェーというのはホームとは違うというのを思
い知らさせる。始まる前でこれなのだから始まったらどれだけの苦
戦を強いられるかと思うと気が重くなった。それでも弁当は食べた
いという気持ちは強く時間の経過を息を呑みながら待ち続けた。

「もうそろそろかな…?」

店内にいる狼たちの気配が鋭くとがっていつている。半額弁当を
前にして狼たちの気が昂ぶっていつているのだ。つられて俺自身も
気分が高揚としてくる。

「残念なのはカレーが売れちゃったことだな」

ハイフプライスラベリングタイム
半値印証時刻を前にして売れてしまった『チキンカツカレー』だ
ったが俺はすぐに気持ちを切り替えて『揚げ出し豆腐弁当』へと狙
いを変えていた。

その時にそれは起こった。スーパー全体が押しつぶされるかのよ
うなプレッシャー。経験したことのない出来事だった。同時に狼た
ちが一斉にスーパーの入り口へと視線を集めているのがわかる。

「っ…大猪おおしか!？」

殺気立つといつても良いほど狼たちは興奮している。これほどま
でに狼たちが警戒する相手など大猪しか知らない。

「いや、違つな」

だがすぐに否定する。俺が大猪と遭遇したときと根本的に違つた。
あの時は完全な敵意と憎悪と恐怖があつたが今回はそこまで負の感

情が感じられない。むしろ敬意すらも感じられた。

「なんなんだったってんだ……いつたい」

困惑しながらも俺をスーパーの入り口を見る。「それ」がスーパーへと入ってくるまでの間はほんの数秒だろうが俺には1分近くにも感じられた。

ウィーン、と自動ドアが開くとそこから現れたのは買い物カゴを持った2人の少女だった。どちらの少女も整った顔立ちをしている。年は今の俺と同じか少し上くらいだ。そっくりな顔をしていることから双子というのがわかった。だが見分ける分には苦労はしなかった。髪の毛の長さが違っていた。片方の少女は肩より先にまで延ばしているのに対してもう一方の少女は肩口で切りそろえられていた。

「……………えっ？」

2人が狼たちの異様の原因であることは明白であった。今ここにいる狼たち全てが強い視線を少女らに送っていた。

訂正、俺だけは違った。視線こそは離れずに2人の少女を見ていたがその視線に込められたのは混乱だった。

「この感じ、堪りませんわね」

髪の毛の長いほうの少女は狼の視線に怯むことなく弁当コーナーへと足を進める。むしろその様から視線が集まっていることに喜びを感じているように見える。

「姉さん、待ってください」

さっさと行ってしまった姉を追いかけて妹の少女もスーパーを進んでいった。

「…あら？」

姉の方が急に歩みを止める。

「いつもと違う視線が混じっていますわね…」

周りをきよろきよろ見渡してと誰かを探しているようだった。妹が追いついてきた頃に姉のほう目当ての人物を見つけたようで顔を動かしてはいなかった。

そしてその視線の先にいたのは俺だった。

おそらく弁当コーナーへと進んでいた足を向きを変え俺のほうへと向かってきた。俺はその間ただ呆然と少女を見ていた。

「初めまして。わたくしたちと同じくらいの狼は初めて見ましたわ」

いつの間にか俺の目の前に来ていた少女はそう挨拶していた。それでも俺は挨拶を返さずにただ少女をきよんとした表情で見っていた。

「あら？あなたは狼なのでしょう？」

何も返事をしない俺に対して少し不安そうな表情になって少女は尋ねてくる。

「…違うんですか？それではわたくしは見ず知らずの人にいきなり

変なことを尋ねている変な人になってしまいますわ」

急に少女は勝手に結論をだしてどうしようという感じの顔になっていく。その顔を見ているとなんか俺が悪いことをしたような気分になってきた。

「あ。いえ、狼です」

自然と口からは言葉がつむがれたが頭はまだ動いていない。

「…ええ。そうですね。あなたが狼だとは最初からわかっていましたわ」

少女は急に息を吹き返したかのように饒舌に喋りだす。

「わたくしたちは中学2年生ですけどあなたはいくつぐらいですか？…わたくしの通っている中学では見かけたことがありませんから小学生ですわね」

少女は勝手に俺を小学生ときめつけて話を進めようとする。

「あつ、違います。中学1年です」

あわてて否定する。中学生になって小学生に間違えられるのは意外と心に傷を負う。小学生にとっては中学生はもう大人だ。世間一般から見れば十分に子供だが。

「あら。そうですね？これは失礼しましたわ。でもどちらにせよわたくしたちよりも小さいわけですわね。珍しいですわね、雰囲気から昨日今日に狼になったという感じでもありませんし。…どうして

狼なんてやってるんですの？」

俺の答えを待つまでもなくどんどん彼女は話を進めている。たとえ、俺が混乱していなくてもこの展開についていけたかは微妙なところだと思っ。

「あつ、決してあなたの家庭環境が気になったとかではなくて純粋な興味からですわ。不快な思いをさせてしまったのなら謝罪いたしますわ」

もうついていけない。せめて少し静かにしてくれればその間に頭を冷やせるのに。そんな時に助けは現れた。

「姉さん。この人、困ってます」

もう1人の少女が姉を止める。

「あら、そうですね。わたくしとしたことが自己紹介もせずに話をしてしまつては相手も困りますわね。うっかりしていましたわ」

姉の方が見当違いな結論に達した。普通に考えれば違つとわかるだろうがこの『少女』を普通で考えては駄目だということはわかってた。そう、俺はこの『少女』、いや『少女たち』を知っている。

「遅くなりましたがわたくしの名前は…」

そこまで少女が言ったときに俺の口から声が漏れた。

「…オルトロス」

俺の言葉に少女たちは驚いたようだ。だが、姉の方はすぐに誇らしげな顔になる。妹のほうは驚いた顔のままだったが。

「ええ、ええ。そうですね。ですが本名の方はご存じないでしょう？ わたくしは沢桔梗^{さわききょう}。こちら、妹の鏡^{きやう}。以後お見知りおきを」

姉に紹介された妹の鏡は姉の梗と共に俺に対して優雅にお辞儀をした。

2人の少女、『沢桔梗』と『沢桔鏡』は『ベン・トー』における原作キャラにあたる。ここが『ベン・トー』の世界だったのだから原作キャラがでてきても不思議はない。ラノベの世界というだけで浮かれていた俺には原作キャラと出会うことなど考えていなかった。いや、ラノベの世界というだけで満足していた。

だが目の前にいるのはまごうことなき原作キャラだった。しかもオルトロスの年齢から計算すると俺の年は原作の主人公である佐藤^{さとう}洋^{よう}と同じになる。

それを知った瞬間に体の中から熱くなっていくのがわかった。

オルトロス　ギリシア神話に登場する双頭の犬。その名の「オルトロス」は「速い」を意味する。あるいはオルトスとも呼ばれその「オルトス」の名の場合の意味は「真っ直ぐな」になる。速いにしても真っ直ぐなにしても原作を読むに沢桔姉妹にびったりに思える。だがこの年にして二つ名を頂戴するほどの猛者でもある。

「どれくらいの腕前か楽しみにしていますわ」

そう言って沢桔梗は去っていった。

「姉が迷惑をかけました。それでは、私も失礼します」

もう1度、俺に対してお辞儀をしてから姉を追いかけていった。

俺は2人が離れてからも興奮が冷めなかった。

しかし、初めての原作キャラとの出会いは同時に初めての二つ名との遭遇でもあった。これが意味することを興奮冷めやらぬ俺にはまだ理解できていなかった。

第八話 ゴールデンウィークの遠征（後書き）

少し遅くなりました。すいません。

ですが弁当とか考えるだけでも一苦勞。料理しない私にとって弁当のバランスとかがよくわからんです。最近はスーパーやコンビニに行くたびに弁当コーナーを買いつもらないのに覗いている。冷やかしてみたいですね。

あと、ご都合主義と言われようがそろそろ原作キャラを出したかった。ですが、失敗したと思います。原因は沢桔梗です。あれの暴走機関車娘とでもいえるようなキャラを最初にだすのは私の文章力では無理があつた気がします。

第九話 魔犬の名を持つ双子姉妹（前書き）

『彼女ら』が狼として道を歩み始めたときは小学生になったかならないかという頃であった。若い狼というのは珍しくはないがここまで幼い狼はまずいない。この年の子供がスーパリーの弁当を求めることなど有り得ないからだ。それでも『彼女ら』は狼となった。

親がスーパーのチェーン店の親会社の人間だったのが大きかった。物心がつくころにはスーパーは『彼女ら』にとって遊び場も同然だった。きつかけはなんだったろうか、思い出せないが『彼女ら』は狼たちに混ざって半額弁当を手に入れることを目指し始めた。

最初は遊びの1つであったそれも子供であった『彼女ら』にはとても楽しかった。大人たちに混じって一緒に遊ぶような感覚であったことを覚えている。けれど楽しかったのは最初だけだった。すぐにつまらなくなる。半額弁当を手に行うことができなかったからだ。この時の『彼女ら』は厳密には狼といえなかった。大人たちが競うようにして手に入れようとしているものも『彼女ら』も欲しがっていただけだった。

子供だった『彼女ら』にすればそれは勝てない遊びなどつまらないで終わる。だが、それでもこの場に姿を現していたのは大人たちが躍起になって手に入れようとしているものを『彼女ら』も手に入れたかっただけにすぎない。子供特有の負けず嫌いといっても良いだろう。

どれほどの勝てない日々が続いたかは覚えていないがある日に『彼女ら』は半額弁当を手にした。それは様々な要因が重なった偶然としかいえない。それでも『彼女ら』は喜んでるのは2人で協力した結果であったからだ。会計は2人の少ないお小遣いを出し合っ
てすませた。

そして家に帰って2人で半額弁当を食べた。この時の気持ちと味は一生、忘れないといえるほどだった。この時から『ハチノケ沢桔梗』と『

沢枯鏡さわくぼかみゆ』は『狼』といえる存在になったといえる。

それからの日々は敗北の日々が続いていく。『狼』として目覚めても体格からして『彼女ら』は不利だった。それをどうにかしようと買い物カゴを使うことを覚えていった。初めのころは上手くなるととても扱えない。むしろ素手で戦ったほうが良かったほどだ。それでも『彼女ら』は買い物カゴを振るい続ける。

いつの間にかたまに半額弁当が手に入るようになっていた。いつの間にか時々半額弁当が手に入るようになっていた。いつの間にかそれなりに半額弁当が手に入るようになっていた。

体が成長して買い物カゴも上手く扱えるようになってきた。『彼女ら』はよく半額弁当が手に入るようになっていた。

その頃から『彼女ら』は2人にして1人の狼として近辺に名をとどろかせ始めた。2人で1人ということが『彼女ら』をはるか東より出でし双頭の黒き獣の名で呼ばれ始めた。

この地域において最強の名を冠するのに最も近いといわれる『彼女ら』を人は『オルトロス』と呼んだ。

第九話 魔犬の名を持つ双子姉妹

オルトロスが俺の前から去ってほどなくするとスタッフルームの扉が開く音がした。

出てきたのは半額神と思われる妙齡の女性だった。少々肥満体系気味といった体つきをしている。簡単に言うと彼女は半額神でなかったら絶対に大猪おおじしと呼ばれる存在になっている、そう確信できる感じのおばさんだった。

それでも他の半額神と変わりなくスムーズに惣菜コーナーへと足を運びバーコードリーダーでピツピツとバーコードを読み取って半額シールを作っていく。その動きは慣れを感じさせた。彼女もまた半額神としてのキャリアは相当に長いとわかる。

今日は惣菜が結構残っていたみたいで中々惣菜コーナーからは離れない。そういう日は今までに何度か経験をしているが慣れない。タイミングをくじかれるとでもいえばいいのだろうか、気持ちの上ではもう半額弁当になっているのに実際にはまだ半額弁当になっていない。このじれったい感覚がどうしても好きになれない。そんな悶々とした感情を抑えながら半額神を待つ。

ましてや今日は原作キャラに会えて気分が一層に昂っていたから尚更だ。あせる気持ちを抑えながらも視線は半額神から離さない。

ようやく、半額神が弁当コーナーへとやってきた。やはり手馴れた感じで半額シールを作って貼っていく。こちらは惣菜と違ってそれほど3つしか残ってないのですぐに終わった。そのままスタッフルームへと戻っていく。扉を閉める前に店内に向かつて一礼をする。とスタッフルームへと消えていった。

狼たちの狩りの時間が幕を開けた。俺も半額弁当を目指して駆け出していく。

「お手並み拝見といきますわ、よ」

いつの間にか隣に来ていたオルトロスの片割れ沢桔梗さわきょうけいが手に持った買ひ物カゴで俺をなぎ払おうとしてくる。

攻撃される前に声をかけられたおかげで早めに沢桔姉の動きを確認できた。俺は十分に避けられると判断して軽くサイドステップを踏んで避けようとする。

瞬間に嫌な予感が全身をはしった。理由はわからないが直感がつげている、このままでは危険だと。考えるよりも早く体が反応を始める軽く踏むつもりだったステップに思いつきりと力を込めていた。離脱すると同時にその場所には沢桔姉が振るう買ひ物カゴが通過していった。

「…！？早い…！」

俺の予想では悠々とかわせるほどの力を込めたというのにギリギリなんとか避けられたというタイミングだった。

「あら？…随分と遠くまで離れますのね」

沢桔姉の言葉にはつとずる。言われたとおり俺は全力でステップを踏んだために弁当コーナーから離れてしまっていた。いや、横に飛んだので距離的には問題はあまりないのだがこのタイムロスは致命的と言っつていい。最初のスタートダッシュは狩りにおいてはとても重要なことといえる。時には豚と呼ばれる可能性すらあるタイミングでスタートをきって弁当へと向かうものもいるぐらいだ。

それだけにこのタイムロス痛い。弁当コーナーへと目を向ければすでに狼たちの戦いは始まっているのがわかる。

この場は買ひ物カゴを食らわなかっただけでよしとせねばと気を取り直して狩りの場へと駆け出そうとしたときに前から人が飛んで

きた。弁当の争奪戦においては人が飛んでくることなど日常茶飯事
とっていいほどによくあることだ。新米といえる俺でも人が前か
ら飛んでくるといふ経験はなんとか味わっている。

だから驚きこそはすれ怯んで体が硬直するなんてことは今はもう
ない。体が自然に飛んできた狼をかわして弁当コーナーへと走り出
す。

「さっきよりも狼が少なくなっている…?」

俺が弁当コーナーから目を話したのは飛んできた狼が視界を塞い
でいた僅かな間だけだ。1、2人ならともかく俺に飛んできた奴を
含めると5人近くがすでに狩場から消えている。これは異常なハイ
ペースとっていい。こうして俺が向かっている間にも狼たちは倒
れていつている。狼が倒れる前には黄色い何かがぶつかっていつて
いるのがわかった。

また1人の狼に黄色い何かがぶつかって狩場の外へと飛ばされて
いく。

「買い物カゴっ…!?!」

吹き飛ばすほどの大振りをした後に僅かに動きの止まったそれは
買い物カゴだった。俺にとって買い物カゴを使う狼との遭遇は初め
てだった。無論、戦ったこともなければ現状で手一杯だった俺に対
策などをたてる時間はなかった。

そして俺はこの場で買い物カゴを使う狼を知っていた。

「オルトロス…」

その名が俺の口から漏れた。

今現在において弁当コーナーに君臨しているは間違いなく俺とそ

う年も違わない1人の少女、沢桔鏡さわきつかがみであった。オルトロスの二つ名を与えられし凄腕の狼姉妹の妹。彼女らは2人で1つの二つ名を与えられこそしているが1人で見ても二つ名を与えられても何の不思議もない。

「それでも、弁当は…俺が手に入れる！」

敵は格上、地の利はなく、対策も何も無い。圧倒的に不利ともいえるこの状況だといえど退く事はありません。目の前には半額弁当がある、それこそが狼である俺にとっては重要なことだ。

数が減りつつある狩場へと一直線に向かっていく。今までは減るだけだった狼たちだったが俺が着く前に新たに加わるものがいた。沢桔梗、オルトロスの半身である彼女は俺へと攻撃を加えたことで狩場への到着が遅れていた。

沢桔梗が狩場へと加わることによりオルトロスは本来の姿を現した。先ほどまで残っていた狼たちは名うてとまではいかなくともそれなりの経験を積んでいて決して弱いとはいえない実力を持っている。だが2人が揃って真価を發揮するといえるオルトロスを相手にはすぐに蹴散らされることになるだろう。

事実、俺が弁当コーナーへと着いたときには俺とオルトロスを含め5人しか残っていなかった。俺にとってはようやく本格的な戦いが始まるというのにすでに戦いは終盤を迎えようとしている。この状況を作ったのは間違いなくオルトロスと呼ばれる双子姉妹。

恐怖を感じないなどとはとてもいえない。アロハや巨乳なども俺にとっては十分すぎる強敵だったが目の前にいるあどけなさが残る可愛いといえる双子姉妹はその2人よりも比べ物にならないほどに強く、場慣れしている。今の俺との間には圧倒的な力の差があるのがすでにわかっている。

まず勝てないと思う。だが絶対とまでは思っていない。いや、思っていない。前に一度、恐怖に負けて何も出来ずに後悔した

ことがある。大猪と呼ばれる悪魔のような存在。奴らは半額弁当をただの安い弁当、食事を作るのが面倒なときに家族にだす、その程度の認識しか持っていない。ここまでならばまだ許せる。弁当本来の役目であるからだ。だが、半額神のもとでなけば恐喝するかのように半額シールを求め、それを当たり前のように思い感謝すらもない。思い出すだけでも頭が沸騰するかのように苛立ち顔がゆがむ。何よりも許せないのは大猪との力の差に絶望し何も出来なかった自分自身だ。

今、俺の目に映っているオルトロスは誇り高き狼であることは疑いない。しかし、大猪との経験から俺は埋めようがない力の差があるうとも立ち向かうと決めた。

だから俺は半額弁当を目指してオルトロスへと挑む。

「…っん!？」

正面から買い物カゴが俺に襲い掛かってきた。正直に言えば買い物カゴと認識は出来なかった、黄色い何かが俺に向かっていているということしかわからない。それでも俺に向かってくることはわかる。それだけわかれば十分だ。

「うお!」

思わず声が漏れる。頭を下げて買い物カゴの一撃をやり過ぎたものの髪の毛をこすっていくのがわかった。

「ギリギリだったな…」

そう言いながら頭をあげると再び目の前に黄色い何かが迫っていた。

「これで終わりです」

その買い物カゴをふるっていたのは沢桔鏡だった。

「ぐわあ!!」

その一撃は俺の顔を真正面から打ち据えた。後ろに数歩分よろけたが踏ん張ってこの場にとどまる。

「随分と丈夫ですわね」

だがその俺の頑張りは無常にも上から聞こえてきたその声と共に打ち据えられた買い物カゴによって砕かれた。

「おおう!?!」

ちょっと奇声っぽい感じの音が俺の口から発せられた。頭に痛みと衝撃が訪れるが上からの攻撃だったために俺はいまだにこの場にとどまっていた。

けれどこれ以上は厳しいというのがわかる。頭に2発も買い物カゴを食らったダメージは大きいし、視界も定まらない。焦点が合わないうえにもやもやと霞が買っただけに見える。

「…ん?」

そんな中でも俺の目は弁当コーナーに残っている弁当はくつきりと写した。頭は攻撃のせいで動きが鈍っているがそれでも弁当を確認した俺は無意識にそこに向かって手を伸ばしていた。

「本当に」

「丈夫ですわね」

不意に双子姉妹の声が聞こえた。それと同時に腹へと強烈な一撃……いや、二撃が加えられた。まさに双子ならではのこれ以上ないといえるほどのドンピシャのタイミングで同時に買い物カゴが俺の腹へとぶつかっていた。

「……これが、オルトロス……か……」

そつつぶやきながら俺は吹き飛ばされた。

「んっ、……っう」

腹を手で押さえながら立ち上がる。オルトロスの攻撃を食らってからそう時間は経っていないと顔と腹の痛みが教えてくれた。じわじわとひかない痛みではなく突き刺すような痛みが感じられる。

「……って。弁当はどうなった？」

弁当コーナーを見ると弁当をてにした沢枯姉妹がいた。その表情は弁当を手にした歓喜ではなく信じられないものを見ているかのようだった。

「……姉さん手加減しましたか？」

「していませんわ。そういう鏡こそ相手が小さいからと攻撃を躊躇ったんです？」

「いえ、思いつきやりました」

沢桔姉妹が何かを話しているが上手く聞き取れない。それにそれよりも半額弁当の方が大事だ。2人が1つずつの半額弁当を手に行っているがこの時間まで残った弁当は3つ。

「弁当は…？」

二人の影になっている弁当コーナーを目を凝らして見る。

「まだある…！」

そこには確かに弁当が残っていた。弁当が残っている限りは狩りの時間は終わらない。2度にわたってアロハに教えられたそのことは高城真たかぎしんには深く刻み込まれていた。

折れた心を立ち直らせた言葉というのはその人にとって大きな意味を持つ。ゆえに高城真にとっては弁当を取られた事実よりもまだ弁当が残っているかの方が重要なことだった。

残っている半額弁当を目指して一歩前へ歩き出す。

「おろ？」

前に踏み出そうとしたが体は右斜め前によるけるように進んだ。

「真っ直ぐに歩けねえ…っつう」

転びはしなかったが体はズキズキと痛みが増していく。食らったダメージが大きかったのだろうか思ったとおりに体は動かないがそれでも動けないよりはましだと思えばよろめきながらも少しずつ少しずつと半額弁当へと近づいていった。

「すさまじいですわね」

「はい、姉さん」

そんな俺の様子を沢桔姉妹は手にした半額弁当をレジに通しに行かず、ただただ眺めていた。

「ぐおっ！」

急につんのめるように俺は前へと倒れる。先ほど買い物カゴを食らった顔から倒れたせいかもしれないが、腕に力を入れて立ち上がろうとする。

「つと？」

が、力が上手く入らずに立ち上がることに失敗する。ここまでに累積された体への負担は重い。午後になってからほぼ自転車を漕いでいたしこの場で受けたダメージも相当なものだ。まして攻撃の主はオルトロスの二つ名をいただく沢桔姉妹、並みの狼とは攻撃力が違う。体が休め、休めとさっきからうるさいほどに訴えていた。

しかし、その体の訴えを聞くわけにはいかない。弁当が残っていないならまだしも、ご丁寧にもこの場の全ての狼をぶっ飛ばしてくれたオルトロスのおかげで弁当が残っているのだ。俺の体はまだ動いて弁当がまだ残っている、この状況で休むなんてことはできない。

「どりゃあー！」

かけ声と共に起き上がろうとするが、ぼすつと腕は体を支えきれずに失敗する。

「いてて…」

勢いをつけたためか反動であごを床に思いつきりぶつけた。さすがに休まんと動けんのか？なんて考えが頭をよぎり始めたときに視界の端にうめきながらも意識を取り戻して起き上がるうとしている狼の姿が見えた。

「…ここまで、来て。負けられつかよ」

もう1度腕に力を込めて立ち上がるうとする。が、やはり崩れ落ちそうになった。

「こな、くっそ」

更に腕へと力を込めて無理やり上半身をあげて膝立ち状態になる。

「…はあはあ」

肩で息をし始める。さつきよりもましな体勢だがまだ立っていないし、あの狼ももう少して起き上がりそうだ。それに他の狼たちも意識を取り戻したものが何人かいるようでピクピクと動き始めた。

「はあはあ。…もう一息だ。頑張れ、俺」

自分で自分を励ましながら手を床についてつま先へと力を入れる。他の狼たちも弁当を指そうと再起動をしているが位置、体勢の両方で俺は優位を得ている。運ではなくて自分自身での力で掴み取った優位といえる。ボロボロの体で歩いてここまで来て倒れても立ち上がるうと何度も挑戦した結果がここに現れていた。

「ふんっ！」

力を込めて立ち上がる。多少はよろめきこそしたがきちんと自らの足で立ち上がり一歩、また一歩と弁当コーナーへと近づいていった。

そして遂に手を伸ばせば半額弁当が手に入る位置へまでたどり着いた。他の狼たちはまだそこまではきていない。

「『揚げだし豆腐弁当』か…」

ここに来てようやく俺は残っている弁当を確認した。くしくも残っていた弁当は狩りが始まったときに俺が狙っていた獲物だった。

そのことに口の端を緩めながら俺は『揚げだし豆腐弁当』を手にとった。

よろめいているが足取りは軽いと言っていい。2度目の勝利、それはオルトロスが狼全員を一時的に戦闘不能にするという格の違いをみせつけた結果であったが俺にとっては勝利は勝利に違いない。しかも初めての場所で弁当を手に入れたということは俺に自信をつけさせた。調子に乗っては痛い目を見ると思うのだがそれでも気分はいい。

気分のいい理由のもう1つとしてはオルトロスとの出会いがあった。コテンパンと喋っていい程にやられてしまったが狼の世界ではそれは弱者の常とも言えることで恨み言なんていうつもりは毛頭ない。どちらかというと御伽噺の登場人物とあった興奮がテンション

をあげる。

だからついついと会計を終えて店を出たときに帰ろうとする沢桔姉妹を見たときに声をかけてしまった。

「ちょっと」

その声に沢桔姉妹は振り向いた。

「なんですの？」

沢桔梗がそう俺に尋ねる。当然だと思っ話しかけられたから何か用があるのだろうと思っのは。だが、俺にとって話しかけたのは街中で有名人を見かけたので声をかけてしまったという状況に近い。
ハイフライスラベリンゲタイム
さっきは半値印証時刻の前だったから狼としてそのことに集中できたが今は違う。

「……………」

言葉を続けない俺に対してしまいは訝しげな顔で俺を見続ける。それは俺に混乱をもたらしした。話しかけたんだから何かを話さないといけないという気持ちと有名人にじっと見られているという事実が俺の混乱をどんどんと深めていく。そして何か喋らなければと思っっていた俺の口が言葉を発する。

「サ、サインください!!」

「……………は？」

言っってから失敗したなと思っがすでに遅い。沢桔姉妹はわけがわからないという感じでお互いの顔を見合っっているし、俺もどうしたら言いかわからない。そんな中でこの状況を打破したのは沢桔梗で

あつた。

「ええ、ええ。わかりますわ。わたくしたちの強さを目の辺りにして憧れを抱いたんでしょう？さあ、何にサインを書けばよろしいかしら？」

全ては繋がったという自信満々な表情をして胸を張りながら俺に言う。隣で妹の鏡がそれは違うのでは？という表情をしている気がしなくもないが問題はない。

正直助かつたと思う。これで会話が繋がると思った矢先に俺は非情な事実構築。

「…ごめんなさい。書いてもらえるもの持ってません」

「……………」

再び場は沈黙が支配を始める。せつかく場の流れをどうにかするチャンスを失った。ついでにサインを手にするチャンスも失った。心情的には後者の方がいたいなと内心思う。

「あ、いや、えっと。そ、そうだ！一緒にご飯をどうかと思って」

言葉に詰まりながらも場の雰囲気はどうにかしようと思し紛れにご飯へと誘う。

「…鏡、殿方に夕餉に誘われましたわ。どういたしましたしょう？」

俺の苦し紛れの言い分に対して沢桔梗は考えるような表情をした後に相棒でもある妹へと問いかけた。

「構いません、姉さん」

「それではあちらに公園があるのでそこでどうでしょう?」

沢桔梗はそう俺に聞いてきた。これは願ってもない展開といえる。心境的にいうならば声をかけた有名人とそのままご飯を食べると同じだ。体の内から興奮がみなぎってくる。心の中で混乱した俺グツグツと寝た。

それにこの提案にはもう一つ嬉しいことがあった。俺は弁当こそ手にしたがこのままでは家に帰るまでの間はお預け状態になる。これは正直辛い。ただでさえ運動をしていたのにここで激しい戦いを繰り広げたので腹の虫はさつきから催促を繰り返してきていた。だがここで弁当を温めるといふのはリスクが高過ぎた。見知らぬ土地なので当然といえば当然だが弁当を食べられる場所などわからないし何よりもこんな時間に一人で弁当を食べていたら見た目もあいまって目立ちすぎる。おせっかいなおばさんが通りかかって警察に電話なんて展開は十分に考えられた。

「はい、お願いします」

沢桔姉妹の言葉をありがたく受け取る。

「すみませんが、ちょっと待っててもらえますか?お弁当を温めてきます」

そう言って俺はスーパーの中へと戻った。

第九話 魔犬の名を持つ双子姉妹（後書き）

有名人にあつたらついついと敬語になってしまふ。あるはずですが私は有名人にあつたことはありませんが。田舎住まいですからね。どちらにしてもオルトロスは年上にあたるので敬語っぽくなくても仕方ないと思います。だからもう少し親しくなれば口調もくだける予定です。

第十話 続・魔犬の名を持つ双子姉妹

道中は何かを話すわけでもなくただ黙々と沢桔姉妹のあとをついでいく。沈黙は辛いが話しかけるいい話題を思いつかないのでしょうがない。そもそも一緒に晩御飯を食べるにしてももともと話したいことがあったわけでなく勢いという部分が大きかった。すでに太陽は沈んでおり、暗がりの中で双子姉妹をずっと追いかけている俺は他の人から見たらストーカーに間違えられても仕方のない状況なのが静寂に包まれているこの空間を辛いものにする。

「ここですわ」

近い、といった通りに5分も歩かずにその公園には着いた。

「あちらのほうに東屋がありますわ」

そう言つとそのまま沢桔姉妹は公園の中を進んでいく。俺も後を追いつながら公園を眺め見るとこの公園はやや広いといった感じだ。鉄棒、ブランコ、すべり台、砂場と一通りの遊具は揃っている。特筆すべき点としては公園の規模の割りに設置されている街頭が多いということか。

「着きましたよ」

案内された先にあった東屋は作られてしばらく経っているようで柱には傷跡が多く、子供たちによっていたずら書きもされていた。だがゴミは近くにゴミ箱が設置されているためか見当たらずご飯を食べるのには悪い環境ではない。

沢桔姉妹が隣り合って座るのを見て向かい合わせに入る。そして

スーパーの袋から戦利品である弁当を取り出してテーブルへと置いた。沢桔姉妹のほうも弁当を取り出してテーブルへと並べている。その後は会話を始めるよりも先に申し合わせたかのように手を合わせた。

「いただきます」

三人で声をそろえて食事の前の挨拶をする。パキンと割り箸をわする音が静かな公園に響く。

早速メインである揚げだし豆腐へと割り箸をいれると豆腐の上のついていた餡がこぼれていった。暖められた餡は食欲を誘う香りをただよわせる。俺は誘われるがままに豆腐を割り箸で挟んで口へとはこんでいった。

口の中で豆腐をかみしめる。あっさりとした豆腐の味わいに濃厚な餡のバランスが丁度いい。少し感じる酸味が味に深みをもたせている、レモンでも軽く絞ってあるのだろう。

「うん、美味しいな」

一口食べた後に沢桔姉妹のほうを見てみると2ずつ入っているコロッケを全て半分ずつにしてお互いに弁当へと渡していた。これなら種類の違うコロッケを食べられるし、2人の仲のいいこともわかる。まあ、原作を知っている身としては沢桔姉妹の仲違いなどはないと思っているが。

2人はコロッケを分けた後に箸をのばして食べ始めた。コロッケを食べている姿は年相応のもので先ほどの狼として見せた迫力はない。

勝利の証であり、狼としての目的である半額弁当を食べて頬が緩まない狼などいないと思う。現に沢桔姉妹も頬をほころばせてコロッケを食べている。整った顔立ちをしている分だけそのあどけない

笑顔は人を引き込ませる。その笑顔を見ているとこちらも嬉しい気持ちにさせられた。

「それでわたくしたちに何の用ですか？」

コロッケを一口食べるとそう俺に聞いてきた。俺のほうから誘ったのだから何かしらの用があると思うのは当然のことだろう。

しかし、正直なところ用などはない。

「特に用って訳じゃないんだけど。年が近い狼って初めて会ったからついついつて感じかな？」

少しは物語の登場人物に会えた興奮も冷めてきたのか最初の頃よりもくだけた感じで話しかけられた。

「確かに私たちがぐらいの狼は珍しいですね」

「そうですね。特別な事情がない限りこの年で狼なんてしていませんしね」

「それに狼になってもすぐに止めてしまいます。それほど簡単な世界でもありません」

「ええ、実際にわたくしたちよりも小さい狼を相手にしたのは初めてですわ」

2人の言い分からしてもこの振りははずれではなかったようだ。特に怪しむこともなく普通に話しにのってくる。

「でも、そろそろ出てきます。同い年の狼が」

この場合の同い年は俺ではなく沢桔姉妹にとってのだ。

「あら？そんなんですの？」

妹の言葉は姉にとっても意外だったようで聞き返している。

「はい、姉さん。中学2年生にもなると塾帰りに小腹が空いてスーパーへ寄ってそれから狼に、というパターンが増えてきます。実際に半値印証時刻ではありませんが夜にスーパーで同級生を何回か見えています」

「中2になって塾に遅い時間までいれるようになったってことですか？」

「はい。この地域の塾の時間と周辺のスーパーの半値印証時刻を考えると、ハーフプライスラベリングタイムすれば中学2年生が早い狼デビューです」

「俺のところはどれくらいから狼になる奴が多いんだろっなあ？」

沢桔鏡の答えにふとした疑問が湧く。

「やはり……。すみません、名前を伺っていませんでした」

何か言いかけたところで言葉が止まったと思ったら出てきた言葉に俺は固まる。確かに俺は名前を名乗っていない。最初に出会ったときに沢桔梗の方が半ば一方的に名乗ってきたことだが俺のほうは名乗っていないかった。原作のおかげで俺のほうは沢桔姉妹を知っていたことも大きい。自分が知っている人物相手にはついつい自己紹介を忘れることもある。向こうが知っている、覚えていると勝手に思い込んでしまう。

だが、結果として名乗り忘れていたことには違いない。元とはいえ社会人として失格だ。

そんなことを考えていたらこれから社会に出て行く自信が少し失われていった。

「あの…。言いたくなかったら別に大丈夫です」

声の主である沢桔鏡は答えない俺に聞いてはいけなかったのかと思っただのか少し申し訳なさそうな顔をして言ってきた。

「…良い娘や」

「はい？」

思わずもれたつぶやきに沢桔鏡は首をかしげる。そのしぐさが可愛いと思ったが気を取り直す。

「ああ、なんでもない。なんでもない」

手を振りながらそう断ってから自己紹介を始める。

「まずは自己紹介が遅れてごめん。俺は高城真^{たかぎしん}。中学1年で狼としてはまだ半月程度のひよっこです。よろしく」

「では、こちらも。姉さんに紹介はされましたが改めて。沢桔鏡^{みづきかみ}。中学2年生です。よろしくお願いします」

その後で2人そろって軽いお辞儀をする。軽く頭をさげただけなのですぐに頭をあげるとそこには少しだが微笑んだ顔の沢桔鏡の顔があった。おそらく、俺も微笑んでいるはずだ。新しい狼との出会いに対して。

「…そういえば姉さんは？」

言われてみれば先ほどから会話に加わってこない。

「楽しみですわね」

と、思ったらちようど声が聞こえてきたので沢桔梗のほうを見た。そこには新しいおもちゃを与えられたかのような無邪気な笑顔の彼女がいた。

「…姉さん？何をそんなに嬉しそうにしているんです？」

「あら？鏡は嬉しくないんですの？」

沢桔梗はさも喜ぶのが当たり前のような口調で言う。

「何がですか？」

沢桔鏡にもわからないようで姉に対して聞き返している。

「わたくしたちの同級生が狼になるんですよ。今までは学校でしか知らなかった同級生に狼としての世界を身を持って教えてさしあげる。わたくしたちの前にひれ伏して倒れている同級生の方々。考えるだけで興奮してその日が待ち遠しいですわ」

「興奮しないでください、姉さん」

若干あきれた様な目で姉を見る妹。

「あら、鏡には理解できませんか？でも……ほら、その貴方ならわかるでしょう？」

沢桔梗は矛先を俺に変えてくる。同時に名乗り忘れていたことを思い出して少し沈んだ。

「わかりません！それと俺の名前は高城真です！よろしく願います！！！」

暗くなりそうな気分を吹き飛ばすために少しやけになって叫ぶように名乗る。

「わたくしは：先ほど名乗りましたわね。よろしくお願いしますわ」

強い口調には気にする風でもなく、普通に挨拶を返される。今になって考えると大人気なかった。下手をすれば喧嘩を売っているように取られたかも知れない。

「話を戻しますが、高城さんはやはりこの地域の人ではないんですか？」

「わたくしも気になりますわ。わたくしたちの中学にはいないということは少し離れたところにすんでいるということですよね。：引越してきた風には見えませんし」

確かに幼いといっていい狼は少ないから同じ縄張りにいけば自然と噂は入ってくるだろう。それに俺のところと言ったからことからこちら辺の狼ではないとあたりをつけたというところか。

「そうだよ。ゴールデンウィークだから自転車でちよつと遠出したついでに地元以外のスーパーに寄ってみたんだ」

多少、事実を隠して伝える。正直に話すのは少し恥ずかしかったからだ。

「そうですか。それでどうでしたか？」

「二つ名もちと会ったのは初めてだったからショックが大きかったよ」

「後悔なさいまして？」

「してないよ。むしろ、来て良かった」

これは本音だ。二つ名もちに会えたということよりも沢桔姉妹に会えたことにたいしてだが。

「それは良かったですわ。わたくしたちとしても立派なおもてなしができた、ということですよ」

オルトロスには派手に買い物カゴでやられたが確かに狼にとってそれはもてなしに違いない。そう思うと苦笑がもれる。

「どうかしましたか？」

そんな俺に対して沢桔鏡が尋ねてきた。

「いや、この世界にどっぷりとつかってるなと思って」

1ヶ月前の俺ならばこんなことをされたら理不尽だと嘆いていただろう。だが狼となった今では素直にもてなしと思えるし、しつかりとよそ者である俺を相手にしてくれたことが堪らなく嬉しい。

「……………」

俺の発言にたいして沢桔鏡は驚いた風な顔をした。

「えっと、俺なんか変なこと言った？」

「いえ、そうではありません。が、先ほど2週間前に狼になったばかりだといっていたので驚いています。これだけはやく順応している人は珍しいです」

それは原作知識があるからです、と声にだして言いたくなるが堪える。

「よっぽど性にあってたんだよ」

茶化した感じでそう返す。

「楽しみですわね。そういった方は成長が早い。わたくしたちを楽しませてくださる日が来るのを待っていますわ」

そう言っただけに對して微笑んだ沢桔梗の表情に大人になってないあどけなさと狼としての獲物を見つけたような喜びが混在していた。その笑顔には蠱惑こわくてき的な魅力が感じられた。

「早く食べてしまいましょう。せっかくのお弁当が冷めてしまいます」

沢桔鏡の言葉を受けて我に返る。一瞬とはいえ間違はなくその表情に俺は見惚れていた。

そして言われて思い出す。俺も沢桔姉妹も弁当をまだ一口しか食べていなかったことを。あわてて割り箸を持ち直して弁当を食べ始めた。

「」「」「」「」「」「」

食べ終わったのは俺が一番はやかったがそれでも沢桔姉妹が食べ終えるのを待ってから揃って挨拶をした。一緒に食事をした以上はこれは大切なことだとおもう。

「ではわたくしたちはそろそろお暇させていただきますわ。楽しい夕餉の時間をありがとございますわ」

「はい、私も楽しかったです」

「こっちこそ楽しかったよ。それに面白い話を色々聞けたしね」

食事中のマナーとしてはあまりよろしくないのだろうが結構話し込んでしまった。面白い話もたくさん聞けたが問題は時間が経ちすぎたということだろうか。

「じゃあ、また。次は沢桔さんたちよりも早く弁当を手に入れて見せるよ」

はっきり言えば見栄にしかない台詞だったがそれでも俺は言った。次に会うときまでにもっと強くなってやるよ、という意味を込めて。

「言ってくれますわね。わたくしたちも簡単には取らせませんわよ。…それともう1つ」

俺の啖呵に対して気分を悪くした感じもなくむしろ機嫌がよくなった風だったが不意に表情を変えて言ってきた。

「わたくしたちは2人とも沢桔さんだからと言って一まとめにされるのはあまり気分のいいものではありませんわ。名前で呼んでくださって結構ですわ。…鏡も構いませんわよね？」

「はい、姉さん」

確かにそうだなと思った。いくら双子で仲が良いといっても何でも一緒くたにはされたくないと思うは普通のことだ。

「わかりました。それじゃあ改めて、よろしくお願いします」きょう『さん」

そう顔をほころばせながら言った。これから2人とは長い付き合いになっていくと思う。少なくとも現時点は俺の知っている限りでは最強の狼だ。狼として生きていくうえで超えたいと思う存在であるからには時間を見繕ってはこちらに来て挑んでみたい。残念ながら超える日がくるのは当分先のことになるのは明白だが。

「ええ」
「はい」

2人が揃って返事をする。この時に俺は気づいた名前も発音が同じだと。

「」「」
「」「」

沢桔姉妹も気づいたようで場に静寂が訪れた。

「…学校とかではどう呼び分けられています？」
「そうですね。呼び捨てだったりさんづけだったりちゃんづけだったりしますわ」
「さすがに年上に対して呼び捨てやちゃんづけはちょっと…」

あまり参考にならなかった。ではどういう風に呼び分けようかと考えようとしたが意外とすぐに答えはでた。さんづけと先輩でいい

じゃないか。問題はどちらにどちらの敬称をつけるかだ。先輩の方がより敬っている感じがするしお姉さんである梗さんのことを先輩にしようと思う。

「それじゃ……」

「姉さん学校でも姉さんとか言われたりしてます」

成る程と思う、鏡さんの言っていることは梗さんのことを姉さんと呼ぶのが沢枯姉妹を呼び分けるあだ名のようなものになっているのだろうと納得する。

「梗…姉さん？」

思わず口から言葉が漏れてしまったがこれはないだろうとすぐにおもう、やはり先輩とさんで分けるのが一番簡単だし面倒も少ない。

「…姉さん？」

俺が口を開くよりも先に鏡さんがつぶやいた。何事かと梗さんのうほつを見ると直立不動のままに動かずにいる梗さんと目が合った。いや、正確には俺の目が向いたがただしい表現といえる、俺の目が向く前から梗さんは俺のほうをじっとみていたのだから。

「……………ですわね。悪くないですわ。むしろ、望むところですよ」

梗さんは何かをつぶやき続けているのがわかる。それは俺にとって決して望ましいことではないことではないのを背中にはしる悪寒が教えてくれていた。

「梗…先輩？」

嫌な予感を払拭するために先輩付けで梗さんと呼んでみる。

「ちがいますわー!!」

いきなり俺に対して大きな声を張り上げてくる梗さんの目には炎が灯っているのがみてとれた。

「梗姉さん、ですわ」

「えっ…？いや、やつぱし先輩のほうが…」

「年下の殿方に姉さんと言われるのは悪くありませんわ。なんと申しましようか、梗姉さんと言われた時から心の中から萌えてくるような感じがありますわ。今までに味わったことのない快感とでも言いましようか？素晴らしいですわ」

よくわからないことを言いながら独白のように梗さんは語り続けている。

「諦めてください」

いつの間にか隣にきていた鏡さんが俺に向かって言うてくるが、そう簡単に納得するわけにはいかない。そう今こそ、高城真の大勝負のときだと直感が告げている、これは負けられない戦いだ。頬を手で叩いて気合を入れると梗さんの元へ抗議すべく向かっていく。

「ああなつた姉さんを止めるのは無理です」

鏡さんの声でそんな言葉が聞こえたが空耳だとおもつことにして沢桔梗ラスボスに俺は立ち向かっていった。

「…梗姉さん、鏡さん、また今度。さようなら」

「ええ、また遊んでさしあげましてよ」

「すみません、また姉さんが迷惑をかけます」

馬の耳に念仏、昔の人が作ったことわざと言うのは素晴らしいものだとおもつが俺にとっては近いうちに馬の部分が梗姉さんになるかもしれないと去っていく沢桔姉妹を見ておもった。

「さて、俺も帰るか」

東屋をでてスーパーへと向かう。考えてみればスーパーに置きっぱなしだったと。だが歩き出した途端に体が悲鳴をあげた。

「ついてえ」

おそらくオルトロスから受けたダメージが一気にぶり返してきたのだろう。

「こんな状態で家に帰るのかよ…」

思わずため息が漏れる。その時にふと視線の片隅にバス停が見えた。丁度、バスも向かってくるのが見えるしその電光掲示板の行き先は俺の家の近くを通る路線であることを表していた。それを見たときには俺の足は迷うことなくバス停へと向かっていた。

翌日。俺は昨日のスーパーへとまた来ていた。自転車を取りに行くついでにもう1度オルトロスへと挑むためだ。昨日の食事中に聞いた話だと2人はゴールデンウィーク中はこのスーパーにくるつもりらしい。ならばリベンジをとおもうのは男の子だから仕方ない。そんなことを考えていると入り口からプレッシャーが感じられる、この感覚は間違いなくオルトロスだ。案の定、オルトロスこと沢桔姉妹が入ってくる。入ってきた2人を睨みつけるといいほどに強い視線をぶつける。

最初に気づいたのは梗姉さんだったがすぐに鏡さんも気づく。2人は少し驚いたかのような表情をしているのは、まさか昨日の今日でもう来るとは思っていなかったからだろう。しかし、驚きはすぐにひそめて姉妹は揃って楽しそうな表情を俺に向けてきた。

「昨日の俺とは違うってことを思い知らせてあげるよ」

「ええ、それは弁当を前に教えてもらいますわ」

こうして俺はゴールデンウィーク中は弁当を得られずにボロボロになって家に帰る日々が続いた。

第十話 続・魔犬の名を持つ双子姉妹（後書き）

疲れてるからかな？こんなはずではなかった。

プロットも対して練らずに投稿するのは無謀だったと実感しましたよ。

次はもっと早くに投稿できるように頑張ります。

第十一話 異文化研究部

ジリリリリリ。ジリリリリリ。ジリリリリリ。

けたたましく鳴る目覚まし時計によって眠りのふちから呼び戻される。覚醒しきっていない意識の中でも手は音源の元へと伸ばされていった。

「うう…」

ゴールデンウィークと呼ばれる休日も昨日までのことで今日からは今までどおりに中学校へと通う日常へと戻らなければならぬ。元来、高城真たかぎしんは朝に弱くはなく寝起きはいいほうといえるが今日は違った。大型連休中に沢桔姉妹に出会ってからは毎日毎日と姉妹のもとへと出向いていっていたので疲れとダメージが朝になっても残っている。

「…さすがに連休の最後くらい家で大人しくしておくべきだったよなあ」

誰に聞かせるでもなくつぶやく。それでも連休の間はたるんでいるとおもいながらも昼近くまで布団にもぐりこんでいたおかげが午後には元気に動き回れるようになっていた。まあ、その元氣も半値ハーフブラインストラベリグタイム印証時刻を迎えることでオルトロスのけちよんけちよんにされてなくなるのだが。

「まあ、それに見合うだけの収穫はあったかな？ふあ…ねむう」

大きなあくびを1つしながらももぞもぞと動き出して布団から出て行く。『オルトロス』との出会いは俺に狼の世界の広さを教えて

くれる存在となっていた。二つ名持ちとの出会いは初めてのことであったが実力差を痛感させられた。であった日に半額弁当を手に入れたことが今では奇跡のように思える。弁当が3つ残っていたということが一番の要因であることが少し悲しくさせる。

それに原作キャラとの遭遇したことでテンションもあがったことは否めない。今までは物語の中の世界というだけだったが、これからは物語の中の登場人物になっていける可能性もある。厨二病とか子供っぽいとか言われようが嬉しいものは嬉しいとしか思えない。

「いずれは、俺つええーとかやれるのかな？フッフ」

原作キャラたち相手に大立ち回りをしている未来の自分を思い浮かべてうすら笑う。その時にわき腹から強烈な痛みが襲い掛かってきた。

「っ痛う。…昨日は無茶しすぎたかな」

連休の最後くらいは弁当を、と思い無謀としかいえないような動きで弁当を狙ったのだが当たり前のように隙だらけなところを梗姉さんの買い物カゴを食らった。このタイミングで痛みがぶり返すのは梗姉さんに『寝言は寝ているときに言うてくださいまし』とか言われている気分になる。

「精進あるのみかなあ…。はあ」

腕をあげるしかないとわかっていても現在の実力差を考えるとため息しか出ない。体の疲れと痛みだけではなく気分までも重くなっていくのがわかる。このままもう1日、休んでしまいたいという考えが心の中をかすめ始めた。

「…さつさと行くか」

誘惑に負ける前にと朝の支度をぱっぱと済ませて中学校へと向かった。

家に居ると布団へともぐりこみ直してしまいそうだったからと家をでたのはいつもよりも早い時間だったのだが重い体のためか歩みはのろく、学校へと着いたのはいつもとさして変わらない時間だった。

「おはよう」

ガラツと教室の扉を開けていつもよりもやや小さい声で挨拶をしながら入っていく。教室の中のところどころから挨拶が返ってきた。ざっと見渡した感じいつもよりも人が多く騒がしい。もれ聞こえてくる話はゴールデンウィークにどこに行ったただの話ばかりだった。

（加われにきい。）

特に何処かに遊びに行ったりはしなかったので話の種がない。強いて言えば遠くのスーパーには毎日のように行っていたのだがそんな話を聞いて面白がる中1などは稀だろう。

「おっはよー！」

うるさいといってもいいほどの声と共に背中を後ろから叩かれた。

「おはよう、政志^{まひこ}。…元気だね」

振り返らなくても声でわかるし、当たり前のように俺の背中を叩いてくるのは政志しかいない。

「おおよー！いいゴールデンウィークだったぜ！」

満面の笑顔でそう言ってくる。この瞬間に俺は悟った。ああ、政志はゴールデンウィークにあったことを話したくて堪らないんだなと。

「なんたってよ……。それがよ……。……でさあ」

始まった政志の自慢話を俺は教室の天井のシミを数えながら聞いて、始業の鐘が鳴るのを待っていた。朝から鬱な気分になっていくのは不快としか言いようがなかった。

キーンコーン、カーンコーン。

「ん~~~~」

終業の鐘が鳴り響く中で俺はイスにもたれかかりながら俺は大きく伸びをする。体が硬い。

「帰るか」

今から家に帰れば半値印証時刻まで休める。このまま体調でスパーに行くのはちよつと不安だ。そう考えて席を立って教室の扉を出て行く。

「んっ?」

出ようとしたときに腕のすそを引っ張られて、何事かと後ろを向くとそこには斯波ハシさんがいた。

「高城くん。部室の場所つてわかってるの?」

「部室?」

斯波さんに言われたことの意味がいまいち理解できない。

「忘れたの?異文化研究部に入ったでしょ」

「...ああ」

ようやくと思い出す。入部してから部活動は行われていなかったし、入部届けを書いてから初めて半額弁当を手に入れたり、沢桔姉妹に出会ったりと衝撃的といえるほどの大きな出来事が連続して起こったためにすっかりと忘れていた。

「えーっと。海野君はと」

斯波さんは俺を捕まえた後にきよろきよろと教室内を見渡して政志を捜していた。そういえば一緒に入部届けを書いていたなと思い俺も政志を捜してみるが教室内にはいないようだった。

「もう帰っちゃったのかな…?」

少し寂しげな表情をしながら斯波さんがつぶやいた。

「そういえばなんか用があるとか言ってたような…」

聞き流していた朝の話の中で政志がそんなことを言っていた様な気がする。

「ほんと?」

首をかしげて俺に尋ねてくる斯波さんを見てると詳しく思い出さねばという気分になされた。朝の満面の笑顔を浮かべて嬉々としてどんな素晴らしいゴールデンウィークだったかを語る我が親友の言葉を思い出そうと頑張る。因みに親友の満面の笑顔からはすでに憎らしさにか感じなかった。

「えっと、確か。…!そうそう。なんでもゴールデンウィーク中に家族旅行に行ってたおかげで買ったばかりのゲームが全く進められなかったからやらなくちゃいけないとかいって…」

不意に背筋に悪寒がはしった。

「それ、…ほんとのこと?」

俺の目に映る斯波さんの表情は年相応のかわいらしいもので、きつと同級生の男子とかがみたらドキドキとするものだったろう。だが、俺はその目が決して笑っていないのがわかったし、直感が逃げると訴えている。

「は…はい、そうです」

思わず敬語で答えてしまう。

「そう。…まあ、いいか。……………あたし1人じゃないだけ」

最後のほうはぼそぼそと小声で言っていたが俺の耳はその声を確かに拾った。

「じゃ、行こっか。高城君」

そう言っただけは無邪気な笑みを浮かべた。

「なんだここは…?」

部屋の扉を開けたがそこから先に一歩が踏み出せない。扉を開けて真っ先に目に飛び込んできたのは2メートル程はあるだろう人の形を模した彫刻だった。木で作られたその彫刻は顔の部分だけは鳥で錫杖のようなものを手に持っている。その隣にはモアイ像らしきものの小型のフィギアが並んでいる、それもロシアの人形のマトリョーシカのように横には同じモアイ像が段々と小さくなって置かれ

ている。丁度、扉のほうへと向きがあわされているのでこちらを見られている。

「早く、入ろう?」

後ろから聞こえた斯波さんの声は急かすよう感じがする。だが俺はこの部屋には入りたくない。不気味な空間がそこにはあった。

「…ここが部屋?」

答えはわかっているがそれでも聞かすにはいらなかった。

「そうだよ。だから、入ろう」

先ほどよりも力のこもった声で斯波さんは言ってくる。もう1度部屋の中を見てみると今度は地蔵を見つけた。ただこの地蔵は普通の地蔵とは違って額に第三の目がある。しかも額に目にだけ黒で開いていた。

「…なぜに。というかあれは地蔵?」

「ああ、あれね。ジャッキーって言っただよ」

口から出た疑問に斯波さんが答えてくれたが、ジャッキーって名前まであることに衝撃を隠せない。斯波さんの顔を見ると苦笑いしているのがわかる。彼女にも理解できない世界だということがその表情が雄弁に物語っていた。そもそもジャッキーって何?

「因みにあの鳥の頭をした木像はポップー様で、隣に並んでるモアイ像は全部女の子なんだって」

斯波さんから非常にどうでもいい情報を教えてもらうが理解が追いつかない。

「何する部活？」

「様々な文化を研究する部活だよ」

まだ怪しげなお札や壁とか床に魔方陣がかかれていないだけマシだとは思うがそれでもこの部屋に入るにはいささかの勇気が必要でした。

「同級生がいなくて寂しかったんだ」

確かにこんな怪しげな部活に入ろうとする人は少ないだろう。

「斯波さんはなんで異文化研究部に入ったの？」

しかしならば斯波さんはこの部に入部したのか、という疑問が湧いてくる。

「ちょっとね、先生に用があつて部室まで来たらいつの間にか入部してたの」

「は？」

どこか遠い目で俺を見ながら斯波さんはそう言ってきたのを見て俺は何も言えなくなった。

いつまでも扉の前で立ち往生をしているわけにもいかず、思い切つて部室の中へと入っていく。中に入ると更に色々とよくわからないものが散乱としていた。右を向けば様々な仮面が綺麗に飾られている棚があるし、左を向けば剣やら槍やら盾などの物騒なものがまゝとめてあつた。確かに文化といえば文化なのだろうが俺が想像して

いたものとはかなり違う。

「駄目だよ。部屋に入るときはちゃんと挨拶しないと。お邪魔します」

「…お邪魔します」

慣れた様子で部屋に入ってきた斯波さんはさっさと歩いてテーブルに着く。ただそのテーブルの上にも全く知らない国旗っぽいペナントやらが置いてあった。

「もうすぐ先生とか先輩も来ると思うから」

「…うん」

俺もイスに座るが落ち着かない。この部屋には目がついている彫刻品などが多数あるから常に見られているような気分させられる。

「慣れれば平気だよ」

その台詞をいう斯波さんはどこか悟りきつたような表情をしていた。その時にガラツという音がして扉が開けられた。

「こんにちは。今日は先生は来ないそうです」

入ってきたのは校章の色から三年生とわかる女の先輩だった。

「えっ。今日は先生来ないんですか？」

「はい。何でもゴールデンウィーク中に買った物の整頓が終わっていないから、しなくてはいけないそうです」

丁寧な口調で話すその女の先輩は黒髪を腰まで伸ばしていて細い

体つきをしている、大和撫子といった言葉がぴったりする美人さんだった。

「楽しみですわね。今度はどういったものが新しくこの部屋に加わるのでしょうか？…想像するだけでぞくぞくします」

「えっ！これ以上増えるんですか！？」

斯波さんの驚きながらもでた言葉は俺の気持ちそのものといってよかった。

「はい。長期休暇のたびに色々なものを買ってきてくださいます。いい先生に恵まれて嬉しいですね」

そう言って微笑む先輩の笑顔は大変と素敵なものだったが同時に俺とは違った感性をもつ人だということも理解させられた。

「ところで香月ちゃん、そちらの方は？」

「あ。そうだった。優貴先輩、ゴールデンウィーク前に言っていた新入部員の…」

「じゃあ、貴方が高城君？それとも海野君かしら」

「あ、高城です。よろしくお願いします」

流されるように挨拶をしてからしまったと思う。よろしくなんて言ってしまったら部活を抜けにくくなる。正直なところすでにこの部活を退部したい思いが強い。わけのわからない部室の上に先輩は間違いなく変人の類に属している、物腰こそは丁寧で優しい印象を受けるしそれは間違っていないと思うのだがそれでも変人であることは疑いようがなかった。

「わたしは3年の進士優貴といえます。よろしくお願いしますね、

高城君」

「はい、進士先輩」

「出来れば名前のほうで呼んでくれませんか？苗字だと男の方に間違われることが多いです」

「わかりました、優貴先輩。じゃあ、俺のことも真でいいです」

「うん、ありがとだね。真君」

苗字で困るということはよくあることだ。優貴先輩のように進士とか和泉とか発音で名前と間違われるものや佐藤や鈴木などの多い苗字は呼ばれても誰かがわかりづらい。後者の問題は地域ごとに同じ苗字が集まっていることも多いから珍しい苗字だからって油断はできない。

「ところで海野君という方は？」

「あつと。今日はもう帰っちゃったみたいで」

「そうですか。それは…残念です」

物憂げな顔からは本当に残念に思っていることがわかるが、俺としてはこの部屋がこんなだと知っていたら政志に首輪をつけてでもつれてきていた。こんな不気味な部屋には1人でも多い道連れが欲しい。

「こほん、真君。異文化研究会へようこそ。部長として歓迎します」

1つ咳払いした後、優貴先輩は歓迎の言葉を口にした。

それからしばらくは他愛のないことを話して時間をすごしていた。優貴先輩いわく部活内容の詳しい説明とかは政志をつれてきたときに先生と一緒にするということだ。他の部員の人は先生がいないと

知ったらエスケープをかましたらしい。やはり、この部屋には居た
くないのだろう。むしろこの部屋を気に入っている優貴先輩の方が
少数派と見ていい。

ホー、ホー、ホー、ホー、ホー。

急にふくろろの鳴き声が部室内に響く。俺は何事かと驚いて部室
内を見渡すと、ふくろろの置物を見つけた。そのふくろろは彫刻と
いうよりも剥製といったほうが近いようリアルな造形をしていた
がこのふくろろに関しては不気味というよりはよく出来ているなど
感心する。

「ホーちゃんがら回鳴いたということはもちろん5時ですね。ついつい
話し込んでしまいました。がそろそろ解散しましょうか」

「ホーちゃんって言うのはあのふくろろの置物の名前ですか？可愛
い名前ですね」

地蔵のジャッキーとか鳥人間のポッピー様に比べれば、いや、比
べるのも失礼なくらいに普通の名前だと思う。それにふくろろの置
物ぐらいならあってもまだ納得できる、ホーちゃんはこの空間の癒
しだ。

「…ホーちゃんは置物じゃなくて時計だよ。お腹をぱっくりと開け
ると盤面がでてくるよ。…その時に断末魔みたいな声がでるけど」

訂正、ホーちゃんはやっぱりこの部屋の住人だった。斯波さん今
の情報は教えてくれなくても良かったよ？

「あと、暗くなると目が光るの。…ちょっと怖いよ？」

そこまでのリアリティはいらない、と俺は思う。

「もう一つ言っとくけどホーちゃんはふくろっじゃなくてみみずくだよ」

「えっ!?!ふくろっじゃないの!?!」

「はい、ふくろっの方もあつたらしいのですがそちらの方がサイズが大きくて値段が張って買えなかつたそうです」

もう何も言うまい。周りを見るとやはりいろんなものがあるが、統一性はない。強いて言えば芸術品の類が多いがそれ以外のものもたくさんある。

「ん?」

部屋を見渡すと部屋の片隅に布をかけて隠してある大きな置物らしいものを見つけた。どうせろくなものじゃないと思いつつも隠されていると見てみたくなるものだ。ふらふらと足は部屋の隅へと向かう。

「わっ!」

布をはずすとそこには狼の彫像があつた。それは臨場感があるというか削りは荒削りだし足のほうはまだ掘られてすらいない未完成品だったが顔の部分だけはしっかりと彫られていてまるで生きているかのような眼光を放っている。

「それは先生が作っているものです。…完成はとおいそうですけどいつの間にやら俺の隣に来ていた優貴先輩が教えてくれた。」

「先生って美術の先生なんですか?」

「あら、真君は顧問の先生を知らなかつたの?美術の相馬先生よ」

「…相馬先生？」

「真君のクラスは相馬先生に習わないのかしら？」

聞き覚えのない先生の名前だったがこれからは部活で会うことになるだろう先生の名前だから覚えておかねばなるまい。我が校では一度入部届けを出すと特別な事情でもない限り半年は止められない。しっかりと体験入部ぐらいしとけばよかったな、と後悔しても遅かった。

「じゃあ、次の時には先生もいると思うからしっかりと覚えてね。そろそろ帰りましょうか」

そう言って優貴先輩はさっさと部屋をでていくので俺もあわてて追いかける。斯波さんはすでに部室の外にまででていた。

「それじゃ、さようなら」

先輩は笑顔で手を振って帰っていく。

「はい、さようなら」

俺と斯波さんの声が重なる。

「じゃ、あたしも帰るね。また明日、高城君」

「うん、斯波さん」

俺と斯波さんもそこで別れる。俺もそのまま家路へとついた。

「今日はなんだか疲れたし、適当な物でも買って晩御飯を済ませようかな」

考えてみれば『ベン・トー』の世界だと知ってから親がいなくて、きはいつも狩りに出かけていたと思ひ出す。

「たまには、休息が必要だよな」

そんなことを言いながら今日はたっぷりと休もうと決めたのだ。た。

第十一話 異文化研究部（後書き）

そういえばベン・トーの用語解説とかって欲しいですかね？基本的に原作用語は簡単な説明を入れているつもりなんですすがまとめてあったほうがやっぱりいいでしょうか。

第十二話 アラシの日

5月も中ごろへと入り、小学校のリズムとは違った生活へとも慣れたと言つて問題はない。学力のほうは腐つても転生者である俺は中学1年くらいならば勉学に励む必要などない、と言つてられるが丁度、部活にいた優貴先輩ゆきの教科書を見せた貰った結果、俺も中学3年時には同級生と共々受験勉強に勤しむ事となりそうだった。

優貴先輩といえば部活の最中になにやらと一生懸命と机に向かつていたので勉強をしているのかと思えば絵を描いていた。特に定まつてこれをするというのが決まつていない部活だったので別に構わないとは思つたが、絵を見せてもらった瞬間にその気は霧散した。簡単に言えば優貴先輩は原作で言うとお粉花おしろいはなと同じ世界の住人だったということだ。そんな先輩に対して抗議の声はもちろんあげたが優貴先輩はとびきりの笑顔で「これははるか昔からある文化を絵としたものです。昔からの伝統を知るというのも大切なことですよ。この部は異文化とうたつていますが文化ならば何でもありという感じですね。文化に貴賤なし、自分では理解できない文化でも頭ごなしに否定はいけません。自らにとつての可能性を狭める結果になつてしまうかもしれませんよ？」とおっしゃられた。

いい言葉だと思ふ。先ほど見たのは絵というか漫画だったがそれさえなければ素直に感動できたと思える。いや、きつとした。せめて、主役級と思える人物が顧問である相馬毅先生そまじゆうしと俺に似ていなければもう少し優貴先輩の言葉は俺の胸に染み渡つていただろう。それさえなければ素直に尊敬できる先輩となつていただけに実に残念だった。

他の先輩たちや相馬先生も『いい人』だった。ただ、あの部活で最初に学んだことが『いい人』だからといって性格に難がある人は案外と多いという事というのが悲しい。あとから聞いた噂によると異文化研究部は見てるのは楽しいし、頼りになる人も多いけど、あ

そこに入るのは勘弁というのが一般的な風評だった。通称で魔窟とまで言われているのを知ったときはさすがにシヨックを隠せなかった。

残念なことに我が親友である政志まことを異文化研究部へと連れて行くことは未だに叶っていない。終業のチャイムがなると同時にさつさと帰っていつてしまったために捕まえることが出来ずにいる。無理やりにも捕まえることは可能だろうがやつれた頬をして虚ろな目でぶつぶつと「ああ、せつかくいい個体がきたのに性格が……。あと何回卵をかえせばいいんだろう」とか言っている奴に俺が関わりたくなかった。今までもたびたびとそういうこともあったから、何のゲームかは知らないがクリアすれば落ち着くと思う。

何はともあれ、異文化研究部は気に入っているといい。先輩たちと先生の唐突な行動に斯波しばさんと共にびくびくとして過ごすことさえなければ最高といえるのだが。ただ飼育ケースに入っている虫が観賞用ではなく、食用と聞いたときは本当に退部届けを書いたが受理されなかった。半年間の制限をこれ程と憎らしく思える日がこようとは思わなかった。この時に相馬先生が「大丈夫だ。高城たかぎはこの部に落ち着くタイプだ。俺が保障する」と言っていたが内心で落ち着いて溜まるかと啖呵を切っていたのは当然だろう。そんな保障は微塵もいらぬ。だが1週間で慣れ初めて自分を考えるとまさにその通りになるであろうことは明白でそれが余計に癢だった。

弁当のほうもこの1週間で2回の勝ちを収めて順調といえる日々を送っている。まだアロハと巨乳よりも先に弁当を手に入れることは出来ていないがいずれは、と思っている。少しは自分でも成長を実感しているのだ。だが、そんな感じで意気揚々とアロハの元へと向かったらいつもどおりに何も出来ないうちに狩りの時間は終わっていた。アロハが強いのはわかっているがそれでもあんまりな結果に思わず涙した。そうしたら梗姉じょうあねさんに「いい子、いい子」とか言われながら頭をなでられてなけなしのプライドはスタボロに崩れていった。心の中でくそうと思うだけにしておく、口に出して

しまえばそれはまさに負け犬にしかなくなる。

今日もいつも通りに授業を終えて家に帰る。中学が終わってからすぐにスーパーへと向かつては半値印証時刻にはいささかはやい。

ハーフプライスラベリングタイム

部活のある日はそうでもないのだが異文化研究部は毎日やる勤勉な部活ではなかった。楽しいといえば楽しいのだがそれ相応に精神的にも疲れてしまうのでそれぐらいで丁度いいとは斯波さんとの共通した意見だった。昨日とて…いや、思い出すだけでも疲れるから止めておこう。これから大事な戦いが控えているのにわざわざとコンデイションを損なうようなことはバカのことだ。さっさと家に帰って半値印証時刻までゆっくりとしていよう。

ハーフプライスラベリングタイム

そんなことを思った矢先に出鼻をくじかれた。いつもつかっている通学路が通行止めになっている。工事のお知らせとかは朝は見かけなかったなにな、とか考えつつ見てみると壁にトラックがめり込んでいるのが見えた。トラックには黒塗りの猫が描かれているのを見ると配達中の事故だろう。でなければそれほど広いとはいえないこの道をトラックが走る理由はない。まだ事故が起こってからそれ程経ってはいないようで近くで警察官に問い詰められている男がいた。帽子のマークからしてこのトラックの運転手だろう。派手にぶつかつたようだが運転がは無事というのは不幸中の幸いといえる。なんにしるこの道が通れるようになるにはまだしばらくかかりそうなので回り道を余儀なくされた。

違う道とはいっても慣れしたんだ近所に過ぎない。迷うということもなければ、目新しい発見があるわけでもないから遠回りになつて面倒だな、という感想ぐらしかうまれない。ただ歩いていたら上から落ちてきた鳥の糞が直撃したことだけが新鮮だった。…全くもって嬉しくなどないのが。帰ったらシャワーを浴びようと決めた。

「ただいま」

返事が返ってこないことにも2ヶ月もすれば慣れたというよりはそれが当たり前になった感じがする。それでも帰りの挨拶をするのは親が恋しいからだだろうか、それとも返事はなくとも挨拶自体に意味を見出しているのか、ひよっとしたらただの惰性でし続けているだけかもしれない。それでも挨拶をするというのは悪いことではないのだから止める必要はないかと考えている。

いつもならば父さんの書斎に入って本を読んだり、史上最凶のやり込みゲーをうたい文句にしているSRPGのキャラクターや武器のステータス強化をしていたりするのだが、今日はまず頭についた憎たらしい物体を洗い流すために浴室へと向かった。

俺はお風呂は湯船にじっくりと浸かりたいタイプなのでシャワーは髪と体を洗うときぐらいにしか使わない。だが今日は弁当を求めて戦うことに決めているので、その時には汗をかくだろうからその後には湯船にしっかりとつかりたい。二度入れるのは手間がかかる。追い焚きすればいいのだろうが俺しか入る人がいないのにそれもうかと思っただ。それに二度風呂などは旅行に行ったときぐらいにしかしていなかったたので抵抗もあつた。

だから今はシャワーで済ませているのだが意外と気持ち良い。昼間からシャワーを浴びるといのは普段とはまた違った感じがする。ついついと長い時間シャワーを浴びてしまった。もし今日、半額弁当を手に入れたら、これから狩りの前にシャワーを浴びるのもいいかも知れない。

浴室からでると思っていたよりも時間は経っているが、時間はまだある。今日もゲームをしようかな、と思ったが今やっているゲームの新作が出ることを思い出した。

「今からゲームショップに行つてからスーパーに行けば丁度いい時間だな」

予約をしなければ売り切れるという程でもないだろうが、予約をしておいたほうが確実だ。髪が乾いたら家をでようと決めた。

煮物神のスーパーの前へと立つ。狼となつてから1ヶ月が経つがそれでもこれからスーパーに入るといつ時の緊張感は失われていない。弁当は残っているのか、狼たちはどれ程集まっているのか、入るまでわからないということが原因だ。だが、緊張感と同時に高揚感も覚える。どんな弁当が残っているだろうか、どんな狼が集まっているだろうか、不安は同時に半額弁当に対する最高の調味料も提供してくれていた。季節や材料の違いで同じ名前の弁当でもサイドメニューが変わったり、微妙に味付けが変わったりもする。それは狼にもいえることで日々、強く逞しくつてなつていく狼たちを倒した達成感は1回ごとに違った感動をあたえ、それが半額弁当を美味さを引き立てる。思わずと唇の端がゆるんだ。腹の空き具合も十分だった。今日もまた半額弁当を目指してスーパーの扉をくぐる。

狼たちが放つ鋭い眼光に出迎えられる。俺も後から入つてくる狼にこれほどの眼光を放っているのだろうか。自分では確かめようなどない。アロハや巨乳に聞けばわかるのだろうか、「俺ってちゃんとプレッツシャーかけられてる？」なんて聞くのは恥ずかしい。きつと放つていると、若干の希望的観測にいたらせて頭の中を切り替えた。

「んっ？イチゴが安いな」

入ってすぐの目立つ位置に特売品のイチゴが並んでいた。1つ1つの大きさはまちまちだし形も整っていないとはいえないが、だからこそ仕入れ値も抑えられて店頭価格も安く出来るのだろう。今日、手に入れた弁当しだいではデザートに買っていつてもいいかな、と思える。難点としては1パックではさすがに多いことだけだ。残った分は朝にでもつまめば問題はない。

さて、イチゴに少し気を取られたがあくまでも本命は弁当だ。期待に胸を膨らませつつ弁当コーナーへと進んだ。

今日の獲物は悩んだ結果『ローストビーフ弁当』に決めた。決め手となったのは弁当に牛肉という贅沢感と5枚入っていたという事実だろう。一緒についていたポテトサラダも高ポイントだった。ローストビーフではご飯のメインのおかずとしては少しパンチ力不足だろうがそれを補うためにタレの味付けは一目で濃い目だとわかる。副菜としてならばあっさりとした味付けの方が嬉しいがメインとなるとやはりご飯をかきこみたくなる様な味付けが好ましいと俺は思う。最後まで俺の脳内では『目玉焼きハンバーグ弁当』との激しい戦いが繰り広げられていたが。もし目玉焼きが固焼きではなく半熟だったらもつと悩んでいただろうし、サニーサイドアップ（片面焼き、フライドエッグとも呼ぶ）ではなくターンオーバー（両面焼き）だったならば勝負は『目玉焼きハンバーグ弁当』の勝利で幕を閉じていた。因みに俺は目玉焼きは塩コショウと醤油で食べる。

狙いも決まった今は半額神がでてくるその時を首を長くしてまっているしかない。時間的にもそろそろのはずだ。

だが、スタツフルームの扉が開くその前に入り口の扉が開いて屈強な体つきをした男たちが入ってきた。この男たちは見覚えがないが間違いなく半額弁当を狙っている。まだまだ狼としては若造の俺

だが、そんな俺でもわかるほどに男たちが飢えているのが見て取れた。普通に30%引きの弁当を買っていくことも考えたが、すぐに首を振る。

「この時間にきて30%はないよな……」

「その通りだ」

つぶやいたつもりだったがそれに対する返答は俺の隣からきた。横を見るといつぞやの金髪がいる。金髪は俺のほうを見ずに入ってきた男たちを鋭い目つきで睨んでいが、その目に込められた感情は狼にむけられているものとは違っていた。狼に対しては敵ではあるが、その視線に込められた想いに侮蔑や嫌悪は含まれない。だが、金髪からは明らかな侮蔑と嫌悪の感情があふれ出している。この金髪とは話したことはまだ1度もないが、それでも月桂冠の時には俺を助けてくれた。だからこそ、俺は金髪が誇り高い狼であると思っていたからその目に込められた敵意を不思議に思った。

「……………チツ。性懲りもなくまた来やがって、アラシどもが」

舌打ちとともにき捨てるようにそう言い切った。

アラシ その言葉を聞いて俺は納得した。大猪おおじしと共に狼たちに忌み嫌われる存在。嵐、荒らしとも言われる彼らは狼たちにとっての禁の1つを破るものだ。

その夜に己が食す以上に狩るなかれ この掟おしを知ったものかとばかりに半額弁当を根こそぎと持って行ってしまふ。多分、彼らはその夜のうちに食すのだから掟おしを犯していないようにも思えるが、そこには誇りが無い。狼たちの掟おしは全て一文に集約される。

礼儀を持ちて誇りを懸けよ この一文から全ての掟おしがうまれてくる。この礼儀と誇りを当てはめてわかりやすくしたのが細かい掟おしとなっていた。アラシたちの行いにはその礼儀と誇りが無い。この

場合の礼儀とはアラシたちは己の腹を満たすべくただのド力食いをするのは想像に難しくない。そこには弁当を作ってくれた半額神はんがくしんに対する礼儀など微塵もない。それに弁当を手に入れるために常にある程度の人数で来ることは誇りがあるとは言いがたい。その行いは豚と呼ぶに問題は感じられない。ただ、彼らが正面から豚といわれずにアラシという別の言葉を用いられてるのは彼らには力があるからだ。豚とは比べるべくもない、並みの狼すらも蹴散らす圧倒的な力が、群れとなってやってくる。

アラシが現れるのは大会の前と相場が決まっていた。大会へむけて遅い時間まで練習に時間を費やせば当然と晩御飯の必要性がでてくる。その標的となったのが半額弁当だ。安価でファーストフードに比べても栄養のバランスが取れているというのが大きいだろう。アラシが現れるのは大会が近づいている時というのは時期がある程度決まっているということになる。だから、狼たちにとっては天災とも呼ばれ、力なき狼たちは、ただただ天災が通り過ぎるのを待つことになる。もちろん、アラシの数に対して1つのスーパーでまかないきれぬわけもなく、近隣全てのスーパーに現れるというのも珍しくない。

「あれが、アラシ……」

初めて見るアラシの姿は体つきも相まって、威圧感を感じさせられたがこちらでも簡単には気圧される訳にはいかなかった。原作でも有数の実力者である『氷結の魔女』こと槍水仙やりすいせんが自らを運動神経が悪いとまで言っているが、それでも狼としては抜きん出ている。つまり、運動神経以外の部分である意思の力や経験といったものが狩りにおいて重要であることは疑いない。まだ経験が豊かななどとてもいえない俺では意志の力で負けてしまっただけはそれこそ弁当を手に入れることなど不可能だ。

アラシたちの雰囲気飲まれないように金髪に習って俺もアラシ

たちを睨みつける。中学生の身で筋骨隆々とした大学生を睨むのは怖い、喧嘩に絶対に勝てない相手にガンをつけなければいけない状態というのはしたくない。ここが、スーパード目指すものが半額弁当でなかったらとてもできないと思う。『ローストビーフ弁当』を食べたいという気持ちを力にアラシたちを睨み続けた。

「おい、もう煮物神が戻るぞ。いつまでやってんだ」

金髪に声をかけられてスタッフルームに向かっていく煮物神に気づく。いつの間にもやたら結構な時間が経っていたらしい。あわてて臨戦態勢を整えた。目標となる『ローストビーフ弁当』が半額弁当になっていることを確認する。目を離していた隙に買われてたりしたら目標を変えなければいけない。なくなる。

「よかった。ちゃんと残ってた」

ほっと、安堵のため息を漏らす。すでに煮物神は礼をしていた。アラシとの戦いの幕は煮物神の扉を閉める音で始まりを告げた。

俺が駆け出すと同時に狼は元よりもアラシたちも一斉に弁当コーナーへと向かっていき、そこで激しい戦いが始まるはずだったが、幾人かの狼がその前にアラシを迎え撃とうと進路をアラシへと変えていった。これも1つの戦略だろうとは思うが、それでも半額弁当を手にする確立が減るこの作戦は上策とは言い難い。それでも彼らアラシへと向かっていくのは、そのリスクを負ってまでもアラシ

には弁当を取られたくないという思いが強いからだろう。アラシに向かうことを選んだ狼には例外なく、敬意を払いたい。俺はすでに弁当コーナーへ向かっている足をこのタイミングで変えることはできない。せめて、アラシに向かうことを選んだ狼たちの雄姿をこの目に焼き付けようと多少は足が鈍ることを覚悟の上で視線を固定する。

ちょうど、その先にいたのは先ほどまで会話をしていた金髪だった。金髪は俺の視線に気づくと僅かならもちちらに向かつて唇の端を吊り上げて笑った。その顔には「ここは任せとけ」と書いてある。頼もしく思う。考えてみればアロハといい、巨乳といい先達の狼には世話になってばかりだと思いだす。ルーキーだからといつてもこれから自分にとっての脅威になるかもしれない存在にそういつたことをするのは簡単なことではない。俺も見習って、新しい狼が入ってきたときには世話を焼けるようになりたいと強く思った。

ありがとう、と言葉にはせずとも表情で金髪は読み取ってくれたのだろう少し俺に対して目を細めた後に、アラシへと向き直るとすぐに顔は緊張を含むものとなった。アラシという存在は金髪にとっては悔しいことに格上の實力を持つのだろう。そして、金髪はアラシとかち合っ。

「ぐぼっ！...！」

「えっ...！」

結果はあつけないものだった。それまでの金髪から感じられた狼としての誇りが霞むかのように、為す術もなく金髪はアラシにぶつかると同時に吹き飛ばされた。あまりの光景に俺の歩みが緩む。

「ぎゃあああ！...！」

「あべしっ！...！」

「ぎゃいん！...！」

金髪がアラシに吹き飛ばされるのと同時にあちこちから狼の悲鳴があがる。悲鳴に呼応するがごとく、俺の足は鈍って、視線は悲鳴が聞こえたほうへといった。その先には例外なくアラシによって蹂躪されていく狼の姿があった。

「嘘だろ…!？」

目に映る光景を思わず否定する言葉が漏れる。アラシの恐ろしさは原作を通して知ってはいたがそれでもここまで一方的なものになるとは思っていなかった。

「ん？」

不意に店内なのにも関わらず俺に影が被さった。俺は更に足を緩めて影がさしたほうを見る。

「うわあああ!？」

そこにはたくましい胸板があった。はちきれんばかりに鍛えられた筋肉はこの場においては恐怖しか俺に与えない。考えるまでもなく俺にアラシが迫っていることがわかった。いそいでかわさなければと思うが、体が動かない。原因はアラシの圧迫感だけではなく、その体から発せられる汗の臭いも大きい。急に鼻を刺激した臭いが汗の臭い…それも相当なものである。こんな臭いを嗅いで一瞬の硬直もしない奴は嗅ぎなれてる奴ぐらいだ。俺にかわす術は残されていないかった。

「ぎゃわあああ!!せめて、シャワーを浴びてか…」

最後まで言い切ることはなく、俺は宙を舞っていた。全てがスロ―モーションに感じる中で眼下ではアラシたちに次々と吹き飛ばされていく狼たちの姿が見える。空を飛ぶってこんな気持ちなのかと場違いな、現実逃避にも近いことを考えながらも目だけは弁当コーナーにある、『ローストビーフ弁当』を見ている。アラシとまともにより合えるつもりだったのかと聞かれれば、素直に頷くことは出来ないだろうが、それでもここまで何もできずに終わると思っていなかった。

「おろ？」

唐突に浮遊感が消えたかと思うと体が下に向かって急降下を始める。

「がつー!!」

床に落下した痛みで思わず声をあげる。背中から落ちたせいで腕を使って衝撃を逃がすことも出来なかった。

「うう……………」

しばらくの間、落ちた体勢のまま痛みにうめいていた。その間に経過した時間は短いものだったが俺が立ち上がって弁当コーナーを見るとそこには弁当は残ってなく、ただ悲劇をあらわすかのようには狼たちが横たわっていた。

第十二話 アラシの日（後書き）

いまさらながらに原作の女性登場人物が花から名前をとっていることに気づいた作者です。： 斯波さんと優貴先輩をどうしようか？無理にでもこじつけられるかなあ。

何か土日にかけてアクセス数が更新したわけでもないのに増えていて驚きです。まあ、嬉しいんですけどがね。

12月8日に加筆修正しました。

第十三話 荒らしの日

SIDE 金髪

何も出来なかった事実には愕然としながらも立ち上がる。前にアラシが来たときよりも経験も積んだ俺は強くなったはずだった。それでも、いざアラシが来ると何も出来ないままに終わった。忘れていた無力感が俺に訪れる。この無力感にはアラシが現れるたびに味わって、次にアラシが来るまでには強くなつて見せると毎回毎回と俺は決意した。けれども、結果が変わったことは一度としてない。アラシが弁当を手に入れられない日は決まってるこの『二つ名』が出てきたときだけだった。それ以外の日は憂鬱な結果にしかならなかった。

「くそっ!!!」

また、アラシに蹂躪される日々が始まると思うと嫌気がさす。今日、アラシに敵わなかったということは今までのようにアラシが過ぎ去るのを待つしかなくなる。ここまで完璧にやられてしまった程の実力差は簡単には埋まらない。いくら日々の成長があるとしてもそこまで急激な成長は望めない。自然と今回はアラシに立ち向かう力はないという結論にいたった。

周りを見渡すとさっきまで共にアラシと戦っていた狼たちが力なく床に突っ伏していた。彼らもまた今回のことで力が及ばないことを悟って陰鬱な日々が始まることを嘆くだろう。全員が全員、立ち上がれないほどのダメージを受けたわけでもあるまいに立ち上がるものがないということに狼たちの諦めが感じられる。

いや、誰もいないわけでもなかった。1人だけ立ち上がっている狼が…いや、子犬がいた。もう、子犬と呼べる存在ではなくなりつ

つあるのかも知れないが、それでも俺はあえて子犬と呼ぶ。理由は簡単だ。気に食わないからだ。初めてあの子犬と出会った日は、あの子犬のデビュー戦だったらしい。らしいというのは後から人伝に聞いた話だから本当にそうだという確証がないからだ。それでも、俺はその子犬にやられた。そんな出会いをしていい印象を抱けるはずもない。

その子犬が月桂冠を手にして狼の世界を去るかどうかの瀬戸際にたったとき、戻って来いと思ったのは直接とこの手で倒していなかったからだ。小さいと言われても仕方がないと思うが、それでも新入りにやられっぱなしのままに居なくなってしまうのが嫌だったからにすぎない。結局と子犬とはあれからリベンジの機会はない。俺だって狼であるのだから個人的な私闘と半額弁当を狙えるチャンスならば、もちろん後者を優先する。皮肉なことに利害の関係で子犬と共闘することはあったのだが。

そして今日はアラシに無様にやられる姿をさらしてしまった。他の狼たちもあっけなくやられてしまっていたし、子犬自身もそうだろう。これが現実であり、この場にいる狼とアラシの力の差でもある。

「……………子犬、これがアラシだ」

俺以外でこの場に立っていた唯一の存在である子犬に向かって言う。

「こいつらが現れた以上は…鳴りを潜める狼も出てくる。…子犬、お前は どうする？」

これが事実。アラシの時期にスーパーから姿を消す狼というのは存外と多い。ましてやこの地域は『二つ名』を持つもののおかげでアラシたちに目をつけられている。おかげでここらに現れるアラシ

は他のところに比べても体格がいい選りすぐりが送り込まれてきていた。その癖に今は実力者が集まっている『マスター・S』の店や古狼の集まるあのスーパーには行かないのだからアラシどもは『煮^{ものがみ}物神』と『地場神^{じばがみ}』の店でこの機会に鬱憤を晴らしているだけにしか思えなかった。そう思えるだけの乱暴さがここに現れるアラシにはあった。

「地場神の店に行くかってことですか？行くに決まってるじゃないですか」

何を当たり前のことを、という感じで子犬は俺の問いに答えた。俺も昔はこうだったのだろうが、狼を続けていると定期的に訪れる悪夢ともいえる存在であるアラシは何度も何度も挑んでいったことで諦めることを覚えてしまった。今回は駄目だったから、次のアラシの時期までには…そんな考えがうまれてきてからは1度の敗北の後にはアラシに挑まなくなるようになった。それは俺だけじゃない。狼との戦いと違ってアラシと戦って負けても得るものはない。ただの力と数による蹂躞から学ぶべきものは全くない。学んでしまったらそれは豚^{ぶた}への一步となる。ならば、いつそその期間はスーパーから離れてしまおうと考える狼はそれなりいた。

最初の頃はそんなことをする奴らを理解は出来なかったが、狼となった春が過ぎて夏を越えて秋を迎えて冬が訪れた頃になると俺もそんな理解が出来なかったやつらと同じになっていた。

「そうか。頑張つてこいよ」

「あれ？金髪さんは行かないんですか？」

俺の言いようから地場神の店に行かないと言ってるのがわかったのだろう、子犬は俺に対して聞き返してきた。

「ん？ああ、アラシが出たからな」

「でも、さっきは挑んでたじゃないですか」

「まあ、最初くらいは、な。だからこそ今の俺じゃ何もできないと分かったからな」

「……………。分かりました、けど行くのは止めないんですね」

「止めたって無駄だからな。…昔の俺がそうだった」

「……………」

何かを言いたそうな顔で子犬は俺を見てくる。

「早く行け。間に合わなくなるぞ」

その顔で見られるのが嫌で俺は子犬を追い払う。子犬は自分の腕時計で時間を確認すると、もうこんな時間なのかと驚いたようだった。

「…悔しくないんですか。アラシが好きなようにのさばっています」

それでも子犬は去らずに俺に問いかける。

「悔しくねえわけがねえだろうが。アラシがスーパーに居るってだけではわたが煮えくり返る。だけどな、どうしようもないんだよ。…怒りは弁当に向けられる力じゃねえ、アラシに向けられる力だ。それも間違いなく暴力と呼ばれる類の力なんだよ。俺はそんなもん

に頼る狼になんてなりたくねえし、そんな力でアラシを退けても半額弁当に会わず顔がねえよ」

子犬は何も言わずに俺の言うことをただただ聞いている。

「だからよ、そんな力をこの場に持ち込まないために俺は諦めることを覚えたんだよ。最初の一回ぐらいは純粹な俺の力で弁当を目指せる。けどな、アラシに何日も何日もやられているとどうしてもそんな暴力に頼りたくなっちゃうんだよ」

言いつもりもなかったことを言ってしまうのは、子犬が羨ましいからだろう。まだアラシに辛酸をなめ続けていないものに対する羨望か。

「負け犬とでも根性なしとでも臆病者とでもいくらでも言われてもいい。アラシと戦わない、いや、言葉で取り繕っても意味はねえな。逃げると思ったときにそんなことを言われる覚悟なんてとうにできてる。そんなものはこの場を暴力で汚すことに比べれば全然マシだ！！」

だんだんとヒートアップしているのが自分でも分かった。

「せめて、少しでもアラシを止める力があるのならいくらでも挑んでやるよ。だがな、現実は何もできなかった。今回だけじゃねえ、前回もその前もそうだった。だからこそ余計に、暴力に頼りそうになっちゃう。暴力にさえ頼ればアラシもどうにかできるんじゃないかってな。そんな俺自身が情けねえと思えるからもつとアラシがいるスパーに行きたくなっちゃう。だから敵わねえと思ったら俺は逃げんだよ。アラシと弱い自分からな。そして、今回もアラシとやり合っただけだったんだよ、俺は弱いままだったってな！！！」

最後の言葉が強くなったのはそんな自分に対する不甲斐なさからだった。狼としての弱い自分、暴力に頼りそうになってしまう情けない自分、アラシに奪われていく半額弁当を何も出来ずに眺める自分。そんな自分が嫌いだった。

「…金髪さん」

そんな俺を見てくる子犬の顔には様々な感情が同居していて複雑なものとなっていた。

「…お前がアラシを前にしてどういう狼になるかは知らねえが、これだけは言っておく。アラシを前に半額弁当を手に入れられる狼なんて本当にごく少数だ。下手な希望とかを持つてると余計に始末が悪くなるからな。どういう風になるにしても早めに割り切ったほうがいい。先輩としてのアドバイスだ」

言ってると思う。俺は目の前に居るこの子犬にどうなって欲しいのだろうかと。俺みたいになって欲しいのか、敵わないと分かっているながらもアラシに挑む狼になって欲しいのか、それともアラシすらも退ける狼になって欲しいのか。

「ふっ」

自分で考えたことだがそれでも笑ってしまふ。最後の選択肢などは有り得ない。最初の頃は誰でも思うようなそんな存在に実際になれる程の実力者などはそうはいない。

「さっさと行け！半値印証時刻は早まる事だつてあるぞ。時間に余裕を持っておいたほうがいい」

ハーフプライススラベリングタイム

口だけではなく手でも子犬を追い払ったら、今度は素直に入り口へと向かっていった。

「どうなるかはわかりませんが、今はがむしゃらにアラシに挑みます。たとえ、敵わなくてもここいらの狼がアラシに苦しめられているのならば、月桂冠のときに助けてもらった俺はその元となるアラシに挑むことが恩返し的一步になりますから。…アラシをどうにかできれば最高なんです、それはさすがに高望みが過ぎますね」

そついい残して子犬は煮物神のスーパーを後にしていった。

「……………月桂冠だけはでてくれるなよ」

子犬が消えていった扉を見ながら俺はそんなことをぼやいていた。

S I D E O U T

俺は煮物神の店をでると愛車にまたがり、地場神の店を目指し始めた。自転車を漕ぎながらも金髪の言ったことを考えている自分がいた。金髪のようにアラシと戦わないことを選ぶのも狼としての1つの道であり、金髪はそれを選んだと狼だったということだ。それでも、金髪の言葉からは選んだ道であっても、自らが望んだ道とは言い難いことは明白だった。出来うることならば狼としてアラシの蛮行を止めたいのに、それをすることは己の狼としての一線を越えてしまう危険を秘めている。想像するだけでも相当な悔しさと、情

けなさが込みあがってきて自然と、ギリツと歯噛みする。同時にそれは未来の俺である可能性をも秘めているという事実がある。今はまだ、無鉄砲にアラシに挑めるがそれにもいずれ終わりがくることは明らかであり、その時には俺はまだアラシに挑んでいられるのだろうかと自問する。答えは出なかった。否、答えを出せるほどの経験が俺にはなかった。

「今、考えても仕方ないこと……か。だけど、今はまだ難しいことを考えずに純粹にアラシに挑める」

金髪の言うことに思うことはあっても、経験が少ない俺にとってはアラシはまだ狼の敵である存在に過ぎなかった。いつまでも『まだ』なんていつてられないであろうとも、『今は』狩場を荒らす無粋な存在としか認識できていない。答えの先延ばしではなく、答えを出すためにはアラシとの戦いは必要不可欠なものになる。その結果がいつ出るかはわからないが、今の俺はアラシという存在から狩場を守るそんな狼になりたいと夢みていた。

キキーツつと旋回して勢いを殺しながら駐輪場へと自転車をつける。

「よお、ちゃんと来たな。……すっかりやられてきたようだな」

自転車を降りるとすぐに軽く片手を挙げながらアロハが俺に近づいてきた。

「…アラシのことですか」

「そうだ。こっちにもわんさかと来てる。まっ1つの風物詩ってやつかね」

「風情なんてこれっぽちもありませんけどね」

「そうだな。店内が汗臭くなって堪らんね」

そんなことを言いながら2人で笑い合っていると急にアロハの顔が真面目になった。

「…辛いぞ」

言葉は短かったがそれでもアロハの言わんとしていることは嫌というほど伝わってきた。

「……………。戦わずに後悔する辛さは1度味わいそうになりましたからね。それを超える辛さがなければ退く理由にはなりませんよ」

少しの逡巡の後に俺はそう答えた。即答できなかったのは金髪というアラシに対する狼の1つの末路を見てしまったのと、簡単に答えていいような問題ではなかった気がしたからだ。

「ふん、社会勉強だとも思っとけ。大猪おおじしと違って1度現れたらしばらくの間はいつでもアラシは相手してくれるぞ」

アロハがいつもより口が悪いのは彼もアラシという存在に敵意を持っている証拠だろう。同時に実力では相手が上とも思っているから、強気な言動をして自らの士気を盛り上げているのがわかる。

「行きましようか、アロハさん」

そう言つて俺はスーパーに向かつていく、後ろからアロハが追つてきて俺を抜いていった。

「生意気だな。まだ俺の前は歩かせねえよ」

そんなことを言うアロハに対して笑いがこぼれる。ただ、その背中俺からみて頼りになるものだった。

店内に入るといつもの狼の視線は明らかに少なく、代わりに鍛えられた筋肉が目立つ巨躯たちの姿があった。一目でアラシとわかる彼らは嫌でも目に入ってくるのだが、アラシに意識を向けるよりもまずは弁当を確認しようと思き出す。一步、一步と弁当コーナーに向かうこの時はいつもならばどんな弁当が残っているのか心を躍らす道なのだが今日はアラシのせい少し足取りが重かった。それでも、実際に弁当が残っているのが見えたときにはそんな気持ちが吹き飛ぶのだから現金なものである。

「なんにする？」

弁当を確認した後には生活用品コーナーにしていると向かいのスナック菓子コーナーからアロハの声が聞こえてきた。今日はいつもより多くの弁当が残っていて弁当を狙う者の数自体はあまり変わっていないが、狙う者の質には大きな違いがあった。狼が数を減らし、その分だけアラシがいる。そしてアラシは1人につき1つの弁当では

なく、いくつもの弁当を持っていく存在だ。必然的にいつもより厳しい戦いとなることがわかる。

「オムライス」

俺は短く答えた。正確には『大盛りオムライス』なのだが、山のようにもってあるのが気に入った。決してその山の頂に掲げられている日の丸に惹かれたわけではない。オムライスというものはいざ見かけると無性に食べたくなるときがあるそれがいまなのだ。

「オツケー。俺は『かつめし』だ」

かつめしか、重厚なかつが誘惑してくるその弁当は見ているだけでお腹が空いてくる。ただ1つ気になる点を除いては。

「…カツどんとなにが違うんですか？」

そんな俺に対して、アロハはこいつ駄目だなといった顔をした。

「はあ。やっぱし犬っ子は犬っ子だな。もっと勉強をしなさい。…俺はしなかったがな」

わざとらしく盛大にアロハはため息をつく俺に向かって説明を始めた。

「まずよく見る。煮てねえだろうが、カツどんは煮てあるだろうが！」

「…確かに」

「まあ、ソースカツどんとかは煮てないから煮てればカツどんってわけでもねえがな。因みにソースカツどんにはウスターソースにく

ぐらしてから丼にのつけるタイプと丼にのつけてからウスターソースをかけるタイプがあるな。後者の場合は下にキャベツをひく場合もあるな」

こいつ、殴っていいだろうか？絶対にバカにしていると思う。1度は納得しかけた俺がバカみたいじゃねえか、とふつつつと頭の中で燃え滾るものが生まれ始めたのを感じる。

「簡単に言えば、ご飯の上にカツをのつけて、ドミグラスソースをかけたって感じだな。ゆでたキャベツが添えてあるのも特徴の1つとっていいな。別名としてカツライスなんて呼ばれていたりもする」

「つまり、カツどんとかつめしと一緒にするなっでいいですか？」

なんかよくわからなくなってきた。そもそもカツどんの定義っていったい？そんな思いが胸を渦巻いてきたので手っ取り早く切り上げようと思ったのだがそうは問屋がおろさなかった。

「まあ、そういうことだ」

「ちなみにあたしはカツ皿派」

いつのまにきていたのやら気づけば俺の後ろには巨乳がいてそんなことをのたまっていた。

「カツ皿って何さ？」

あまりに唐突な登場で気が動転していたのだろう。ついついと口から漏れ出た疑問は、巨乳の表情を変えさせた。

「えっ。カツ皿知らないの？」
「そりゃ、狼としての常識だろうがよ」

そんな常識は知らない。

「しょうがないわねえ。あたしが説明してあげる。ごはんの上にカツとゆでたキャベツをのせてね…」

「ちよつと待て!!それはさっきのかつめしと何が違うんだよ!？」

思わず声を大にして叫んでしまう俺がいたのはさきほどのアロハから受けたかつめしの説明と巨乳がしているカツ皿というものは違いがなかったからだ。

「もー、最後まで話はちゃんと聞かないと駄目。かつめしはドミグラスソースを使うでしょ？カツ皿は卵をそばゆで伸ばしたのをタレとしてかけてあるの。すごく美味しいんだから！」

そういう巨乳の顔はカツ皿の味を思い出しているのか、幸せそうな表情をしているがよだれをたらすのは止めていただきたい。

「まあ、カツ皿も美味いがかつめしの方が上だな」

「…アロハ。あんたにはカツ皿の良さがわかっていないようね。あたしがみつちりと教えてあげる」

「ハッ、上等。逆に俺がかつめしの虜にしてやんよ」

バチバチと火花を散らす両雄だが、俺からしてみればそれはしょうもない子供の喧嘩にしか見えなかった。倒すべき敵はアラシだといつにも関わらず、2人は止まることを知らない言い合いを続けている。これも仲のよい証拠かも知れないのだが時期と場所をわきまえて欲しいともすごく思う。だから、俺は言っちゃった。

「最強は…塩カツどんだろうが!!」

そう言い放った俺にアロハと巨乳は向き直って首をかしげながらも尋ねてきた。

「塩カツどんってなんだよ？」

「塩カツどんって何？」

2人は塩カツどんについて知らないようだったので、今度は俺は2人に対して塩カツどんの説明をしてやる。

「塩カツどんってのは……………」

「残念だが時間のようだ。地場神が出てきた」

意気揚々と説明を始めようとした矢先に地場神が出てくるのが見え始め、いつもならば嬉しい半額神の登場だったが今日ばかりはもう少しゆっくりしていてもいいのにな、そんなことを思った。

ただ、地場神が現れたということは嵐との激突が間近に迫っており、アロハも巨乳も他の狼も、無論のこと俺も一瞬にして体から緊張が発せられる。相手にするのは狼ではなく、アラシ。煮物神の店では惨敗を喫した相手だったが、この地場神の店では俺の最も信頼する男女であるアロハと巨乳がいる。2人の実力がアラシよりも上だとは思っていなかったがそれでも俺は底知れぬ安心感を感じたのであった。

第十四話 嵐の日

一步、一步と進んでいく地場神じはがみの足音が緊張に包まれている俺にはとても大きく聞こえている。他の狼たちも同様だろう。悔しいのはアラシたちはそのような緊張とは無縁であるということか。アラシにとっては俺たち名も無き狼などは取るに取らない存在と思われる。実際に彼らは狼たちを蹴散らしえるからアラシであって、狼に負けるようではアラシ足りえない。アラシと言われるからには今この場にいる鍛えられた肉体を誇る男たちもそれなりにスーパーという名の戦場をくぐり抜けてきていると見るべきだ。と、ここまですべて考えてふと思いつく。

「そつだ。新人から狙えば…」

いくらアラシと言っても新人勧誘が終わっているこの時期であれば入部満たない未熟なアラシがいる。彼らを優先的に狙っていけばアラシの数を減らしていける。アラシの強さは鍛えられた肉体もそうだが、数こそ大きな武器となっている。1人を倒しても次のアラシがせまってくる。しかも、体育会系の男たちが1度倒されたくらいで、戦線離脱などと考えるのは愚かだ。きつと、何度でも向かってくる。彼らは弁当に懸ける思いこそ狼に劣るが、基本体力、打たれ強さにおいては大きく上回る。狼のように弁当への懸ける思いに頼らずとも従来の練習で培った体力で何度でも襲い掛かってこれるだろう。

ゆえに、新人を狙う。基礎体力もついていなく、スーパーという戦場での経験も希薄な彼らから仕留めることで優勢な状況を作り出す。この弱肉強食の世界では弱いものから狙うことは卑怯などではなく、当たり前前の戦略だ。

「そいつぁ、無理だ」

名案かと思っていたがアロハによって否定された。

「…何ですか。まさか、新人は狙わないとか」
「違いよ」

おそらく慚然とした表情でアロハに聞き返していたであろうにアロハはそんなことを気にした風もなく言葉を返してきた。

「ここには新人自体が来ないんだよ…。つーか、入部して1年以内のやつは他の場所に行かされる」
「へっ!？」

思わず間抜けな声が出してしまった。

「…何ですか？普通は部の先輩とかが後輩を教育するものじゃ…」
「ああ、普通はな。だがここが普通じゃないそれだけのことだ」
「そうよ、主には『クラーケン』のせいよ」
「クラーケン………?」

聞きなれない単語を巨乳が発した。クラーケンとは北欧の伝承に現れる怪物ではなかったか。なんでそんな単語が出てくるかはすぐにわからなかった。

「……………二つ名?」

それでも自然とそんな言葉が漏れた。

「よく分かったな。クラーケンはここらじゃ最強なんていわれてい

る狼だ」

「ほんとに海のそこに潜むかのように、今ではあんましスーパーには姿を現さないけどな」

クラーケン。その名前をよく覚えておく。ここで狼を続ける限りはいずれは必ず戦うことになるであろう相手になるのは間違いない。しかし…。

「クラーケンとアラシがどう関係するんですか？」

この2つ関係がよくわからない。

「…前にアラシが出たときに妖精と一緒に返り討ちにしてからよ、アラシの親玉に目をつけられたんだよ」

「もともと、『雷電』のおかげで目をつけられてたのも大きいわよ」
「……………妖精？雷電？」

二つ名と思わしき単語が連呼されるが俺には誰なのか全くわからない。

「ん？ああ、後で説明してやるよ」

「そうね、今はお弁当かな」

そう言っアロハと巨乳は弁当コーナーへと目を移していく、俺も釣られて目をやるとそこには半額シールを貼っている地場神の姿があった。いつのまに、とも思うがそれだけ話していたのだろう。結果、新人はおらずに歴戦のアラシしかないという望ましくない情報しか手には入れられなかったが。それがこの場で狩りに臨まない理由とはなりえない。

話している間にも地場神はもう数えるほども億劫なほどにこなし

てきたであろう作業を終えるとスタッフルームへと向かっていく。いつもと変わらぬその後姿だったが、なんとなく俺にはアラシなんかに負けるなよ、そう語っているような気がした。

「俺らだっつていつまでもアラシにはやられちゃいないさ」

そんな思いをアロハも感じ取ったのかつぶやくようにいった台詞は俺の耳へとしっかりと届いていた。それに答えるように巨乳も大きく首を縦に振っている。その目には普段よりも3割り増しほどの闘志の炎がこもっていた。

地場神がスタッフルームの扉を開けてこちらに向き直る。今までも何回も見てきたがこれから始まる戦いを思うとそれから先の動きに待ったをかけたような気弱な気分にもさせられたが狼としては生きていくうえでは必要ともいえる戦いだっつた。先ほどの煮物神にものがみの店での狩りはアラシの脅威を実際には知らないうえでの、知識のみでの脅威だったが今度はそうではない。1度といえどアラシとやりあつた今ならば憶測ではない彼らの恐ろしさを体で覚えた。怖くないわけがない。

ただ俺の感じる恐怖などに関係などは無く地場神は店内に向かつて頭を下げた跡にスタッフルームへと消えていく。狩りの時間の始まりだつた。今宵は弁当を狩る狼だけではなく、その狼をすら狩るアラシというゲストを迎えて。

一斉に狼たちが半額弁当を目指して駆け出すときに足音から奏でられるリズムは俺にしては聞きなれたものだったが、今日聞こえてくる音はいつもよりも騒がしい。原因は言わずもがなアラシだ。狩

りの度に聞こえてくるこの音は何度も聞いているうちに心が高揚してくる。そして、この音を奏でている中に自分自身も入っていることに誇りを持っている。

オルトロスのところへ遠征に出かけたときには、そこで聞こえてきたその音はここらとはまた違ったものだったが味があった。よそ者が混ざることによって音が乱れるかとも思ったがそんなことはなかった。たとえば、地域が違って、うまれる音が違ってもその音を奏でるものが狼ならば自然と足音に交じり合い、新しいハーモニーを奏でていた。

しかし、今日の音は酷く無粋なものだった。不協和音と聞いていい。アラシは狼が奏でる演奏会へとは加われなかったのだ。こんなことでも俺はアラシとは狼の敵なんだと再確認させられる。どすん、どすんとうるさくて敵わない。

「負けない」

そう口に出しながら半額弁当を手に入れるために駆けて行く途中で、アラシと接触した。

俺の右隣にいたそのアラシは特に何をしてもなくただ前進を続けるのみだった。それだけでアラシにとっては十分に並みの狼ならば跳ね除けていたし、これからもそうだろう。だが、当たり前負けすることをわかっているのにわざわざ衝突することを選ぶ必要などない。しかし、俺よりも隣から迫ってきているアラシの方が足は速かった。まだ中学1年である俺にとってはこういう状態になったら弱いことは分かっている。スタートダッシュは欠かせないものとなっていた。このままでは間違いなく追いつかれると分かっているのなら、迎撃するしかない。早すぎれば対応されるだろうし、遅すぎればその時には俺はアラシによって跳ね飛ばされているだろう。ここぞ、という機会はほんの一瞬しか与えられない。多少は速度を変えることで調整は利くだろうが、早くしたら勢いのあまりに足の

コントロールが利きづらくなりこの後に弁当コーナーでベストポジションに丁度とまれるかわからない。かといって遅くすれば出遅れるのが目に見えている。

半額弁当に近づきながらも攻撃のタイミングを計り続ける。動きながらも相手を観察し続けなければいけないこの状態は負担が大きいの。狩りに慣れた狼ならば当たり前のようにできるようになるのだろうか、そこまでの経験は俺にはまだなかった。

まだ早い。確実に近づいてくるアラシのプレッシャーは俺をあせらせていく。迫り来る巨体を一刻もはやく、遠ざけたい。そう思う気持ちで攻撃のタイミングをはやらせる。頭ではもう少しひきつけてからだと分かっているのに、体がプレッシャーに負けて手を出しそうになる。歯を食いしばりながらつい出そうになる手を押しとどめるが、強烈な不安に包まれる。このまま堪えていて、外せない一撃のチャンス逃してしまつのではないか。それならばせめて、倒せなくとも一撃だけでも入れて散つたほうがいいのではないかとすら思ってしまう。それならば何も出来ずにやられたという不名誉を冠する事は無い。

けれども、これから狼として大成するにはその衝動を耐えて、じっくりとチャンスが巡ってくるまで待つということができなければならぬ。ただ攻撃をし続けていれば弁当を手に入れられるような簡単な世界ではないというのは、これまでに培ってきた経験からもわかる。

だから、今は待つ。時間にしたら数秒のことだつたろうが、俺が攻撃するのに丁度いい間合いにアラシが来るまでの時間はとても長く感じた。気づけば、アラシは俺に触れそうな位置にまで来ていた。

「でやつー!」

掛け声を上げると共に足にブレーキを無理やりかけて止まると、その反動を乗せた肘を荒らしめがけて振りぬいた。アラシの姿を目

で確認したわけではなかったが、入ると俺は確信していた。アラシから感じるプレッシャーは間違いなくそこにあったのだから。

「ぐっ……………!？」

聞こえてきたのはアラシのうめき声。確実に俺の肘打ちはアラシの腹へと入った。

「…堅いつ!？」

しかし、俺の肘は致命的な一撃とはならなかった。明らかに腹筋を締めていたとわかる手応え。俺の攻撃はアラシに読まれていたということだ。人体の中でも硬い部類である肘での一撃、反動による勢いまで足したその攻撃は体格差があるアラシとて沈める威力を持っている。だが、それでもアラシは倒れない。少しはのけぞっているようだがすぐに体勢を立て直すであろう。逆に俺は必殺の一撃が読まれていたことに対するショックで動きが止まっている。

「なんで…!？」

その疑問に答えられるのは1人しかない。その1人はあつという間にのけぞった体を元に戻してくる。

「簡単なことだ、小僧。体格差を考えれば、俺に対してくる攻撃は肘か膝の可能性が大きい。他の攻撃じゃ俺を沈め切れねえからな。ポジション的に膝は有り得なかった。なら、肘にだけ注意していれればいい。……………さすがに顔面を狙われたら怯んだかも知れねえがな」

わざわざと解説してくれたこのアラシの男は根が親切なのだろう。しかし、今の俺が感じるのは圧倒的な恐怖だけだった。同様で出来

た体の硬直は体勢を立て直したアラシの男から再び発せられるプレッシャーによつてますます硬くなっていく。いや、先ほどよりも強力なプレッシャーを放っている上に間近にいるせいで最早、体を動かすのは無理だった。

「俺たちアラシは狼たちを食い漁るかのように圧倒的な力でこの場所を荒らしてきた。けどな、俺らは自惚れてたんだ。それを教えてくれたのが狼だった。だから、俺らはこの場では油断なんかしないし、慢心することもねえ。……………坊主の一撃、思ったよりも重かったぜ」

そういつとアラシの男は弁当コーナーに向かっていった。

「あ…あ、あ……………」

体が竦んでいた俺は反撃することもよけることも出来ずにただ迫ってくるアラシの男を見ていることしか出来なかった。男と弁当コーナーの線上にいた俺は何もすることが出来ずに吹き飛ばされた。その時の衝撃はすさまじいと言えず、ただの一撃で俺は意識を手放した。

どれくらい時間が経ったのかわからないが俺が目を覚ましたときにはアラシがいたことが夢だったかのように店内は静けさに包まれていた。目が覚めてもしばらくしても俺はただ呆然と倒れたままの姿で床に臥せっていたが、やがて、むくりと立ち上がる。

「えっ…?」

自分が居る場所を確認した俺は愕然とする。アラシに吹き飛ばされる前までは弁当コーナーの近くまでいていたはずなのに俺の居る場所は弁当コーナーからは最初に居たスタート位置とそれほど変わらない距離があった。誰かが動かしたわけではないのは周りに倒れている狼がいることでわかる。俺をアラシが動かす必要もないし、狼の誰かが気を利かして運んでくれるなんてこともない。ある者は壁にもたれかかったまま動かないし、ある者は重なり合うようにして倒れている。この惨状を見てさきほどの恐怖が俺の心の中で再現される。特に寒い訳でもないのに、体は震えている。原因は恐怖からと言うのは自分自身でもわかった。

「なんで…?」

煮物神の店に現れたアラシも強かったが、明らかに今この場を荒らしていったアラシの方が強いとわかる。実際に俺が相対したあのアラシは鍛えられた体に頼った力任せの戦い方ではなく、相手の行動を考えてそれにどう対策するかを考えていた。ただぶつかっただけでも倒せるであろう俺に対しても、だ。倒れ付す狼を見ても煮物神の店よりも凄惨なものとなっている。

「あ…れ?」

その倒れた狼の中にはアロハと巨乳の姿はなかった。俺が知る2

人に限ってアラシを恐れて逃げ出したなんてことは有り得ないと思
った。ならば、アラシに勝ったのかと聞かれれば俺は即座に否と答
える。俺は2人の実力を間近に見てきたし、何度もやられてきた。
だからこそ2人の実力というのはよくわかっている。残念ながら今
日この場に現れたアラシとの力量差は運というファクターを加味し
てもまず勝てない、それほどまでにアラシは強かった。そうなると、
2人はやられた後に俺よりも早く立ち上がり店を去って行ったのか
と思った。毎回、狩りの終わりに一緒に食事をしている訳でもなし、
十分に有り得た。

ふと、違和感がはしる。アロハは二つ名のことを後で説明すると
言っていた。それを無視してさっさと帰ってしまうほど不義理な男
ではないことは俺はよくわかっていた。ならばどうということなのだ
ろう。

「消えた…?」

自分で言うておいてすぐさまそんな訳はないと否定する。きっと
俺が見逃していただけだろうともう1回、今度はさっきよりも注意
深くしっかりと見渡すが、やはり居なかった。

「やっぱり帰っちゃったのかな?」

アラシとの戦いの激しさで簡単な口約束を忘れるぐらいのことは
あるかも知れない。もちろん、俺はその程度のことをとがめようと
は思っていない。次の機会にでも聞けばいいだけの話だ。

「帰るか」

とぼとぼと店内を歩いて出口へと向かう。足取りが重いのは肉体
精神の両方でのダメージが大きいからだ。アラシに吹き飛ばされた

時の肉体的な痛み、歯がたたなかつたという心の消沈。

だが、大小あるにせよ、その2つのダメージは今まで何度も味わってきたものだ。決していい思いとは無縁ではあるがそれでも、その辛さは俺が戦場に立っていたことを意味する勲章のようなものとさえ開き直っていた。

「……………ん？」

スーパ―の端に人影が見えた。数は2つ。片方は壁を背にしたままもたれたまま、片方は隣で立っている。その姿に見覚えがあつた俺は足を速める。

思ったとおり、その2つの人影はアロハと巨乳だった。しかし、なぜこんなに遠くにいるのだろうか。そう思いつつも足は止めずに2人の元にたどり着く。

「アロハさん、巨乳さん」

「ん？…子犬ちゃん。丁度良かったわ。こいつ運ぶの手伝って」

そういつて巨乳はアロハのほうを指差す。壁にもたれかかって動かないアロハは相当なダメージを受けていることがわかった。ちらりと、巨乳のほうを見ると表情から巨乳も軽くは無いダメージを受けているのがわかった。

「左側よろしく」

そういつと巨乳はアロハの右側に入ってアロハの右腕を自分の首にかけた。俺も釣られて左腕を自分の首にかける。

「せーのっ…！」

巨乳の掛け声に合わせて立ち上がる。

「ぐっ！」

持ち上げるのには成功したが重い。成人男性であるアロハはきつと1人では持ち上げられなかっただろう。だが、持ち上げてから気づく。

「起こせばよかつたんじゃ…」

「起きても、すぐには動けないよ。酷くやられてたしね」

「えっ!?!」

俺の中を動揺がはしった。いくらアラシが強いと言ってもアロハをそこまでボロボロにすることが出来るだろうかと疑問が湧く。しかし、今居る場所を思い出して納得もする。狩場からこれだけ離れた場所に倒れ付していることがそれだけの戦いがあったことを意味する、と。

「とりあえず、近くの公園までね」

いたって冷静とも言える口調でそう言う巨乳だったが、その顔は何度も何度も心配するように目を覚まさないアロハは見ていた。

俺は肩にアロハの重さを感じたまま、巨乳に動きに導かれるようにスーパーを出て行った。

第十四話 嵐の日（後書き）

遅くなりました。ちょっと車をこすってへこんでたんで、文章を打つ気分になれませんでした。まあ、言い訳ですね。次はもっと早くに投稿できると思います。

あと、活動報告書きました。よろしければ見てください。

第十五話 歴史の前編

巨乳と2人がかりでアロハは公園まで運んできたが、アロハはただ目を覚まさないので近くにあってベンチへと寝かせる。運んでいる間は俺も巨乳も全く喋らなく空気が重かった。お互いにこれほどまでにアロハがやられていることによるシヨックが大きかったのだらう。

「ふう。ようやく一息つけるわね」

巨乳はアロハを降ろした後に疲れたのか肩を回していた。

「ここまでやられるなんて一体何があったんですか？」

アロハがここまで酷くやられるとは信じられなかった。俺の理想が少し入っているかも知れないが、それでもアロハのやられようは普段を知っている俺には信じられなかった。アロハとは今の俺にとっては狼としての最も身近な頼れる存在であり、同時にライバルでもある。ライバルと見てもらえてるかはわからないが少なくとも俺はそう思っていた。

「うーん、特になんかあったって訳じゃないのよ。ただ、アラシが現れてそれが『本隊』だったってだけ」

「本隊？」

知らない単語が出てきたことでも思わず鸚鵡返しに尋ねてしまふ。

「あれ？子犬ちゃん、知らないの？」

そんな不思議そうな顔をされても知らないものは知らないの
うしようもない。

「あー、そっか。子犬ちゃんにとっては初めてのアラシか」

俺が首肯する前に自分で結論に至った巨乳は得心がいったといっ
た風に頷いている。

「正確には、地場神ぢがみの店に来る前に煮物神にものの店で会いましたけどね
「むっ。どっちにしても今日が初めてって事じゃない」

少しブーたれたような顔になって見つめられると俺が悪いわけ
もないであろうになんとなく悪いことをしたような気分になるから
不思議だ。まあ、軽い上げ足取りっぽくなってしまった俺の発言は
とりよつによつてはいい気分はしないだろう。

「まっ、しょうがないわね。お姉さんが説明してあげる。元々、二
つ名のことをアロハの奴から聞くつもりだったんでしょ？ ついでに
それも含めて、ね」

アロハに目線を合わせた巨乳からは、こいつはこんな状態だしね
的な感じが込められている。

「じゃあ、お願いします」

特にアロハでもなくとも、説明をしてくれるならありがたい。

「と、言ってもあたしも又聞きの話とかも多いけどね。…うん、
何から話せばわかりやすいかな」

自分の頭の中で話の順序を組み立てているらしく少しばかりのひねり声を上げながら巨乳は考え込んでいる。

「まあ、いいや。さっき言ってた本隊から説明するね。わかんないことがあつたら聞いてくれればいいから」

「はい」

考えるのがめんどくさくなったのか、俺が最初に聞き返したことから説明することにしたらしい。俺としても事前知識はベン・トーにおける知識しかないので地域ごとの特性や、どのような二つ名がいるかもわからないので特に異議はなかった。

「んつとね、本隊つてのはアラシの集合体みたいなものかな？子犬ちゃんは煮物神の店でもアラシに会ったんでしょ。その時と比べて地場神の店の狼はどう感じた？」

「…強いと感じました。煮物神の店で会った連中と比べても。力とかそんな単純なものだけではなく、それ以外の部分を見ても」

これは実際に戦って思ったことだ。済んだことを掘り返しても仕方が無いがそれでも俺が放ったあの一撃は普通のアラシには予見されないといまでも思っている。

「そう、その通り。で、本隊について細かい説明をする前に子犬ちゃんに質問。アラシってどういう存在かわかってる？」

アラシについて。この質問の答えはYESでいいだろう。アラシという存在自体は地域ごとの特色もあるだろうが大まかにはかわらない。それでも復習を兼ねて声に出す。

「えっと。大会が近づいてきたときに練習量とかが多くなって、腹

を空かした学生が……」
「ぶつぶ」

俺の声は巨乳によってさえぎられた。

「アラシってのは学生限定じゃないよ。大会、もしくは試合が近づけば企業、道場といったところにいる人もアラシになるのよ。最も、社会人になると財力もついてる人が多いからアラシと呼べるまでに徒党が組まれるのはやっぱりほとんどが学生だけだね」

言われてはつとする。ただ、社会人になるとアラシになりになるだけで、社会人のアラシとて居ないわけではないだろう。

「ちなみに警察の柔道部とかは最悪のアラシとか言われてるよ。ただ強いだけじゃなくて、技術、連携、精神のどれをとってもそこらのアラシとは比べ物にならない……らしいよ。どこにでも現れる可能性がある上に実力も抜きん出てるからの最悪だね。更にいうと自衛隊は最強のアラシとか言われてる。近くに駐屯地がないって恵まれてるらしいよ。ここら辺は聞いただけの知識だけだ」

警察や自衛隊が徒党を組んでアラシとなってスーパーに現れる。

……うん、想像するだけでも絶望しかうまれない。ただでさえ強いアラシに最悪や最強なんて代名詞がついてる時点でその実力計り知れない。

「会いたくないですね」

「あたしもよ」

「……」

場は沈黙に支配される。俺にしても巨乳にしてもそれらが巻き起

こすスーパーの惨状を思い浮かべると二の句が告げない。

「さて、そんなスーパーを席卷するアラシなんだけど全ての狼がやられる訳じゃないわ。一部の、本当に一握りの実力者はアラシがでても弁当を手に入れられる。その限られた狼がここにはいたのよ」

流した。巨乳は何も無かったのように流した。俺としても蒸し返したい話題でもないし、聞きたい話しはまだ聞けてないので何も言わずに大人しく聞いておくことにする。

「クラーケン。それがその狼の二つ名よ。彼の實力は他の二つ名と比べても抜きん出ているのよ。だからこそアラシすらも退けていた。1度や2度ではなくね」

「……………クラーケン」

アラシすらも退けるその狼の二つ名を尊敬と畏怖の念を持ってつぶやいた。ここでアラシを続ける限りははずれぶつかるであろう敵であることを思うと体が熱くなる。

「そしてアラシたちはクラーケンが自分たちでは勝てない相手と知ったときに主に3つのグループに分かれたわ。1つは負けることを嫌ってこの地区をでて他の地区を荒らしまわる者に。もう1つは後塵を拝むことを選んだ。つまりは、クラーケンに遅れをとっても他の狼たちよりは強いわけだから弁当が手に入ればそれでいいってね」

戦略としてはそれもありだろう。そんなことをする狼は立派にはなれないだろうが彼らはアラシだ。個人としての力量よりも集団としての弁当の確保が優先される考え方はアラシとしては正しい。

「それで最後が敵わないなら敵うようになればいいという考えの下

に、大学の部活やらサークルの一部の実力者が手を組んでアラシが結成されたのよ。おそらくだけど、その垣根を越えてできたアラシの集団ってのは他にはいないんじゃないかしら？」

話を聞くだけでもおっかない。ただでさえ強いアラシが更に強くなってどうすんだよ、とか思わないでもないがアラシにそこまでさせるクラーケンってなにものだよ。

「そういった経緯で生まれたアラシが『本隊』って呼ばれるようになっていったのよ。それは今までのアラシとは一線を画した力をもつて狼たちをなぎ払っていったわ。クラーケンにやられていた鬱憤を晴らしていたんだと思うわ。今までを越える暴力が狩場を支配していたの。………思い出したくも無い」

心底嫌そうな顔を浮かべる巨乳もみるにそのアラシの狩場での有様は相当なものだったのだろう。だが、1つの疑問が生まれる。俺がさきほど地場神の店で会ったアラシからはそこまでの暴力的な感じは感じられなかった。むしろ、煮物神の店で出会ったアラシよりも紳士的だったと言えた。そこら辺のことを巨乳に尋ねてみる。

「でも、さっき会った本隊って連中はそんなに暴力的な印象をもちませんでしたけど」

「まあ、その辺は今から説明していくから大人しく聞いときなさい」
宥めるかのような声色で待てとばかりの手振りを示しながら巨乳は説明を続けた。

「彼らの力は途轍もなかったわ。その力がならばクラーケンすらも狩れる、そう狼たちはみんな思っていたのよ。それはあたしたち狼の完全敗北を意味していたわ。だから、あまりいい方法じゃないと

わかっていながらもクラーケンと本隊がかち合わないようにしていたの。アラシの暴力に支配される時代なんて真っ平御免だったからね」

実際にその場にいなかった俺にはわからないが、きっとその方法を選ぶときにはすごい苦渋を味わったと思える。それでも、アラシによる暴力に屈するよりはマシだという結論に達したからこそ、その方法を選んだ。俺がその時に狼だったら、アラシに負けることを是としたか、それともアラシから逃げることを是としたかはわからないがどちらを選んでも後悔しかうまれないと想像に容易い。結論をだしたことこそがこの狼の強さの1つだと感心した。

「けれども、そんな逃げの策なんて長続きしなかったのよ。元々、アラシよりも強かったクラーケンがそんな状態を許せるわけも無く本隊と戦うために動き出した。そして、去年の暮れに遂にクラーケンと本隊は出会ってしまったの。それによってクラーケンは負けてアラシの勝利を向かえる………はずだったわ」

「……………はず？」

「ええ、状況的にはクラーケンとあたしたちが束になってもおそらくは勝てなかったはずだけど。あたしたちは本隊に勝ったのよ。クラーケンが月桂冠を手に入れるという結果をもってね」

本隊に勝ったことはめでたいことのはずなのにも関わらず巨乳の表情は優れない。

「嬉しくないんですか？」

「嬉しくないわけじゃないわよ。この勝利によってこの地域には平和が訪れたのよ。そしてこの敗北をもって単なる力を集めただけでは狼に勝てないと思ったのか、少しずつ本隊も変わっていったのよ。元々、各部活での代表的な人が多かったからそれに気づいてからは

彼らは普通のアラシよりもあたしたち狼に詳しくなつて、アラシにはなかった戦術すらも組み立てるようになっていったのよ。本隊が解散しなかったのは、おそらくだけど、クラーケンを倒すという当初の目的が達成できてないからね。スポーツをやってる上で負けず嫌いつて重要だからね。負けっぱなしじゃ引き下がれないってことじゃないかな？」

「それがさつき会ったアラシなんですか」

「そうよ。実際にはもうちょっと色々とあつたらしいんだけど詳しくは知らないの」

弁当を手に入れるだけではなく、狼に対しても対抗心を燃やしているアラシ。敗北を経て力以外に精神をも練磨させて強者となった。簡単には倒せない相手だが、今までように暴力で支配していかない分だけ狼にとつてはマシな連中となったわけか。今の彼らにならクラーケンが敗れたとしてもこの地域がアラシに怯える日々が訪れることはないだろう。

「で、どうやって勝ったんですか？話を聞く限りではかなり分が悪い戦いだっただんですよね？」

そんな俺の質問に対して少し迷ったような素振りを見せた後に巨乳は語り始めた。

「戦場となつたのは煮物神のスーパー。そこでクラーケンと本隊は対峙したのよ。けど、そこにはもう一人、二つ名をもつ者がいた。それが守護妖精しゅごようせい、あたしたちは略して妖精って呼んでるけどね」

アハハ、と軽い笑い声をあげる巨乳だがその表情は硬く決して笑っているとは思えない。

「守護妖精、彼女は妖精の名が示すとおり小さな女の子なのよ。多分、子犬ちゃんと年もあんまり変わらないと思う」
「えっ!?!」

その事実は俺を驚かすには十分すぎた。俺と同じくらいの女の子が二つ名を持っているなんて、とここまで考えがいたったときに隣町で出会った双子の狼を思い出す。そういえばあの姉妹も俺と大して変わらない年齢で二つ名を得ていると。ひよっとしたらこの世界ではこれぐらいの年で二つ名を得るのは珍しいことではないのかも知れない。原作を思い出しても他にもギリ・ドゥーが今の俺ぐらいの年に二つ名を得ていたはずだ。そう考えると驚きが急に収まってきた。

「つまり、クラーケンと妖精の2人がかりで本隊を倒したって事ですね」
「えっ……。いや、まあそうなんだけどさ。もっと驚かないの?」

逆に巨乳に驚かれてしまった。やはり、この年で二つ名を持っているのはすごいことらしい。それでも、身近に他の例を知っている手前、驚きが再びはやってこなかった。戸惑っている巨乳を見ているとなんとなく悪いことをした気分になる。

「わー。俺と一緒にぐらいの年で二つ名を持つてるなんてすごいー。っていうかすごいー」

「……………」
「……………」

「……………わざわざ驚いてくれなくてもいいよ。ってかもっと自然な驚き方があるでしょ。なんかバカにされた気分よ」
「じめんなさい」

「どうやら俺はわざと驚くのが下手らしい。突き刺さる巨乳の冷えた目がきつい。」

「まあ、いいわよ。話続けていい?」

「あ、はい」

「それじゃあ、次は守護妖精についてね。彼女は狼ではないわ。…いや、狼として認められていない。だけでも豚ともまた違った存在なのよ」

「……………は?」

意味がわからない。彼女……………守護妖精は狼ではないのか?ならば何故?

「わからないって顔してるわね。そりゃそうよね。『礼儀を持ちて誇りを懸けよ』、狼の基本にして全てが集約されているその一文だけど、彼女にはそんな精神はないのよ」

ならば妖精は豚ではないのか?いや、豚にしては強すぎるのか?

「一番近い言い方をするならば フロースヴィトニル 悪評高き狼ね」

「フロースヴィトニル 悪評高き狼……………?」

また聞きなれない単語が出てきた。

「悪評高き狼と書いてフロースヴィトニルって読むのよ。フェンリルは知ってるよね?そのフェンリルの別名の1つよ」

俺はこくこくと頷く。フェンリルってのは北欧神話にでてくる怪物であり巨大な狼の姿をかたどっているとされている。

「伝承だと神々に災いをもたらすっていわれてるけど、この場合は災いをもたらされるのはあたたしたち狼ね」

「それでその フロースヴァイトニル 悪評高き狼ってのはどういう存在なんですか？」

あまり俺たち狼にとっていい存在ではないのはなんとなくわかるが、それでもどういった存在かはわからない。

「簡単に言うと彼らは豚のような真似はしないし、アラシのような特性もないし、狼のような誇りも持ってない。正確にはちよつと違うけどわかりやすいのは狩りの目的がすぐ変わっている人をそう言うわ」

そう言われてもあまりピンとこない。どれにも属さないからそう言われているのか？

「うーん、やっぱし分かり辛いか。えっと、ね。狩りの時間ってあたしたち狼って殴ったり蹴ったり投げ飛ばしたりするじゃない。そういうった行いに中には愉悦を感じる人もいるのよ。自分が強い、合法的に力を奮えるってね」

確かにそういうった人は全くいないとは言切れない。けども、思ったところで弁当を手に入れる過程の上では必要なことだ。合間を縫って弁当を取るような戦術を極めない限りは必ずとっていいほど必要だ。

「で、そういうった力に魅入られて溺れた者をそういうのよ。具体的には、もう戦えない狼に追い討ちをしたり決して褒められるような…いえ、やってはいけないようなことをするのよ」

ふつふつと俺の中で怒りが燃え上がる。俺にとって狩りの時間は

神聖なものだ、それを侮辱された気分がする。

「普通はそんな行いをすれば他の狼たちによって豚として始末される。けれども、中には逆に返り討ちにしてしまうほどの猛者がいるのよ。………そういった者たちが フロースワイトニル 悪評高き狼と呼ばれるようになるのよ」

言葉が出ない。ようするに フロースワイトニル 悪評高き狼とは始末できなかったからそういわれるようになったということはその地域の狼ではどうしようもないからそう呼ばれると知っているようなものだ。そんな存在がこの地域にいて、ましてや俺と同じくらいの少女と聞いては俺としては怒りと恐怖が混ざり合う。そんな存在がいるということに対する怒りと、俺と変わらぬ年にしてそれほどの力をもっているという恐怖。

「そんな難しい顔はしなくても大丈夫よ。彼女はまた フロースワイトニル 悪評高き狼とは言われてないわよ」

「えっ？でも、さっき」

「一番近い言い方って言ったでしょ。彼女はまたそこまでのことはしてないわよ。………ただ、彼女は向かってくるものには容赦はないの。そして、狼とは違った目的を持っているのは確かなことよ」「違った目的？」

「そう、それが何かはわからないけど、彼女は煮物神以外の店には決して現れない。煮物神の店になんらかの秘密があるのは確かよ。でなければ彼女の異常性は説明できない」

表情を陰しく変化させる巨乳。そこには怒りといったものは含まれていなく、悲しみに近い感情すら浮かばせる。

「彼女は最初から強かったのよ。初めて、ハイフライスラベリングタイム 半値印証時刻に現れたと

きに彼女は弁当を手に入れたのよ」

「えっ……………」

戸惑いが俺の中で生まれる。そんなことはあり得ない。1度経験すればわかるが全くの素人が初戦から弁当を手に入れられるような世界じゃないことは今までの経験でよくわかつている。初戦では弁当コーナーの前にたどり着くことさえ困難といえる。そんな中で弁当を手に入れるなんて。

「それが彼女の、妖精の異常性。普通ではない何か、おそらくは精神的なものによって付加された力があるわ。あの弁当が食べたい、って欲求があたしたち狼の力になるように妖精にもそういつた何かがあるってという意見はあたしたち、ここらの狼の出した結論よ」

巨乳の話には一応の筋が通っている。だが、だとしても当時、俺よりも小さかった妖精が狼を退けるまでの力とは何なのか。ひよつとしたら、それさえわかれば俺ももっと強くなれるのだろうか。

「1つ忠告しとくけどね。妖精みたくなりたいなんて思っちゃダメよ。1度、妖精に会えばわかるだろうけど、あれは……………」

そこまで言うと巨乳は突如として震えだす。

「絶対に、何かしらの負の感情よ」

そう震える声で言い切った。

第十五話 歴史の前編（後書き）

中途半端感が強い気もしますが、長くなってきたので投稿。続きは年明けに。せめて、アロハを目覚めさせてやりたかった。

オリ設定、大・爆・発なので好き嫌いが分かれると思います。それでも、やる。いや、やりたかった。

だから、一言。お願い、見捨てないてください。

第十六話 歴史後編

負の感情とはどういったものかと俺は考える。純粹に弁当が欲しい、それ以外の思いのことを言っているのだらう。そこに上乘せさせる力、簡単に言えば自分の好物や月桂冠の時には間違ひなく普段以上の力が出ている。後者のときは俺だけが受ける加護でなく、その場に居る狼全員が受ける加護なので結局は補正はなしと変わらぬのだが。

けれども、負の感情がもたらす力、単純に負の力が狩場におけるパワーアップを成し遂げる理由がわからない。もし、先ほどの悪評ローズウィトル高き狼ならば己の欲望、暴力を振るう、振りたいという思いが上乘せされている力となるのだらう。忌々しいことはなほだしだが。

しかし、巨乳の話聞いた限りでは守護妖精ゴセイリキョウにはそのような思いはないということだ。こちらから手を出さない限りは力を振るわなということとはそれが守護妖精の力となっているわけではない。

「勘違いとかじゃないわよ。…目を見ればわかる。あの冷え切った目を」

そう言われてもピンとこない。ましてや同年代と聞いているから尚更だ。

「そんなになんですか…?」

「そうよ。1度見たら、忘れないわよ。それにね、あたしたち狼を倒しから彼女は笑うのよ。満足げな表情でね。その場に狼が残っているか残っていないかじゃなくて、弁当を手に入れようとする者が居なくなつた時にね。その後にゆっくりと残っている弁当を眺めて、選んでいくのよ」

「えっ!？」

俺が驚きの声を漏らしたのは仕方の無いことだと思う。狼にとって半値印証時刻前の弁当選びは非常に重要なことだ。狩場においての戦闘力とは自身のポテンシャルによるものが大きな割合を占めているが、その弁当を食べたいという思いもまた大きな要素を占めている。自身が食べたいという思いがより強い弁当が残っているのならば、普段よりも強くなるのは狼にとって常識ともいえることであった。彼女はその加護を得ずにそれだけの力を発揮しているというのはそれこそ天才などではなく巨乳の言うとおり異常といった方が正しい気がする。

自身の能力、経験を元にそこから腹の加護（腹が減っているときに食べたいという欲求）、弁当への思い（どれだけその弁当を食べたいか）がどの状況でもつく、+ であり狼として生きていくのはこの想いの強さが大きければ大成しやすい。

しかし、妖精はその加護を受けていない。話を聞く限りではひよつとしたら腹の加護さえ受けていないのではという印象さえ受ける。基本能力にしても俺と同じ年くらいならば不利なのは明らかだし、最初から強かったということは経験則ということもない。

と言う事はそれ以外の要素に妖精の強さの秘密がある訳だが、この3つの部分で勝敗はほとんど決するといってもいいほどの割合を占めていると言える。ならば何が彼女をそうさせるのだろう。

「…ガリー・トロット」

「ん?なにそれ子犬ちゃん？」

「あ、と。何でもないです」

「？」

巨乳は不思議そうな顔しているが詳しく説明することもできない。まさか、この世界のことを知っているなどとは言えない。言っ

まったらたちどころに精神病院送りとなってしまうても仕方が無い。さて、オルトロスが存在していたということはガリー・トロットも存在すると考えて間違いないだろう。最もガリー・トロットという狼は未だ存在していないのだが。今は山木柚子やまき ゆずという名も無き狼の1人だろう。彼女がその頭角を現すのはビッグ・ママと呼ばれる半額神の店をホームとしてからなのだから。

今俺がガリー・トロットを思い出しのにはちゃんとした理由があった。先ほどあげた3つの要素以外の部分で補正を受ける状態というのはいが、補正值が微々たるものだったり特殊な条件下のであったりの制約がある。その中で毎回、その補正を受けて上昇率にも目を見張る狼といえばガリー・トロットしか思い至らない。

ガリー・トロットの力のもと乙女パワーともいうべき恋心であった。本人は無自覚ではあったがビッグ・ママに恋する気持ちもビッグ・ママの愛が詰まった半額弁当に対して実力以上のものを発揮させていた。

妖精も煮物神の店にしか現れないということは、おそらくではあるが煮物神の店でしかそのポテンシャルを発揮できないと思う。ただ、俺と同じくらいの年の子が煮物神に恋をするかと言えば全力で否と否定できる。ならば、他の要因ということになるがそれが何かは皆目と見当がつかない。ひょっとしたら、煮物神の店でしか力を奮えないというのも勘違いなのではないかとふと思ってしまう。

「まあ、とりあえず妖精に会うことは無いと思うから気にしなくてもいいと思うわよ」

巨乳は何気なく言ったのだろうが俺には寝耳に水だった。俺はこれから6月になったら現れるであろう強敵のことを恐れていたのはなんだったろうだろうか。

「あたしもよくわからないんだけど。クラーケンと一緒に本隊を倒

してからしばらくすると姿を見せなくなったのよ。その直前までは変わりなかったから、引退って訳でもなさそうだしね」

「つまり、出会うことは無いだろうと……？」

「うーん、絶対とは言えないけどね。狩場に現れたのに理由があるのは確かだろうし、だとしたら狩場から姿を消したのに訳があると思うのが自然よね」

消えた妖精。その意味はわからないがそれは妖精にとって意味があるものだったのだろう。

「妖精は姿を消して、クラーケンは姿を現すことが少ない。今、マスター・スプリングの店で争っている狼の中から新しい二つ名が生まれるの決定的なことよ。………その場に加われなくてあたしは悔しいわ」

ギリツと唇をかみしめる巨乳の思いは狼として経験の浅い俺でもわかる。二つ名を得る絶好の機会だというのにその参加券さえ得ることのできない自分に腹ただしくも、情けない。

「あ……れ？」

「ん？どしたの子犬ちゃん」

ふと、地場神の店で行われた会話を思い出した。

「雷電ってのはこの二つ名じゃないんですか？」

巨乳の話を聞くに、二つ名として活動中の者がいないから新しい二つ名が生まれると言っている様なものだ。だとしたら、本隊にやられる前に聞いた3つの二つ名はなんだったのだろうか。『クラーケン』、『守護妖精』、そして『雷電^{らいでん}』。雷電というのが二つ名な

のかその略称なのかまではわからないが、二つ名持ちの実力者であることは間違いないだろう。だと、したらこの地域には二つ名がいるのだ。新しい二つ名が生まれる可能性は零でないにしても決定的とまでは言われぬはずだ。

「あー、そこら辺も知らないのか」

そっか、そっかと言いながらうなずく巨乳だった俺にはそれは理解できない。

「雷電はね嫌われ者なのよ」

ただ一言、簡単に言い放った。

「えっと、それだけですか」

「そう、それだけ。正確には嫌われ者というよりも狼として認められてないってことだけだね。ただ二つ名を持っているだけの実力者であることは間違いないわよ」

狼として認められていない。それは先ほど語られた妖精のような行いをしていうことだろう。そう考えると怒りと負けられないという気持ち湧いてくる。同時に新しい二つ名の誕生を望む気持ちも強くなっていく。二つ名持ちとなればその地域の顔であり、代表でもある。そういった人物が狼として認められないような人物しかいないとは情けないやら、悲しいやら、とてもよい感情はもてなかった。

「あ、言っとくけど。妖精とはまた違った意味での認められないよ。彼は戦場では立派な狼だしね。彼が認められないのはまた別のことが要因なのよ」

俺は巨乳から伝えられる事実によって拍子抜けする。せつかく、雷電倒すべし、といった感じで俺の気持ち昂ってきたタイミングだったのでそれは尚更と大きい。巨乳が立派というほどならば相応の戦い方をするのは明らかだ。ならばなんで雷電は狼として認められないのだろうかという疑問が湧いてくる。

「それはね、雷で…」

「言わなくていい！それは犬っ子が雷電に会った時に自分で決めるはずだ。雷電を狼として認めるか、認めないかは」

俺の表情から疑問を嗅ぎ取った巨乳が説明を始めようとしたときに大きな声によってそれは遮られた。声がしたほうを見るとベンチに横たわっていたアロハが起き上がっていた。

「やっと起きたわね」

「アロハさん、大丈夫ですか」

突然の大声には驚いたが、アロハが起きて声をあげていると確認するとそれよりも無事だったことに安心する。

「ああ、ちーつとばかり酷くやられただけだよ。こんなことで一々、心配してちゃ狼としてやってけんぞ犬っ子」

肩をコキコキとならしながらアロハは応える。

「心配してあげてるのになんですかその言い草は」

「あいつなりに照れてんのよ。まあ、大丈夫そうで安心したわよ」

「まあ、な。ぶっちゃけちまうと、とっくに目は覚ましてた。お前が犬っ子に説明してたみたいだから任せようかと寝たふりをしてた

「ただだしな」

悪びれもせずと言うアロハだったが、俺はその時に巨乳の眉尻がピクツと動くのを確かに見た。しかし、アロハはそれに気づかずに揚々として語り続ける。

「正直、あんま説明って得意じゃないんだよな。めんどくさいし。変わりにやってくれるんなら楽でき……じゃなくて、話の腰を折るのも何だと思ったからな」

「へえ、そう」

いつもより明らかに冷えた声にアロハも気がついたのか恐る恐るといった感じで巨乳のほうを見る。しかし、巨乳はあえて気づかないふりをして俺に話しかけてきた。

「子犬ちゃん。説明ばかりしてたけど、お腹減ってきたよね？実はさっき、地場神のスーパーでお握りを買っておいたの。休憩を兼ねて食べましょ？」

何時の間には思ったが、確かに腹は弁当を食べ損ねて減っている。これ幸いと思っておくこととした。

「ありがとうございます」

「いや、気が利くね。ごっそさん」

そう言って手を伸ばすアロハだったがその手は空を切る。アロハの手を避けるようにお握りの入った袋は動いていた。

「……………」

「……………」

無言で見つめあう2人。その均衡を先に崩したのは巨乳だった。朗らかな笑みを浮かべて指先をアロハのほうへ向けて一言。

「あつちにコンビニあるわよ」

訂正、巨乳が指差したのはアロハではなく、その先にみえる『サクル系』という名のコンビニだった。

「……………」
「……………」

再び見つめあうアロハと巨乳。そこにはロマンなど存在しなかった。

「ふっ」

気障な笑いをもらすアロハ、彼の次に台詞がこの場を左右するだろう。

「楽しようとしてすいませんでしたっ！！」

今まで聞いたことの無いような大きな声をあげるアロハ。その頭は見事としか言いようの無い角度で下げられている。これほど見事なもの俺は前世を含めても見たことがなかった。その美しさに一瞬ではあるが目を奪われた。

「ん。わかればいいのよ。後のことは子犬ちゃんに説明してくれるわよね？」

「勿論でございます」

情けないとは思わない。逆の立場なら俺もそうしただろう。俺たち狼は空腹を力とする分、空腹であれば食べ物を求める気持ちは人一倍強い。強くなくては狼としてやってはいけない。

「それじゃ、はい」

そう言つて、巨乳は袋の中からお握りを取り出す。きつちりと三角に結ばれて海苔と包装用のフィルムターに包まれていたそのお握りは角の一箇所から海老の尻尾が覗いていた。天むすだった。

それを見たアロハの顔は喜色に包まれ………なかつた。差し出された天むすを手に取りうつともせずに固まっている。

「どうしたのよ？食べないの？」

急かすような巨乳の声に対してもアロハはお握りに手を伸ばさずとしない。苦悶の表情さえ浮かべなにかに迷っているようだ。やがて、意を決したようであロハは口を開いた。

「俺にはな、狼をやつていく上での重大なハンディキャップがあるんだ」

突然、全く違う話題を話し始めたアロハ。だが、その顔つき、話の内容は決して軽いものではない。これから語られるであろう内容に俺はごくりと唾を飲んだ。

「エビアレルギーなんだよ。正確にはエビとカニだがな」

「えっ」

「っ!」

アレルギー持つてるといふことのハンディキャップは想像だに恐ろしい。弁当にエビ・カニが使われているだけで戦いに加わることもすらできなくなる。たとえ他のものが好物だろうと、半額弁当を食べ残すという選択肢など存在しない。俺とて半額弁当を残すしかないとわかつているのなら、涙を飲んで諦めるしかないだろう。悲惨なのはもし月桂冠にエビかカニが使われていた場合だ。狼がのどから手が出るほど欲する月桂冠を目の前にしてもその狩りに参加できない悔しいさは経験者しかわからないだろうが、それでも考えるだけでも絶望しか浮かばない。

自らのアドバンテージを伝えるといふことは難しい結論だったろう。ただ、梅が食べたいとかそういう理由でわがままをいふと選択肢もあつたらうにアロハは話すことを選んだ。………決して、巨乳を再び怒らすことが怖かったからではないと思う。………思いたい。それだけの信頼を俺たちにくれてくれているといふことだ。思わず、目頭が熱くなるのを感じる。巨乳も同じだったようで差し出していた天むすを袋に戻すと新しくツナマヨのお握りを取り出した。

「わりいな……」

「気にしないで。秘密にしとくから」

「俺も」

「あんがとよ」

短い会話を交わした後は、沈黙に包まれる。俺も巨乳からお握りを受け取る。鳥五目だった。

「……いただきます」「」

いつものように3人の声がそろって食前の挨拶が俺たち以外に誰も居なかった公園に響き渡った。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさま」

「ごっそさん」

それぞれの食後の挨拶を終えるとアロハが俺へと向き直る。つられて巨乳も俺のほうを見る。

「さて、と。じゃあ、ここからは俺が話すぜ。と言ってももう話すことなんて雷電のことぐらいしかないがな。…だがな、俺としては雷電については犬っ子自身の目で見て判断して欲しいと思ってる。」
「つまり、話すことはない」と
「わかりやすく言うとそう言うことだな」

説明を引き継いでそれはどうだろうと思う。俺だけではなく巨乳もアロハをジト目で睨んでいた。

「そんな目で見るなよ…」

「だって…ねえ」

「はい。せめて言わない理由ぐらいは言っただけで貰わないと」

「わかったよ」

ふうと1つため息をついた後にアロハは喋り始める。

「簡単なことは聞いただろう。雷電が狼として認められていないってな」

「はい」

「けどよ、それは全ての狼の共通した意見というわけでもねえ。あいつは豚じゃねえし、今はちゃんとした狼だ。だからよ、俺は嫌なんだよ。友達が認められねえってのはよ。今ここで語るのは親雷電派とも言える俺に」

そう言っつてアロハは巨乳を見る。

「あたしは…狼として認めてるけど。わざわざ擁護しようとは思わない」

「そうか」

少し悲しそうな目をしたアロハだったがすぐに話を戻す。

「というわけで、一応は雷電を認めてる巨乳がいるわけだが。俺としては偏見を与えるようなことを言わないで実際に会った時に決めて欲しいと思っつてんだよ」

「会えばなんで認められていないかがわかるってことですか？」

「ああ、見てわかるはずだ。わからなくても狩りの時間になれば絶対にわかる」

真剣な眼差しで俺を見つめるアロハに俺は思わず頷いてしまう。

「…そうか、あんがとよ。できれば犬っ子にも狼としての雷電を認めて欲しい」

ぎこちないながらも確かに笑っているアロハがそこにはいた。

「ところで、なんでそこまで雷電に入れ込むんですか？」

俺が発した疑問は当然だろう。反雷電派というのは話を聞く限り

親雷電派よりも圧倒的に多いだろう。その中でなんでアロハはここまで雷電の為に動くのか。

「ああ、それはな。雷電が俺の親友だからだよ。つっても、あいつと親しくなったのは最初は同じ大学であいつが狼であることが許せなくて突っかかってからだがな。今では間違いなく俺の1番の親友だ」

「「えっ!?!」」

アロハの言葉に俺と巨乳は同時に驚きの声をあげた。親友、最初は突っかかってというところではない。親友というならばかばうのもわかるし、最初は突っかかってというのもそういうものだろうと納得できる。だが、だがしかし。

「大学生…?」

「ん、ああ。言ってなかったか?」

「冗談よね…?」

アロハが大学生など到底信じられない。そもそも大学生が毎日のようにアロハを着ているか?

「……………お前ら俺をなんだと思ってたんだよ」

「フリーター」

「あたしはパチプロかなんかだと…」

俺と巨乳は即答する。答えこそ違ったが巨乳のその答えは俺を十分納得させるものであった。むしろ、成る程と頷いてしまいたいくらいであった。

アロハを見るとプルプルと震えている。拳は握り締められていて、怒りの震えていることがわかる。

「おっ、お前ら——！！！」

アロハの絶叫は公園内に響き渡る。俺と巨乳は怒れるアロハから逃げるようにして公園を後にした。

第十六話 歴史と後編（後書き）

新年明けましておめでとございます。更新ペースは相変わらずだとは思いますが。

名前だけ登場の二つ名たち。今はまだアラシが横行しているので出番は何時になるのか。それは作者すら知らない。

なんか独自考察がどんどんと増えていつている。だが、自重はしない！自嘲はしますが。

こんな作者ですが今年もよろしくお願いします。

第十七話 アラシの中のとある一日

「アラシは続くか…」

教室の窓枠にてを組みながら空を見てつぶやく。

「何言ってるんだよ、真しん。晴れてんじゃん」

後ろから声をかけてくるのは小学校からの親友である政志まさし。政志の言つとおりには雲一つ無い快晴とよべるだろう。もう1ヶ月もすれば梅雨の真っ只中となり、こういった空を見る機会も減っていると思つと今のうちにしっかりと日差しを味わっておこうなんて思える。

「天気のことじゃないんだよ」

「はあ？嵐は天候だろ」

「まあ、そうなんだけどね。俺が言ってるのはその嵐じゃないんだよ」

「訳わかんねえ」

俺が言うアラシとは天気のことではなく、狼たちが日夜、半額弁当を求める狩りの場スーパーに出現するアラシのことだ。狼でさえない政志にとつてスーパーにはお菓子やアイスを買に行くくらいであろうから無縁の悩みだ。そんな政志の顔を見ているとなんとかため息が漏れた。

「なんだよ、ため息までついてよ…」

「あはは。きつと高城君たかぎは心の中が嵐だつて言いたいんだよ」

斯波^{はし}さんが話に加わってくる。

「どつという意味だよ？」

「悩んでるって事だよ」

「そうなのか、真!？」

ぐるん、と顔をこちらに向けてくる政志。

「おまつ、悩んでるなら俺に言えよなっ!力になってやるからな!」

ぐつと拳を握り締めて俺の前で熱く語る政志だが、俺はまだ悩みがあるなど口にしていない。確かにあるが、俺が決着をつけるべきことだし、政志にはどうしようもないことだ。というか、話して着いてこれだけでもしたら邪魔になるだけだろう。

「いや、別に悩んでないよ」

そう判断した俺は笑顔で否定する。

「ぬっ、ないのか」

あっさり騙される政志。楽でいいが少しばかり将来が心配になる。

「違つみただぞ、斯波さん」

「きつと高城君は悩みを話すのが恥ずかしいんだよ」

「……………なっ!」

あっさり騙されていた政志が愕然とした表情で再び俺のほうを向く。

「水臭いぞ。俺とお前の仲じゃないか！何を恥ずかしがってるんだよー！」

さつきよりも俺に近寄り激しく俺を攻め立てる政志。そこまで言うならばなぜ付き合いの長い俺ではなく中学で知り合った斯波さんの言うことを信じる？正直、暑苦しい。

「お前は俺が困っていたときにいつも手をさし伸ばしてくれたじゃねえか！俺にはさし伸ばすことさえさせてくれねえのかよ！？校長の銅像にサングラスと髭を書いちゃったときも、一緒に後始末してくれたじゃねえか。あの時の借りを返させてくれよ！」

あの時は『先生から海野君1人だと絶対に、途中で投げ出しちゃうから悪いけど高城君も一緒にやってもらっていない？』と頼まれたからだ。そうじゃなければ手伝わなかった。それに、サングラスと髭のいたずら書きは定番だが、自分の教科書だけにしとけとあの時は思ったな。

「……………これが優貴先輩が言う男同士の友情。確かにちよつといいかも……………」

熱くうるさい政志の声以外にもなにかをぶつぶつとつぶやいている斯波さんの声が聞こえる。かすかに聞き取れたその台詞は斯波さんが新たな世界への扉を開けようとしてる確かな証拠だった。まずい、絶対にまずい。直感が告げている、このままではダメだと。

「政志、暑苦しい」

「へ……………」

正直者の政志はこういった正面からの言葉に弱い。心は痛むが、斯波さんが新世界への扉を開ける前にどうにかしなければならぬ。現在においては多少傷つけることになるのは仕方のないことと割り切る。

「いや、俺は真の事を考えてだな…」

「だから、暑苦しいってば」

確実に傷つきつつも、なお諦めない政志にもう1度言う。今度は先ほどよりも一字一句丁寧にしっかりと言い放った。がっくりと膝から地面に崩れ落ちる政志。すまん、他に優先することがあったんだ、と心の中で謝っておく。

「ちよつと、高城君」

振り向くと斯波さんが私怒ってます的な顔で俺を見ていた。

「仲良くしないとダメじゃない！」

どうやら斯波さんは俺が政志をいじめたと思っているようだ。まあ、まさにそのとおりなのだが、俺は反論を試みる。

「いやいや、これが俺たちなりのスキンシップなんだって」

「えっ…でも」

政志を流し見る斯波さん。

「そつだろ、政志っ！」

「え…あ、うん」

「ほらね」

膝を突いたまま返事をする政志だが俺が強い口調で言ったからついついとつられて頷いてしまっただけだろう。だが、今はそれで構わない。言質さえとってしまえばあとはどうとでも押し切れる…はずだ。

「でも…はっ。そういえば優貴先輩の読んでる漫画の中にもこんなシーンがあったよな。あれは確か、好きだからついついいじめちゃうんだったよね。じゃあ高城君は…」
「ストロップ!!」

今までに無いくらいに大きい声をあげて斯波さんの独創を妨げる。このままでは俺が非常に不名誉な事態に陥ってしまう。

「斯波さん。違うからそれは絶対にあり得ないから!」

少々…いや、かなりむきになって否定する。そんな俺に対して斯波さんは天使のような微笑を浮かべた。

「わかってるよ。高城君は照れ屋だもんね」

顔は天使のようであつても俺にとっては死神の宣告と変わりなかった。

「いや、ちが…」
「いいの。大丈夫だよ」

慌てて否定しようとするが、途中から笑顔を崩さないまま…いや、より素晴らしい笑顔となっている。

俺は理解した。今の俺では斯波さんの考えを改めさせることがで

きないと。理解すると途端に急激な虚無感に襲われる。俺は虚無感に身を任せ、膝から崩れ落ちていく。

白昼の教室に向かい合ったオワタのポーズをした男子というシチュールな光景が誕生した瞬間だった。次の授業である数学の小野先生（51歳、バツ3）の「今日はカウンセリングの先生が来てるから放課後に行つて来なさい」という言葉が心にしみた一日だった。

あとになって斯波さんが会話に加わってきたのは今日こそは政志を異文化研究部に連れて行こうと思っていたからであり、「放課後に用事できちゃったなら今日も無理だね」という台詞を聞いたときには厄日ってあるんだなと実感した。

放課後は政志と2人でカウンセリングを受けていた。俺としては受けたくなかったし、別にになにか相談したいことがあるわけでもなかったが、政志に引きずられるように相談室へとつれてこられた。

そこで、あるうことが政志は俺が冷たいということを見せない饒舌なしやべりでカウンセラーの先生に訴え、それに対して先生も「うん、うん」と頷いた後に俺をさとするかのような説教を始めたのだった。

正直に言えば何を言われたかなんて覚えていないが、最終的には「政志君ともっと仲良くしようね」で終わったのはよかつたといえるだろう。おそらくだが下手に反論をこころみていればより長い時間の説教が待っていたと思う。

相談室から出てきたときは上機嫌な政志を隣に俺は隣で肩を落としていた。

ズルズルと家で首領兵衛どんへえをすすする。今日もまたアラシによりスーパーを荒らされ、半額弁当は残さず、アラシのものとなった。煮物にもの神の店でも地場神じばがみの店でも半値印証時刻ハーフプライスラベリングタイムが終わった後には倒れ伏す狼の姿が見え、戦力差をまざまざと痛感させられた。不幸中の幸いといおうかあれから本隊と呼ばれるアラシの集団に会っていない。まあ、普通のアラシにすら敵わないのならどっちに会おうが変わらない気もするが。

「減ってるよな」

首領兵衛どんへえに入ってるお揚げを食べながら、狩場となったスーパーを思い出しつぶやく。当然、首領兵衛どんへえのことではない………確かに減ってはいるが。減っているのはアラシではなく、狼だ。最初にアラシが現れたときから息巻いていたのが見て取れた狼たちは日が経つごとに1人、また1人とスーパーから姿を消していった。アロハいわく、「アラシが終われば、また戻ってくる、いつものことさ」とのことだがそれでもアラシを前にして一緒に戦う狼たちが減っていくのに複雑な感情を覚える。

諦めるのも1つの選択だとわかっていながらも、それでも狼たちにはアラシに挑んで欲しい。これは俺が思う狼という理想を押し付けているだけだろうとは思うが、やっぱり他の場所を狩場に選ぶのではなく、狼としての活動を休めることも無く、いつも自分たちがホームとしているスーパーで戦い続けて欲しいと思ってしまう。

だからか最近では煮物神の店に行つてアロハと巨乳が居ないと

もしや　　と思つてしまふ。大概は地場神の店に行けばいるからそのときはひそかに安堵のため息をもらしていたりする。アロハが言うには「さすがにアラシと2戦目で勝てるとは思つてねえよ」と言つた後に巨乳が引き継いで「だから、よりお腹が減る時間に半値印ラベリングタイム証時刻を選ぶことが多いわよ」と言つていた。

確かに、理論的ではあると思う。ただでさえ強敵であるアラシに1戦目で消耗した後にもう1度挑むなど勝利を望むべくも無い状態だ。けれども、俺はここ毎日煮物神の店と地場神の店の両方に顔を出している。

経験が欲しいのだ。俺には圧倒的に経験が足りていない。弁当を手に出れない悔しさは2重に襲つてくる変わりにアラシとの戦いの経験が俺の体に蓄積されていつている。実際に身体能力の急激な向上は見込めないし、対アラシ用の戦闘スタイルの構築などもすぐにはできない。だから、1番手つ取り早くアラシが居る中で半額弁当を手に入れるために俺が必要だと思つたのが経験だ。アラシと戦つてきてわかつたが狼戦で培つた経験では対応できない場合が多い。

狼のタイプは俺は大まかに3つあると思つている。

1つ目は突撃タイプとでも呼ぼうか。大体の狼がこのタイプに属すると思つている。細かい違いはあれど弁当に向かつて突き進み、それを阻むものを攻撃していく。簡単に言えば正面からの正々堂々とした正攻法のスタイルといえよう。オルトロスのように武器を持つたり、相手が攻撃してこない限りは弁当のみを狙うカウンター型の狼でも基本的にはこのタイプに属すると思つている。

2つ目は原作で言うとおしろいはなおしろいはなと白粉花やギリ・ドゥーが取る戦法だ。隠密タイプとも言える彼女らのスタイルは戦闘には参加せずに狼たちの戦いの隙に出来た死角を利用して半額弁当を目指す。前者が攻撃的なスタイルなのに対し、こちらはあまり攻撃力を持っていない狼が良く使う戦い方だ。しかし、これを行うために狩場全体を見通せる視野が必要であり、誰にでも出来るというわけではない。とは言つても全ての狼たちの目から逃れることなどはまず無理だから最低

限の防御、回避スキルは必要だ。全体的な数は少ない。

最後は機動タイプといったところか。原作で該当するのは魔導士ウィザードにサラマンダー、主人公である佐藤洋サトウヨウも時折この戦い方をする。狩場において縦横無尽に動き回り半額弁当を手に入れる。時には狼、時には壁や天井と言ったものさえも足場として自らを弁当コーナーへと向かわせる。ただこのスタイルは、弁当コーナーまでどうやってたどり着くかの発想力、動きが限られる空中に居る間に来る攻撃に対する対応力、道の邪魔になる狼を瞬時に戦闘不能にする攻撃力、狩場全体の動きを読む戦略眼などが必要とされるスキルは多い。しかし、全体的な数としては隠密タイプよりも多い。ただ、それを機動タイプと呼ぶかどうかはわからないぐらいの習熟度ではあるが。

「あつ、首領兵衛どんへえが冷めてる」

少しばかり考えにふけり過ぎたらしく、手と口は動きを止めていて首領兵衛どんへえは冷めていた。残っていた麺と汁をズズツツと一気にすり上げる。

「……っと。ごちそうさまでした」

やはりあったかいほうが美味しいな、と思いつつも完食する。アラシが現れてからは晩御飯は首領兵衛どんへえばかりだった。いい加減ほかのカップめんにしようかな、なんて考えが頭によぎる。

さて、腹も膨れたところでアラシ対策の脳内会議を再開する。

先ほどわけたタイプの中ではアラシは言うまでも無く突撃タイプに分類される。だが、狼よりも比べようが無いほどに高い突撃力と耐久力を備えていた。立ちほだかる狼を吹き飛ばし、狼たちの攻撃を何するものでもなく平然と受けて反撃してくるその様は脅威だった。だが、小回りやとっさの連携では間違いない俺たち狼の方が上

だった。

そこを利用するのが1番だとは思うが、今の俺では何も思いつかない。連携にしたって誰とでもすぐに動きを合わせられるほどに経験はなかった。目を合わせただけで動きを合わせられるのはアロハと巨乳だけだろう。他の狼とでは微妙にまだかみ合わない。だがそれも、ここ最近では煮物神の店でアラシという強敵に挑み続けているおかげが以前よりは明らかに連携攻撃は上手く出来ている。残念なことこれといった戦果をあげてはいないが、それでも最初にアラシに会ったときみたいは何もすることができずに無惨に散っていくようなことにはなっていない。

結局は俺が少しばかり強くなったとてアラシを前にしたらそれは大した意味を持たないというのが、ものすごく悔しかった。今日とて いや、やめとこうか。負け戦から学ぶことも多いが、敗北の味である首領兵衛どんべえを食べた後では余計にむなしさがあふれる。イメージトレーニングは明日の授業中にもすればいい。こういつたときに転生者という利点は発揮されると思うが、毎回毎回と授業を聞いていないなんて2度目の人生だけど真っ当に育つのかなあと自分のことが心配になる。

「まっ、今は将来のことよりもアラシのことだな」

自分をごまかすように声を出した後にはせめて宿題はしっかりやっておこうと自分の部屋へと俺は戻った。

寝る前に母さんから来たメールの『ちゃんとしたものを食べてる？』という一文を前に俺は携帯を手に苦笑いすることしか出来なかった。せめて心配しないように『大丈夫だよ』と嘘のメールを送ることに少しばかり心が痛んだ。

「とりあえずサラダを買ってこよう」

カップめんばかり食べている時点で食生活は悲惨なものとか言えなかったが、何もしないよりはマシだろうと俺はコンビニに出かけたのだった。

第十七話 アラシの中のとある一日（後書き）

アラシ編が終わらない。これで6話目か。5話ぐらいで終わると思ってたのに……！10話以内にはなんとか終わらせたいなあ。

このままでは原作以上にアラシの存在感が大きくなってしまっ……汗

第十八話 再会のアラシ

5月も今日で最後となる。いまだ俺たち狼に白星の日はなく、黒星ばかりが増えていつていた。毎日、毎日とアラシと争っていると不意に俺にはわからなくなることがある。

俺は半額弁当を手に入れたいのだろうか、それともアラシを倒したいのだろうか。どちらにしても結果は同じかと思うかもしれない。しかし、実態は大きく違ってくる。

前者は狼としての正しい姿だ。しかし、後者は違つと俺は思う。後者は狼はアラシに負けないという結果が欲しいからであつて、弁当を手に入れるのは俺ではなくともいいわけだ。本来、こんな気持ちで狩りに望むなんて事はありえない。簡単に言えば半額弁当を手に入れなくてもいいと考えて戦つていふことになる。

けれども、自然と頭の片隅で考えてしまつ自分が情けない。それだけ俺にとっては半額弁当は狼の為にあるべきという考えが強かつた。原作を知つていふからだろうか。

選民ぶつた考えだとは思ふ。それでも半額弁当に相応しいのは狼だと俺は思つていふ。

だから、どうしても半額弁当を守るといふことを優先してしまふのだ。

「はあ。どうしたらいいんだろうか？」

「なにに？高城君はまだお悩み中？」

なんとなくつぶやいてしまつただけだったが、近くにいたのか斯波さんが俺に話しかけてくる。

この間も教室で悩んできたときに斯波さんは話しかけてきた。結果としては政志とともにカウンセリングを受けるといふことと、斯波さんが新しい世界にたどりついたという俺の胃を痛めることにし

かならなかつたわけだが。

それでも悩みにのってあげようという純粋な行為は無下にできるわけでもなく、かといって相談に乗ってもらおうようなことでもなくてどうしようかといったところか。

「言ってくれなくちゃ、わからないんだけどなあ。それとも言いたくないことなのかな？」

「まっ、そんなところだよ」

実際には言ってもどうしようもない上に、理解されないものなのだから正直に言わずに言い繕う。

「高城君が言いたくないなら無理には聞かないけど、時間が経てば解決とかはしないの？」

「それは……………」

思わず俺は言いよどむ。斯波さんの言うとおり時間が経てばアラシはスーパーから消える、つまりは悩みが無くなるということだ。が、それでいいのかと聞かれたら俺は返答に困ってしまう。

今のままアラシが去ってしまえば、半額弁当を守りきれなかったという事実が残ってしまう。それは守る戦いをしている俺にとって敗北を突きつけられるのと同意義だ。

それに、アラシ 正確には本隊にいる1人のアラシ は俺の渾身の一撃を食らわせたのに、それでも足を止めるにはいたらなかつた。

格が違うと簡単には諦めたくない。あのアラシは半額弁当とともに俺の自信と誇りまでも奪っていった。

このまま引き下がるなんてことはしたくないし、たとえ敵わないまでも半額弁当を渡さない。それぐらいの意地は見せておきたかった。

そして、明日からアラシがいなくなるわけではないが今日まで共にアラシと戦ってきた狼たちとの共同戦線は今日で終わりを告げる。別に今日を境に諦めるわけではない。ただ、明日からは『マスター・スプリング』と呼ばれる半額神のもとで日夜、半額弁当を求めている狼が帰ってくるのだ。

俺は彼らの実力は知らないが、今いる狼よりは上というのは間違いないだろう。そして、何より二つ名を持つものがあるのだ。流石に二つ名持ちがいて、なす術無くやられるなんてことはないだろう。…無いと信じたい。

どっちにしても俺たちの誇りを見せるならば彼らの力に頼ることなくやっつてのけたい。その為のチャンスは今日で最後なのだ。

「高城君…?」

思わず思考の渦に入り込んでしまっていた俺に斯波さんが話しかけてきた。しっかりとした返事も返さずにいたのだから当然だろう。

「あ、ごめん。ちょっと考え事してた」

「ちゃんと人と話してるときはちゃんとしなきゃダメだよ?」

少し起こった風な感じで俺に対して斯波さんは言う。だが、本気で怒ってはいないだろうとわかる。

「うん。気をつける」

「そう?じゃ、あんまし考え事の邪魔しても悪いから行くね。…できれば相談して欲しいんだけどね」

少し顔に笑みを見せた斯波さんは俺から離れていく。しかし、その歩みを不意に止めて振り返った。

「そうそう。アラシのことならもつすぐ終わると思っよ」「え……」

思わずと俺の口から声が漏れたのも仕方ないことだろう。

斯波さんにはこの間に悩んでるときにアラシという単語を出してしまったときに、心の嵐が吹いている…つまりは、悩んでる比喩的な表現だと解釈していた。

しかし、今回のイントネーションは間違いなく俺が、俺たちが戦っているアラシのものだった。

「それじゃあ、ね」

「あつ、ちよつと」

「ん？何かな」

教室から鞆を持って出ようとしている斯波さんはおそらくだが家に帰るのだろう。そんな斯波さんを俺は思わず引き止めてしまったけれども、それでどうするというのが。斯波さんがその単語を知っているのなら、狼の可能性は高い。しかし、確証を得られているわけでもないし、なんとたずねればいいのかも分からない。

正面から斯波さんは狼なのか、と聞くなんて違ったときが怖い。

「えつと、また学校で」

「うん」

結局、俺は斯波さんに聞くことも出来ずに別れの挨拶しか出来なかったのだった。

斯波さんのことは気にはなつたが、今はそれよりも半額弁当の方が大事と割り切り、スーパーへと来ている。

スーパーに入ると同時に鋭い狼特有の視線が俺に向かって浴びせられるが、平時に比べてその数は少なく心なしか眼光にもいつもより覇気が感じられなかった。

それもまた仕方ないことかと思うが、以前の突き刺すような視線が懐かしく思えてくる。

アラシの姿はまだ見えないがそれもいつものことであつた。彼らは半額弁当を根こそぎ持つていくために、狼のようにじつくりと獲物を見定めて、己を高めるようなことをする意義は薄かつた。

狼ならば悩みぬいた上にこれという弁当を決めてその弁当を食べたいという思いを活力源として自身の戦闘力の増加へとつなげるが、アラシにとつてはどんな弁当が残つていようがどうせ持つて帰ることには違いないのだから、特定の弁当に対する思い入れなどない。

月桂冠ができれば、さすがに話は変わつてくるのだろうが、俺が狼を始めて今まででもまだ1度しか見たことが無いほど貴重なものが、そうタイミングよく出るわけがない。

いや、出て欲しくない俺は思っている。いつもならば、月桂冠がでることは嬉しいことなのだが、この状況では月桂冠が出たとしてもアラシのものになってしまう。

戦う前から月桂冠が出て欲しくない、そう思えるほどにここ最近
はアラシとの力の差を感じていた。

「4人かあ。今まで1番少ないな」

弁当コーナーへといたる道筋で見かけた狼の数は今までで最も少ない数だった。しかも、4人のうち3人はここ最近は何となくとも仲良くアラシにやられている顔見知りである。

残りの1人も毎日というわけでないが、アラシにやられている姿を何度か目撃していた。

「あの狼はなんでいつもトマトをしげしげと見てんだろっなあ」

見知ったといえる狼の1人に俺が心の中でトマトと呼んでいる壮年の狼がいた。なぜか彼はいつもトマトばかりを眺めていた。

この間はアラシにやられた後にトマトを勝って帰るのを見たが、まさか半額弁当の変わりに夕食にしているわけではないよな……。俺は彼がカップめんを買って帰るのは見たことが無い。

料理が出来るならば狼になっている可能性は少ないし、何よりもトマト以外を買っていない。いや、トマトジュースを買っていくことはあったか。

因みに後日、アロハにこの狼のことを聞いたら『ああ、それは知らねえよ。トマトの謎って言ってな、ここの7不思議の1つだ。』という言葉をいただいた。狼の世界にも7不思議があることに驚くと同時にあとの6つってなんだろうと無性に気になったのだ。

他には長髪の優男って感じの狼とサングラスに顎鬚を蓄えたちゃんといかついおっさんが俺といつもアラシに挑んでいるメンバーだ。いつもはこの固定メンバーに4、5人は加わるのだが、今日は他の狼は諦めたのか、都合がつかなかったのかは知らないがあと1人、メガネの痩躯の男のみだった。

(勝てる気がしねえ)

全員、スーパーで相対したことも多いし、アラシが現れてからは

共闘もしている間柄だけにある程度の実力はわかっている。だからこそ、連携とかも段々と合わせられるようになってきていた。

しかし、だ。だからこそ実力を知っている分だけアラシに太刀打ちできないということが分かってしまう。

おそらく、ここにきている狼たちは勝つ負ける以前にアラシを前にひくということが出来ない類の人物なのだろう。いつもいつも、アラシを怯むことなく険しい表情で睨みつけていた。

俺はそんな彼らを感じるともにうらやましくも思える。やられどやられど挑み続けるその気概に感心し、実力差を知っても挑み続けられるその心の強さをうらやましく感じた。

俺はまだそこまでの心の強さはないとわかる。多分、今日がアラシとの最後の対決になると思っていた。

今日が終わりでも、また明日がある。今まではそうだったが、明日からは違う。

今日までは自分の力でアラシと戦い、アラシから弁当を守れたらそれは嬉しいことだったが、明日からは違う。

戻ってくる狼たちがいるのだ。彼らとて狼には違いないのだから、彼らとともにアラシから半額弁当を守ればいい。

だが、俺にはそう簡単には割り切りづらい。結局は、自分の力では足りませんでした助けてくださいと泣きついているような気がしてより自分が惨めな気分させられそうな気がするのだ。

絶対：とまでは言い切らないがそれでも、明日からはひよっとしたらしばらく狼を休むかも知れないなあと考える俺がいるのもまた事実なのだ。

今日の狙いはスタンダードに『鮭弁』だ。こういったシンプルか

つ基本を抑えたものは時々無性に食べたくなくなることがある。値段が安いことを考えるとノルウェー産あたりだろうか。一度、秋に産卵に戻ってくるぐらいの鮭を使った半額弁当を食べてみたいなあ、なんてのんきなことを考えていたらウィーンとスーパードアが開いた。

いつもと変わらず、練習の終わりか合間の小休止なのかはわからないが先ほどまで激しい運動をしていたのがわかる暑苦しさを持ってアラシが入ってきた。思わず憎憎しげな目でアラシを見てしまう自分は仕方ないだろうと思う。

「なっ……………」

最早、ここ連日訪れるアラシたちはなんとなくだが顔を覚えていく。しかし、その中に前に俺の攻撃を防ぎ、そのまま弾き飛ばした本隊と呼ばれるアラシ集団にいたあのアラシがいたのだった。

思わず、視線に力を込める。

「……………上等って感じかな」

今日という日に再び彼とあいまみえたのは偶然とはいえない機会だと感じる。俺にアラシという存在の強さを身を持って教えてくれたあのアラシならば今日の相手としては申し分ない。

しかも、他のアラシの顔に見覚えがあるということはあれは本隊と呼ばれる集団ではない。本隊に属するアラシとてそれ以外のグループに属しての借りもする、ということとは聞いている。

ならば、1人で現れた今日は絶好の機会だろう。次にあのアラシに会ったとしてもそれが本隊としてならば残念ながら彼にたどり着けるかもわからない。

しかし、今日ならば他のアラシは普通のアラシなのだ。今まで勝てはしていないが、それでも彼の元に行くことぐらいは出来ると断

言できる。

明らかに格上だろうとはわかっている。だが、俺は取り戻したいのだ。あの日に打ち砕かれた俺の一撃に込められていた俺の自信を。渾身の一撃を防がれた精神的なダメージというのはこのほか大きい。あれ以来は渾身の一撃というのを俺は放っていないかった。その性質上、放った後は大きな隙が出来る。命中さえすれば、沈められなくとも俺が体勢を立て直す間くらいならば相手は動けないはずなのだ。しかし、彼は耐え切った。

それは俺の自信の喪失に繋がっている。あれ以降はついついと耐えられることを考えると放てないでいた。いつそかわされていたのなら開き直れもするのだが。

そんな中、彼が俺のほうに視線を送ってきた。自分でもわかるほど強く睨んでいたのだからそれに気づいてこちらをむいてきたのだろう。

「あ……………」

彼は俺を睨み返したわけでもないのに俺の声がかすれて、体が震え始める。

すぐに彼は俺に興味がないかのように携帯電話を手を取った。おそらく、メールでも見ているのだろうが、一瞬彼が驚いた風な顔をした後にささつと携帯を操作してしまった。

その様子を俺はずっとみていたが、ただ敵意を持ってみていたわけではない。ただ目が離せなかっただけのことだ。

あいかかわらず体は震え、すこし冷や汗が出始めている。

そう、俺は彼が怖いのだ。だから、体が震えて冷や汗をかいている。

「これが、イップスってのかな？ 八八……」

イップスとは精神的なことが原因で運動動作が思い通りにできないことだ。スポーツに使われる言葉だから弁当の争奪戦に使っている言葉かはわからないが。

もっと簡単に言ってしまうえば、トラウマか。あのアラシにやられたことがトラウマとなつて、彼を見られたことで完膚なきまでのあのやられ様がフラッシュバックしてきて体が震える。

他のアラシとは比べようも無い圧倒的な力にやられた記憶がよみがえり、体が戦うことを拒否していた。苦し紛れに笑って少しは気分を変えようとするも乾ききった、棒読みの笑いしか出ない。

しかも、彼は俺を気にも留めていない。それが腹ただしくもあり、同時に目をつけられてないことにほっとする。

「うちくしょう」

歯噛みをしながたただ眺めていることしか出来ない。その恐怖から彼が自分の視界から消えると、死角から襲つてきそうな気がして目で追つてしまう。

まだ半額にもなっていない状況で襲われるわけも無いのだが、それでも彼が視界から消えることが怖い。

だが、同時に恐怖の対象をずっと見続けていることで体の震えはより激しく、汗は止まらない。それでも俺は目が離せないのだった。

どのくらい彼を見ていたのかわからないが、彼の周りにはアラシの気配が突如として戦意がむき出しのものへと変わった。

「えっ？」

その戦意は俺に向けられたものではなかったが突然の変化に戸惑う。

つい一瞬だけ、アラシの視線の先にあるものを見る。そこには扉の中に消えていく煮物神の姿があった。

「え？」

再度、戸惑いの声を俺はあげた。もうそんな時間なのか？

確かにずっと彼ばかりを見続けていたが、もう半値印証時刻ハーフプライスラベリングタイムなのか？

そんな戸惑い続ける俺を尻目に狼とアラシが一齐に半額弁当を指して、動き出した。

「あ……」

数瞬遅れて俺も動き出すが、相変わらず彼から視線が離せない。

先ほどと違い、今度は彼が襲ってくる可能性が十分にあるのだ。そんな思いが俺の目を彼に固定し続けていた。

そんなことをしては半額弁当を手に入れることはできないとわかっているのだが、視線が外れない。他のアラシ、狼たちの動きを見なければ俺がやられるとわかっているのだがそれでも俺は彼を見続ける。

「え？」

三度、俺の口から戸惑いの声がこぼれた。

すでに半額弁当が生まれているというのにも関わらず彼は一步も動いていないのだ。隣にいたアラシはすでに動き出しているのだから気づいていないはずはない。しかし、彼はじっと弁当コーナーを

見続けるだけだった。

「あっ……」

不意に視線を固定しながらも走り続ける俺に影が走ったと思うと、激しい衝撃が襲ってきて、俺は宙を舞っていた。

衝撃で強制的に視線がずれた俺は今俺がいた場所にアラシがいることを認めた瞬間に、『ああ、俺は吹き飛ばされたのか』と心の中で納得していた。

戦いが始まっているのに戦う気構えすらなかったのだったら当然の結果だ。俺を突き飛ばしたアラシがそのまま弁当コーナーに迫っていくのが見える。

他の場所でもアラシたちが弁当コーナーを目指して突き進んでおり、それを阻もうとしている狼の姿があった。

「あ、そうだった」

不意に重力に引っ張られ始めることで俺が宙に舞っていてこれから地面に落ちるということを思い出した。

すでに受身を取るような余裕を持っていなかった俺はどすんという激しい音とともにスーパールの床に倒れふしたのだった。

最後に俺はまだ動かさずにじっとしているだけの彼の姿を確認して気を失ったのだった。

トゥルルルルル。

「ううん」

けたたましく鳴る携帯の呼び出し音によって俺は意識を目覚めさせられた。

俺が出ないことで鳴り続ける携帯を手取る。と言っても俺の携帯にかけてくるのはもっぱら親ぐらいなのだが。

さすがに親が連絡がつかないと困るということでは俺は携帯を持っている。時差などの問題から家の電話では親がいる場所によってはとんでもない時間帯になってしまうのだ。

それに、友達にも携帯を持つてるなんていつたらず間違いないじられるのでどうなるのか心配なので持っていることを言っていない。

なので、親からの連絡かと思って着信先を確認もせず俺は電話に出た。

「はい、もしもし」

「おっせーよ！」

電話越しに聞こえてきた声は張りのある男の声だった。少なくとも俺の父親ではない。

「えーっと、どちら様で……」

「あん？俺だよ、俺」

怪訝に思うが、とりあえず誰かを尋ねると返ってきた返事は昨今の代表的な詐欺事件と同じだった。

少しばかり戸惑うが、声を聞いているうちに聞き覚えがある感じがして記憶を探り始まる。

「あー、あー！アロハさんっ！」

「だからアロハさんってなんだよっ！」

そういえばこの間、番号を交換してたなと思い出す。

「まあいい。それよりもさっさと地場神の店に來い」

「…へっ」

アロハの声に反応して思わず手につけた腕時計を見るが、俺が氣絶していた時間は短かったようで今から行けば余裕で地場神の店の半値印証時刻には間に合う。
ハイフライスラベリンゲタイム

「いや、まだ…」

「月桂冠が出る」

「えっ……………」

俺の言葉を遮って話すアロハの言うことは普段ならば喜ぶことなのだが、アラシがいる現在では心の中で出ないでくれと思っていた月桂冠がでるということだった。

「だから早く來い。俺もこれから連絡のつくほかの狼にこれから片っ端から声をかける。じゃあな」

必要なことだけを伝えたアロハは電話をきったようすでツーツという音だけが耳にあて続けている携帯から聞こえた。

最後の方が早口だったのは、アロハも焦っているからだろう。月桂冠を守る為にアロハは今動き始めているのだ。

「月桂冠……………」

そんなアロハとは対照的に俺はただ月桂冠とつぶやいたまま呆然

と
し
て
い
た
の
だ
っ
た
。

第十九話 苦悩の果てに

「地場神じばがみの店か？」

アロハからの電話を貰った後に呆然としていた俺は後ろからかけられた声によつて、意識がようやくと途切れた電話からはなれた。振り返るとそこには俺が心の中でトマト呼んでいる狼の姿があった。

「…あ、はい」

急に話しかけられたが、すぐに話の内容は月桂冠の話だとわかった。今まで話したことの無い相手だったためか、深く考えもせずに関われたことに対する肯定の返事はすぐにでた。

「今日は夜にバイトのシフトが入ってるつてのによ」

「僕だつて勉強しないとイケないんですから」

トマトの横にいた優男風の長髪の狼とメガネをした瘦躯の狼が会話に加わってくる。

「だから何だつてんだよ。月桂冠が出るつてんなら行くしかねえ」

サングラスをした狼が彼らの後ろから現れて、俺たちに向かって言い切る。

「もちろんですよ。受験生としてはどうかと思いますが、狼としては月桂冠の方が大事ですからね」

「やられっぱなしってのは性に合わんしな」

サングラスに同調するようにメガネ、長髪と続いて参戦に意思を表明していく。ここ数日は彼らとは地場神の店では会っていないということは、つまりは彼らにとってアラシを向い打つ戦場とは煮物^{にもの}神の店^{がみ}だったのだろう。

そこで全力を尽くすが故にその後には戦える気力、体力は残っておらず地場神のスーパーに出向くということをしなかったのだろう。現にサングラスは肩を、メガネは腹を押さえているし、長髪に至っては足を引きずるように歩いている。

「やれやれ、ご苦労なことだ」

そんな彼らを見ながらトマトは呆れ顔で言うが、彼も買い物カゴに入れていたトマトジュースを商品棚に戻そうとしている。

「それはお互い様だろ」

「違えねな」

そんなやり取りをしながらも彼らの目がぎらついているのは月桂冠という狼にとって最高のご馳走がちらつかされているからだ。

「てえと、あのアラシが眺めてただけつてのは狙いを月桂冠に定め たってことかね？」

「おそらくそうでしょうね。携帯を見る前と後とでは感じられる闘志が違いました。仲間からの連絡で狙いを急遽変えたのでしょう」

長髪の疑問に答えたのはメガネだった。やはり伊達にメガネはしていないということか。

「本隊って呼ばれてるアラシは何を根拠に思っているか知らねえが、

月桂冠を手にいれりゃクラーケンが出てくると思つてやがる」

「あながち的外れでもないぞ？ここのトップはクラーケンになつている。さすがに月桂冠を取られたりしたら狼の誇りのためにも出てくるんじゃないかと俺は思つてる」

悪態をつくサングラスにそれを宥めるかのようにでありながらも、サングラスの言うことを否定はしていない。

「おいおい。負けた後のことなんて考えてんなよ。はなから負ける気満々みたいで縁起でもねえ」

「…たまにはいいこというじゃないですか」

「そうだな。俺らがやることは月桂冠を手に入れる。それだけだな」
「そんなじゃ、ま。行くとしますか」

トマトの言葉を最後に4人は揃つてスーパーを出て行く。目的地は言うまでも無く、地場神のスーパーだろう。

そんな中で俺は彼らと一緒に歩むことをせずにただポーッと突っ立つたままでそんな彼らの様子を眺め続けていた。

普段ならばいの一番組に地場神のスーパーに向つている俺だが今日は足が床にくつついたかのように動かない。それは、先ほど感じたあのアラシからの重圧から未だに俺は逃れ切れていないからだ。

あの時感じた恐怖にがんじらめられたままにいる俺はまたあのアラシと会つのが怖かった。

同時に嬉しく感じる俺もいた。嬉しいという感情は、あのアラシは俺を歯牙にもかけずに戦う価値すらもないと思つていたのでなく、それよりも優先するべきことがあつたということに対するほつとした感情から生まれたものだった。

体から恐怖は抜けきらずに、頭では地場神のスーパーへと行くこととしてゐるのに足はそんな気持ちなど知らぬ存ぜぬとばかりに動くうとしない。いや、ひよつとしたら頭の中でもあのアラシに会うく

らいなら…、と無意識に考えてしまっているのかもしれない。

だから今の俺はスーパーを出て行く狼たちと並ぶことは出来ずに、ただ次の戦場へと向っていく勇敢な狼たちを見ていることしか出来なかった。

長髪がこちらをちらつと見返してスーパーの扉をくぐって出て行く。

メガネもこちらを見返し、俺と目が合ったことを確認して出て行った。

サングラスはこちらを振り返ることをせずに出て行ったが、扉をでるその時に少しだけ、しかし故意的とはつきりと解る程度足を止めていった。

彼らは俺が怯えて足が進まないことに気付いていたのだろう。だからこそお前も来いという意味表示をそれぞれがあらわしたのだと思っ。

最後にトマトが煮物神のスーパーを出て行く。

「先に行ってるぞ」

そんな台詞を残しながら。

駐輪場の前で俺は愛車を前にしたまま立ち止まっていた。普段ならばすぐにも地場神のスーパーへと向うのだが今日は向おうとい

う気力が湧いてこなかった。

恐怖はスーパーのドアをくぐっても消えることなく、俺の記憶に鮮明に焼きついており、その記憶が俺の足を地場神のスーパーへと向わせない。

俺とともに煮物神のスーパーにいた狼の言葉を信じるならば、これから行く地場神のスーパーにいる。それも、ただでさえ圧倒的とまでいえるその力をより発揮するだろう。………月桂冠を手に入れるために。

ぶるつと俺は思わず身震いしてしまう。その存在だけで震えるだけで何もできなかった俺があの時以上の気迫をもって半額弁当を手に入れんとするあのアラシを前に何が出来るというのか。

そんな思いが頭を掠める。それに今まで何もできなかった自分が行ったとしても何も出来ずに何も変わらない。弱気な考えが頭の中で錯綜とする。

アラシの脅威は今日までで身を持って知っているが、本隊と呼ばれる集団に属すあのアラシは他のアラシとは間違いなく別格だ。

それと同クラスの實力を持つアラシたちもおそらくだが地場神のスーパーに集まってきているだろう。本隊の目的は弁当の奪取よりも、クラーケンを倒すということに主眼を置いている。

しかし、クラーケンが現れないのならば倒すことは不可能だ。そして、現れないならば出てこなければならなくすればいい。そのクラーケンを釣り上げるための餌が月桂冠。

俺はクラーケンのことを知らないが、それでも二つ名を持つほどの狼ならばある程度は縄張りに巢食うよそ者を排除しようとすると思う。

その地域で實力を認められたからこそ二つ名を得るわけであるから、それは同時に群れのボスに近い状態にもなると思う。それならば、己の縄張りを荒らす者が存在するなら良くは思わないはずだ。

アラシはどこにでも存在する狼で敵であればこそそういった二つ名持ちの狼がわざわざと狩りに動くことは無い。彼らは数も多いし

倒したとしても他に流れる、あるいは自分の縄張りへと流れてくることもあるだろう。

要するに一々とアラシを排除していてもキリが無いのだ。だからこそ、二つ名が進んで外敵であろうともアラシは狩らないんだと思う。

しかし、だ。月桂冠が取られたならば話は変わってくる。勝者の象徴でもあるその輝かしき半額弁当が狼でない者の手に渡るということは狼の敗北を意味する。ならばこそ、クラーケンも黙っていないだろう。

だからこそ、アロハは、巨乳は、トマトたちは月桂冠をアラシに渡さないために、狼の誇りを守るために地場神のスーパーで闘う。

そして、アラシは己を降したクラーケンにリベンジする為に、月桂冠を手に入れようとしている。

考えたくはないが、まず間違いなく月桂冠はアラシの、おそらくはあのアラシの手に渡る。そう、思わせるだけの圧倒的な実力が彼にはあるのだ。

もちろん、それを防ぐために狼たちもたくさん集まるだろう。だが、アラシを相手に数の有利などどれほど望めるかという話だ。

集団戦においては悔しいが間違いなく、アラシに分がある。基本的に狼というのは目的の為に一時的に汲むことはあっても最後まで組むなんてことはないし、組んだしてもせいぜいが3、4人くらいだ。

狼の誇りにおいて数の暴力をもって、闘うなどありえない。狼に必要なのは数によってなぶることではないからだ。むしろ、多寡をもつての連携よりも1対1の闘いにこそ燃えるものがある狼が大多数を占めるだろう。

最後まで立っている2人が繰り広げる一騎打ちなどは考えるだけでも興奮で身震いする。まあ、まだ俺には当分先のこととなりそんな話なのだが。

「今は目先のことか………」

俺はそんなことを呟きながら何度目かわからないほどに確認した腕時計の時刻を今一度確認する。その針は刻一刻と地場神のスーパーの半値印証時刻が近づいてきていることを伝えてきていた。

それでも俺はまだ動けずにいる。

ひよっとしたら、向うことも逃げることもできない俺がタイムアップを待っているのかも知れない。

行ったところで何も出来ないということがわかる。恐怖が抜けきれない俺にはあのアラシにまた会えばさっきと同じで体がすぐんで動くことさえままならないだろう。

行ったとしても無様をさらすだけだ。

そんな姿は見られたくない。いや、行ったとしても迷惑だろう。

恐怖というのは伝播するのだ。今、地場神のスーパーにいる狼たちは皆が皆、アラシの恐ろしさをよく知っている。その上で、恐怖を振り切り闘おうとしている者も多いだろう。

そんな中で恐怖に震える狼が1人でもいれば、それは他の狼が振り絞っている勇氣に水をさすものでしかない。

その水となるのが俺なのだ。

今、俺が行けばただでさえ低い勝率は完全なゼロとなる。

俺のせいで負けてしまうのだ。ならば、いつそ行かないほうがいいのでは。

そんな考えに俺はとらわれ始める。

月桂冠が欲しくない訳では決して無い。アラシに月桂冠を取られるのが許せるわけでもない。

それでも、俺が地場神のスーパーに行ったところで狼たちには何のプラスにもならずマイナスとなってしまう。

マイナスになるぐらいならば行かないほうが狼の為になるはずだ。心残りが無い訳ではない。地場神の月桂冠がどんなものかはものすごく気になるし、先に行ってるという言葉を残して行ったトマト

たちには悪いと思う。

何よりも俺をここまで狼として育ててくれたアロハと巨乳に対する裏切り行為だ。

アロハは今日、俺が行かなかつたらどんな思いを抱くだろうか。

巨乳は俺のことを見損なうだろうか。

トマトは、他の狼たちは俺を臆病者とさげすむだろうか。

自分でも情けないと思うが、それでも今までいたアラシを倒そうとしていた俺はあのアラシとの再会の瞬間から消えてしまったようにいなかった。

「……………帰るか」

言葉にするのは意外と簡単なことだった。さっきまでの苦悩が嘘の様に。

ひょっとして俺はもう1度あのアラシと会いたくなくて言い訳を捜していたのかも知れない。

今日、帰ってしまえば俺はもう狼としてスーパーに戻ってこれないかも知れない。

それでも、あんな恐怖をまた味わうならばそれもいいかも知れないなと思えば自転車にまたがろうとしたときに後ろから声をかけられた。

「なんだよ、帰るのか？月桂冠が出たんだろ」

振り返るとそこには会ってないのは2週間ほどだろうが、俺には酷く懐かしく思える顔があった。

「子犬は月桂冠がいらねえのかよ？」

憎たらしく頬を吊り上げて笑っている金髪の顔があった。

第十九話 苦悩の果てに（後書き）

待たせてしまった上に短い…。

そして、いつになったらアラシ編が終わるのだ。当初は5話くらいで終わると思っていたのに続く続く。

はやく、ベン・トーの新刊でないかな？

第二十話 金髪との対話

俺の目の前に現れた狼。金髪はアラシと戦うことを選ばずスーパーという戦場から姿を消していったはずだった。

しかし、そんな彼は俺の正面におり、その口ぶりからすると今からまさに地場神じはがみの店へと向おうとしているようだ。

「なんで…?」

疑問の聲が俺の口からぼろりと漏れる。彼にとって敵わないアラシとは憎むべき相手であって、そんな感情を半額弁当を求める戦いに持ち込みたくないがゆえに戦いから去っていったはずだった。

そんな金髪がどうしてまだアラシが暴れているこの世界へと戻ってきたのだろうか。

「子犬の考えているよりもよっぽど狼たちのネットワークってのはしっかりとしてんだよ。まあ、自分たちの戦場っつーか地区？縄張り限定に限るんであれば尚更な」

そこで一拍をおいてから再びと金髪は喋りだす。

「まあ、平たく言うと月桂冠がたつて情報はここの狼には知れ渡っている。本来ならばライバルが増えるだけだからそんな情報は出回らない。けどよ、今は事情がちげえだろ？」

そこで俺に向ってニツと笑い顔を見せてくる金髪だが、正直にあつていない。もっと実力があるのならば大物の風格もでてかっこいいか思えるのだろうか。

まあ、金髪のことはおいておくとしてもアロハの行動は狼たちを

動かし始めているらしい。それがアロハの人望か、はたまた月桂冠という餌に狼が食いついているのかはわからないが結果としてはアラシに対抗するための戦力は順調に集まっているようだ。

しかし、俺にはどれだけの狼が集まろうと現状では勝ち目があるとは到底思えない。そう思えるほどに俺にはアラシの恐怖が、正確には本隊の恐怖が身に刻まれていた。

さきほどまで煮物神にものがみの店にいたあのアラシもいるのならば尚更だ。

「……………」

それを考えると俺は金髪へとは笑い返せない。あの笑いには一緒にアラシに目にももの見せてやるうぜ、という誘いだからだ。

俺は…さっき戦うことを選ばずに、帰ろうとしていた。だから笑い返せない。

「……………。いや、なんか言えよ。なんか俺がまぬけみてえじゃねえか」

返事を返さない俺に業を煮やした金髪が口を開く。

「…ひょっとしてよ」

喋らない俺に対して思うものがあるのか少しの間の後に問いかけるような声色で再びと金髪が喋りだす。

「行かねえのか？」

金髪の吐き出す言葉は俺にとっては事実であったが、それでも俺がその台詞に対して頷きを返さなかったのは逃げともいえるこの選択を他の狼の前で認めたくないというプライドのせいだろう。

だが、この場において否定しないということは肯定を意味してしまっていた。

「そう、か……」

少しの間だけ沈黙が辺りに訪れたが、物悲しそうな金髪の声によってその時間は終わりを告げる。

「……………」

それでもまだ俺の口は開いてくれない。いや、開いたとしても見苦しい言い訳しかでないでないだろう。それならば、開いてくれないほうがよっぽどいい。

「……………狼をやめるってわけじゃねえんだよな？」

金髪の言葉は俺の胸を深く、深くえぐってくる。痛いと心が悲鳴を上げているのが聞こえてくる。

沈黙は楽だ。自分で答えを出さなければ、タイムリミットを迎えるか相手が勝手に答えを決めてくれる。

ましてや、今日は月桂冠を手に入れるためにアラシからスーパーを守るために、と戦う理由があり、それは決して軽いものなんかじゃない。

だが、金髪の目はただひたすらに俺を見続けているのがわかる。今の俺には金髪を見返すような心の強さはないがそれでも1ヶ月以上の間、狼としてあり続けた俺は人の視線に敏感になっており、金髪の視線が俺を捉え続けていることがわかった。

「……………」

何も喋らず、月桂冠の元へとも向おうとせずただ俺の答えを待っている金髪。

相も変わらず動かない俺の口とは違って頭の中では様々な感情がない交ぜになっている。

金髪に返事を返さない俺は、感情では狼を続けたいと思っている。だが、あのアラシを見ただけですくんで動けなくなった俺の弱さが、すぐにも絶好のリベンジの機会があるのに向うことができない俺の弱さが狼を続けていいのかという疑問へと変わっていく。

そんな自分の情けなさが狼であり続けたいという感情を言葉にして吐き出すことを許してくれない。

それでも、何か金髪に返さなくてはという思いから無理に出した言葉は金髪の問いに答えるものではなく、金髪に対する問いかけだった。

「…どうして、どうやってまたアラシに挑もうと思ったんですか？」
「あん？」

逆に問いかけられるとは思っていなかった。ただろう。金髪は怪訝な表情へと顔を変えるが、すぐに少し考えるような素振りへと変わっていく。

金髪もまた理由は違えど、アラシと戦わないことを選んだ狼だ。その金髪がまだアラシがいるスーパーへと戻ってきただけの理由が俺には無性に気になった。

ひょっとしたら、その理由しだいでは俺もまたそれを理由にしてアラシがいるスーパーへと向かえる力が湧いてくるのではという、かすかな期待を込めて。

「そうだな。…なんていうかよ。うーん、言葉にしにきいな」

俺のとっぴとも言えるであろう質問にもしっかりと答えようとし

てくれるあたり、金髪もアロハと同様に後輩見がいい狼なのかもしれない。

「月桂冠がでたからですか？」

うーん、とうなり続けている金髪に対してもっとも俺がらしいと思う理由を口に出して問いかける。

「いや、違えな。確かに月桂冠がでた、欲しいって想いつてのは今の俺にとつては間違いない後押しにはなっちゃいる。…が、それは理由じゃなくて、きっかけの1つでしかねえな」

そう言うのと再び思考の渦へと沈んでいくかに見えたが、答えはないと思つたのか言葉にするのが難しいと思つたのか一息をついただけだった。

「一番の理由つてのは、1度でも狼になっちゃったら狼でなくなるのは難しいってことか、な？」

そこで金髪は俺に問いかけるような視線を送ってくる。

「子犬にとつてはどうなんだよ？狼つてのはなるうとしたら、誰にでもなれる反面、豚になっちゃう奴や犬のまま狼になれずじまいでスーパァから姿を消していく奴だつて多い。それだけの苦勞があるし、周りから狼つて認められるまでは辛いものが多い。だがよ、その分だけまわりから狼だと思われたときは嬉しかったしよ、何よりその時には他では味わえない半額弁当の味を知っちゃまっている」

金髪の語ることは俺にもよくわかった。最初は好奇心、物語への憧れから踏み入れた世界だったが、いつの間にか純粹に半額弁当を

食べてみたいという気持ちだが、欲望が強くなっていき1度味わったその時から、物語の世界に入り込んだという理由ではなく、俺自身が食べたいという思いから毎夜の如くスーパードへと足を運ばせていたからだ。

「俺：俺たち狼にとって月桂冠てのは大事なもんだ。いや、俺らだけじゃねえアラシにとっても月桂冠てのは特別なもんだよ。狼をアラシを狂わせるような魔性の魅力を持っているのが月桂冠だ。けどよ…」

俺を見る金髪は確かな意思を視線にのせていた。

「俺にとっては月桂冠ってのはきつかけになっても理由にはならねえ。月桂冠ってのはすげえ魅力的だけどな。普通の半額弁当だって十分に魅力的なんだよ。半額弁当が欲しいから戦って、戦って、戦い続けてるんだ。だからよ、俺にとっての月桂冠ってのは半額弁当の中での1つでしかねえんだよ」

「えっ…」

絶対的な勝者を意味する月桂冠に対する思い入れというのは狼としてのキャリアが少ない俺でも強くある。それなのに月桂冠を半額弁当の1つでしかないと言い切る金髪の言葉に俺は驚愕する。

「俺は美味しいもんを食べたい。自分が食いたいもんってのは自分で決めるもんなんだよ。月桂冠だから食べたいんじゃないって、その月桂冠という名の半額弁当が魅力的だから食べたいと思う。月桂冠があるからって、その近くに自分がもつと食べたい弁当があるかも知れねえ。俺らは美味しいもんを食べたいんだ。その先にあったのが狼になって半額弁当を手に入れるって事なんだからよ、月桂冠がある

からって自分が本当に食べたい弁当を見失っちゃなんねえって思ってる」

思わずぐくりとのを鳴らしてしまふ。それは月桂冠を特別視しきれていない狼を目の当たりにしてその感性に対しておののいたのか、それとも彼がそんなにまで思う半額弁当に対して俺自身も感化され食べたいという思いからの欲求からのなのかはわからなかったが、ただ1つ確かなのはアラシと戦わないこと選んだこと、そして月桂冠を目の前にしても本当に自身を見失わない強さをもつ目の前の狼をかつこいいと思ったことだ。

彼は狼としての己の信念を確固として確立している。惜しいのは実力が伴っていないことだろう。後は実力さえつけば間違はなく二つ名クラス狼として名をはせるだろうと俺は確信した。

だからこそ余計に金髪が再びとスーパーに舞い戻ってきた理由がわからない。

「つまりは、月桂冠以外の理由の方が大きいってことですよね？」

「まあ、そうだな」

「それって何ですか？」

図々しいと自分でも思うが、金髪の持つ理由を俺は知りたい。その理由は俺に当てはまるかどうかなんてのはわからないが、狼としての自分というものを確立している狼の先人である金髪のあり方の1つを知るといふのは俺にとっては大きいことだと思う。

1人の狼がスーパーという戦場で戦い続けた上でたどり着いた己についての狼。その答えの一端を俺にも知ることが出来たのならば、そのあり方を感じうるものがあるのならば。

俺は、俺はあのアラシともう1度向き合うことが、その覚悟が出来る……かも知れない。

俺は期待しているのだろう。金髪の答えを。

俺はスーパーに行きたいのだろう。だが、恐れがそれをさせない。恐れが自分の中で逃げるだけの理由を作ってしまった、諦めてしまっている。

素直に帰ろう、諦めようとすぐに答えを出さなかったのは行きたくないからだろう、スーパーに。

だから、期待するのだろう。金髪の答えを。

俺が再び、あのアラシへと対峙するだけの覚悟を、理由を、ヒントを与えてくれるかもしれない金髪の答えに。

「そりゃ秘密だ」

「えっ……？秘密………？」

「まあな、人に話すようなもんでもないしな」

金髪の言うことは最もだろう。自分の生き方……いや、この場合は狼としてのあり方だろうが、そう簡単に人に話すようなことではない。

ましてや、俺が金髪と対話とっていいほど話すのはこれで2回目。俺にそんなことを話す義理など全く持っていない。

「でも……」

それでも俺はみつともなくも、金髪にすぎるように言葉を吐き出す。そうとするが、俺が言葉を続ける前に金髪によってさえぎられた。

「それは子犬だっで一緒だろう？月桂冠が無ければスーパーに来ないわけじゃない。普通の半額弁当でも狼たちがスーパーに集まるには十分すぎるほどに魅力的なんだよ。だから、月桂冠つてのはきつかけになっても理由にまではならねえと俺は思ってる」

確かに金髪の言うことには一理あると思う。

「だからよ、俺を含めて今日いまから地場神じばがみの店に行くような奴はアラシに対して隔意を持って戦わないもしくは逃げるって決めこめたものの、それでもまだ半額弁当の魅力が忘れ切れてない愚か者ばかりだと思うんだわ」

さっきまで欲しかった答えの一端を見たようなそんな金髪の言葉。

「けどよ、俺はまだ戦うかどうかはわからねえ。アラシを前にして憎しみに囚われるようなら、そんな暴力を奮うぐらならば月桂冠が目の前にあるのが俺は帰る！それが俺の半額弁当に対する決意なんだよ。そして、これからも美味しく半額弁当を食べるのに俺にとって必要なことだ」

帰ると口にしたときに金髪の瞳が悲しげに揺らいだのを俺は確かに見た。なんだかんだといいながらも月桂冠を目の前にして立ち去るなど狼にとっては苦渋の決断に違いない。金髪にとっても勇気のある宣言だったろう。

やはり、金髪は強いと思う。心が。

俺にもなれるだろうかと、と心の中で疑問が湧く。

今まさに帰ろうとしていた俺に、だ。

「それで、やっぱり行かねえのか？」

俺の心を見透かすかのように放たれる言葉が心に突き刺さってくる。俺の表情が醜くゆがんでいくのが自分でもはっきりとわかった。

「……………俺は子犬を無理やりにつ張つてたりはしねえ。狼つてのは自分の意思でスパーに行くべきだからだ」

金髪の言葉に焦る俺がいる。あのアラシの元へ行かなくても済むにも関わらずだ。

きつと自分の力だけでは向うことができない俺は強制的にでも連れて行ってもらえれば今までと何も変わらない生活を続けられると心の中で思っていたのだろう。

そして、金髪はこの言葉の意味は自分で決める。そういうことだろう。

俺自身もスーパーに行きたいと思っている。それでも、足は竦んでしまう。

しかし、先ほどは負けてしまったスーパーへと行きたいという渴望が金髪との対話で少しずつ湧き返ってきているのを俺は感じた。

第二十話 金髪との対話（後書き）

話が思い浮かばない。いや、アラシを強くしすぎたのが原因なんだけども。というあんな暴力を目の前にしてどう勝てと？どう立ち直れと？

次は予定としては金髪 side です。

第二十一話 金髪の思い

SIDE 金髪

スーパーへの歩きなれた道を一步また一步と足を出して俺は向っている。しかし、それは半額弁当を手に入れるためではなく、普通に晩御飯を買うために、だ。

アラシが暴れまわる時期には大概がカップめん生活へと突入するのは健康面を考えれば決して褒められたことではないが、自炊が出来ないので仕方ないと割り切っている。

普段ならばどんな弁当が残っているか期待に胸を膨らませて歩いている道のりだが、今の俺にはそんな高揚感など無い。

戦わないからだ。

それ自体は俺が選んだことだし、納得もしている。が、それでもあの世界の魅力にとっぷりと浸かってしまっている俺にとっては心が厳冬の様に冷え切っていた。

俺にとってはこの厳冬は耐えるしかないものだった。冬を吹き飛ばすような熱いものは俺の中にあるのは分かっている。

けれども俺はそれをよしとしない。それは怒りという噴火であり、冬を吹き飛ばすだけではない。確かに戦えるだけの力は得られるだろうがそれは暴力であって、そんな思いをして手に入れた半額弁当には半額神に対する敬意など微塵も無い。

俺の中には俺の掟^{ルール}つてものがある。狼としての絶対の掟^{ルール}、スーパーに置ける掟^{ルール}、個々の狼が自らに課している掟^{ルール}。掟^{ルール}なんて言っても様々なものがある。

最初の絶対にやっちゃなんねえこと。それは狼ではない存在になつちまうことだ。踏み外して豚になつていく奴を俺は腐るほど見てきてる。

次のは土地柄ともいえる。地域が違えば微妙に狼たちの風習が違

ってくる。簡単に言えば、戦わずに隙を見て半額弁当を手に入れようとするのは立派な戦術であり、技術だとは俺は思っているが、場所によっては正面からのぶつかり合いが狼の美学みたいになっていてそういう戦い方をする奴はいい顔されなかつたりしていた。

最後のは自分に課すもんだ。持っていない奴もいるだろうが、持っている奴の方が圧倒的に多いと思う。例えば、一日にスーパーは一軒とか決めてる奴とかもいる。自分自身に後がないって奮えたたさせているタイプだ。

まあ、平たく言えば戦って半額弁当の過程にこだわっているような奴がいるってことだ。そして、俺もそんな狼の1人って訳だな。

俺にとつての掟は手に入れた半額弁当を誇れることだ。

そして、怒りに身を任せてスーパーで暴れるのは、半額弁当を手に入れたとしても俺には誇れない。

理想だけでいえばやっぱし、月桂冠を前にしての一騎打ちとかに憧れる。まあ、そこまでの高望みは俺の実力が許してくれてねえが。

「はあ。気温は日々高まりつつあるのに、俺の実力はちっとも高まらねえ」

気温と実力には全く関係ないがそれでもついついとぼやいてしま

う。
ストレスも溜まっているのだろう。日課となっているスーパーでの戦いに餓えていると言い換えてもいい。趣味とってしまったてい

いかは疑問が残るが、趣味を取り上げられればストレスを覚える人間の方が圧倒的に多いだろう。

俺が今まさにその状態なのだ。
コンビニで何か買うとか、牛丼でも食べに行くとか晩御飯の選択なんていくらかもあるのに、それでも俺は戦いが終わった後のスーパーへと足を運んでしまっていた。

餓えているのだろう、戦いに。

餓えているのだろう、半額弁当に対して。

餓えているのだろう、あの強敵^{ライバル}たちに。

だが、それでも俺はあの戦いにはおもむかない。己が暴力に飲み込まれてしまわないために。

「惣菜か握り飯、今日ぐらいは残ってねえかなあ」

どうせ、残ってないと心の中では思っているのにそれを願うように自然と言葉が漏れていた。

そして今日も戦いの残りが残る煮物神^{にものがみ}の店へと俺は足を運ぶ。

スーパーにあと少しというところでポケットから近頃コンビニでよく流れている歌が聞こえてきた。

俺がメールの着信に設定している音楽で、最近のお気に入りだ。この歌手グループの曲を全部持っているってほど通じやないが、この曲が入っているシングルと最新のアルバムだけは買ってある。

直ぐにとつてもいいが、俺はサビの部分が終わるまで待ってからポケットから携帯を取り出した。

「……………」

携帯の画面に表示されているメールの内容は俺にとって、いや、狼にとつて望んではないことであった。普段ならば違っのだろうが、今はダメだ。

「……………後、一日違えば大きく変わるっつーのにな」

自嘲めいた声を出しながらもう一度携帯の画面を見直す、当たり前のことながら表示されている文字列が変わるわけでもなかった。

『地場神じばがみの店で月桂冠がでた』

要約すればこれだけの内容だが、狼にとっては『だけ』なのでは済まない大変な事態だ。

普段ならば絶対に流れないであろうその情報が流れた背景にはアラシの存在がある。今まではアラシに勝てない状況だったが、月桂冠を取られるということは決定的な敗北を意味する。

だからこそ、競争相手が増えるというリスクを侵してでもこの事実が狼のネットワークに流された。

おそらく、この情報によって足を地場神の店へと足を動かし始めた狼は多いだろう。

月桂冠の魅力に誘われて。アラシに抗する為に。

俺はそんな内容のメールを確認すると携帯を閉じてスーパーへと歩き出した。

地場神の店でなく、今向っていた煮物神の店へと。

アラシは確かに、恐ろしい。だが、それよりも暴力に頼ってしまふいそうな俺の方がもっと怖い。

俺が憧れなりたいと思うのは強く、そして気高い狼だ。

ここらではベテランといえるほどのキャリアを積んできた俺だが実力が増すなんて事は中々無かった。もっばら増えるのは敗北の歴史だけ。

俺には狼としての才能は無かったのだろうか？と思えばスーパーに足を運ぶのを止めようとしたことなんて1度や2度ではすまないくらいに何度だってあった。

それでも、俺がスーパーに足を運び続けているのはそれだけ気に入ってしまったというところだろうか。

苦渋の決断と、自分で言ったら恥ずかしいがそれだけ悩んで悩んで悩み抜いた結果が狼を続けることだった。

それでも俺には強さがついてくることは無かった。同期の狼たちはスーパーから去るか二つ名持ちとまではいかないがそこそこは名の知れた狼になった者も多い。

俺だけが置いてけぼりを食らっているかのような心持になってしまふことが良くあり、それが何日も続くと辛い思いをする。

それでも俺は好きなのだ。

半額弁当が。

スーパーが。
ライバル
強敵たちが。

何時の頃か忘れてしまったがかなりふり構わずに半額弁当を手に入れようとしていた時期があった。その時の半額弁当を美味かったが、それでも物足りなさを感じたし喜びなんか無かった……と思う。

その頃の俺は他の狼たちに嫌われていた。豚とまで言われなくともグレーなことは平気でやってたからだ。

そんな俺を元の狼に戻してくれた1人の狼だった。

彼は強さと気高さを備えていた理想の狼だった。

いつもの様に手に入れた半額弁当を食べている俺に対して言われた一言は俺は元の弁当を手に入れない狼へと戻るきっかけになった。

『満足してるのか？その弁当で』

俺の心の物足りなさを的確についてきた一言だった。俺自身、半額弁当に物足りなさを感じていたが理由は分かっていたいなかった。

だからこそ無性に腹が立ったのを今でも覚えている。その言葉に最初は反発をしていたのを思い出すと今でも恥ずかしくなってしまう。ついつつむいてしまう。

彼の言葉を理解するのにかかった時間は意外と早かった。当時はそう思っていたのに今ではかかりすぎだ俺と過去に自分に向っていつてしまっていたりする。

それでも気付けただけマシだよなと思う。あのままだったら俺は半額弁当に魅力を感じなくなってスーパーから去っていただろうか。

徐々に正面からやり合って手に入れた半額弁当の味も中身も今でも思い出せる。弱気になったときにはその弁当のことを考えると不思議と力が溢れてくる感じがする。

そんな俺を狼に戻してくれた彼はもういない。当時最強の一角と呼ばれていた彼はもう1人最強と呼ばれていた狼『クラーケン』との激しい戦いに敗れた後に引退をした。

風の噂で古狼の集うスーパーではしば姿を見かけると聞くが俺自身はあの戦い以来あったことはない。

なにはともわれ、狼に戻った俺は強くなくてもせめて気高い狼になろうとその時に誓った。

だから、それ以来俺は己が後悔しない戦いをしている。元通りの弱い狼に戻ったが今の俺には満足している。

でも、だからこそ足を踏み外すことの恐ろしさを知っている。

アラシを憎む力がそれだ。

だからこそ俺は暴力を奮わないために地場神の店へとは行かず、いつも通りに煮物神の店へと向う。

そしていつも通りにたどり着いた煮物神の店だったがそこにはいつもと違う光景があった。

「子犬…」

最近狼になつた幼いといつてもいいその狼が駐車場の…正確には駐輪場の前でただずんでいた。

後ろを向いているからここからは表情なんて見えねえが、それでも子犬が何を考えているかなんてわかる。

あれはつぶれそうになっている狼だからだ。

俺はここいらではトップクラスといつていいほど年季の入つた狼だ。だからこそ何人も狼が挫折してスーパーから姿を消して言ったのを知っているし、ましてや間近で何度も何度も見てきた。

その経験が俺に教えてくれる。あれは危険な兆候だと。

ましてや、それを受け止めるほどの精神が出来ているとはとても思えない年だ。

ああなつた狼は大概がもうスーパーには戻つてこない。戻つてきても大成なんかまですしないし、むしろ弱くなっていることすらある。

「まだはええよな」

子犬を見ているとそんな台詞がもれてきていた。

それは、狼としてつぶれるにはだ。

もしも、普通につぶれてしまふだけならばそこまで俺も気にすることは無かつたであろう。

それがその狼にとつての限界だからだ。

しかしながら、今のここの情勢はそんな単純なものではない。

本隊と呼ばれるアラシの存在は有望な新しい狼の芽を摘み取つていくのは明白だった。

そして、目の前の子犬もそんな狼の1人なのだろうと推測する。

だから、俺は救おうと思う、子犬を。

俺にできるかなんかはわからない。

それでも、かつて俺が救われたように。

きっかけになっってくれればいい。

そう思いながら俺は一步を踏み出して子犬に声をかける。

自分自身が気高い狼でいられることを願いながら。

S I D E O U T

第二十一話 金髪の思い（後書き）

全編金髪。アロハや巨乳ですらまだなのに。
主人公降格の悲劇の足音がまた一歩近づいた。

第二十二話 立ち向かう為に

スーパーの駐車場で見つめあい続ける俺と金髪。

金髪は言葉とは裏腹にその視線にはスーパーへ行こうと訴えかけてくるのがわかる。

彼の言葉に嘘はないのは俺にはよくわかったが、同時に俺という狼に強制はしないがスーパーへ行くという選択を選んで欲しいという気持ちを隠すことはせずに眼で自分の意思を伝えてくる。

そこが金髪にとっての思いなのだろう。彼は他の狼よりも半額弁当を手に入れる過程にこだわっている感じがする。

その思いの強さの分だけ半額弁当を目指す同士であり、ライバルである俺という狼を前にしても半額弁当に懸ける思いを強制することを嫌いつつも、それでも尚、志を同じにする仲間として思いが俺をもう1度戦場へと来て欲しいという思いを込めた目をさせているのだろう。

こう言うっては失礼だと思うが、俺の知る金髪という狼は決して強くなどなく、むしろ弱い部類に入るのだから、金髪とて挫折の1度や、2度は経験しているはずだ。

狼を始めて2ヶ月も経たない俺でさえこうして2回目の挫折を迎えているのに俺よりも狼としてのキャリアが長く、それでいて確かな実力者でない金髪が経験した挫折の回数は俺の非ではないだろう。もしかしたら、挫折なんか経験してないのかも知れないが。なんとなくだが、金髪の強さは挫折を経験して乗り越えて来た…そんな感じがする。

だから、俺にとっては目の前の狼は尊敬に値する人物だった。今まさに狼としての生活から離れるかも知れない、そんな岐路に立っている俺だから余計に目の前の狼はまぶしく感じる。

そして、そんな経験を乗り越えてきたという狼は俺にほんの少しの勇気を与えてくれているような感じを覚える。…あのアラシへと

立ち向かう為に必要な。

「俺…俺は…」

そんな金髪を見ている内に、俺の中でアラシに立ち向かう覚悟なんてまだ出来ていないのに俺の口はいつのまに喋りだしていた。

「怖いんです。アラシが」

それは負けを認める台詞であり、俺をスーパーへと向わせない最大の要因でもあった。

「アラシの強さは十分に分かっていたつもりだったんです。今日までは毎回毎回やられても次につなげることができて…た。勝てない度に実力の違いを感じて、だけど次こそはって思いながら首領兵衛^{どんべえ}をすすりながら明日のこと考えて」

怖い、と一言口にしてからは自然と言葉が出てくる。考えられた言葉ではなく思いを口に出しているだけだった。

「あのアラシ…なんか本隊って呼ばれてるアラシの1人にやられたときも次こそはって思って、でも日を追うことにあのアラシの、実力が頭1つ突き抜けていることがわかっていつて。それでも、次に会ったときは倒してやるうって意気込んで。今日、あのアラシと出会ってダメでした」

「…そうか。まあ、あんまし気にすんなよ、なんて言っても意味無いだろうが。本隊のアラシってのは他のアラシとは違ったもんだと思っただほうがいい。並みの狼なら敵わんぞ」

「違うんです」

俺を慰めるかのような金髪という言葉は俺には痛いだけだった。

「何も出来なかったんです。震えるだけで。あのアラシが目に入った瞬間に体がぶるぶると震えて、変な汗とか出て。もう、何がなんだかわかんなくなってる」

「……………」

「それで、訳わかんないうちにアラシにやられて…て、ほんとに何も出来なくて。あのアラシが怖くて、怖くて、体がいうこと聞いてくれないで、頭の中がこんがらがって内に半額印証時刻ハーフプライスラベリングタイムが終わって、

…」

「……………」

「何も出来なかったこと何て何度もあったけど、今回は…何も出来なかったんじゃないかと体が、頭が何もしようとしてくれなくて。いつも、なら悔しくて堪らないのに、俺はほっとしたんです。対峙しなかったことに」

「対峙しなかった？」

「えっと、本隊のアラシは来るには来てたんですが…争奪戦には参加しませんでした。……………きつと、月桂冠がでたからだ」と…」

俺にとっては いや、それは狼にとって恥すべきことだった。

半額弁当を前に恐怖に飲まれ何も出来ずに終わる。あまつさえ、心を捉えていたのは半額弁当の魅惑ではなく、アラシの恐怖だったことなど恥じ以外の何物でもないと思う。

「……………なるほど」

俺の目の前で金髪が得心したような顔をしているのは、きつと俺が地場神じばがみの店へと行くこうとしていなかった理由が分かったからだろう。

アラシと会いたくないから、スーパーに行かないなんていうのは

俺の弱さが原因と分かっている。この場合は実力不足も大きいが、それよりも俺の精神的弱さの方が重大だ。

1度覚えてしまった恐怖を克服するのは大変なことで、1番簡単なその克服方は記憶の奥底へとしまっておくことだろう。

けれどそれは思い出さない環境へと身を置くことを前提とした考えで、つまりは俺が狼でなくなることに同意義となってしまう。

情けないと思われるだろうが、あのアラシに会うことを嫌がって逃げようとしてさえしているのに俺にはまだ狼でいたいという気持ちがある。

だから、俺には逃げたくはないという気持ちもあるにはあるが、それ以上の恐怖によって俺の出す答えが決まったただけのことだ。

「だから、スーパーへと向かえない、か。くくっ……」

かみ殺すかのように笑う金髪からは俺を馬鹿にするようなものには聞こえなかったが、それでも自分で情けないということを理解している分、金髪の笑い声に俺は敏感に反応して、噛み付いた。

「そんなに面白いですか？アラシを前に尻尾を振って逃げる俺が？」

普段ならば年も上で狼としても先輩である金髪に噛み付きはしなかっただろう。だが、今の俺はそこまで冷静な判断を望むべくも無い。

それだけ今の自分の状態に俺自身ふがいなさを感じ、苛立ちを感じていたからだろう。

「いや、悪かった、悪かった。だけど別に子犬に対して笑ったわけじゃねえよ」

「……………どういことですか？」

俺の顔がむすつとなつていているのが自分でも分かるが、あえてその表情を止めようとしなくて金髪へと問いたです。

「いやいや、子犬みたいな奴は別に珍しくないって事だよ」

「……？」

「あんま人に話すようなことでもないがな、結構子犬みたいに挫折を経験する狼は珍しくねえんだよ。まつ狼初めて直ぐに2度もって奴は始めてみたがな」

「……………悪かったですね」

何が悪いのか自分でもわからないままに憎まれ口とでも言おうか俺は非難がましい声を金髪に返す。

「拗ねんなよ……。まあ、俺だって子犬みたいに自分の無力さを実感したことなんて沢山あるし、それがきつかけで道を踏み外したことも狼を止めようと思ったこともある。……………あんま人に話したいよなことじゃねえけどな」

少し遠い目をし始めた金髪を昔を思いだしているのだろう。

「あー、やめやめ!」

唐突に顔が赤くなつたかと思うと思いつきり首を振る。おそらくだが、過去の恥ずかしい思い出を思い出すことでもなんとも言えない羞恥心が襲ってきたのだろう。あれは恐ろしいものだ。時間が経つてからわかる自らの汚点とでも言おうか。

「まあ、とにかくだ。別に子犬だけが経験するようなことじゃねえって事だ。だから別に恥じなくてもいいんだぜ? つーか、そんな事で一々気にやんでたら狼なんてすでに絶滅してんぜ。新参者に容

赦なんてない世界なんだしな。それにな…」

「それに…?」

「少しばかり安心した。もう狼で居ることに嫌になっちまったのかって思ってたからな。けっこー居るんだよな、壁にぶち当たってそれが原因で狼を辞めちまう奴。怖がってるっつーことは原因がはっきりと分かっている訳だからな。半額弁当が欲しいって気持ちに変わりは無いんだろ?」

「それは…」

金髪の言葉に俺は言葉をはっきりと返すことができずにいた。半額弁当が欲しいという気持ちには金髪の言つとおり変わりはないが、今の俺には、という気持ちも強くあった。

「俺に…俺に半額弁当を欲しがる資格なんてあるんでしょうか?」

「あん?」

「アラシを前にして怯えることしか出来なかった俺に半額弁当を欲しがる資格なんてあるんでしょうか。他の狼たちは自分の意思で圧倒的に力の差のあるアラシに立ち向かっていったけど、それさえ出来なかった俺には…」

「ストップだ!それ以上は言つな!」

金髪の突き刺さるような声に俺の体は硬直して、続くはずだった言葉は途中で途切れてしまった。

「たとえどんな見つとも無い狩りだろうが、それはお前のした狩りだ。狼にとって狩りに加わってって事は十分に半額弁当を手に入れる資格があるってことだ。子犬は見つとも無いっつってそれでも掟^{ルル}を破つてないだろ?」

狼の掟^{ルル}とは『礼儀を持ちて誇りを懸けよ。』のことだろう。確か

に俺の戦いは狼として情けないものだったが、それでも誰かに卑怯と呼ばれるような行為はしていない。

「でも、あんなにみつともない戦いに礼儀も誇りも…」

「子犬、お前は勘違いしている」

「？」

「俺たち狼だつて常に狩りの時間…いや、半値印証時刻ハーフプライスラベリングタイムからか。毎回、礼儀を持って誇りを懸け切れてる訳じゃねえ。ふつとした拍子に礼儀を逸した行為をしてしまうこともあるし、何かに気を取られていて誇りを懸けてねえ戦いをすることもある」

「でも、狼にとって1番大事なことなんじゃ？」

「そうだ、大切なことだ。だがな、常にそれを守り続けるのは難しいことなんだ。だからよ、それを守ること大切なんだが、もっと大事なものは、それを常に念頭において踏み外そうとしない心持と、もし踏み外してしまつたらそれを認めて、振り返り、繋げることだ。迷惑かけた奴がいりや、しっかりと誤れ！」

「認めて、振り返る…」

「ああ。今子犬は自分で狼らしくない見つとも無い戦いをしたと分かっているなら、そういう戦い方をした自分を認めて、なんでそうなったをしっかりと振り返って次に繋げる事が大事なんだ。子犬はすでに自分の戦いに恥ずかしいと思ってるならそれは認めてるからだ。そして、原因はアラシに恐怖したからだとすでに振り返っている。なら、次にするのはこの経験を次に繋げることだ」

「次に…」

「そしてその機会は今直ぐそこまで迫ってきてる。この機会を活かすか殺すかは子犬しだいだ！」

そうやって俺を見てくる金髪の眼力は俺が今まで体験したどの狼の視線より鋭く突き刺さってきた。

心が痛い。逃げようとしていた自分がみじめに思える。

金髪は俺が逃げようとしていたのを分かった上でなんだかんだと言いなから発破をかけてくれているのがわかる。そんな金髪の思いが温かい。

でも……。俺の気持ち半分弁当を欲しても恐怖に囚われた俺の体は言うことを聞いてくれず、口から出るのは弱気な言葉だけだった。

「今の俺が行っても、出来るのは震えることだけです。そんな俺がスーパーに行ってもアラシに挑もうと己を奮い立たせている狼たちの士気をくじくことにしかならないと思います。だったらいつそ行かない方が」

そんな言葉は自分でも驚くくらいすらすらと言えたのは俺が諦めているからだと思う。アラシに勝つことを。

「子犬、俺はそんなことを聞いちゃいねえ」

「えっ!？」

「俺が聞いているのはこの機会を活かすかどうか、スーパーへ行くか行かないか、だ。子犬がスーパーへ行って何が出来るか、どうなるか…なんて聞いちゃいねえ! 行きたいのか、行きたくないのか…簡単な2択だ!」

金髪の真剣な眼差しは俺から外れることなく見据えたままで、俺に答えを強要するかの力強さが込められていた。

そんな金髪という言葉に触発されたように俺の頭の中で答えが巡る。

今日まで狼をやってきたのだ月桂冠という狼にとって最高の獲物があるならば行きたいに決まっている。いや、普段でも半額弁当を手に入れてないのならば近くに半額印証時刻のスーパーがあるならば答えは決まっているようなものだ。

しかし、今の俺には行きたくない思えるだけの理由があるのだ。

アラシと呼ばれる狼の天敵。

その中でも圧倒的な力を持つ本隊と呼ばれるアラシたち。特にその中の1人に対して俺は圧倒的な敗北を喫して枷となってしまっている。

この枷は自分が思っていた以上に重く俺の動きと考えに制限をつける。

俺にとって、逃げようとしていた理由はアラシが怖いことと、それが原因で他の狼に迷惑をかけることだ。

だが、金髪の求める答えの俺がどうしたいかには俺自身の純粋な気持ち問いかけている。

先ほどは帰ることに傾いていた俺の中での天秤から1つの要素がなくなつたことで再びどちらが重くなるかを出すべく揺れ始めた。

スーパ―へ行くという秤には金髪から与えられた勇気が与えられて、行かないという秤からは迷惑をかけるという懸念を除いた上での天秤の再度の揺らめきが落ち着くには時間がかかった。

それだけ俺の中で答えを出すのが難しかったからだろう。

「……い……い」

「……？」

それでも傾いた天秤の先の答えを俺は口にするが、それはぼそぼそとしてとても聞き取れるようなものではなかった。

「決まっただか？」

それでも俺の微かな雰囲気の変化を感じ取った金髪の声に応えるように次は先ほどよりも大きな声がでた。

「……いたい」

「聞こえねえよ」

「…いき…たい」

「もつとはつきり！」

「いきたい」

まだ2ヶ月にも満たない狼としての活動だったがそれでも思いで1つ1つが俺にとっては大事なものとなって、秤に載せられていくのと同時に俺の出した答えははつきりとした語調になっていた。

「なら、次にすることは分かってるよな？」

そう笑いながら言う金髪の言わんとしてることは地場神のスーパーへと行く、ということだろう。

「でも」

だからこそ俺は即答できなかった。行きたいという答えを出してなお、俺にとってアラシの脅威は俺を縛り付けるものとなっていたからだ。

「でも怖い、か」

俺が直接口にする前に気付けば俺が口にするべき言葉を金髪が口にしていた。

「俺は最初に言ったよな。スーパーに無理矢理連れて行くようなことはしねえって。だがよ、行きたいのに躊躇ってる奴を後押しならいくらでもしてやるぜ？」

「え…？」

「1人で向えないってんなら連れてってやるっつてんだよ」

確かに俺はまだ1人ではスーパーに迎えないだろうが、俺の手を引つ張って行ってくれる者がいるならば、『いきたい』とまで口にした今ならば、逃げようとしていた気持ちが薄れている今ならば、行ける…かも知れない。

行ける…かも知れないと思った時に頬の筋肉が弛緩したのがわかった。理由も分かる。嬉しいからだ。

そして、同時に理解する。狼であるということはすでに俺の大事な生活の一部になっていたと。

金髪の方をみけると先ほどまで決して俺からそらなかつた顔を逸らしていたが、金髪の右手は俺のほうへとしっかりと差し出させていた。

顔は見えなかつたがきつと金髪の顔は照れて赤く染まっているだろうなあと俺は思いつつ差し出せている手を見る。

そして少しの逡巡の後に。

「…ありがとうございます」

それは小さな声で金髪に聞こえたかは分からなかつたが、間違いなく俺の人生の中でも最大級の感謝の気持ちがこもっていた。

「…おおよ」

金髪からの声も俺に負けず劣らず小ささだったがその言葉は俺の耳へとしっかりと届いていた。

そして、金髪は黙って俺の手をしっかりと握り締めて歩き出した。それに引つ張られるように俺も歩き出すのだった。金髪の温かさを感じながら。

第二十三話 集いし狼たち

SIDE アロハ

すでに何度目かわからなくなったが、俺は目の前にある洗剤から目を離しスーパールの入り口を見る。

俺たち狼の戦いはスーパーに入った時から始まっているのに、こんな集中力を欠いたことをしては勝てる戦いも勝てなくなってしまう、というのは経験上分かっている。

ましてや、今日は何時にも増して負けられない戦いだっただ。獲物は月桂冠、同じ獲物を狙う敵にはアラシもいる。

負けられない、という思いは強くあるのにそれでもついついと視線は入り口へと移ってしまい、他の狼やアラシの気配を探ることもままならない。

「ちっ」

閉じたままのドアを見るたびに舌打ちを繰り返し、ドアの開く音がするたびに反射的に見てしまう。

原因は分かっている。犬っ子が来ないからだ。

俺は確かに月桂冠が出たことを犬っ子に伝えた。だからすぐにも来ると思っていたのだが、犬っ子は未だにきていない。

そして、その原因が何らかのハプニングに巻き込まれたわけでもなく、犬っ子自身の意思によって地場神じほがみの店へと足を運んでいないということも。

犬っ子と一緒に煮物神の店で一戦を終えてきたトマトらが言うにはアラシに怯えている、らしい。

最初に聞いたときは、有り得ないと思った。今になってアラシに怯えるなんておかしい。

だって俺は最初にアラシにやられた後も立ち向かっていく犬っ子を見続けて、時には共闘すらもしていた。だからこそ今になって怯えるなんてことを理解できなかった。

いや、したくなかっただけかも知れねえ。

「……………過保護ね」

いつの間にか俺の隣へと来ていた巨乳が若干と呆れ気味の口調で俺に対して言う、が。

「お前にや言われたくねえよ」

実際に数えたわけではないが巨乳だって俺に負けなくらいにスパーの入り口を何度もちら見している。

巨乳だってすでに歴戦とっていいぐらいはこの世界で経験を積んでいる。だから集中を切らすことの愚かさを知っているのだ。

それなのに、気にしているって時点で巨乳だって犬っ子のことを気にかけているのは言われなくてもわかる。

きつと、不安だからこそ同じ思いを抱いている俺に話しかけてきたのだろう。

「……………否定は、できないわね。きつとあたしも過保護なのよ」

呆れた感じの口調のままそう言うのは自分に対しての自嘲の意味があったのだろう。

こういった他人を気にかけることは社会に生きていくには重要だろうが、ここでは違う。ここでの思いやりなんてのは相手に向って全力でぶつかっていくことだ。それが相手を認めたとときの敬意のほらい方だった。

そういった意味では『クラーケン』はある意味狼の鏡といえるか

も知れない。今はまだ軽くなぎ払う程度で済んでしまうほど実力の差がある俺らを相手にも容赦することなく、潰してくれる。

おそらく、4月から新しく狼になった奴以外のこちらの狼は全員、クラーケンにやられている。というか、こちらをホームにして戦う狼にとって洗礼とっていい。

かく言う俺も無様としか言えないやられ方を何度もしているし、同期だった狼の中にはクラーケンに敵わないと見るや自身の縄張りを変えた奴だっていた。

そう思うとクラーケンと本隊の存在はこちらの狼を篩ふるいにかけている、とっていいだろう。というか新人の狼継続率は最悪だ。

守ってくれるはずの先輩たちですら、クラーケンや本隊の前では無力なのだ。

見守るような戦いが許されるのは最低限、二つ名を貰う程度の実力をもつてないとただ狩りに集中できてない半人前の狼に過ぎない。

「…………ちっ」

今度は犬っ子が来ないことではなく、狩りに集中できていない自分に対して舌を打つ。

「ねえ」

「なんだよ」

俺の隣から動く気配がなかった巨乳が声をかけてきた。先ほどから落ち着きなくそわそわとしているのを感じていたから、俺に何か話しかけたかったのだと思う。

「トマトから聞いたんだけどさ。なんか二代目にたいめ見てから子犬ちゃんの様子、変わったらしいよ」

「……………そうか」

二代目というのは俺たち狼の中での通称だ。今回アラシが暴れ始めた日に犬っ子を倒したアラシでもある。

なんで二代目と呼ばれているかってーと、ほぼ間違いなく来年の本隊を率いるのはあいつと呼ばれているからだ。いや、おそらくは秋には本隊を率いているな。

本隊として癖のあるアラシたちを纏め上げた初代も凄いが、単純な実力ならば二代目の方が上なのは間違いねえ。だが、今はまだアラシとしての機能性を考えれば初代の方が厄介な相手だ。

まあ、どっちだろうが関係ねえ。やることは変わらねえし、俺には荷が勝ちすぎた相手であることに変わりはない。………威張って言うことじゃない上に自分が情けなくなるがな。

にしても、今の話を聞いちゃうと犬っ子が来ないことに納得できちゃう。本体というのは他のアラシに比べても別格。

そして、犬っ子は派手にやられたあの日から本隊とはかち合ってたねえ。

納得したくはねえが、犬っ子が来ないことに対して納得できるだけの理由だとも思ってしまう。

「ちっ」

周りを見渡して本隊と呼ばれるアラシの姿を3人確認して、すでに俺自身わずらわしくなり始めた舌打ちを再びとっつてしまう。

元々、今日は予定がなかったのだから、3人という数は少ないがそれにプラスして普通のアラシとている。俺が呼び集めた狼たちを合わせると30人近い人数が集まってしまっている。

これ程の人数が集まった狩りなど俺には経験はない。巨乳もないだろうし、そもそもこれ程の数が揃っていること事態が異常だ。

「……………ねえ」

「なんだよ」

聞き返したのは形だけだった。巨乳が言おうとしていることは俺にはわかっていた、聞き返したのは俺の中での返答を考えるための間に過ぎなかった。

「子犬ちゃん、来るかな？」

しほんだような声で言うのは諦めが混ざっているからだろう、と思う。

「来るだろ」

そんな巨乳の気持ちはわかるが、そんな声色で尋ねられるとどうしても俺にも不安が伝播してしまう。それを意識しないようにただ短く端的に俺は返事をした。

「……………そっだよね」

巨乳からの返事が返ってくるのにやや間があったが、俺の答えに同調するようなものだったことに一安心できた。

俺自身だって不安だからこそ、同じ気持ちでいる巨乳がいるってのは助かっている。だからこそ、巨乳が弱気になることで俺も弱気になっちまう。

ふと、腕時計を見ると半値印証時刻の時間まであと10分ほどとなっていた。ハーフプライスラベリングタイム

今日は半額弁当を狙う狩人が多いが、残っている弁当も多い。店側としては売り切りたいだろうから、ハーフプライスラベリングタイム半値印証時刻がずれ込むことは…まず、ねえ。

携帯を取り出して、着信かメールがないかを確認するが、表示画

面はいつも通りの変哲のない待ち受け画像が表示されているだけだった。

今まではそのままポケットへとしまっていた携帯を俺は操作してアドレス画面を映し出す。

名前を知らないから『犬っ子』と登録されているアドレスから電話コールをしようかと、悩むが結局は携帯を閉じてポケットへとしまった。

「……………やっぱり過保護」

「やめただろうが」

「うっん、それだけ気にかけてるだけで十分にだよ」

「……………ちっ」

お前だって、さつきから何度も携帯をてにしてるじゃねえか、と言い返してやるうと思っただが止めた。その代わりに巨乳にも聞こえるように大きく舌を打つ。

それでも巨乳は俺の隣から動こうとせず、俺と並んでスーパーの入り口を眺め続けていた。

S I D E O U T

目の前にあるのは地場神と呼ばれる半額神が勤めているスーパー

で俺たち狼にとって至高ともいえる存在である月桂冠が出現した狩場だ。

金髪に半ば引つ張られるような形ではあるが、確かに自分の意思で歩みを進めてこの場所まで俺は来た。

だが、実際にスーパ―を前にして再びと俺の足は鈍ってしまった。

「……………いいんでしょうか？」

金髪に対して返事を期待したわけではなかった。ただ、逃げようとしてしまった俺が月桂冠を争う資格があるのかとついついと考えてしまっていた。

「ばっか。スーパ―を目の前にしてそんな事言ったってしり込みしてるようにしか思えねえよ」

笑った顔で指先をスーパ―の入り口に金髪は向ける。早く入ろう、ということだろう。

確かにここまで来ていかないなんてことはここまでの道のりをないがしろにしてしまうことになる。

金髪を見ると、すでに1人スーパ―へ入ろうとしている。金髪にとつて俺はもう手を引かなくとも進むと思われるのだろう。

それとも、最後の決断は自分でしろ、ということなのだろうか。

「ふう〜〜〜」

大きくと息を吐き出す。

確かにここから先は俺自身で進むべき道だ。答えはすでに決まっている。ただ、答えが決まっているからといって出した答えに向かつて迷いなく進めるほどに俺は強くない。

だから、間近に迫っているスーパーの入り口にまでの距離までの
一歩、一歩に俺の今までの狼としてのことを思い出ししていく。

俺を狼として育ててくれたアロハ。

俺が狼であることを助けてくれた巨乳。

俺をここまで連れてきたくれた金髪。

俺にとつての物語を現実と教えてくれたオルトロス。

俺と何度もぶつかり合ったトマトらここらを縄張りとする狼。

初めて食べた半額弁当。

今はまだ食べていないが、俺の胃を刺激する半額弁当。

アロハに少しだけ食べさせてもらった月桂冠。

俺が今進む先で待っているであろう月桂冠。

そして、今はまだ見ていない未知の半額弁当たち。

「なんだ」

考えていけば簡単に次々と俺が狼でいたい理由なんて出てくる。

中には狼でいることで会う嫌なこともある。

今現在、本隊と呼ばれるアラシの1人が俺にとってまさにその存在だった。

だけでも、考えれば考えるほど、思い出せば思い出すほど、俺には狼でいる理由が、いたい理由が浮かんでくる。

さっきまではそうは思えなかっただろうが、今は違う。不安が取り除かれたわけでもない。

それでも、俺は自分の足でスーパーへと行くための力を貰った。

だから、一歩ずつ確かに俺はスーパーに入るために進んでいる。

ウィーン、と聞きなれた自動ドアが開く音がすると同時に店内から声が聞こえる。

「おせえぞ」

どこかほっとしたような声色でアロハは俺に言う。

「すみません」

ハイフフライススベリングタイム

「もう、半値印証時刻まで時間がない」

「はい」

「それまでに、月桂冠の魅力を胃に刻み込め！」

第二十三話 集いし狼たち（後書き）

月桂冠が思いつかない。

弁当を考えるたびに料理できないのに書きはじめた事を少し反省したりする。後悔はしていないが。

ようやくと次から決戦だー！長かった、本当に長かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5494o/>

弁当を求めて

2011年5月10日20時37分発行